

簡易 PDF 版

# 目次

1. ヌーソロジーとは？	8
■ 霊性進化論としてのニューソロジー	9
■ 物質の謎を解明していくニューソロジー	9
■ あらゆるジャンルを総括していくニューソロジー	11
■ 「冥王星のオコット」とのチャネリングについて	12
2. 科学の枠外にある存在	15
■ 「無意識」の設定	17
■ 「上位存在」の認知	18
3. 「自己」を見つけるために	21
■ 「他者化」とその逆を行く道	22
■ 科学の枠外にある「自己」	23
4. 影に潜む「精神世界」の文化	26
■ 1995年から消えていった精神世界カルチャー	27
■ 手段の一つとしてのニューソロジー	29
5. 冥王星のオコットの目的とは？	31
■ 「シリウス革命」より引用する「オコットの目的」	33
■ 三つの概念の色彩表現	35
■ 内容のまとめ	36
6. 「最終構成」と「変換人」とは？	37
■ 次元変換とピラミッド	38
■ トンデモ情報いろいろなニューソロジー	40
7. 変換人型ゲシュタルトとは？（前編）	42
■ 物質は宇宙精神の影	46
■ 点の内部に入り込む意識	48
■ 二つの円と回転の関係	50
8. 変換人型ゲシュタルトとは？（後編）	52
■ 主観と客観の関係性	52
■ 自我を解体する道	53
■ 素粒子と原子の秘密	55
9. 基礎用語① 次元観察子と定質/性質など	59
■ 13の次元ユニット。「次元観察子」について	59
■ 定質と性質	62
■ 反性質と反定質	64
■ 神と人間を繋ぐ道	65
10. 基礎用語② 負荷・反映・等化・中和	67
• 負荷	67
• 反映	67
• 等化	68
• 中和	68

■ 4つの原理と自他関係 .....	68
• 負荷：始まる。ただ自分がある .....	69
• 反映：受け手がいる。相手がいる .....	69
• 等化：俯瞰（ふかん）する者がいる。次元上昇 .....	70
• 中和：第三者の相手。安定する .....	70
■ ペンタースystemと次元観察子 .....	71
• 新たなる負荷 .....	71
■ 「数は霊である」の文化 .....	73
11. 基礎用語③ ノウス(NOOS)とノス(NOS) .....	75
■ ヌーソロジーにおける根源的な陽と陰 .....	76
■ 「能動的なもの」と「受動的なもの」 .....	77
■ ヌーソロジー (Noosology) の名前の由来 .....	79
■ 奇数と偶数 .....	79
12. 基礎用語④ ケイブコンパス .....	83
■ 「 $\psi_1 \sim \psi_8$ 」にある二つの方向性 .....	85
■ 「元止揚」について .....	87
■ 人間の「思形」と「感性」 .....	89
■ 人間の「定質」と「性質」 .....	91
■ 次元観察子のまとめ .....	93
13. 基礎用語のおさらい .....	95
■ 「ニューソロジー基本概要+（プラス）」のワード .....	96
■ 「シリウス革命」のワード .....	97
14. 変換人型ゲシュタルトの本論に入る前に .....	99
15. プログラム 1 次元観察子 $\psi_1 \sim \psi_2$ 方向の対化 .....	103
■ アニメーションにしてみる .....	104
■ 「表相」について .....	105
16. 「天球」についてとミクロとマクロ .....	107
■ $\psi_1 \sim \psi_2$ における意識進化の方向性 .....	110
17. プログラム 2 次元観察子 $\psi_3 \sim \psi_4$ 位置の交換の対化 .....	111
■ 「等化」と「対称性」についてのおさらい .....	112
■ ミクロとマクロの対称性とは？ .....	116
■ $\psi_3$ 理解のためのヒント .....	116
18. 「4次元」を理解する話 .....	118
■ 次元論の基本 .....	118
■ 観察の次元は1次元上位にある .....	119
■ 4次元を発見するための図 .....	120
■ 4次元より上の次元 .....	121
19. 変換人型ゲシュタルトの基礎 .....	123
■ 変換人型ゲシュタルトの基礎となる概念 .....	123
■ ミクロについて意識する .....	128
■ ミクロを先手として光景を見る .....	129

20. ダグラス・E・ハーディングの手法.....	130
■ 指差し実験 .....	130
■ ハーディングの宇宙論 .....	132
21. 「知覚正面」を平面として空間を見る.....	133
■ 「知覚正面」とは? .....	133
■ 4次元と知覚正面.....	134
■ 「知覚正面」認識用のCG .....	134
22. 究極の瞑想方法? 「止観」について.....	136
■ 原始仏教・中国から伝わる瞑想方法.....	136
■ 哲学における「止」と「観」 .....	138
■ ヌーソロジー入門の真髄とは? .....	141
■ 他のことも取り入れつつやるなど.....	143
23. 「マイクロ知覚」がカギとなる .....	145
■ ペンローズの「量子脳理論」 .....	146
■ 「無」のコツはマイクロのイメージ? .....	147
24. 量子力学における「重ね合わせ」の原理について .....	149
■ 「等化」と「重ね合わせ」 .....	150
■ ミクロとマクロを重ね合わせは可能か? .....	151
25. 能動的に空間を見る.....	153
■ 「ネッカーの立方体」について .....	153
■ ネッカーの立方体と4次元の関係.....	154
■ 「キットカット実験」について .....	156
■ ミクロイメージのおさらい .....	158
26. 光速度イメージが使えるか? .....	159
■ ローレンツ収縮について.....	159
■ ローレンツ収縮によるタキオン空間入り.....	160
■ 虚数の空間 .....	161
■ 「次元観察子 $\psi_3$ 」との関係を整理してみる .....	162
■ 「知覚正面」と重ねてみる .....	164
■ 時間を反転させると・・・ .....	167
27. 右脳と速読の話.....	169
■ 速読の話.....	169
■ 速読と他のジャンルの話.....	171
■ 感性空間と思形空間の話.....	171
28. 等化は「無数化」の方向にある.....	173
■ 光速度イメージと無数化.....	176
29. 「外面（前）」と「内面（後ろ）」のおさらい.....	178
■ 前側と後ろ側、外面と内面のおさらい.....	179
■ 平手を出して観てみる .....	181
■ $\psi_1$ 、 $\psi_2$ 、 $\psi_3$ との対応づけ .....	183
30. 夢の世界のビジョン.....	186

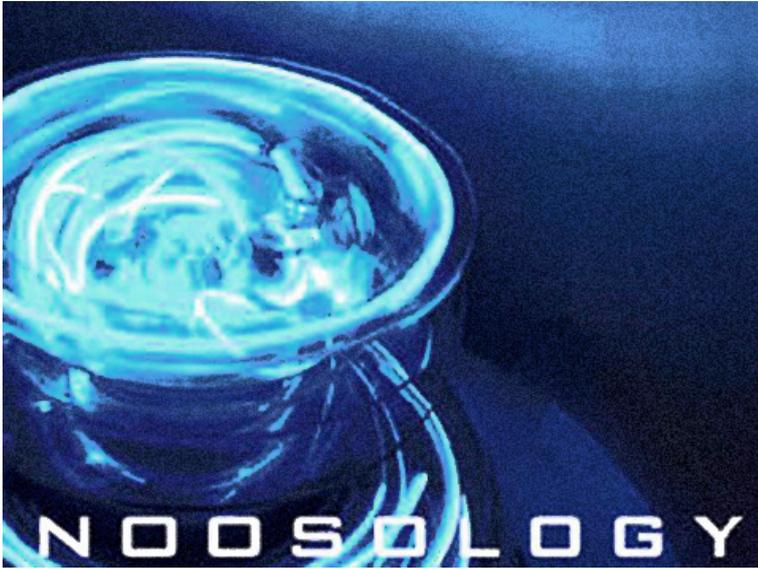
■ 『人間の外面』と「シャドウ」 .....	186
■ 夢世界的なものの様々なイメージ .....	188
■ $\psi$ 3 移行ワークと夢世界 .....	190
■ 「アニマ」と「アニムス」 .....	192
■ 様々なイメージ .....	194
■ 死後世界的なものに入り込めるか? .....	195
31. エーテル空間を知覚していく .....	196
■ 「エーテル体」について .....	196
■ 意識の反転とエーテル空間 .....	196
■ シュタイナー思想におけるエーテル体 .....	197
32. 火のイメージを応用する .....	200
■ 火のイメージの応用 .....	204
■ 火のイメージと反転 .....	205
33. 非物質世界の知覚と霊能者について .....	208
■ 「あっち側」とのアクセス方法 .....	208
■ 非物質存在との交流 .....	210
■ 「他者」の意識との予期せぬアクセス .....	212
■ 「あっち側」とアクセスしないモード .....	215
■ 霊能者とは何か? .....	216
34. 次元観察子 $\psi$ 4 の話に入ろう .....	218
■ 主体と客体 .....	220
35. 「鏡像段階論」について .....	222
■ 「鏡像段階論」についての説明 .....	222
■ 鏡像段階論と次元観察子 $\psi$ 4 .....	224
36. 化粧で理解する次元観察子 $\psi$ 4 .....	226
■ 化粧と次元観察子 $\psi$ 4 の接点 .....	226
■ 男女差が出る話 .....	228
37. 知性と情動の対化 .....	229
■ 水星と金星、知性と情動の対化 .....	230
38. イメージの世界を脱却できるか? .....	232
■ ニューソロジーと言語学 .....	235
39. $\psi$ 3~ $\psi$ 4 までを整理しよう .....	238
40. 「 $\psi$ 3~ $\psi$ 4」のキアスム .....	242
■ 他者の瞳孔と自己の瞳孔 .....	242
■ 図示して整理する .....	244
■ キアスムの奥深さ .....	247
41. 複素空間モデル .....	249
■ 複素空間モデル .....	249
■ 複素空間モデルをじっくりと理解しよう .....	252
■ ミクロに潜む複素空間モデル .....	258
42. 実数と虚数の付随イメージ .....	261

■ 虚軸と夜、実軸と昼 .....	262
■ オイラーの公式に当てはめてみる .....	264
■ オイラーの公式と波。エーテル体と回転 .....	268
43. マカバの利用について .....	272
■ 二つの正四面体 .....	272
■ 二つの正四面体の意味 .....	273
■ Unity で作った多面体ビューアー .....	278
44. 正八面体と正六面体の意味 .....	280
■ 正八面体と正六面体の二つの方向性 .....	280
■ 正八面体について .....	281
■ 正六面体について .....	283
■ 星型正八面体について .....	288
■ 壮大な構造 .....	290
45. プログラム 3 次元観察子 $\psi_5 \sim \psi_6$ 位置の等化と中和 .....	293
■ オコットによる次元観察子 $\psi_5$ の説明 .....	294
■ 次元観察子 $\psi_5$ の発見のゴール .....	294
46. 垂子の回転 .....	299
■ 「垂子」の回転 .....	299
■ 「垂子」から「垂質」へ .....	301
■ 回転による入れ換え .....	303
■ KitCat 実験の意味 .....	305
47. 垂子の無数化 .....	307
■ あちこちの方向へ無数化 .....	309
■ 無数の主体 .....	310
48. マトリックスのバレットタイム .....	312
■ バレットタイムについての解説 .....	312
■ バレットタイムのヌーソロジー的意味について .....	313
■ モノ視点と自己視点がある話 .....	314
49. 「純粹持続」の空間について .....	316
■ 純粹持続とは何か? .....	316
■ 二種類の時間 .....	318
■ 「時間」と「記憶」の真意 .....	319
50. 光の身体化 .....	323
■ 光速度突破からの光 .....	324
■ 肉体の等化 .....	327
■ 光の身体化をする次元 .....	329
■ ニューソロジー的ライトワーカー .....	330
紹介文献リスト .....	332
Youtube 動画リンク集 (QR コード) .....	333
付録 1 (4次元を発見するための図) .....	337
付録 2 (ネッカーの立方体) .....	338



# 1. ノーソロジーとは？

早速だが、まずは「ノーソロジーとは何か？」について書いておこう。



ノーソロジーは半田広宣という人物が1990年代からずっと提唱しているものであり、一言で言うと「思想」とか「哲学」とかに該当するものである。

「～ロジー」とは「～学」という意味なので、学術的に追及していきたいものでもある。

コウセンさんのTwitter上の説明だと「**ポスト科学主義の宇宙論**」「**物質と精神を空間的視点から統合する具体的なアイデア論**です」などと書かれているが、なんとも説明が難しい。

「ポスト科学主義」とは「科学の後に来るものを考える」ということである。我々が今見ている世界は、ニュートン物理学をベースにした科学的なモノの見方や、全てが原子のような粒でできた物質であるという唯物論的な見方が基本となるが、ノーソロジーはそうした科学に基づくモノの見方から、我々が見ている世界の認識を変えるための哲学みたいなものを打ち出していく。

また、「宇宙論」とは、宇宙全体にある事象を科学とは違ったアプローチで説明しようとするものである。

「物質と精神を空間的視点から統合する具体的なアイデア論」  
・・・というのはなんとも難しい言い方だけど・・・  
これは要するに物質・精神・空間について捉え直して考えるということである。  
精神とは？意識とは？空間とは？物質とは？を明らかにしていき、  
人は何故生きて、どこに向かっていくのか？の謎を解いていくのがノーソロジーだとも言える。

## ■ 霊性進化論としてのニューソロジー

ニューソロジーは発想的に「**霊性進化論**」というものに近い。

霊性進化論とは、19世紀にヘレナ・P・ブラヴァツキーが立ち上げた神智学で盛り上がった思想であり、現代に伝わるスピリチュアルもそうした潮流から出てきている。



霊性進化論では、まず「**魂**」のような意識があることが前提となる。

魂は肉体だけに留まるものではなく、

人間の意識は肉体に完全依存して存在しているわけではないとする。

また、魂はこの世界だけにとどまるものではなく、

人智を超えた大なる宇宙のシステムがある中で動いている。

さらに魂は「**霊性**」というものを持ち、人間を越えた存在へと進化することができる。

以上のことを大前提とするものが**霊性進化論**であり、

ニューソロジーもそれに近い発想で理解していった方が良い。

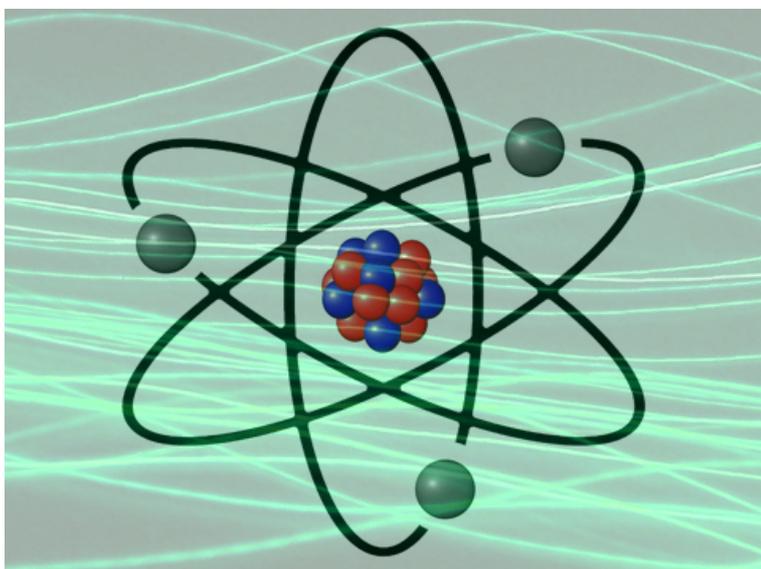
ただ、ニューソロジーの場合、「**魂**」や「**肉体**」が存在している仕組みが従来のスピリチュアルとは少し異なるので、その辺も突き詰めていくと面白い。

## ■ 物質の謎を解明していくニューソロジー

それから、ニューソロジーでは「**素粒子は正体は、我々の意識だった。**」ということが言われている。これも中核に近い。

スピリチュアルや**霊性進化論**のような分野に通じていながらも、

量子論や量子力学の内容に入り込んでそれを説明しようとしている。



東洋思想やスピリチュアルで言われていることに、量子力学の発想を導入することはそう珍しくはない。1975年にフリッチョフ・カプラによる『**タオ自然学**』という書籍がアメリカで出版され、現代物理学と東洋思想の関係について書かれたものが世界的ベストセラーになった。

〔書籍：F・カプラ『**タオ自然学—現代物理学の先端から「東洋の世紀」がはじまる**』（1979）**工作舎**〕

それからというもの、「ニューサイエンス」というジャンルで様々なことが語られるようになっていき、実用的な量子力学とは別ジャンルで、量子論を解釈するための哲学の話が盛り上がっていった。

ただ、ニューソロジーの場合はやたらと本格的である。

波動関数や不確定性原理の謎に挑むだけでなく、電子やuクォークdクォーク、ボソンやフェルミオンといった素粒子が、人の意識にとってどういう意味を持つのか？

さらには、U(1)対称性やSU(2)対称性、ヒルベルト空間といった用語まで出てきて、物質・精神・意識・空間との関係について探っていく。

この辺の本格的な所はまだよく分かってない人も多い。

ただ、肝心の所は、**我々の意識には「カタチ」と呼ばれる何かしらの構造があることである。**つまり、ニューソロジーを実践的に取り組み、意識にはカタチがあることが分かればOKであり、それを『**変換人型ゲシュタルト**』と呼ぶ。

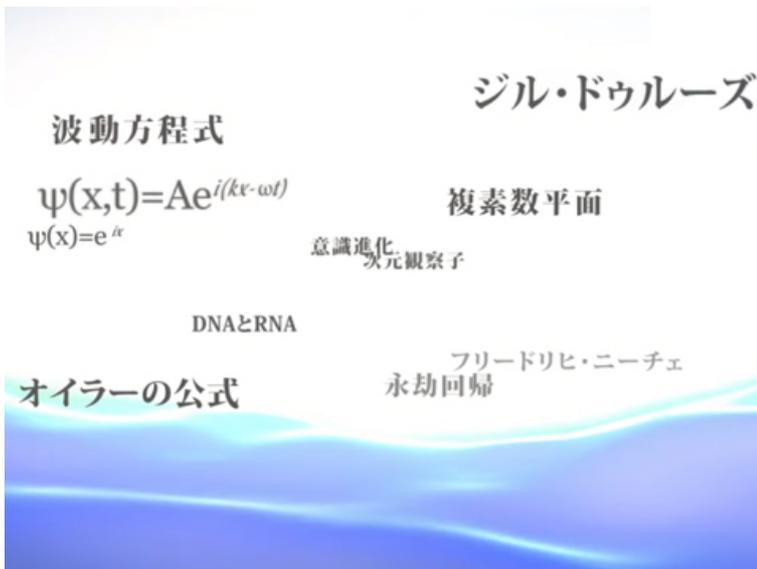
意識のカタチを後付けで説明するために量子力学の専門知識が必要だが、モノの見方を変えるのに量子力学の細かい知識が必須というわけではない。

ニューソロジーで大事となるのは、  
自身が見ている空間を、従来とは違うモノの見方で捉えていくことである。

### ■ あらゆるジャンルを総括していくニューソロジー

ニューソロジーは、霊性進化論やスピリチュアルに近い発想を持つことに加えて、  
ポスト科学主義ということで科学について考え、現代物理学についても本格的に考えていく。

そうした中で、ニューソロジーはとにかく色々なジャンルに繋がってくる。



例えば、自身の目の前に広がる物質世界は、自身の意識の反映なんだと解釈すると、  
「引き寄せの法則」みたいな発想にも近くなってくる。

肉体とスピリットの関係について考えると、  
身体の話も大事になってくるし、健康の話も大事になってくる。

自身の精神について理性的に考えていくと、哲学になってくる。  
半田広宣さん自身がドゥルーズやベルクソンやハイデガーといった哲学者に傾倒しているので、  
ニューソロジーはそういう印象も強いかもしれない。

スピリチュアルや東洋思想の在り方を研究すると、  
宗教の在り方や古今東西の文化についてが絡んでくるし、  
科学や量子力学を研究すると、最先端の技術についてや理系的な思考が絡んでくる。  
さらには、そこから生き物の意識や人間の身体についての話になると、生物や進化論の話が絡んでくる。

だから、ニューソロジーをやっていると非常に多くのジャンルが絡んでくるので、  
それら多くのものを総括し、統合するように扱っていくのがニューソロジーだとも言える。

ヌーソロジーをやる人は、各自でそれぞれ専門分野や切り口を持っていて、そこから色々な教養を持つことになっていく人が多い。

## ■ 「冥王星のオコット」とのチャネリングについて

ヌーソロジーとは何か？を語るためには、その出自がチャネリングであることも語らねばならない。

チャネリングとは何か？

おさらいすると「高次の霊的存在・神・宇宙人・死者などの超越的・常識を超えた存在、通常の精神（自己）に由来しない源泉との交信法、交信による情報の伝達」・・・などと説明される。

なかなかアヤしい行為だが、

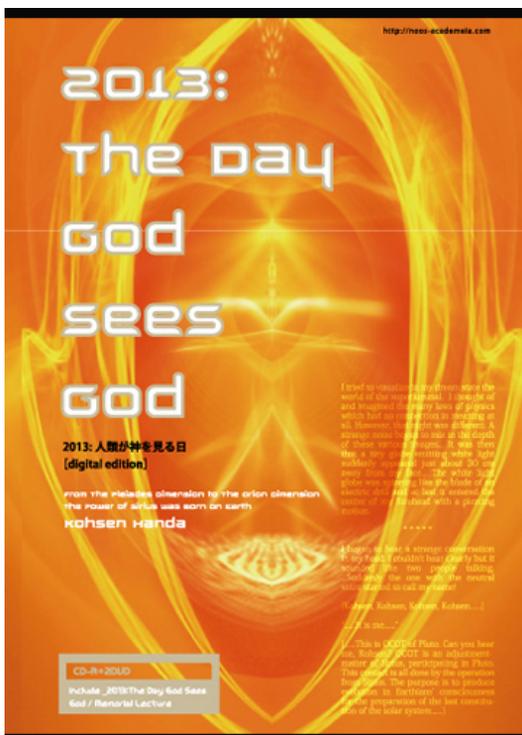
アメリカで1980年代に隆盛した「ニューエイジ運動」の中で使われるようになった名称らしい。

コウセンさんの場合、約1989年～1995年にそれがあり、

**『冥王星のオコット』**と名乗る存在との交信があったらしい。

（その体験の詳細は『[2013:人類が神を見る日](#)』に書いてある）

[リンク : 2013 : The Day God Sees God [ digital edition ] \_ NOOS ACADEMEIA online shop]



※CDブック版の「試し読み」でもその内容の初めの方がそこそこ読める。

最近、動画でその様子を分かりやすく表現して説明する人も出てきた。

(『令和TV』のニコラス・ユウジさん)

[Youtube 動画：冥王星 OCOT から送られてくるシリウス言語にチャネリングした人]

こうしたチャネリングが引き起こしたスピリチュアルムーブメントは、  
だいたいはアメリカが中心となっていて、そこから広がることが多い。

特に、ダリル・アンカによる『**バシャーール**』が有名である。

バシャーールもまたチャネリングソースとして、「自己の望むことをしよう」「自分の好きなことをしよう」「ワクワクすることをしよう」などのことを言う方向性で人気を得て、日本にも伝わるようになった。

スピリチュアル系のものは総じてそうした方向性のものが多い。

そうした中でも『冥王星のオコツト』の語る内容は、めちゃくちゃ特殊であった。

『シリウス言語』と呼ばれる独自用語を使いまくる宇宙人で、

その内容を解説するためにはかなりの知性と根気がいる。

そのため、コウセンさんはバラバラな状態で提供されたパズルをひたすら解くような作業をしないと解説できなかつたらしい。

1989年～1995年の間はずっとその情報と向き合って記録し、

今でも残された情報でそれを解説しているわけである。

——人間の定質と地球の定質とは違うのですか。「全くちがいます。」——どちらが次元が高いのですか。「地球の定質の方が方向性が上にあります。」——地球にも意識があるのですか「勿論あります」——意識とは何ですか？「人間の意識とは人間を意識させられている力の元にある姿。人間に成る為に意識を交替化する力を持つ内面性の姿。それが人間」——性質とどう違うのですか「性質とは意識を方向づけるもの」——人間における定質の交替化はなぜ起こるのですか。「人間が人間を交替化するために必要なものです。——それは上次元からの調整作用なのですか。「そのようにとられてよいでしょう。」——オリオンとはオリオン星座にある恒星と何らかの関係があるのか「あります。当体の性質です。当体とは人間の意識の持つすべて」——他の星も当体ではないのですか「他の星は他の次元に干渉しています」——意識とは何ですか？「人間の意識とは人間を意識させられている力の元にある姿。人間になるために意識を交替化する力を持つ内面性の姿。それが人間。」——では、過去のこの次元の地球において位置の転換を果たした文明があった数多くあったという事ですか「そのとおりです」——それで、その時、位置の転換ができなかった人間だけがこの地球に取り残されつづけているのですか「そう考えられて結構です」——では、今の人類はその人間達の子孫にあたるのですか「はい」——日本人とは何ですか「今の人間の核質です。位置の転換はほとんどがこの核質によって行われています。」——ヒトとは何ですか「新しい力を持つ人間」——ヒトとは太陽人という意味ですか「ある意味では、そういう言い方ができるかもしれませんが。」——ヒトにとって人間の悲しみとはどのように見えるのですか「意味をもたないもの」——では、ヒトの喜びとは「有機体の負荷」——ヒトの上にも次元があるのですか「無限にあります」——オリオンの上にも次元があるのですか「オリオンは巨大な意識における点質ですので上の次元はありません」——あなたがたはヒトの上の次元の存在なのですか「ちがいます。わたしたちはヒトとは違う意識に存在するものですから、くらべることはできません。」——円運動とは何を意味するのですか「膜を作る」——何の膜ですか「位置を変えていくことのできるものを作る膜」——無数の次元が存在しているのか 僕らは何をするのか「救いを見つけるための手段をもたらず」——何を救うのか「この地球における存在の意味を考えるための救い意識に変化を与えるための救い」——今は意識に変化がないのか「今は少しある」——いずれなくなるのか「なくなるというより変化を送れなくなる意識が変化を求めている」——

※その内容の片鱗は『[シリウス・ファイル公開所](#)』や『[オコツト情報原文 bot](#)』に載せてある。

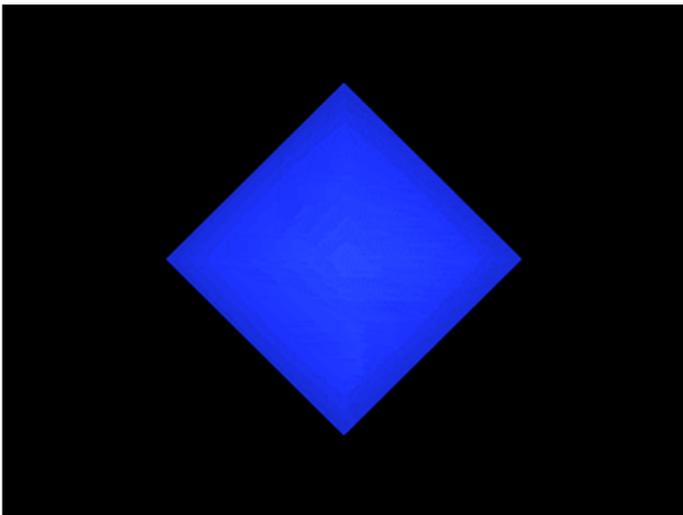
先も書いた「素粒子は正体は、我々の意識だった。」といった内容も、

『冥王星のオコツト』が伝えてきたことである。

他にも、あらゆる数や図形と意識の関係も、オコツトは伝えてきた。

以下にある「正八面体」と「正六面体」の意味についても伝えてきた。

(これはこのシリーズのシンボルとする。)



〔アニメーション：「正八面体」と「正六面体」のモーフィング〕

そんなオコツトのチャネリング情報はとても**数学的で幾何学的**という印象であり、  
ヌーソロジーの内容もそんな感じである。

だからヌーソロジーに惹かれる人は、**数学に惹かれて来る人が多い。**

その一方で、**学術系**というよりはむしろ**シャーマン系**の人がよく来るし、  
人間の身体について詳しい人や、**スピリチュアル**に通じてる人なども来る。  
そうしたものに**数学的な説明**が欲しい人とかがよく来るのがヌーソロジーの特徴である。

さて・・・

そんなシャーマニックで**数学的なヌーソロジー**について、これから説明していく。

そして、ヌーソロジーの肝は『**変換人型ゲシュタルト**』というものを理解していくことなので、  
その説明を中心にするべく『**変換人型ゲシュタルト論**』というタイトルにした。

## 2. 科学の枠外にある存在

ニューソロジーについて語っていった、できれば広まって欲しいものだけど・・・  
なかなか流行らせるのが難しい（笑）

ニューソロジーが受け入れられづらい理由について考えると、  
内容が哲学・数学くさくて難しいというのもあるし、  
語り口の難しさから親しみづらい理由も色々あるけど・・・  
冒頭でも書いたように、**シャーマン系の人が多く来る**といった理由もある。



シャーマンとは何か？

古代から超自然的な存在と交流する役割を持っていた者。

死者との交流すら可能と言われる者。

あと、「あの世とこの世と繋ぐもの」とか言われたり、

古今東西で職業として存在することもある。

日本だと**巫女**が該当し、

神社にいる者は本来そうした役割を担っている。



ただ、現代だと「そんなのほんとにあるの？」と言う人も多いただろうと思う。

そもそも、人類が世界を科学的に捉えるようになったのはニュートンやデカルトが登場した17世紀あたりが始まりで、日本では19世紀に黒船がやってきてからなので、人類史的にはシャーマニズムで生きてた期間のがずっと長い。

まあしかしながら、生まれる前のことなんて我々は体験してないし、科学的なモノの見方のが安定しているから、それが当たり前なのも自然っちゃ自然である。

シャーマニズムは、科学で証明されていない現象について扱うものなため、必然的に「科学の枠外」の世界についての話が出てくる。つまり、これを追求するためには科学の枠外に行かなければならず、そうしたものが現代ではなかなか受け入れられていないのが問題となる。

こうした科学の「壁」を突破しなければならないのがニューソロジーであり、現代社会の限界もそこにあるとする。

また、そもそもニューソロジーの出自は「チャネリング」である。チャネリングはシャーマンのスキルの中で上級編みたいなもので、高次の霊的存在・神・宇宙人・死者などの超越的・常識を超えた存在との交信といったら、そのまんまシャーマンがやってることと同義である。シャーマンがやることはチャネラーがやってることだし、チャネラーがやることはシャーマンがやってることである。ニューソロジーを信じること自体、そういうものを「アリ」とするのが前提となる。

こうしたものを扱わなければならないことが、ニューソロジーの難しさの一つになっている。

(ニューソロジーをやるなら、チャネリングを行うことも必ずやらなければならない。・・・というわけではないが、それに通じた意識を持つ必要性は出てくるかもしれない。)

## ■ 「無意識」の設定

「科学の枠外」や「シャーマニズム」と非常に接点のある分野がある。

それは「無意識」！

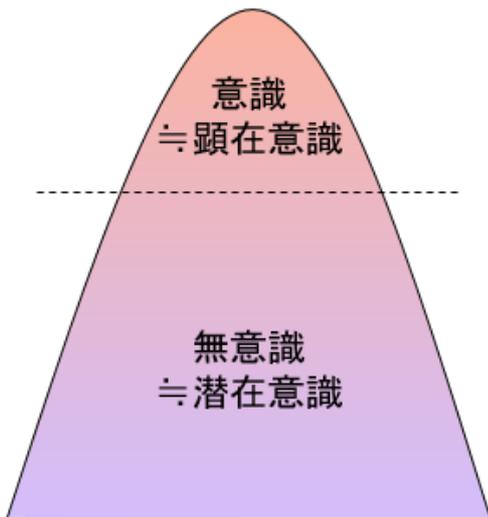
「無意識」について扱う学問、心理学などは、

掘り下げていくとだんだんと不思議な領域になってくる。

人間には「意識」と「無意識」がある。

言い換えると、普段浮かんでいる意識は「顕在意識」で、沈んでて認識できないものが「潜在意識」。

これは精神分析学とか臨床心理学とかでよく出てくる概念である。



歴史上、「無意識」について始めて精神的に着目したのはジークムント・フロイトらしい。

19世紀から20世紀にかけて活躍し、精神分析学の創始者とも言われるフロイトは、

患者が無意識へと抑圧している悩みは、人間が夜に見る「夢」の中で表れてくることに着目し、「夢分析」を臨床治療の主力としていた。

それから、フロイトは無意識の根底には「リビドー」があるとした。これは分かりやすく言うと「性的エネルギー」として説明される。もっと俗っぽい解釈だと「性欲」である。

フロイトはとにかく「性」という分野にこだわっていた。

「人間の悩みの原因は全てリビドーから来る」と言い切るぐらいこだわっていた。

この言説は今でもフロイト派の人に伝わっている。

これは一理あるような気がするけど・・・だいぶ問題視もされていた。

(ちなみにその背景には、キリスト教によって過剰に性を抑圧する文化があったとも言われている。)

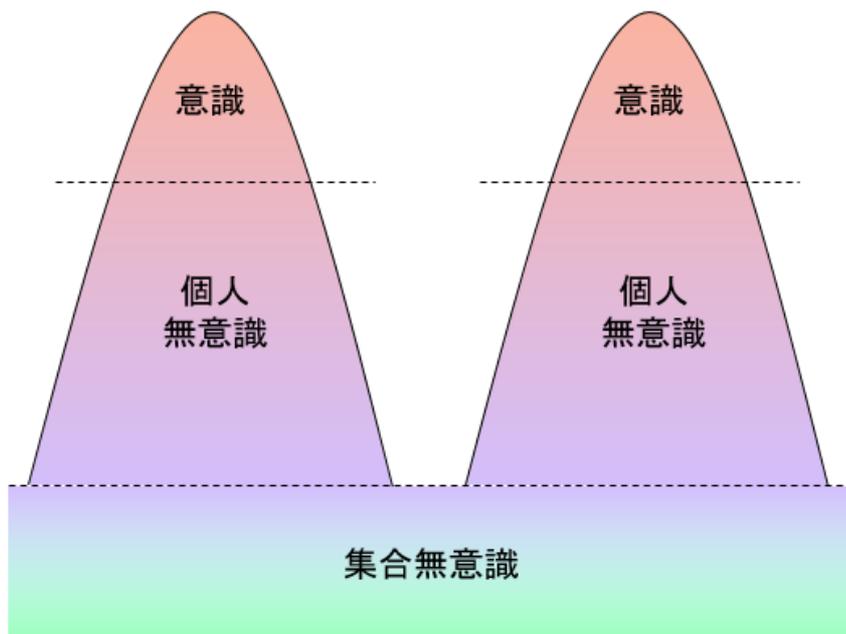
フロイトの弟子であり、後に決別した**カール・G・ユング**は、

「無意識」と「夢分析」に挑む姿勢に共感し、フロイトの傘下に入った。

ただ、ユングは後に人間の無意識には個体が持つ「個人無意識」だけでなく、

「**集合無意識**」があるということを言い出した。

そもそもフロイトとは全く違った発想を持っていて、それが原因で必然的に離れるようになった。



「集合無意識」とは、別々の人が共有する無意識のことを言う。

つまり、**肉体上は別に見える我々でも、無意識では繋がっている領域がある**ということである。

これは科学的にはあり得ないことだ。

しかし、オカルトだとそれがあり得ることになる。

最初から「科学の枠外となるもの」を追っていくものがオカルトだからである。

したがって、ユングはオカルティストとして有名で、

アカデニズムの世界ではほとんど嫌われているが、オカルトの世界では好まれている人物になっている。

## ■ 「上位存在」の認知

科学の枠外を意識する時、

必ず出てくるのは「**上位存在**」みたいな存在である。

高次の霊的存在・神・宇宙人・超越的存在・・・

どう呼ぶかは人それぞれだが、

チャネリングでそうしたものとアクセスするということは、  
そうしたものが実際に存在するということである。

科学的に言うと、道具を使う人間達に勝てる野生動物はいない。  
人間はさらにテクノロジーの発展によって、異常なほどに強くなることができた。  
野生動物を武力で制圧できるからこそ、人間の文化は守られている。  
だから、地球を支配しているのは人間ということになっているし、  
人間がこの世で一番頭が良くて強い動物だと言える。  
だから人類はこの世にあるものを全て支配すれば幸福になれると錯覚する。

しかし、これはあくまで唯物論で考えた場合の話である。  
科学の枠外にもし「上位存在」があった場合、その前提が覆る。  
人間より優れた存在が科学の枠外にいるかもしれない・・・



ここでは分かりやすく便宜上「上位存在」という言葉を使ったが・・・  
人間が「上位」という言葉を使うと、必ずその存在に支配されるイメージを浮かべてしまう・・・  
そのイメージが正しいかどうかは怪しいが、とにかく科学の枠外に何かしらの存在があることを認める必要がある。

ニューソロジーではそうした存在がいる領域を『シリウス』と呼ぶ。  
一方で、我々がいる領域は『プレアデス』と呼ぶ。  
「シリウスにいる存在が偉いものであり、それに比べて我々は愚かなのだ。」・・・とは別に思わなくても良いんだけど、  
敬意を以て接する必要はあるのかもしれない？

ヌーソロジーの出自となる『冥王星のオコット』は何をしに来たかという、  
『シリウス』についての情報を伝えてきた。

オコットが言うには、シリウスには『ヒト』と呼ばれる存在がいるらしい。  
そして、プレアデスからシリウスへの移行の時に出てくるものが『変換人』と呼ばれる存在らしい。  
それは両者の橋渡し役的な存在のようである。

俗説だと、上位存在のイメージは、西洋だと天使とか聖母とか、仏教だと菩薩とか如来とか、  
時として偉そうでいけすかないイメージが出てくることもあるが、  
ヌーソロジーの場合は『ヒト』や『変換人』である。  
偉いのかどうか分からないワードなのがとてもグッドだと思う。

ヌーソロジーではそんな『シリウス』や『変換人』という、  
未知なる存在について知っていく必要がある。

人間が「上位存在」というワードを意識すると、  
「それは偉い。」と思う者がいるし、  
「それは我々を苦しめるものだ。」と思う者もいる。  
そして、それを「神」と呼ぶ者もいる。  
そこが大きな問題であり、  
古代の学問にあった「神学」ではそれがよく研究されていたし、  
西洋の哲学でもずっとそれは重大なテーマになっていた。

じゃあ「神」とは何か？という話になる。  
どうしてもその問題が出てくる。  
人々が「神」という言葉を嫌悪するのは、だいたい宗教のせいである。  
これまでの歴史上、あまりにも間違った宗教が多過ぎて失敗することが多かったからだ。  
しかしながら、宗教は色々あるものだし、宗教は人間に必要なものである。  
それも認めなければならないし、「神とは何か？」という問題にも挑まなければならない。  
それは旧約聖書に出てくる創造主のような神であり、全てを司る万能な神であり、人間に試練を与える神  
・・・というわけではなく、神にも色々いるし、日本は八百万の神を信じる多神教の国である。  
それらを踏まえた上での「神とは何か？」が大事になる。

ヌーソロジーの初の著作は『2013:人類が神を見る日』であるが、  
ここで言う「神」にはそういう意味が込められていると言っても良いと思う。

### 3. 「自己」を見つけるために

ヌーソロジーとは何か？という問題に対して、  
シャーマニズムとか、数学に惹かれる人がやるものとか、これまで書いていった。

もう一つ言われていることは、ヌーソロジーは「自己×他者」の問題について考える「自他論」だということである。

ヌーソロジー学習で肝となるのは「自己」である。  
これは我々が持っている意識について考える際も肝となってくる。

デカルトが自著『方法序説』の中で書いた  
「我思う、ゆえに我在り」という言葉が有名だが、  
「我とは何か？」となると、実はとても他者の影響を受けやすい。

普段の我々は意識は、基本的に他者の影響を受けることが多い。  
というかそもそも、実は人間の意識はそうなりやすいようにできている。

理由の一つは、**幼児から成長する際の意識形成の問題**である。



人間は幼児の段階ではただ漠然と光景を認識する所から始まっていて、  
だんだんと成長するにつれて、物と自分の境目が分かってきて、  
自分の身体についても漠然と分かってきて、  
さらに「他者」という存在がいるのが分かってくる。  
それから、「他者からの視線」をベースに「他者にとっての自分がこうだろう」というイメージから「自分はこうだろう」という意識を確立していく。

人間の成長における意識形成のベースが「他者からの視線」になっているから、人間は他者の影響を受けやすいようになっているわけである。

もう一つは**集団行動の意識**からそうなる。



人間の最大の長所は社会性を持っていることで、集団行動によってその成果を発揮する。単一の個体だったら勝てない野生動物がいっぱいいるので、集団でいることが生きていくために大事となる。集団でいるには社会性を持つて必要があり、社会性を発揮するためには、常に他者の視線や他者の考えに合わせて生きることを意識していかなければならない。これはちょっと考えれば分かることだし、なんとなく生きていてもそうなる。

さらには「言語」がそうした意識を膨張させていく。言語もまた人間の最大の長所と言える能力であり、人間はこれによって社会性をさらに強固にした。ちょっとした鳴き声による意思伝達程度であれば野生動物でも可能である。しかし、人間は言語によって物語を作り、さらにその作られた物語に対して没頭して、そこに自身の魂を置くことができるほどに、言語に依存することができる生き物である。

以上のように、人間がどれほど他者の言葉の影響を受けやすい生き物かは、あらゆるエピソードを思い返せば理解できるだろう。特に受動的に生きているほど「他者の要求を受ける存在＝自分」となってしまうのが人間である。

## ■ 「他者化」とその逆を行く道

そして、完全に他者になりきるように、他者みたいな存在と自分が同一化することを「他者化」という。

特に人間は集団で生きていくと他者化していく。

戦士、アイドル、軍人、性奴隷、社畜サラリーマン、コミュカお化け、金儲けの権化・・・よくあることなので、考えると思い当たる人は多いかもしれない。



けど、他者化している人は、同時に「他者の助けになってる人」であることも多いので、実はみんなにとっては優秀に評価される。そこが人間社会の難しい所でもある。

ただ、ニューソロジーは「他者化」とは逆方向の自分を探っていかなければならない。

自分とは何か？

そして、自分の中に奥深くに潜む、確かなものを「自己」と呼ぼう。

そうすると、自己とは何か？

この問題は実はすごく難しい。

それを探していくためには、「無意識」まで探るしかない。

しかし、普通の人が無意識を探ると、

「他者から植え付けられた意識」ばかりが出てくるものなので、

本当に自分固有の意識を見つけるのは難しい。

無意識を探るのはすごく難しく、

掘れば掘るほど深かったから、ユングは「集合無意識」を発見したし、

それを正解とするしかなかったのである。

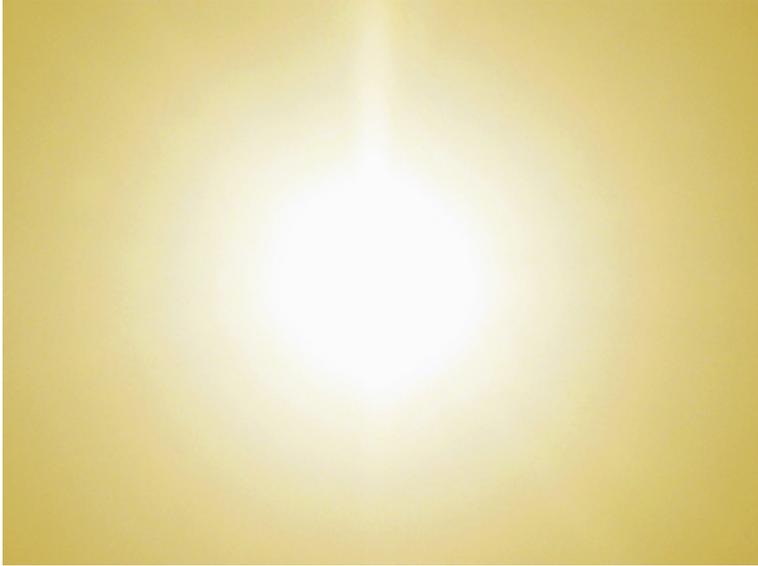
## ■ 科学の枠外にある「自己」

ニューソロジーにおける自己探求に必ず必要なのは、

科学の枠外にある「自己」を探ることである。

無意識を掘り下げていった先にある、科学の枠外にあるレベルの「自己」は、ほとんど「集合無意識」の領域にまで近くなる。  
だから自己探求の話はシャーマニズムの話にまで繋がってくる。

こうした科学の枠外にある自己を「Spirit Self」と呼ぶことにしよう。



「Spirit」は、精神とか魂とか、  
(物質や肉体に対義語として) 霊的な心みたいな意味である。  
Spiritに「ual」がつくと「Spiritual」となり、「精神上の」とか「精神的な」みたいな意味になる。  
日本語の「スピリチュアル」はかなり俗物化してしまったワードだが、  
元々は純粋にそうした概念を追っていくものである。

それから、「Self」はユングが使ったワードで、  
個体が持つ意識・無意識の全体を踏まえて、  
その全体の中心に存在する「自己」のことを言う。  
それらを合わせて「Spirit Self」である。

ヌーソロジーをちゃんとやると、自然と「Spirit Self」を探す作業になる。

「Spirit Self」が掴めない人は、ヌーソロジーを理解するのが難しいので、  
まずは先に自己探求をひたすらやった方が良くかもしれない。

自己探究のジャンルとなると、瞑想とか、自分探しの旅だとか、  
ひらすら内に向かって読書をするのとかが有意義となる。  
「占い」とかも有意義だと言える。

欧米で流行っている「マインドフルネス」みたいな発想も良いかもしれない。

仏教で悟りを開く時の境地に近い「常に落ち着いた状態」が「サンマ・サティ」と呼ばれていて、それがアメリカで普及してできたのがマインドフルネスである。

他者化しやすい西洋社会でありながら、東洋の思想が注目されていて、その発想が瞑想からビジネスにまで幅広く応用されている。

しかしながら、あまりビジネス利用ばかりに向かい過ぎると本筋から逸れてしまうため、その点も注意が必要である。

あくまで重要なのは「Spirit Self」の発見である。

人はつい他者依存をしてしまう生き物である。

人がどうしても他者依存をしてしまうのは、不安があるからであり、どうして不安があるかという点、その原因は自身の家庭の問題や、育ってきた環境の問題にまでさかのぼるかもしれない。

あるいは、認知の歪みや思い込みから、考えが偏ったり不安になったりすることもある。

それらは後天的なものから来てるかもしれないし、先天的なものから来てるかもしれない。

そうすると、そうした分野専門の心理学が必要になってくる。

安定した自己を確立するにはまずはそっちが大事なので、

そっちをしっかりとやるのも良いかもしれない。

逆に言うと、「自己」が確立していて、「Spirit Self」が直観的に分かっている人は、ニューソロジーを理解するのが容易いかもしれないとも言える。

そして、ニューソロジーがはっきり分かるようになると、

「Spirit Self」の感覚が強固になるし、確信が持てるようになる。

「自己」を探るのは、掘れば掘るほど深くなっていくぐらい難しいものだが、

それを可能にするための知恵として利用できるものが、

ニューソロジーだと思ってもらいたい。

## 4. 影に潜む「精神世界」の文化

ヌーソロジーを語る以前に大事なのは、

ヌーソロジー以外で「科学の枠外にあるもの」を探求するジャンルの存在である。

アメリカでは 1980 年代頃から「ニューエイジ」という言葉が出てくるようになった。

ニューエイジとは、物質的世界によって見えなくなっている神聖な真実を目指すものだったり、個人の霊性・精神性の向上を目指すものだったり、宇宙・自然・生命などの大なるものをつながろうとしたり、地球や自然を愛するものだったり・・・

・・・と、非常に多様な思想を含みながらも「新しい時代」を目指すものである。

こうした潮流は 1960 年代から既に始まっていたと言われていて、

アメリカで起きた「ヒッピー・ムーブメント」もニューエイジの潮流の一種とされる。



そうした潮流の元となるのは、ヘレナ・P・ブラヴァツキーが 19 世紀にアメリカで立ち上げた神智学協会だと言われている。

神智学のベースとなる思想は、古代からあったキリスト教・仏教・ヒンドゥー教・エジプトなどが持つ神秘主義思想を総括したものだが、ブラヴァツキーによってまとめられたものの影響は非常に大きい。

神智学協会が広めた「心霊主義（スピリチュアリズム）」や「霊性進化論」は、「新しい時代」に必要なものとして現代的にアレンジされつつ、世界中に広がっていった。

そして、日本にもそうしたものが伝わるようになり、

それが 1980 年代のオカルトブームへと繋がり、

「精神世界」という言葉ができて、書籍のジャンルの一つとなった。

ヌーソロジーも一言で言うと「精神世界」のジャンルにあるものにカテゴライズされる。

この辺についての色々は『サイキックの研究と分析』シリーズでも書いたので、そっちを読んでもらいたい。

[リンク：■サイキックの研究と分析(32) ～1980年代は精神世界のジャンルが流行っていたらしい～ | 哲学思考のなれの果て]

「ニューエイジ」や「精神世界」で目指すものは、大体「オカルト」で目指すものにも近いと言っても良い。そもそも、オカルト (occult) というワードは、本来「隠されたもの」「目で見たり触れたりすることができないもの」を指すものである。神秘思想や西洋魔術の文脈の中で「オカルト」と言った場合、それは科学の枠の外にあるものであり、一神教（特にキリスト教）が排除した思想であり、秘教的な知識体系のことを指したりする。それらは一般的には分かりずらく、隠れやすいから「オカルト」と呼ばれているわけである。ヌーソロジーでやることもそうしたものを探る作業だと言っても良い。



ただ、日本で俗に言われている「オカルト」というワードは、幽霊とか怖いものだったり、怪しげなものだったり、不気味なものを扱う言葉になりつつあり、本来の意味とは離れがちになっている。

(一方で「カルト (cult)」というワードは「崇拜」を意味し、胡散臭いものはそう呼ばれている。)

オカルトが本来の意味と離れつつあることを危惧しつつも・・・その本質について探っていくべきである。

### ■ 1995年から消えていった精神世界カルチャー

1960年代はアメリカではヒッピームーブメントの全盛期となっていて、その後はそれが落ち着いたものの、1970年代もその影響は残っていて、1980年代も日本では精神世界カルチャーが流行っていて、90年代前半までは続いていた。



日本でそうしたカルチャーが消えた明確な理由としてよく挙げられるのが、**オウム真理教**による無差別テロ事件であり、1995年の地下鉄サリン事件と教団逮捕によってその終止符が打たれることになった。精神世界カルチャー全般はそれ以降、一気にやりずらくなってしまった。

オウム真理教の教えの内容も見てみると特徴的である。

「オウム (aum)」という神聖な言霊を重視したり、  
クンダリーニヨガを用いたり、  
人間は神人と獣人の二種類に分かれるみたいなことを言ったり・・・

別に悪い発想ばかりではないのだが、

神人が善で優れていて、獣人は悪で劣ってるものとしてしまった。

オウムという特定の言葉を唯一神聖なものとして使い過ぎて、具体的な人物＝教祖を神と同一視してしまった。

あと、クンダリーニヨガの扱いに問題があっただろう。一番上のチャクラ（クラウンチャクラ）ばかりを開発すると、地に足がつかずに膨大妄想に行き過ぎて破滅することは、ちゃんとした専門家ならよく知っていることである。

とにかく、宗教の悪い所ばかりが暴走していき、  
普通の人間を悪と思うがままにテロにまで発展してしまった。

ただ、クンダリーニヨガが悪いわけではないし、

オウムという言霊自体は悪いものではないし、

人の中に神性と獣性を見出して区別することは悪いわけではないし、

神々の世界を信じて知ろうとすることは悪いわけではない。

我々はあの失態から学びながらも、  
そこで本当に目指すべきものは何なのか？を見つけるべきなのである。

## ■ 手段の一つとしてのヌーソロジー



ヌーソロジーの目的を簡潔に言うと・・・

唯物論的価値観から離れて、科学の枠の外にある世界を目指す。

そこにある上次元の意識と接続することを目指す。

ヌーソロジーではそれを『シリウス』と呼んでいる。

・・・といったことに集約される。

まあこれはあくまで簡潔に言った場合の話であるけど・・・

そこに至るプロセスは、知れば知るほど味わい深い、独創的で膨大なものとなっている。書籍を読むとそれがよく分かってくる。

あと、よくよく知っていくと応用方法が色々あることが分かってくるし、オコツトは割と人間好きなので、人間の生き方も良いものということで、何でも良いことが分かってくる。

それから、上記ではあくまで上次元の意識と「接続することを目指す」と書いた。

「行ったら終了」みたいに「行くことを目指す」とは書いてない。

人間として生きてる限りは人間の意識は持ち続けて生きることになるし、

シリウスに行ってもすぐ終了とはならない。(そりゃそうだ)

あと、接続して繋がった後にどうするかは具体的には決められてない。

そこは各自の自由と言っても良いと思う。

ただ、とりあえず繋がっておけば、何か創造的な生き方をしたくなるかもしれない。

ニューソロジーで大事なものは、あくまで「自己主体で能動的に。」である。

そうして能動的に生きていくと色んな道が開けてくるし、

そもそもオコツトは人間の生き方を否定しているわけではない。

それを踏まえればなんでもありだし、ニューソロジーをちゃんと知れば知るほど、あまり否定的な感情は起きてこない。実はなんでもありのような気もしてくる。

そして、そうしたシリウスのようなものを目指すような思想は、古今東西を探せばたくさんある。

それらに通じるのが「精神世界」や「ニューエイジ」のジャンルなわけである。

自分（Raimu）は、それらのジャンルに興味を持って、

あらゆる方法を探って行って、自分なりに考えた所、

以下の4つの手段にまとまると思った。

- ・ 体育系的
- ・ 人文系的
- ・ 理数系的
- ・ 芸術系的

1番目は基本である身体を重視するアプローチ。2番目は心を重視するアプローチで、言葉やコミュニケーションも大事になってくる。4番目は芸術による表現と、技術の研鑽である。

そして、3番目である理数系のアプローチを支えるに相応しいのがニューソロジーなのだと思う。

幅広い手段がある中でも、ニューソロジーは数学・物理学・幾何学方面で非常に優れた情報を持っている。

『冥王星のオコツト』がもたらした情報を元に、半田広宣さんが苦勞して作り上げた知識体系がそうしたものになっている。

なので、精神世界カルチャー的なものに興味を持ちつつ、

理系的な力に魅力を感じる人は学んでみて欲しい。

## 5. 冥王星のオコツトの目的とは？

さて、これまで変換人型ゲシュタルト論シリーズを(1)～(4)まで書いていった。

これまでのものは「ニューソロジーとはどのようなものか？」を説明するためのテキストで、いわば導入編みたいなものである。

ここから先はいよいよ本編ということで、ニューソロジーの具体的な内容に入り込んでいき、ニューソロジーの書籍を積極的に引用しながら説明していこう。

まずは、『冥王星のオコツト』は何故やってきたか？についてである。



これについては早速、書籍『[2013:人類が神を見る日](#)』の冒頭で、

「コチラは冥王星のオコツトです」と名乗られながらも、

オコツトから交信が始められた時の内容を引用する。

(味気ない文章なので、味気ある文章に変換もしてみます。)

「オコツトハ、メイオウセイニカンヨスル、シリウスノチョウセイシツデス。コノコウシンハ、スベテ、シリウスカラノソウサニヨッテ、オコナワレテイマス。

シリウスノ地球人ヘノ関与ハ、メイオウセイノ近日点通過時カラ始マリマシタ。太陽系ノ最終構成ノタメニ、地球人ノ意識ニ進化ヲ生ミ出スコトガ、ソノ目的デス。

シカシ、プレアデスガ作ル強カナ付帯質シールドノタメニ、アナタガタノ意識ガ働イテイル位置ニ、ハーベスト・ビーコンヲ焦点化サセラレズニイマス」

Hello world!

オコットとは、冥王星に關与する、シリウスの調整質(???)だよん。

この交信はシリウスからの操作によって行われてるよん。

シリウスによる地球人への關与は冥王星の近日点通過時(約 1989 年)から始まったよん。

太陽系の”最終構成”ってのが起きるので、そのために地球人の意識に進化を生み出すことがその目的だよん。

けど、”プレアデスが作る付帯質シールド(※)”によってそれが防がれてるよん。

(※地球全体を覆う唯物論の意識と解釈できる。)

“ハーベスト・ビーコン”という信号を送ってるけど上手くいかないよん。

とりあえず初めの方のメッセージはそんな感じである。続けて以下。

「ハーベスト・ビーコンは1989年から発信が始まっています。この交信も冥王星を中継ターミナルとしてそのビーコンに乗せて発信させられています。わたしの役目はシリウスの調整シグナルを増幅することにあるのです」

“ハーベスト・ビーコン”は1989年から始まってるよん。

この交信も冥王星を中継ターミナルとしてそのビーコンにのせて発信させられてるよん。

わたしの役目はシリウスの調整シグナルを増幅することにあるよん。

・・・以上。

はたから見ると意味不明なメッセージが来た感じであるが、ちゃんと読むと分からないでもないかもしれない内容である。

以降、ここからはふざけないで原文引用を普通に書きます。

(Kohsen) 「つまり、あなたは冥王星人で、シリウスからのテレパスを僕ら地球人に転送しているというわけですね」

(Ocot) 「冥王星人という表現は的確ではありません。人間型ヒューマノイドは冥王星には存在していないからです。あなたがたにしてみれば、わたしはもっと観念的な存在に映るでしょう。地球人の意識進化を推進するために生み出された“**変換人型ゲシュタルト**”という形容が最も好ましいのではないかと思います」

「変換人型ゲシュタルト……………」

「変換人型ゲシュタルトとは、あなたがた地球人が21世紀以降に持つ空間認識のプログラムです。現在の地球人の空間認識は歪曲しています。その歪曲が正しい宇宙的理解からあなたがたを遠ざけてしまっているのです。その歪曲を正常な状態に戻す働きが変換人型ゲシュタルトの役割です。この送信の目的は、わたし自身、つまり変換人型ゲシュタルトをあなたがたにプログラムすることにあります」

・・・これはあくまで一部だけど、オコットのノリはそんな感じである。

こうして「**半田広宣×冥王星のオコット**」の長い付き合いが始まり、大量の情報が送られてくることになったわけである。

この付き合いが1989年から1995年にまで及ぶらしい。

そして、『**変換人型ゲシュタルト**』というワードがまず出てきているので、このシリーズではそれについてを中心に扱っていく。

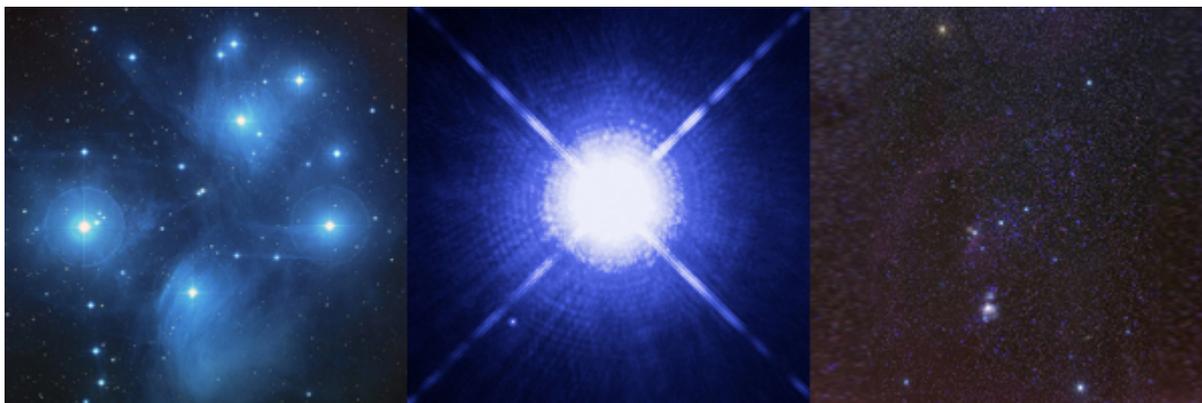
## ■ 「シリウス革命」より引用する「オコットの目的」

それから、以下は書籍『[2013:シリウス革命](#)』の一番始めに書かれていた交信記録の内容である。

(Kohsen) 「この交信の目的は何なのですか。」

(Ocot) 「はい、オリオンによって開始された、シリウスへの方向採取です。プレアデスで生み出された力をシリウスへ変換するために関与しています。」

ここで、『**プレアデス**』『**シリウス**』『**オリオン**』というワードが出てきたので、それについて簡単に説明しよう。



それらは一般的には星の名前に使われているワードだが、オコットによるそれらは「星の本質」のことを言っているらしく、それぞれ、精神世界にある「特定の領域」とか「特定の場所」みたいな理解で良い。地球と近い意識の領域を『プレアデス』、いくらか離れた領域を『シリウス』と呼んでいる感じである。

『シリウス』は以前からちよくちよく説明してる「上位存在」のある場所みたいな意味だ。とはいったものの、高次元幾何学における「上位」っていうのは、単純に「上」って感じではないので難しいんだけど・・・

その辺をちゃんと学んでくのがこのシリーズの本題であり、そのための『変換人型ゲシュタルト』である。

そんでもって、オコットが言うには「シリウスによる地球人への関与」というものも始まっているらしい。

冥王星の近日点通過時からなので、1989年の9月ぐらいからである。

『プレアデス』は「地球」のある場所であり、ここに近い領域である。

これは「地上」と言い換えることもできそうな意味だ。

ただ、プレアデスの中にも高次元と低次元みたいなものがあり、

低次だと「科学の枠の中の世界」に留まり、高次だと「科学の枠の外の世界」も含んでくる。

つまり、プレアデスも精神世界を含んだ概念になっていて、後半の方になるとシリウスの領域にまで入っているようなものとなっている。

そして、『オリオン』は簡単に説明するとシリウスよりもさらに上位存在である。

だからいわば「上位存在の上位存在」みたいなものだ。

これはほんとに単純な説明だけど・・・

オコットはオリオンについて次の説明をしている。

(書籍『2013:シリウス革命』より引用。)

「オリオンとは観察精神が作り出されている場のこと。あなたがたの概念でいえば神が存在する場所…  
…そのようなものでしょうか。」

「神が存在する場所？……その「神」というのは、この宇宙を作った創造主という意味ですか？」

「似ていますが、違います。観察精神とは人間の礎のようなものです。」

なんだか抽象的だが、「大元」とか「礎」とか「果て」みたいなものらしい。

とりあえずはそれ以上の上位存在はないってことで良いらしいので、

「上位存在の上位存在の上位存在」とか「上位存在の上位存在の上位存在の上位存在」みたいなことまではとりあえず考えなくて良い。

考えなくて良いから大丈夫！

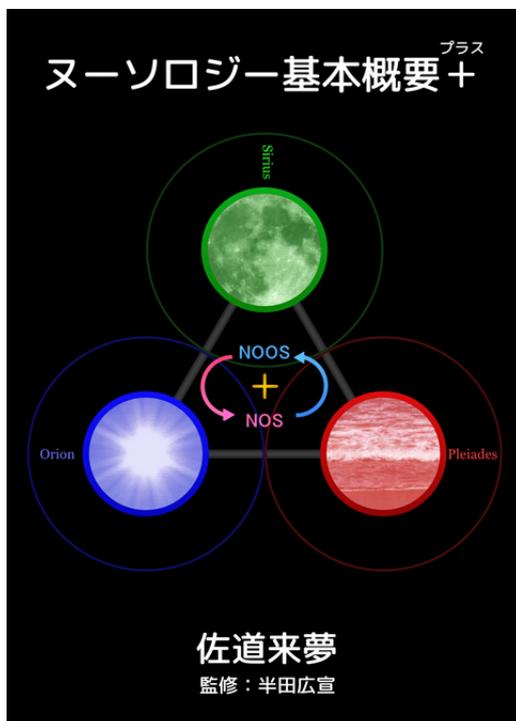
### ■ 三つの概念の色彩表現

ちなみに、この三つはそれぞれ色彩での表現ができて、

[プレアデス：赤，シリウス：緑，オリオン：青]に対応している。

さらに、オコツトによると[プレアデス：地球，シリウス：月，オリオン：太陽]にもそれぞれ関係があるらしい。

筆者 (Raimu) が書いた書籍『[ニューソロジー基本概要+ \(プラス\)](#)』の表紙にあるものも、それぞれ以下の意味がある。

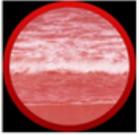




オリオン:青:太陽



シリウス:緑:月



プレアデス:赤:地球

以上のイメージと三つの概念を紐づけると、理解しやすくなるかもしれない。

捉え方次第では、『シリウス』に青カラーを当てる解釈もあるが、  
とりあえず、今回はこのRGBの3色使用で統一していくことにする。

## ■ 内容のまとめ

『2013:人類が神を見る日』に書かれていた、  
ここまでの「冥王星のオコツトの目的」となる内容をまとめると以下になる。

地球人の意識に進化を生み出すために、シリウスから情報を送る。

ただ、現在の地球人の空間認識は歪曲していて、それが理解できないようになっている。

地球人が21世紀以降に持つ空間認識のプログラムを『変換人型ゲシュタルト』と言う。それは空間認識の歪曲を正常な状態に戻す働きを持つ。それをプログラムする。

(そして、変換人型ゲシュタルトを理解すると正しい宇宙的理解ができて、シリウスやオリオンの情報を理解できることに繋がってくる。)

そしてこの「シリウスからの情報」というのがまた膨大で、  
色々と解釈できるのだが・・・とりあえずここまでにする。

詳しくは『2013:人類が神を見る日』を読んで欲しい。ほんとに。

## 6. 「最終構成」と「変換人」とは？

前回引用したオコツトからのメッセージでは、

『最終構成』ってワードが出てきた。

太陽系ノ最終構成ノタメニ、地球人ノ意識ニ進化ヲ生ミ出スコトガ、ソノ目的デス。

それから、『変換人』ってワードについてもうちちょっと詳しく説明したい。

それらの説明をするために、書籍『2013:人類が神を見る日』を再度引用する。

「変換人というのは一体何なのですか？ もう少し具体的に教えていただけませんか」

「次元変換をしていくために現出してくる新しい力を持った人間たちのことです」

「次元変換？」

「そうです、次元変換です。次元変換とは新たな太陽系を作り出すことを意味します」

「新たな太陽系を作り出す…………？」

「現在のあなたには受け入れ難い内容かもしれませんが、もうすぐ、この太陽系に大きな変動が起こり始めます。シリウスではこの変動のことを最終構成と呼びますが、最終構成に入ると、今までの太陽系は働きを終え、新しい太陽系が作り出されていくのです。この太陽系自体の創成は、実は、あなたがた人間の意識進化と対応しています。しかし、地球人の意識は、その進化の方向性にまだ同調することができていません。地球人に意識進化の方向を与えなければ、新しい太陽系活動にも支障が出てしまうかもしれないのです」

「次元変換」ってワードが出てきたり、ワケのワカラン情報になってきた。

この辺は、原書でもコウセンさん自身が戸惑う所である。

その後も話は続いて「最終構成とやらが自然に起きるけど、人間の意識も自然に進化するわけではない」

「意識進化を阻止する背景がある」といった内容になってくる。

ちょっと陰謀論っぽくなるけど……

どうもこの辺は、我々があまりにも「唯物論が正しい。」と世界を認識していると、それが意識進化の阻害になるという話らしい。

この辺を突き詰めると、どうしても陰謀論っぽい世界観も絡んでくるんだけど、

ユダヤ人が悪いとかアーリア人が悪いとか爬虫類人が悪いみたいなのは、ニューソロジーでは目指してないのでそっちに行かないように。

あと、『最終構成』について、別のページの情報も参照してみよう。

「人間の意識がプレアデスからオリオン方向に向かい始めるのが太陽系の最終構成の意味なのですか」  
「はい、意識が人間の次元から変換人の次元領域へと遷移し始めるということです」  
「では、その最終構成とやらは、この地球に何らかの物理的災厄をもたらすのでしょうか」  
「残念ながら今の時点では、最終構成が人間の意識にどのような現象を反映させてくるのか、はっきりとお教えすることはできません。現在の太陽系の働きが終わりを告げるという意味では人間の滅亡という表現もできるかもしれませんが、しかし、それは決して物理的な滅亡を意味しているわけではありません」

『プレアデス』と『オリオン』については前回で説明した。

構造的には、[プレアデス⇒シリウス⇒最終的にはオリオン]というイメージである。

「人間の滅亡という表現もできるかもしれませんが」「しかし、それは決して物理的な滅亡を意味しているわけではありません」のくだりも、そういうものということでもなんとなく分かって欲しい。

具体的にこれからどうなるかはよく分からないらしい。

## ■ 次元変換とピラミッド

さて、この「次元変換」というやつ、

さらに突き詰めてみると、古代エジプトで作られた「ピラミッド」もそれを目的に作られたということが分かってくる。



書籍『2013:人類が神を見る日』によると、

「具体的なことはまだ分からない。」

「オコツトが言っていたことを総合してみると」

といったくだりが書かれているけど、

「ピラミッドを作ったのは人間ではなさそう」と書いてあり、  
『変換人』のような存在が作ったことは確かのようなのである。

そもそも、この辺りの文明を生きてた古代人は、我々と同じ人間と同様というよりか、俗に言う「宇宙人」みたいなものの方が近いらしい。

まるで宇宙から来たかのように超越的存在だということで、  
書籍では「半神半人」という表現もされている。

そうした半神半人のような古代人は、五次元や高次元の知識を持っていて、低次元から高次元への次元振動の共鳴装置を作ることができたらしい。それは高次元への進化を促す強力な宇宙エネルギーを生み出すことができるもので、ピラミッドにもそれが組み込まれているわけである。

ヌーソロジー的には、そうした「意識進化促進装置」として作られたものがピラミッドなのである。

書籍ではコウセンさんは以下のように言っている。

「彼ら変換人達は個人を超えた種族全員に共通のあるビジョンを持っていて、そのビジョンの達成のためにのみ生きていたと言っているかもしれない。そしてピラミッドもそのビジョン達成のための一環として建造されたに違いない」

ヌーソロジーは意識進化について明らかにするものなので、  
その辺のロマンや美学の話はどうしても絡んでくる。

さて、「古代人」のネタだと、他にも「アトランティス」や「ムー」の存在も、オコツトに聞けば返答が返ってくる。

それら古代の民は、意識進化して上次元に行ったり行かなかったり、  
あるいは、今の時代だと「化石」として存在してたりするらしい。

マヤ文明の遺跡、イギリスのストーンヘッジ、イースター島のモアイ像・・・など、  
世界のどこかにある古代の遺跡にも、  
そうした不思議な文明の痕跡が残されているわけである。



## ■ トンデモ情報いろいろなヌーソロジー

このように、『冥王星のオコット』にあらゆることに聞いてみたら、あらゆる返答が帰ってくるので色々なことが分かってくる。

例えば以下とか。

- ・ 夢の世界と死後の世界はまったく同じものである
- ・ 輪廻は存在しない。輪廻しているのは宇宙自身である
- ・ 宇宙のセックスと人間のセックスは互いに反転関係にある
- ・ 人間は死ななくなる、そして、赤ちゃんは生まれなくなる
- ・ 太陽はまもなく核融合を停止する
- ・ やがてコンピューターはすべて停止する
- ・ この宇宙を作ったのはアトランティス人である
- ・ 宇宙には太陽系しか存在しない
- ・ 恐竜が生物として存在したことはない

これらは書籍『2013:シリウス革命』で取り上げられた情報である。

この本は「トンデモ本」の路線で出版された本なので、インパクトのある情報が多い。

あと、筆者 (Raimu) が作った『シリウス・ファイル公開所』のページにも、多岐に渡るオコット情報を載せておいた。

[リンク: 「シリウス・ファイル」公開所]



以上のように、トンデモ情報オカルトモノとしてもウケそうなのが、ニューソロジーの側面の一つである。

・・・さて、トンデモ情報ばかり追いかけてると脱線してしまう。

本題は『変換人型ゲシュタルト』である。

## 7. 変換人型ゲシュタルトとは？(前編)

まるで古代ピラミッドを建造した「半神半人」のような存在とも言われるのが『変換人』。神話に残るエジプトの神々もその名残りなのかもしれない？



さらに、数学・コンピューター・ITが飛躍的に進歩した現代では、変換人の在り方も古代とはまったく違ったものになっているはずである。

そんな変換人のゲシュタルトである『変換人型ゲシュタルト』とは、ざっくりとどんなものなのか？をここで説明しておこう。

まず、そもそも「ゲシュタルト」とは何か？

それはドイツ語で、形、形態、状態の意味を持ち、ざっくり言うと「思考様式」のようなものである。

「空間の認識の仕方」とかもそうであり、ヌーソロジー的に「ゲシュタルト」と言うと、空間の認識の仕方がベースになっている意識のカタチと、それに伴う思考様式のことを指す。

人間には人間のゲシュタルトがあり、一般常識的な空間の認識の仕方がある。これはヌーソロジーでは『人間型ゲシュタルト』と呼ばれている。一般的な人間はそれをベースに生きている。

一方で、変換人のゲシュタルトが『変換人型ゲシュタルト』なわけである。

まず、変換型ゲシュタルト理解のための第一のキーワードは「反転」であり、それは一般的な物の見方から反転したものになっている。

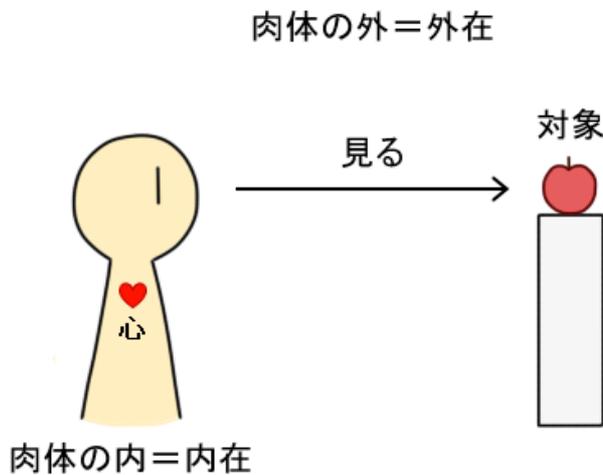
一般的には、人間には肉体があって、その中に「心」らしきものがある。

肉体の外側は「外在世界」となっていて、外在世界に色んな物があって、それを対象として見ることで物を認識する。

肉体の内側は「内在世界」となっていて、我々の意識や心はそこにある。意識は脳に宿ったり、心は心臓に宿っているかのように解釈されたりする。

ここでは外在世界は「外面」のようになっいて、内在世界は「内面」のようになっている。

こうした普通の空間の認識の仕方は『人間型ゲシュタルト』に該当する。



しかしながら、変換型ゲシュタルトでは、まず「内面」と「外面」の関係が逆になっていて、外在世界として見えてる空間が「内面」であり、心のような内在世界が「外面」であるとする。

書籍『2013:人類が神を見る日』で『冥王星のオコツト』は以下のように説明した。

「人間の内面とは、あなたがたが外在と呼んでいる世界、人間の外面とは同じくあなたがたが内在と呼んでいる世界のことを指します」

「内面が外在で、外面が内在？ 内と外が逆だということですか？」

「本当の外宇宙というのは、あなたがたの心の中の方向にある……とでも言っておきましょうか」

『人間の内面』と『人間の外面』もまたオコツト情報特有の用語であり、反転したゲシュタルトにおける内面と外面のことを表す。

一見、外在世界にあるようにみている物質（先の図ではリンゴ）は、自身の内面とは無関係なものではない。自身の持つてくる心もまた、外面である世界の在り様と無関係ではない。

これがオコツトの言い出した、変換型ゲシュタルトにおける基本的なモノの見方である。

いわば、身体の内側に外在世界（物の世界・宇宙）があり、身体の外側に内在世界（心の世界）があるということ？



うーん・・・そんな感じの感覚が分かるだろうか？

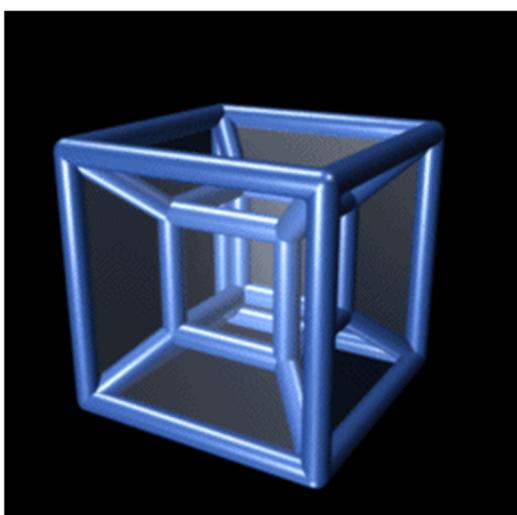
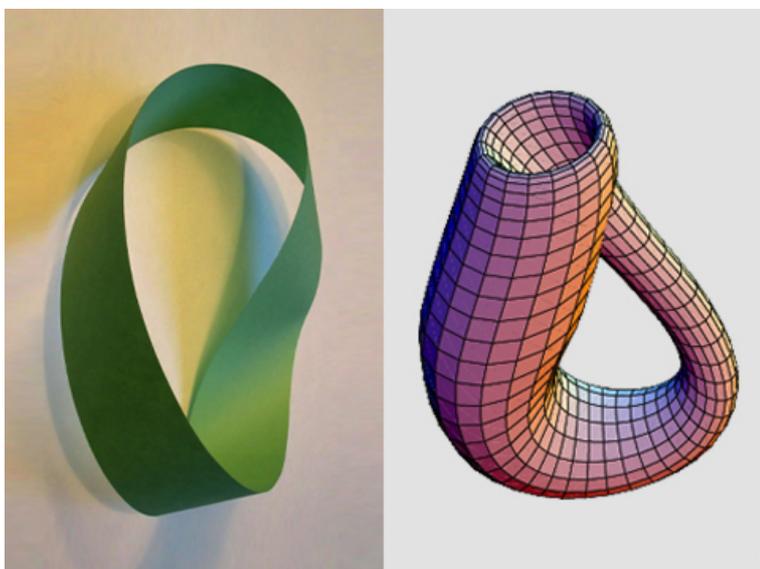
こうした「人間型ゲシュタルト⇒変換型ゲシュタルト」への移行の際には、世界の内と外、物の内と外の間隔を一回「裏返す」ことが必要な構造になっている。

だから、表が裏で裏が表とか、内が外で外が内みたいな、そういうイメージが出てくる。

裏側も表側もないトポロジー、内側も外側もないトポロジーといったら、

「メビウスの輪」や「クラインの壺」といった図形がある。

それから、「4次元立方体」といった図形も、回転させると内と外がひっくり返る構造になっている。



[アニメーション：内と外が裏返る4次元立方体]

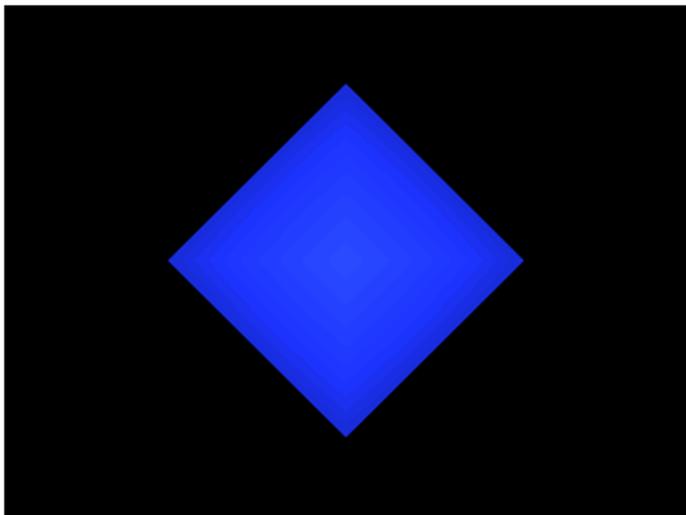
そのため、こうした図形は変換型ゲシュタルトの入門部分と非常に親和性がある。  
いわば、「異界への門」の象徴みたいになっているわけである。

それから、反転したモノの見方が分かると、

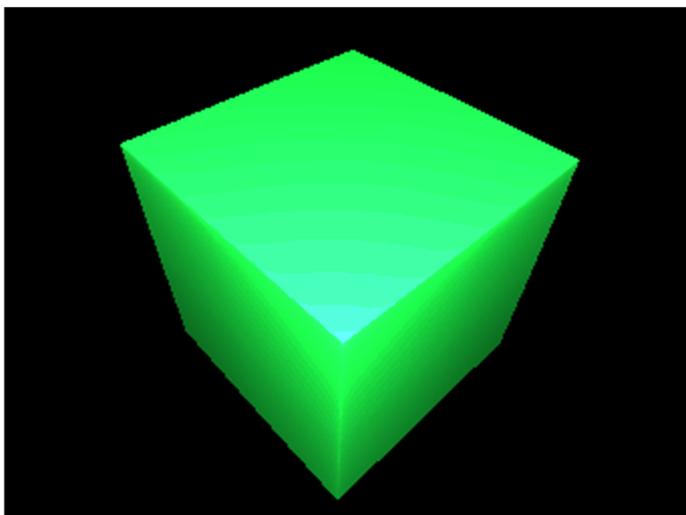
**正八面体**と**正六面体**にも意味があることが分かってくる。

簡潔に説明すると、それぞれ「外在世界(物の世界)として捉えている内面」と「内在世界(心の世界)として捉えている外面」の象徴となっている。

※外在世界(物の世界)として捉えている内面



※内在世界(心の世界)として捉えている外面



以上のようなことについては、パッと見じゃぜんぜん分からないかもしれないが・・・

ひとまず、こういうことをじっくりと理解していくのがヌーソロジーである。

### ■ 物質は宇宙精神の影

「反転」した世界が分かると、自身の持つてくる心が、外面である世界の在り様と関係してくる・・・みたいなことを先ほど書いた。

これを分かりやすく言うと、**外在世界が内在世界を反映しているように見えてくる**・・・ということになる。

つまり、自身の内在世界（心）によって、自身の見ている風景や状況が変わってくるということだろうか？

この辺は「**引き寄せの法則**」みたいなものにも通じている発想と言える。

それから、オcottは「あなたがたが物質として見ている存在は、宇宙精神の影のようなもの」と言っていた。

そもそも宇宙には「宇宙精神」と呼べるような壮大な意識があって、その影が、我々が見ている外在世界（物質）になっているということである。

「我々は影しか見えていない」という話は、古代の哲学者プラトンによる『洞窟の比喩』に近い内容である。



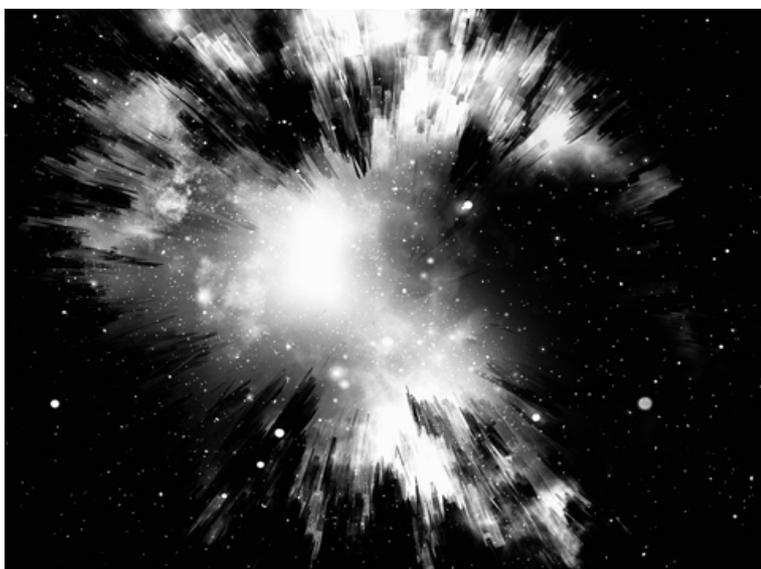
「洞窟の比喩」では、以下のようなシチュエーションを仮定する。

地下の洞窟で生まれた時から縛られた人がいるとして、その中の一方にだけ光があって、様々な形の像（例えば、色んな種類の道具や木や石などで作られた人間や動物）が運ばれていくが、それは縛られた人には見えないようになっている。しかし、縛られた人にはそれらの像の「影」だけが見えている。その場合、その人にとっては「影」が「実体」であるかのように認識する。

プラトンが「洞窟の比喩」で言いたかったのは、それと同様に、われわれが現実に見ているものは、何かものごとの原型となる存在（プラトンがイデアと呼んだ存在）の「影」に過ぎない・・・ということだった。

オcottが言っていたことは、プラトンがそこで言っていたことにもかなり近いのかもしれない。

このように、オcottの世界観はそもそもの「外在世界」の捉え方が根本的に違うのである。



一般的な科学における宇宙創造は、まず「ビッグバン」のような現象があって、それはもちろん我々の心とは全く関係のない物理現象であり、そうした物理現象から始まって[宇宙⇒岩石の集合⇒星⇒海と陸⇒自然]といったプロセスで「地球」が出来上がっていき、そこに生き物が登場するようになって、ダーウィンの進化論のように動物が進化していき、高度な知能と心を持った我々が生まれてきて、世界を見るに至ったみたいな考え方である。

しかしながら、ニューソロジーではビッグバンの話は、「そもそも誰も見たことが無い」ということで否定する方向にある。また、変換人型ゲシュタルトにおいては、むしろ「我々が世界を見る」ことこそが「世界の創造」になる。そうすると、「物質は宇宙精神の影」という発想の方が自然になってくるのである。

以上のように、「我々が見ていることで世界が作られている」みたいな発想は、「人間原理」と呼ばれる考え方に近い。人間原理とは、「宇宙があるべき姿をしているのは、人間が観測することによって、初めてそうであると知った時からだ」みたいな、人間ありきで宇宙を捉える考え方である。

ニューソロジーはその辺に近いことを取っ掛かりとして覚えておこう。

### ■ 点の内部に入り込む意識

内在世界と外在世界の反転みたいなことが起きると、「点」と「全体」の関係も反転してくる。

変換人型ゲシュタルトの初歩で出てくる「反転」の感覚に近いのは、  
「点」の中に入り込む感じであり、  
さらに、点の中に世界がある感じである。

我々が普通に「景色」を見ている時は、ざっくりと「全体」が見えてる感じであるが、  
そうした中で、いわば「点になる」みたいな感じになってくる。



ここで「**仏教**」をちょっと引用した話をしよう。

仏教には「**刹那**」という概念があり、それは時間の概念の1つで「**きわめて短い時間、瞬間、最も短い時間**」を意味する。

もっとも短い時間は、もっとも小さい空間とも接点を持つので、  
そうしたミクロな概念を掴むために、仏教にはそうしたワードがあるわけである。

仏教は長い歴史の中で悟り専用の瞑想法が開発されている。

「**座禪**」が有名だが、中国で生まれた天台宗に伝わる「**止観**」もまた、  
変換人型ゲシュタルトみたいなことを理解することにととても適している。

そうした瞑想法を用いて、**一点に集中しつつも、全体を観る**ような・・・そんな感覚を開発していく。



点の中から世界を観れるようになると、

今度は世界全体で「点」が無数に広がっていて、全体から「視線」が出てくるような感覚にもなる。

そうした空間認識の仕方が、変換人型ゲシュタルトの基本であり、ニューソロジーの基本にもなってくる。

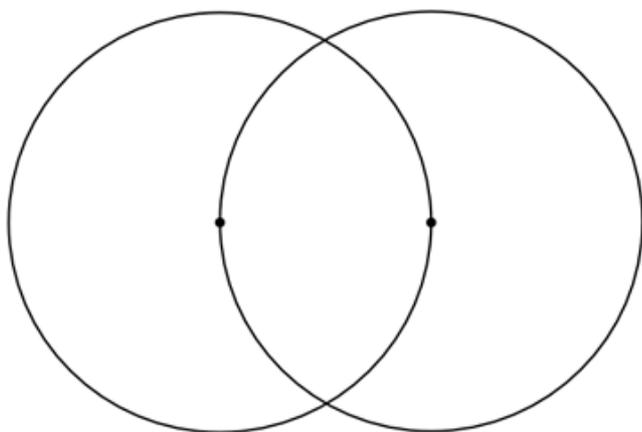
### ■ 二つの円と回転の関係

さて、「点になる」みたいなことを書いていったが、

自身が点になった場合、「自己」と「他者」が以下のような関係になってることがさらに見えてくる。

二つの点と、それを中心とする二つの円が交わっている図だが、

この図から何が分かってくるのだろうか？



左側の点を点 A、右側の点を点 B としよう。

そして、点 A が片方の点 B を中心に回っていたとしよう。

その場合、点 B を中心に点 A が回っているのは客観的に見たら事実だとしても、

実は点 A にとっては点 B が自身を中心に回ってるようにも見える。

したがって、片方を中心にもう片方が回っていると、実は二つの円運動が存在していることになる・・・??

ということがヌーソロジーで言われている。

これもまた、ヌーソロジーを理解するにおいてとても重要な原理になってくる。

点Aは「地球」、点Bは「太陽」の関係だと理解すると分かりやすい。

こうしたことをじっくり考えていくのもヌーソロジーの特徴である。

以上。長くなってしまったので、

『変換人型ゲシュタルトとは？（後編）』に続く。

## 8. 変換人型ゲシュタルトとは？（後編）

引き続き「変換人型ゲシュタルトとはどんなものか？」についての話をする。

### ■ 主観と客観の関係性

ヌーソロジーを理解していこうとすると、

「主観」と「客観」の関係についてがまず出てくる。

これもヌーソロジーの基本であり、変換人型ゲシュタルトの基本でもある。

一般的には、客観は外在世界から生じるもので、

主観は内在世界から生じるものである、と理解するのが正しい。

しかし、ヌーソロジーの場合は、やはり「反転」が絡んでくるので、

内在世界から客観が生じてるかもしれないし、

外在世界から主観が生じているかもしれない？

ということになる。

主観と客観の関係の理解のため、

ブログで以下のツールを用意したことがある。

[『視点変換3Dルーム』](#)という、Web上で動く3Dコンテンツである。

[リンク：「視点変換3Dルーム」というのをUnityで作りました | 哲学思考のなれの果て]

この3Dコンテンツでは、自己視点と他者視点との切り替えが可能であり、

視点を切り替えると実際にどういう光景になるかを疑似体験することができる。

また、その切り替えは主観と客観の切り替えを意味するものでもある。

主観は自己視点によって作られ、客観は他者視点によって作られているものだからである。

そして、4番目の部屋では「KitCat」と書かれた缶が、

自身の周りで周っている様子と、

自身から見えてる光景とを切り替えることができる。

## 他者視点（客観）



〔アニメーション：自身が自転していて、缶がそれを中心に公転している〕

## 自己視点（主観）



〔アニメーション：自身が見ている缶の公転だが、缶が自転しているようにも見える〕

〔Youtube 動画：視点変換 3D ルームでの KitCat 缶回転 (KitCat 実験) 〕

他者視点から見たら、当然ながら缶は必ず自身の周りを回ってるように見える。

しかしながら、自己視点から見たら、自身が缶の周りを周っているように見ることもできるのである。

この「自身が缶の周りを周っているように見る」という思考の切り替えをやってみよう。

この感覚も重要な「反転」であり、

ニューロロジー理解のための基本となる。

### ■ 自我を解体する道

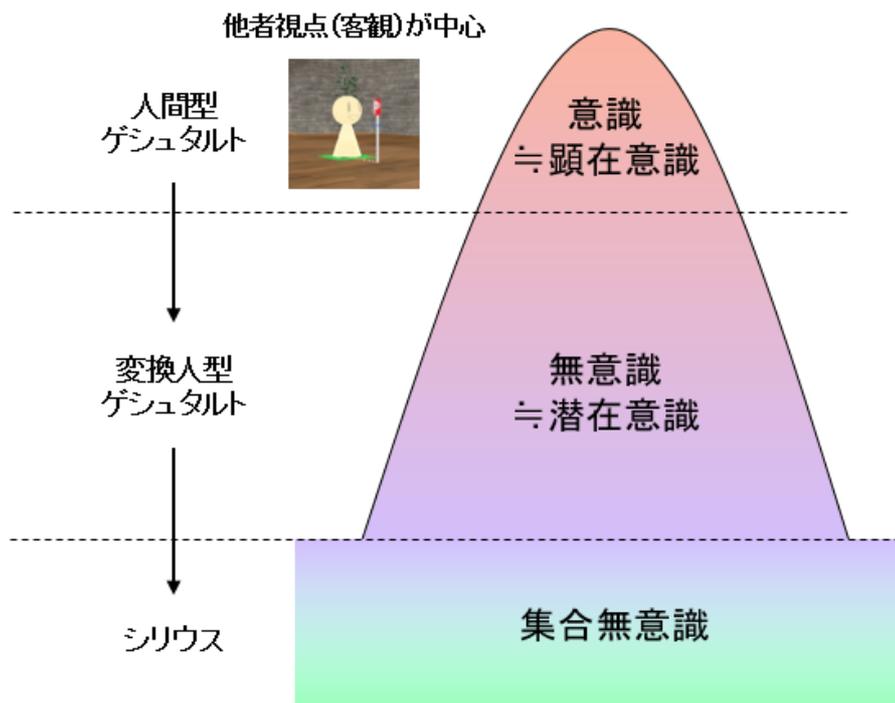
ここまで、人間の空間認識の仕方と、

その反転についてをロジカルに説明してきた。

こうした構造は、必然的に「心」の問題とも絡んでくる。

ニューロロジーを理解すると、我々の普段の意識を形作っている「自我」も空間認識と関係あることが分かってくる。

そして、我々の心の在り様も、そうした自我の在り様によって決まっているため、**空間認識の変容の問題は、必然的に心の変容の問題にも繋がってくるのである。**



人間の自我は、上記の図だと「意識≡顕在意識」の中にあるものであり、これは人間型ゲシュタルトがベースになっている。

人間型ゲシュタルトとは、「外在世界を外面」とする通常の見方であり、科学に則った思考の仕方や、物理法則に則った物の見方である。

そして、こうした認識は「他者視点（客観）」が中心になってできている。

人間型ゲシュタルトから変換人型ゲシュタルトに移行するということは、こうした世界から脱することなので、必然的に**無意識の世界に行くことと同義**となる。

したがって、ニューロロジーを真剣にやると、顕在意識の中心にある自我を解体したり、捉え直したりすることになる。

そして、そうした無意識の世界に向かうと、自然と出てくる感情がある。

自身が今まで無意識に抑圧してきて、向き合うことを避けた負の感情がそこにあるかもしれない。認容し

がたいと思っている心的内容は、その人の暗い部分をなしている。

人間の心には必ずそうしたものが生じるパターンがあり、ユングはそれを「シャドウ」と呼んだ。無意識の世界に行くとそんなものが出てくるかもしれない。



むしろそうしたものを無いものとして、スピリチュアルや精神世界の道に進むのは危険である。それが出てこないスピリチュアルは絶対に嘘だろう。

そうしたリスクがある中で、心や感情がついていける人間はどれだけいるのだろうか？

以前にも書いたことだが、人間はつい他者依存したがる生き物であり、特に不安や恐れを抱えた心を持っているほどそうになってしまう。

他者依存をしたがる性質は、人間型ゲシュタルトの世界への依存や、自我依存をしたがる性質と同義となる。

不安があって他者依存をしていると、無意識の世界へは進めないし、ヌーソロジー的な「前」へは進めない。

したがって、自己を安定させるために、そうした分野専門の心理学が必要になることもあるかもしれない。

こうした心の問題が絡みながらも、ヌーソロジーは極めてロジカルに無意識の世界を突き進んでいく。

## ■ 素粒子と原子の秘密

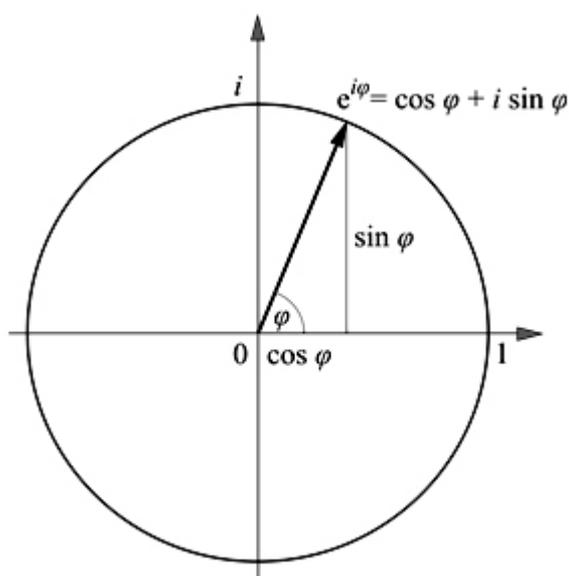
あと、変換人型ゲシュタルトの話で大事なのは、

「素粒子の構造が人間の意識と関係している」と言われていることである。

以下、書籍『2013:人類が神を見る日』に書かれていたオコツトの言説である。

「主体と客体の関係性に形作られている幾何学が展開されていく空間は、おそらくあなたがたが**複素空間**と呼んでいるものと数学的には同型対応していくことになるでしょう。量子的な空間とあなたがたの意識を構成している空間は、わたしたちにとっては全く同一のものとして見えています。あなたがたが量子世界の中に見ている構造は、意識を構成するための高次元空間の射影のようなものと考えて下さい」

「**複素空間**」は「実数+虚数」で構成されるもので、「オイラーの公式」にも表れているものであり、量子力学の基本である「波動関数」に出てくるものである。



オコツトによると、これが主体と客体にも関係してくるとのことだった。主体と客体は、主観と客観にも絡んでいる。

また、「量子世界の中に見ている構造は、意識を構成するための高次元空間の射影のようなもの」と捉えることがニューソロジーの中核にあり、

『2013:人類が神を見る日』にはそうしたことがちよくちよく書かれている。

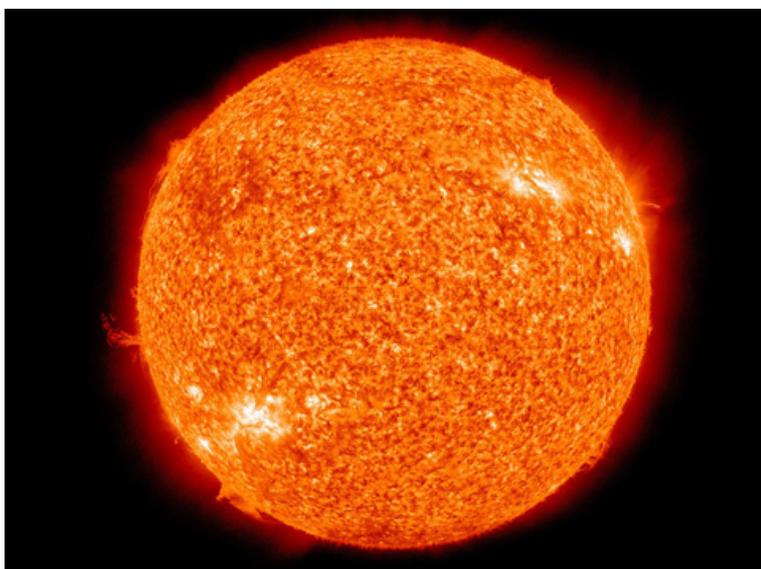


ニューソロジーの初期にあったキャッチコピー「素粒子の正体は、我々の意識だった！」の由来はここにあり、ニューソロジーが素粒子の構造にこだわる理由もここにある。

こうした複素空間や波動関数の話から、本格的な量子力学の話に繋がってくるだけでなく、他にも、uクォーク、dクォークに関係する物理学や、光子、電子との関係まで絡んでくるし、電場と磁場も絡んでくる。全部で17種あるとされる素粒子すべてや、反粒子にも何かしらの意味がある。

さらに、陽子と中性子はuクォークとdクォークで構成され、陽子と中性子が合わさって原子核になり、原子は「原子核+電子」で構成される。素粒子が意識の構造を表すということは、原子もまた意識の構造の集合体であり、何かしらの精神が宿るということになる・・・？

加えて、原子の基本は水素とヘリウムである。水素は原子番号1番で中性子を含まず、一個の陽子と一個の電子で構成されている。ヘリウムは原子番号2番で、二個の陽子と二個の中性子と二個の電子で構成されている。そして、太陽で起きている核融合反応は水素とヘリウムの間で起きている。ここでも何かしらの意識が動いていて、人間にとって何か重要な意味があるらしい？



書籍『2013:人類が神を見る日』にはそんなことが書かれていた。

そして、人間型ゲシュタルトでは絶対にこうしたことが理解できないため、これらを理解するためには変換人型ゲシュタルトが必要であると、

『冥王星のオコツト』という外来者が言っていたわけである。

そんなオコツトが言ったことから構築されていったのがニューソロジーである。

・・・以上。

とりあえず「変換人型ゲシュタルトとは？」の説明はここまでとする。

内容を一気に詰め込んで書いていったが、これらはあくまでざっくりした説明である。

まだ分からないかもしれないが、こうしたことへの理解をこれから深めていくわけである。

変換人型ゲシュタルトについてしっかりと知るためには基礎用語がいくつか必要になるため、次回からはそれについて一つずつ説明していく。

## 9. 基礎用語① 次元観察子と定質/性質など

これから変換人型ゲシュタルトを具体的に学習するための「基礎用語編」を始めていく。  
言うなれば「ヌーソロジー用語」についてである。

ヌーソロジー用語とは、主に『冥王星のオコット』が提供してきた新規用語（もとい謎のワード）であり、その一つ一つがなるべく正確に分からないとヌーソロジーは理解できない。  
これまで出てきた『オリオン』『シリウス』『プレアデス』『変換人』『最終構成』『人間の内面』『人間の外面』といったワードもヌーソロジー用語の一種である。

ヌーソロジーにはそうした未知のワードがたくさんあるのでそこが大変な所だが、  
とりあえず理解すべき用語はそう多くはないため、  
変換人型ゲシュタルトの理解に必要なものに絞って説明していく。

### ■ 13の次元ユニット。「次元観察子」について

まずは『次元観察子』という用語についてである。

これについては、書籍『2013:人類が神を見る日』にある以下のエピソードではじめに伝えられたらしい。

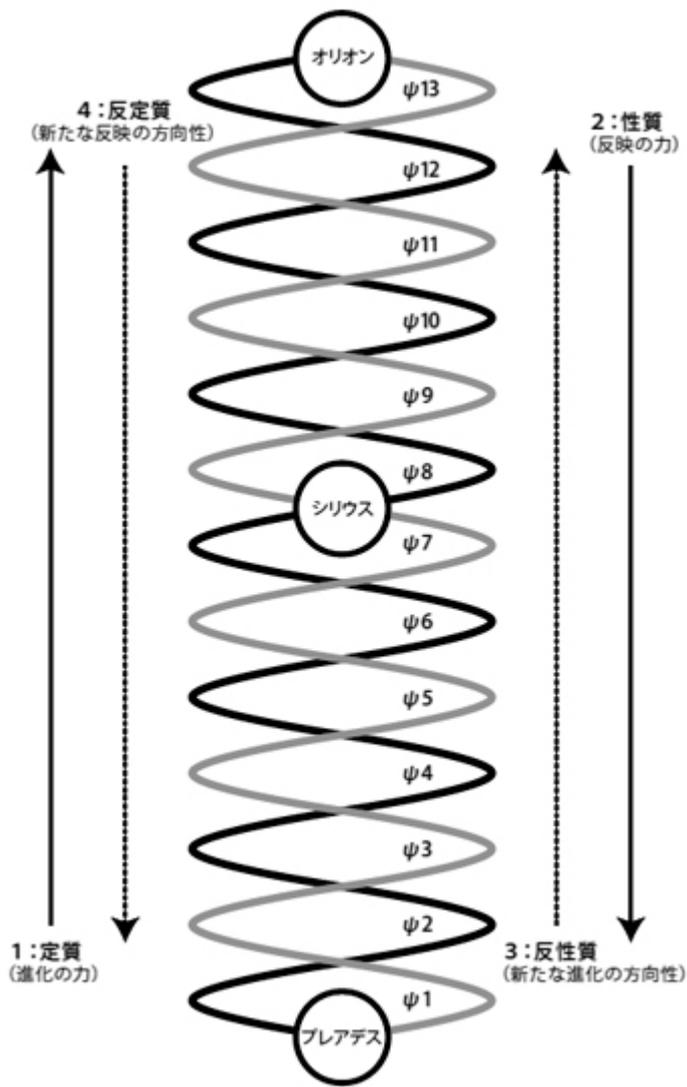
オコットからの二度目の交信は、何の前触れもなく突然始まった。

「**タカヒマラをユークリッド平面に変換してビジョン転送を行います。意識を右後頭部に集中して下さい**」

タカヒマラ……………？……………オコットの声が聞こえて間もなく、右腕の感覚が麻痺し始め、人さし指の先の方から何やら螺旋状のエネルギーのようなものが流入してきた。右腕の全神経網にピリピリと電気的なパルスが走りだし、手が勝手に前方に動いていく。その小刻みな痙攣はあっという間に右肩にまで達し、工業用のロボットアームのように不器用な動作で目の前のペンを握らせた。

——こ、これは……………自動書記だ。——

テーブルの上に置いたメモ用紙に波のような模様と、 $\psi$  1、 $\psi$  2……………というように、何かの記号のようなものが記されていく。しばらくして腕の動きが止まったとき、そこには、DNAのような二重螺旋の図と4本の大きな矢印とが描かれていた。そして、ちょうど、 $\psi$  13、 $\psi$  7、 $\psi$  1と記された部分に、オリオン、シリウス、プレアデスと、カナ文字で書いてある。



『タカヒマラ』とは、ニューロロジー的な「宇宙のシステム全体」「森羅万象」みたいな意味で合っているものである。

ちょっと中略を挟んで、引き続き以下の説明へと入る。

「先ほど送信した図をもう一度よくご覧になって下さい。オリオンとプレアデスの間にいくつの定在波が作り出されていますか？」

わたしは自動書記によって描かれた図を手にとった。2つの螺旋が作り出す間の領域の一つ一つに、しっかりとψ1からψ13までの記号が示してある

「……………全部で13です……………」

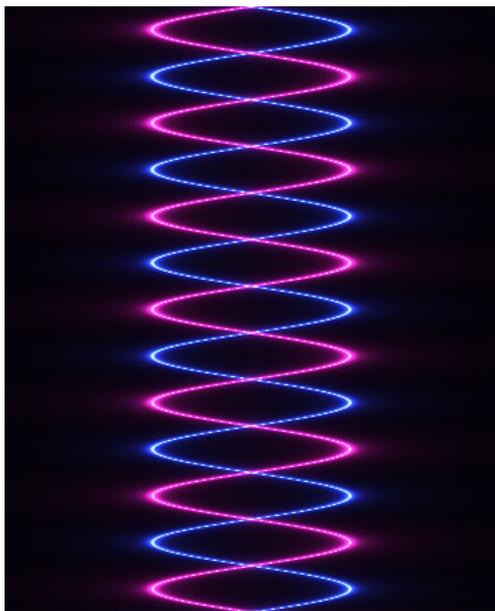
「よろしいでしょう。そこに記されているψ1からψ13のことをわたしたちは次元観察子と呼んでいます。次元観察子とはタカヒマラを構成している次元ユニットのようなものとお考え下さい」

### 『次元観察子』！

これこそがニューロロジー学習の中心となる概念であり、変換人型ゲシュタルトで終始出てくるワードである。

オコツトによると「次元ユニットのようなものとお考え下さい」とのことである。

ここでは13ある定常波のような形で説明された。



「次元ユニットとは？」という気もするけど、  
とりあえずこの13のユニットは森羅万象を網羅しているため、  
これが分かると森羅万象のありとあらゆることが構造的に分かってくる。  
後々詳しく説明するので、とりあえずの理解はそんな感じで。

あと、次元観察子はタカヒマラの階層構造を形作っているものでもある。  
タカヒマラというのは宇宙全体のシステム的なものであり、精神世界的なものでもあるので・・・  
つまり、次元観察子によって**精神世界にある階層構造**が明確に分かってくるわけである。

次元観察子の奇数番目と偶数番目は一つのペアになっていて、それらが一つの階層になっている。  
 $\psi 1 \sim \psi 2$ が第一層、 $\psi 3 \sim \psi 4$ が第二層、 $\psi 5 \sim \psi 6$ が第三層・・・みたいに続いていて、  
 $\psi 13$ が第七層でそこで一旦打ち止めとなる。

	$\psi 1 \sim \psi 2$	第一層
	$\psi 3 \sim \psi 4$	第二層
	$\psi 5 \sim \psi 6$	第三層
	$\psi 7 \sim \psi 8$	第四層
	$\psi 9 \sim \psi 10$	第五層
	$\psi 11 \sim \psi 12$	第六層
	$\psi 13$	第七層

宇宙全体のシステムは七階層になっているということで、  
「7」という数字もキーワードになってると言える。

そしてこうした中で、人間は $\psi 1 \sim \psi 2$ の位置にいるらしい。

そこから一層だけ進むと $\psi 3 \sim \psi 4$ になる。したがって、変換型ゲシュタルトの初歩で出てくるワードもそれになるわけだ。

全部で13まで行かなければならないので、頑張ろう。

(※必ずそこまでやるという話ではないので、後で詳しく説明します。)

## ■ 定質と性質

次に『定質』と『性質』について説明する。

先ほどの続きを引用する。

「つまり、宇宙の全体性は13の次元で構成されているということですか」

「はい、基本的にはそうです。しかし、このタカヒマラには2つの力の流れが存在していますから、全体で26の次元が存在しているという言い方ができるかもしれません」

「2つの流れ？」

「はい。一つが……プレアデスからオリオン、つまり、 $\psi 1$ から $\psi 13$ へと向かう力の流れのことで、もう一つがその反対方向 $\psi 13$ から $\psi 1$ へと向かう力の流れです。この相対的な二つの力の流れのことをわたしたちはそれぞれ定質と性質と呼んでいます。あなたがたの神話で言えば、定質とはイザナギノミコト、性質とはイザナミノミコトのことと考えて下さい」

「イザナギとイザナミ……？」

「はい、イザナギとはタカヒマラに生み出された13の次元を持つ定在波を相殺していく働きを持つもので、イザナミは新たな定在波を作り出していく働きを持っているということです」

「なるほど……、13の嵐でイザナギ……の波でイザナミ……というわけですね」

「全く、その通りです」

先の図に書いてあったように、次元観察子には二つの力の流れがあり、

[プレアデス⇒オリオン]のものが『定質』、[オリオン⇒プレアデス]のものが『性質』と言われている。

そして、なんと。日本神話に出てくるイザナギとイザナミが出てきた。

それも関係してるらしい。



イザナギは国の創成期に活躍した男性神であり、  
イザナミは死んで黄泉の国へ行った女性神である。  
アマテラスやスサノオの親にあたる、超有名級の神様だ。

ヌーソロジーの情報はこういう日本神話ネタとも親和性がある。

## ■ 反性質と反定質

続いて、『反性質』と『反定質』について説明する。

また書籍を引用しよう。

「さて、タカヒマラが律動していくためには、定質と性質だけでは不十分で、もう一組の二元性が必要とされます。この二元性はタカヒマラの中に起きている反響のようなもので、それぞれ**反定質と反性質**と呼ばれます」

「反定質と反性質？ ……………それらは定質と性質の反対側に生まれている力のようなものですか」

「そうですね、反定質と反性質とは、人間が現在、意識と呼んでいるものに相当しています。」

長くなるので続きは省略する。

『反定質』と『反性質』ってワードが出てきた。これは人間の意識に相当するらしい。

このうち、**進化の方向性と言われるのが『反性質』、その反映（逆向き）と言われるのが『反定質』**である。

ちょっとややこしいが、力の方向性が同様なのはそれぞれ[定質・反性質]と[性質・反定質]の組同士である。

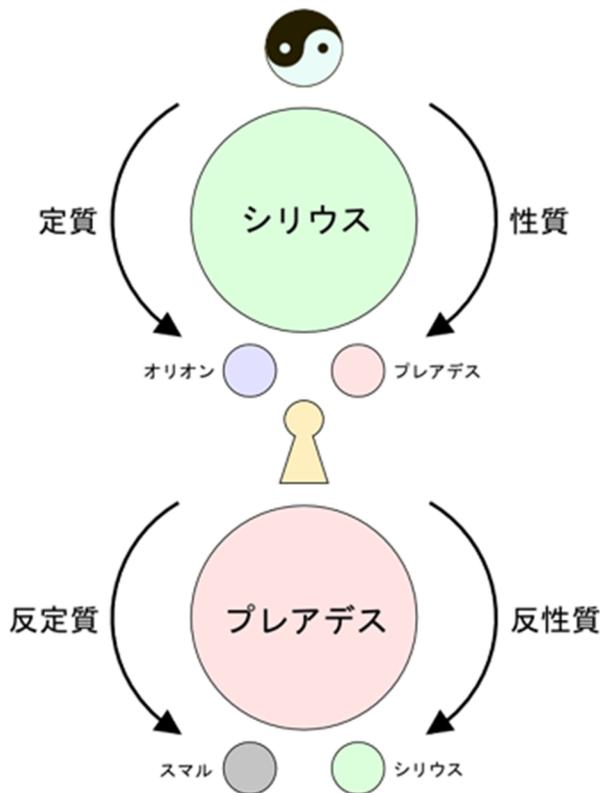
[定質・性質・反性質・反定質]の四概念については、

書籍『2013:シリウス革命』でも説明されている。

そこでは、シリウスにあるのが「**定質と性質**」で、

**プレアデスにあるのが「反定質と反性質」と**書かれている。

sonでもって、プレアデスより下次元に『スマル』ってのがあって、そっち方向に行くのが反定質で、シリウス方向に行くのが反性質となる。



要するに、[ベテルゲース⇒オリオン]の方向の流れが定質、[オリオン⇒ベテルゲース]の方向の流れが性質。  
 [スマル⇒シリウス]の方向の流れが反性質、[シリウス⇒スマル]の方向の流れが反定質。  
 上次元方向に行く流れが「定質と反性質」、下次元方向に行く流れが「性質と反定質」。  
 整理すると以上のようなになる。

シリウスの世界と人間の世界とで、  
 「定質⇒反定質」「性質⇒反性質」  
 となると、方向性が逆になるねじれ現象が起きる所も重要そうである。

上位存在にとっての進化の方向性は、人間にとっては逆になるらしい。

### ■ 神と人間を繋ぐ道

さらに、ベテルゲースとオリオンの関係で以下のことが言われている。

「しかし、このタカヒマラの構造がわたしたち人間とどのように関係しているというのですか」  
 「タカヒマラにおいては、人間とは性質が生まれている状態を意味します」  
 「性質？……つまり、人間はオリオンからベテルゲースに向かう力によって作り出されているということですか？」  
 「はい。オリオンとベテルゲースとは、いわば、神と人間の関係に相当します。宇宙の最も根本的な二元性とは神と人間のことを言うのです」

なんだか難しくなってきた。

ヌーソロジーはやはり「神とは何か？」を明らかにする神学としての特徴が強いと思う。

プレアデスとオリオンの間には、[プレアデス⇒シリウス⇒オリオン]のルートがある。

そして、13の次元観察子はプレアデスとオリオンを繋ぐ道になっている。

言い換えると、次元観察子は**神と人間を繋ぐ道**になっているわけだ。

また、それは[プレアデス⇒オリオン]のカ（定質）と、[オリオン⇒プレアデス]のカ（性質）を対で生み出しているわけである。

次元観察子についてざっくりしたことは分かっただろうか？

そして、次元観察子を具体的に理解していくものが『変換人型ゲシュタルト』なのである。

それから、今のヌーソロジーだと、次元観察子は全部で14あることになっている。

・・・えーっと、これについては次回に詳しく説明する。

## 10. 基礎用語② 負荷・反映・等化・中和

引き続き、ニューソロジー用語についてである。

ニューソロジー学習の基礎となる、

オコットが言ったとても重要な4つのワードがある。

それは『負荷』『反映』『等化』『中和』の4つだ。

この4つはそれぞれ数字の「1」「2」「3」「4」に対応している原理でもある。

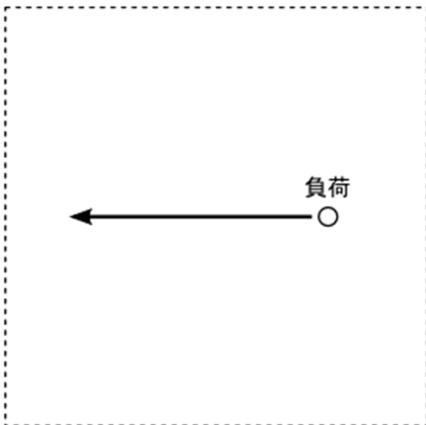
まずはそれぞれについて軽く説明しよう。

### • 負荷

とある始原となる存在があったとして、

そこから開始する作用にあたる。

数字では「1」に対応する。

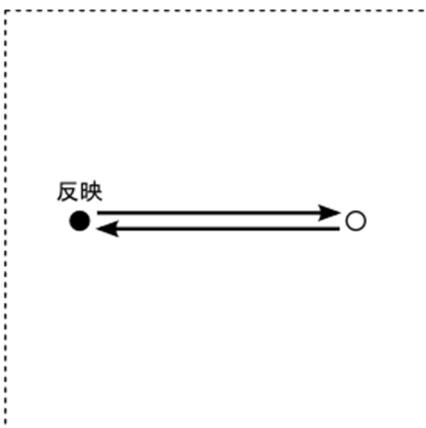


### • 反映

『負荷』という開始の力に対して生まれる、

それとは逆向きの作用にあたる。

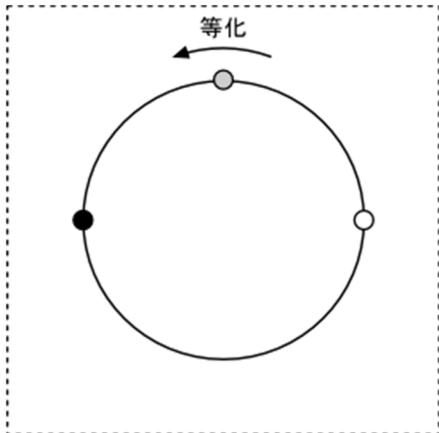
数字では「2」に対応する。



## • 等化

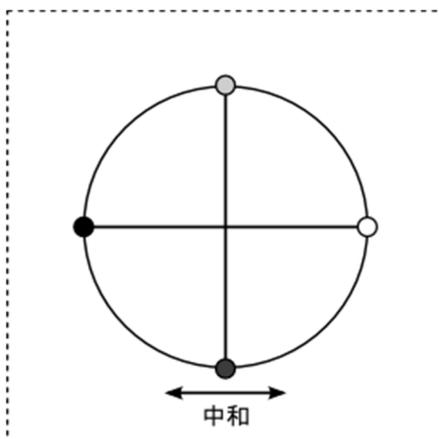
『負荷』と『反映』という、  
背反するものを統合するような「回転」の作用、  
または、対象性を見出す作用にあたる。  
数字では「3」に対応する。

『負荷』と『反映』を新たな次元の視点で見る力を持つ。



## • 中和

『等化』の回転に対する逆回転。  
回転が相殺されるため、その意味で、『中和』は「分離」するような作用にあたる。  
また、双方の対象性を見出すのを拒む作用にもあたる。  
数字では「4」に対応する。  
新しい物質を誕生させるような力を持っている。



それから、「負荷と反映」や「等化と中和」の二つは対立関係にあり、  
そのことを『対化』と呼ぶ。

例えば、負荷と反映の対化は、等化に向かうこともあるし、中和に向かうこともある関係である。

## ■ 4つの原理と自他関係

上記の『負荷』 『反映』 『等化』 『中和』 の4つをもうちょっとイメージしやすいように説明しよう。

この4つの原理は数がある所にはどこにでも出てくるような概念である。

「自己×他者」関係でも出てくるし、次元幾何学でも出てくるので、それらをベースに説明してみよう。

- **負荷：始まる。ただ自分がいる**



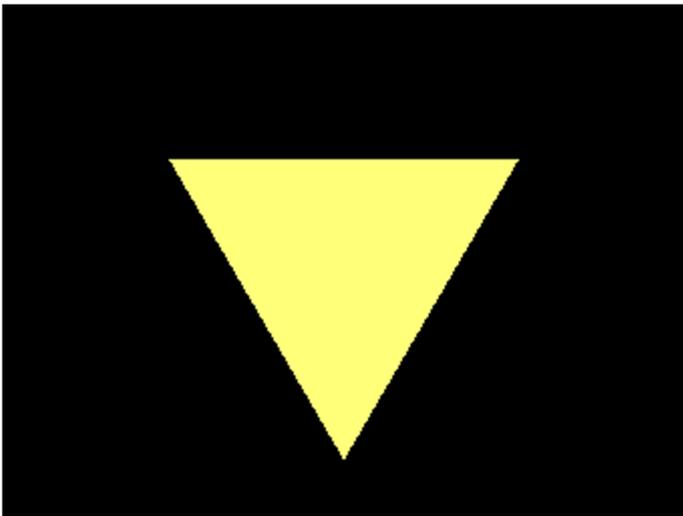
「ただ単に始まる」「一方向のもの」みたいな意味が良い。  
次元的には点だけなので、零次元の状態である。

- **反映：受け手がいる。相手がいる**



〔アニメーション：二つの光が円を描くように回転〕  
相手が出てくることによって多様な事象が起きる礎となる。  
次元的には二点が停止してると一次元の線が出来て、  
円運動すると二次元の場が生じる。

- 等化：俯瞰（ふかん）する者がいる。次元上昇



〔アニメーション：正三角形の板が縦回転〕

「次元上昇」を意味する特別な概念。

「負荷と反映を対称的に見ること」と説明がされている。

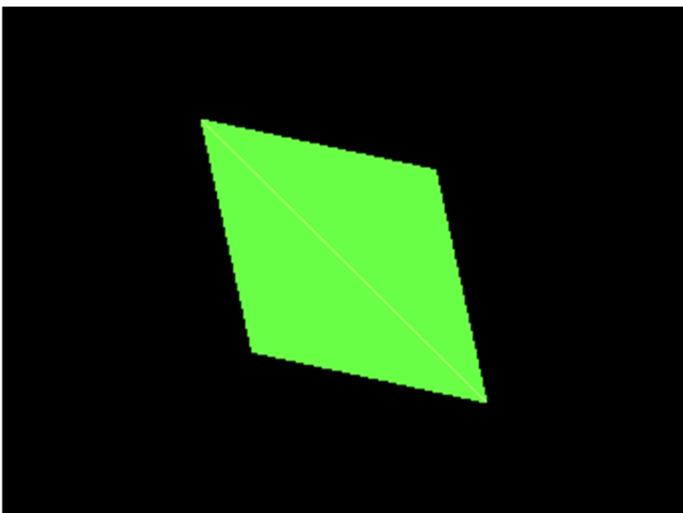
負荷と反映がコインの表と裏だった場合、

次元を上げると表と裏の対称性が見えるような意味でもある。

次元的には三点が停止してると二次元の面が出来て、

z 軸方向への回転が起きると三次元の場が生じる。

- 中和：第三者の相手。安定する



〔アニメーション：正四面体が回転〕

「等化」に対する「反映」と同義。

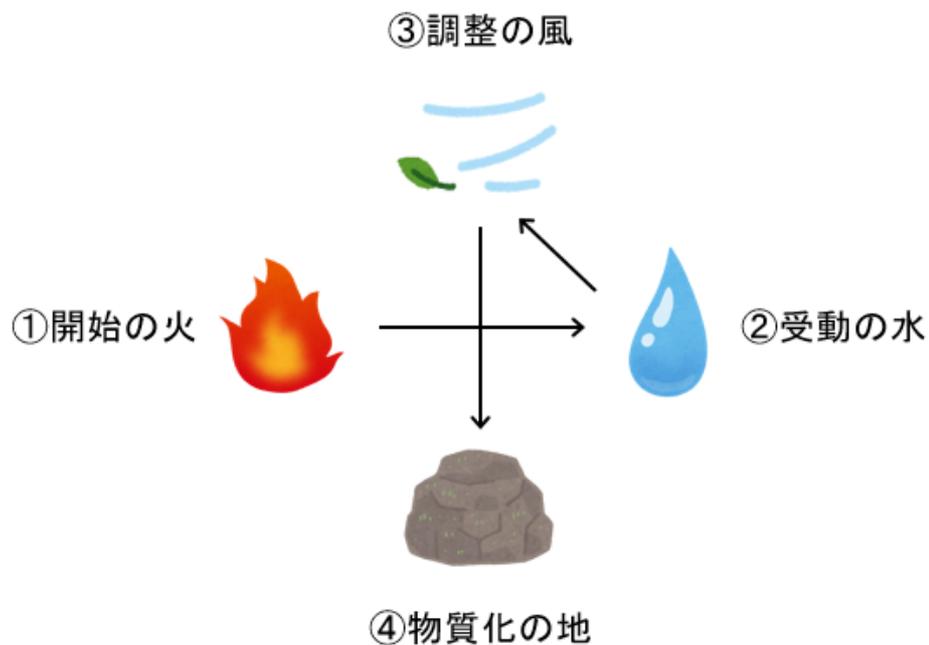
3 番目までだと不安定なため、新しい次元が安定する。

次元的には4つの点があると最低限の三次元立体（＝正四面体）ができる。

上記の4つは、疑似的なものだと次のようなイメージになってくる。

- ・ 負荷（始まる）
- ・ 反映（受ける）
- ・ 等化（俯瞰して捉える/調整する）
- ・ 中和（安定する/物ができる）

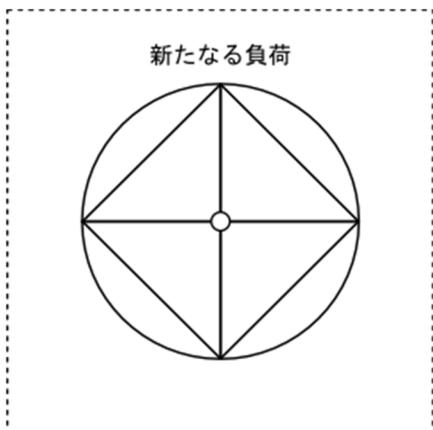
これらは万物にある究極元素みたいなものなので、  
**四大元素のイメージ（火・水・風・地）**とちょっと絡めてみるのも良いかもしれない。



### ■ ペンターステムと次元観察子

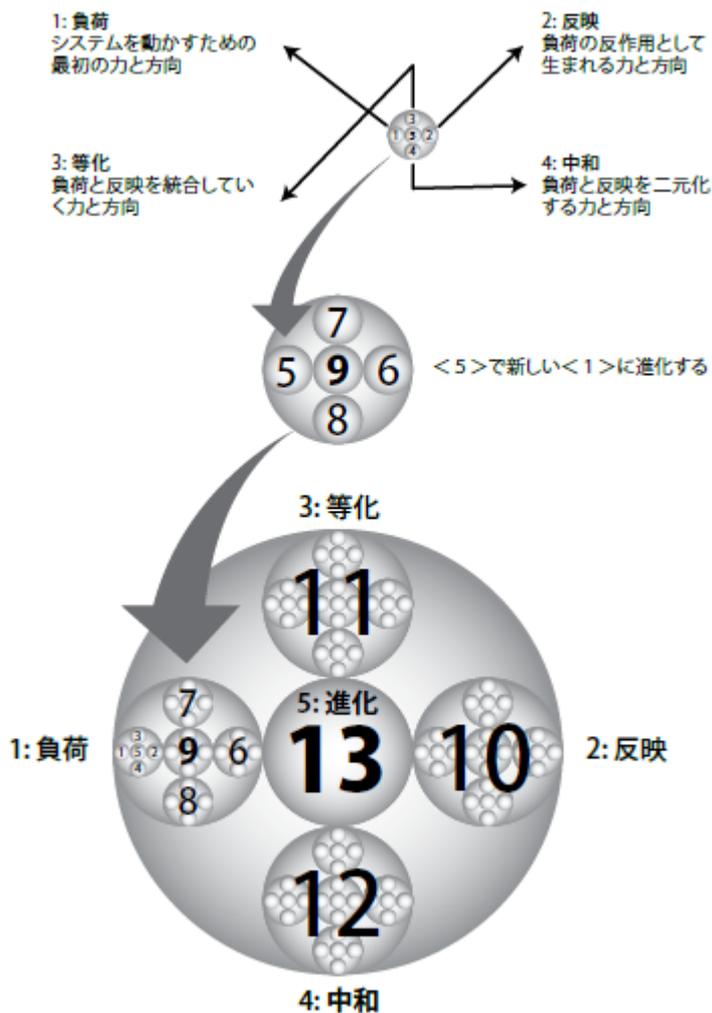
そして、『負荷』『反映』『等化』『中和』の原理に加えて、  
 4番目の次の5番目は、次の1番目（新たなる負荷）になるという原理がある。

- ・ 新たなる負荷



4 番目より次に進むと、それがさらに新しい『負荷』になり、  
 [5⇒1 (負荷) , 6⇒2 (反映) , 7⇒3 (等化) , 8⇒4 (中和) ]と進んでいくようになる

このように、5 区切りで次に発展するシステムを『ペンタープシステム』と言う。



書籍『2013:人類が神を見る日』より引用

それから、なんでこのペンタープシステムの話が大事かというと、  
 前回説明した『次元観察子』がその構造を持っているからである。

[1, 2, 3, 4]⇒[5, 6, 7, 8]⇒[9, 10, 11, 12]⇒[13]の発展構造は、  
 そのまま、次元観察子 $\psi_1 \sim \psi_{13}$ にも当てはまる。

あと、13 番目の反映となる 14 番目がある。

これは前回の「なんで次元観察子は $\psi_{14}$ までとされてるのか？」に対する解答である。

書籍『2013:シリウス革命』の出版は1999年で、その時まではまだだったが、

2000年代に入ってからニューソロジーで、次元観察子は全部で $\psi_{14}$ までとするのが主流となっていた。

恐らく、14番目はオコツトがよく分かってない次元であり、代わりに、人間ならよく分かる次元である。  
人間視点でヌーソロジーが分かってくるほど、14番目が大事になってくる。

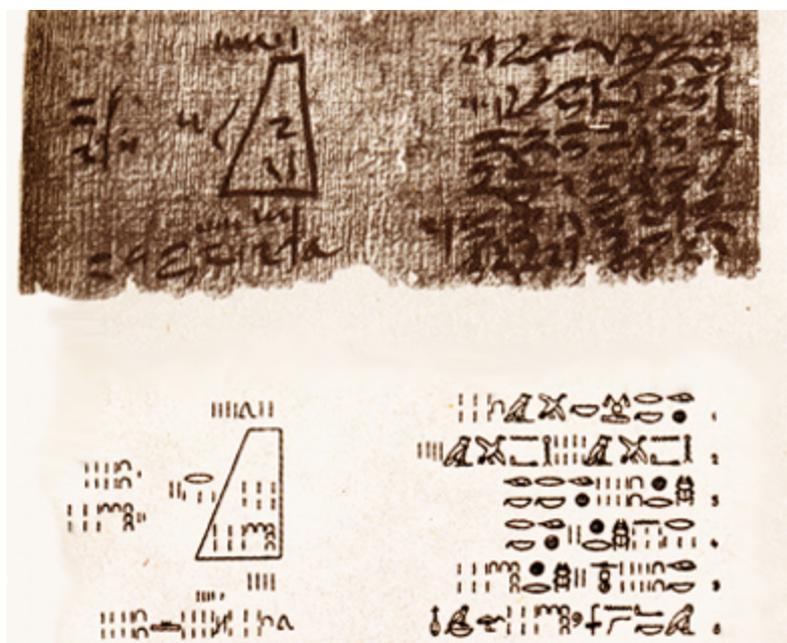
### ■ 「数は霊である」の文化

数字の「5」を区切りとするペンターステムについて、  
書籍『2013:シリウス革命』では以下のことが書かれている。

彼らは、まず「5」という数を無限の象徴として扱う。妙な言い方になるかもしれないが、彼らは「1」よりも「5」が先行して存在していると考えなのだ。そして、この、数以前とも言える至高の「5」によって、「1」の観念を作り、これを存在が出現するための負荷と定義している。次に、そうやって生まれてきた「1」から、続く「2」「3」「4」「5」までの数に例のタカヒマラにおける基本概念 定質、性質、反性質、反定質などの意味合いをそのままダイレクトに当てはめ、宇宙のベーシックな構造を組み立てている。つまり、彼らにとって数とは言語そのものなのである。

数を「言語」とか「象徴」とか、  
時には「霊」のように生命を持ったものとして扱う文化は古代にもあった。

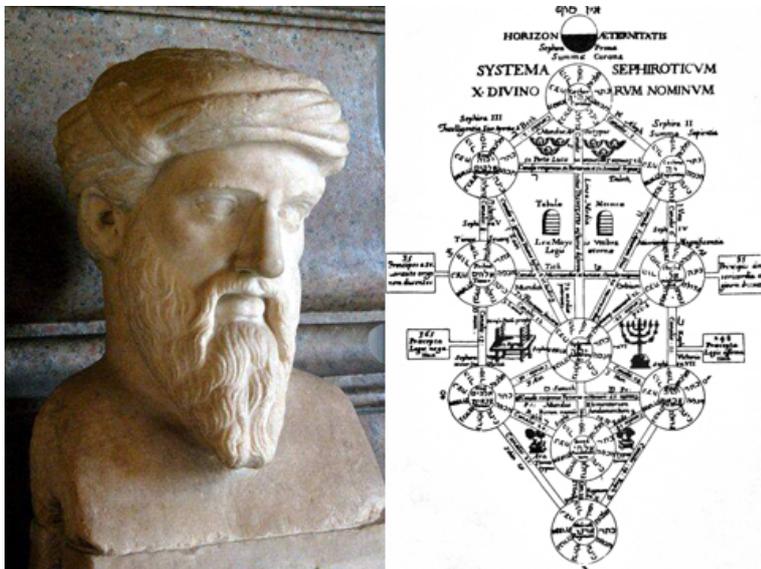
特に**古代エジプト**には確実にあった。



紀元前の古代エジプトで数学が発展していたことは、数学史や考古学でもよく知られているが、それだけでなく、幾何学や数字には「霊」が宿るような、時には「神」との交信にまで使われるような、そんな神秘的な世界観を含んだ数学だったのである。

恐らく、王（ファラオ）信仰や太陽信仰の影で、  
秘教とか密儀とかの類の中でそれが伝えられていた。

古代エジプトの「数は霊である」というような文化がギリシャに伝わって「ピタゴラス数秘術」ができて、ユダヤ人に伝わったものがユダヤ神秘主義の中で受け継がれ、それが後に「カバラ」となる。

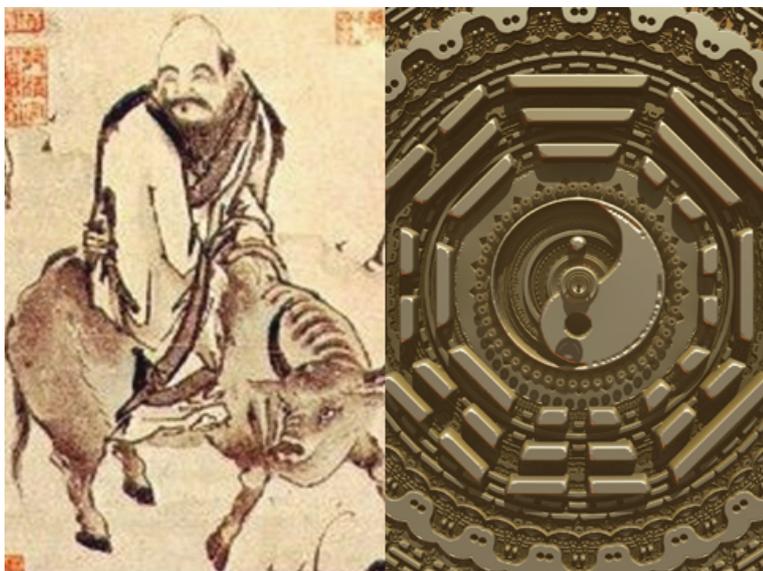


このように、「霊学」と「数学」が一体になったようなものが古代にあって、  
ヌーソロジーもそれに近いような印象がある。

ヌーソロジーは、量子力学誕生以降の 20 世紀末に復活した「霊学×数学」のジャンルと言えるかもしれない。

## 11. 基礎用語③ ノウス(NOOS)とノス(NOS)

さて、ここで古代中国の話をしてしよう。



中国には陽と陰という言葉がある。

それは十と一、正と負、光と影のように背反する性質を持つものであり、そこにある二元論は、両者が同等の力関係にあるようなものとなっている。

これが西洋の場合、二元論となると光と闇みたいになり、

光→善、闇→悪となりがちである。

天使と悪魔もそのイメージだし、神とサタンもそのイメージである。



ただ、東洋思想においては、陽と陰は絶対的な善悪どちらでもないのが本質である。

それはいわば、男と女、太陽と月みたいなものだ。

宇宙全体においてはそのどちらかが絶対的善であってはならないもので、長い目で見るとサイクルがあるような仕組みになっている。

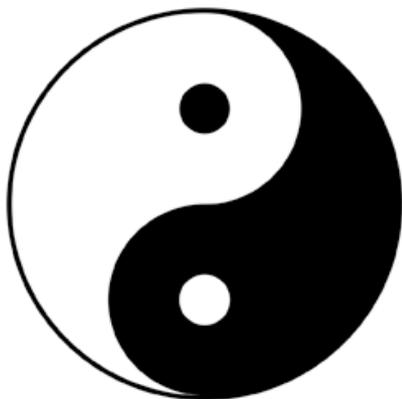
「陰極まれば陽となり、陽極まれば陰となる」という有名な格言が東洋思想にある。

このように物事を善悪で捉えない発想は『シリウス』のヒントでもある。

書籍『2013:人類が神を見る日』でもオコットは「善悪という概念はプレアデスが作る概念」と言っていて、シリウスにあるものは善や悪でなどといった概念で捉えられる働きではないと明言していた。

古代中国にもまた、シリウスに通じた知識があったのかもしれない？

中国にはこうした陽と陰を研究する「陰陽論」があり、「陰陽魚」と呼ばれる象徴的なマークがある。これは道教のシンボルとなっているし、日本でもたまに見かける有名なものである。



陰陽のような概念で宇宙を解明するのもまた「宇宙論」と呼べるものであり、陰陽論は東洋で身近な宇宙論と言える。

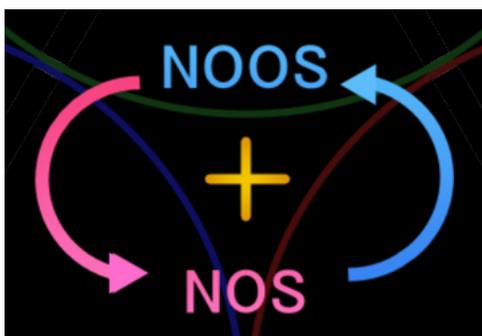
そして、ニューソロジーもまた、それと同様みたいな宇宙論なわけである。

### ■ ニューソロジーにおける根源的な陽と陰

そして、ニューソロジーでも陽と陰みたいな概念がある。

それは、オコットが『ノウス』と『ノス』と呼んだものだ。

半田広宣さんはそれぞれ NOOS と NOS と言い換えて呼んでいる。



ノウス (NOOS) とノス (NOS) もまた、ニューソロジーの中核となる概念なので説明する。

まずは書籍『2013: 人類が神を見る日』に出てきたものを引用しよう。

「科学はノスの力で働かされていますが、生態系はノウスの力で働かされているものです。ノスとノウスは方向性が全く逆なのです」

(中略)

「ノス………？ ノウス………？」

「あなたがたが今言われたエントロピーの正と負の関係にある力の本質のことです。性質を作り出しているものと、定質を作り出しているもののことです。あなたがたの科学技術がいくら進歩しようともそれはノスの力です。プレアデスの統制の中で働かされている限り、科学は自然を破壊していく方向にしか働かないでしょう」

これはコウセンさんとオコツトが、科学と自然の調和について会話している所が出た内容だが、まずは

「科学は『ノス』、生態系は『ノウス』」ということが言われている。

次に、「エントロピーの正と負の関係にある」と言われていて、「性質を作り出しているものと、定質を作り出しているもの」と言われている。

『性質』と『定質』は前々回も出てきたワードである。

次元観察子において「オリオンからプレアデスへと向かう力の流れ」が性質で、「プレアデスからオリオンへと向かう力の流れ」が定質である。

言い換えると、地上に向かっている力の流れが性質で、オリオン向きに進化していく方向が定質ということになる。

そして、オコツトによると、ノスが性質を作り出していて、ノウスが定質を作り出してるらしい。

つまり、ニューソロジー的に進化に向いているのはノウスの方なわけである。

そんでもって、「ノスは科学」に該当し、「ノウスは生態系」に該当するらしい。

ノスは地上に向かっていて、より動物的で人間的な力のようなものなので、そうした力で物質文明を強固にするように発展しているものが「科学」だというわけである。

対して、生態系や自然はオリオンやシリウスが絡んでいて、もっと超越的なものということになる。

## ■ 「能動的なもの」と「受動的なもの」

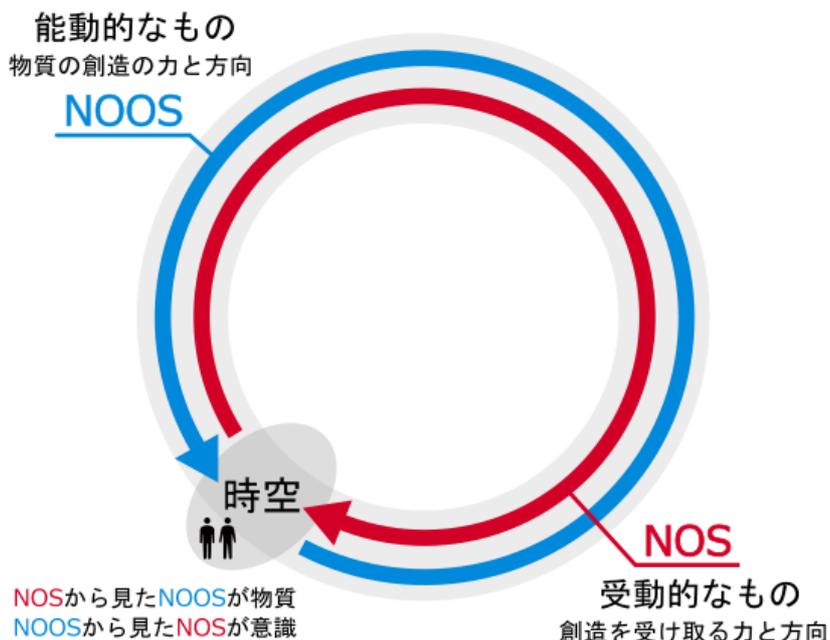
ノウスとノスは他にも様々な説明がされている。

最近のコウセンさんによる説明だと、「ノウス (NOOS) は能動的なもの」で「ノス (NOS) は受動的なもの」だというのがある。

物質を能動的に想像するものがノウスで、その創造を受け取るものがノスらしい。

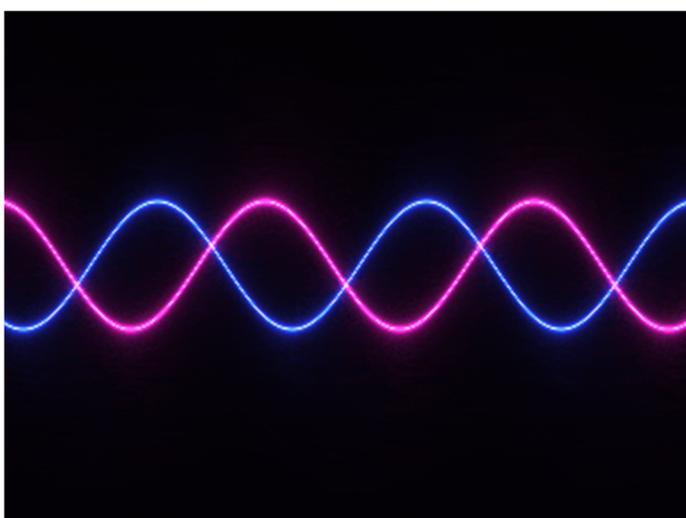
また、それぞれ色彩イメージがあり、ノウスは青、ノスは赤で描かれている。

ノウスとノスは共に動きながらも交差している位置があり、その交差位置に「時空」があり、さらに人間がいるらしい。



そうした中で、通常の人間の意識は受動的なものであるノスの方が先手になっているらしい。ニューロロジー的に考えると、科学の発展が主流になるのはそれが理由である。

オコットが『次元観察子』として送ってきた波形図にもノウスとノスがあるため、ニューロロジー的な宇宙のシステム（タカヒマラ）では、ノウスとノスのような「青の流れ」と「赤の流れ」が螺旋のように回転し、交差しているわけである。



## ■ ニューソロジー (Noosology) の名前の由来

オコットが『ノウス』というワードを伝えた時、

コウセンさんは古代ギリシャにある「**ヌース**」のことを言ってるのだと思っただろう。

「ヌース」とは、知性・理性・精神・魂などを意味するギリシャ語であるが、

要約すると「神的知性」「靈的知性」といった意味を持つもので、

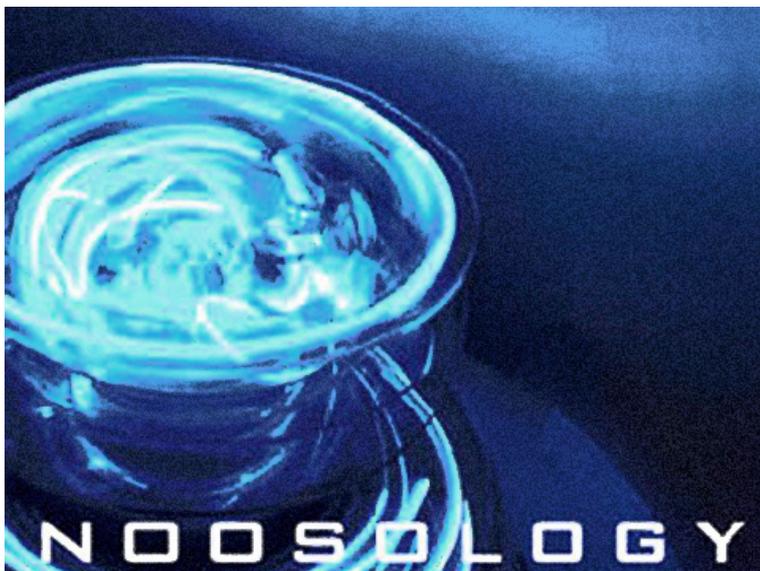
プラトンといった哲学者が重要視した概念である。

昔はこれも「ノウス (nous)」と呼ばれていたが、「ヌース」という発音に変わったらしい。

また、最近のコウセンさんの説明だと、オコットが言った『ノウス』のことを『ヌース』と呼ぶのが主流になっている。

そんな理由もあり、コウセンさんは『ノウス』のアルファベット表記の綴りをあえて『NOOS』としたらしい。

そしてこれが『**ニューソロジー (Noosology)**』の命名の元となっているわけである。



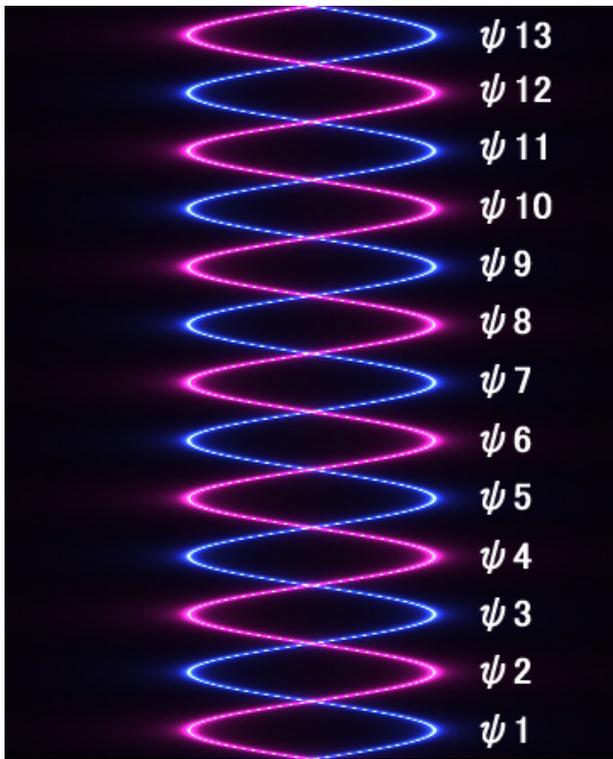
ちなみに、ニューソロジーは『ヌース理論』という名前と呼ばれていた時期もあり、略称が『ヌース』となっている。

## ■ 奇数と偶数

ノウスとノスは『次元観察子』にも大きく関係している。

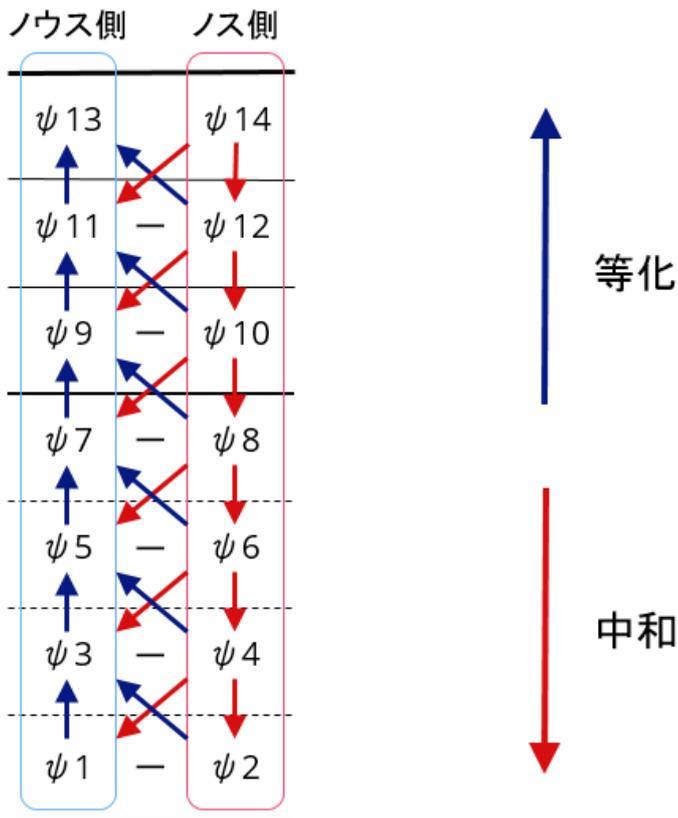
ノウスは奇数番目の力、ノスは偶数番目の力にそのまま該当する。

次元観察子を以下のような波形図で表すと、奇数番目に青の流れ（ノウス）が来て、偶数番目に赤の流れ（ノス）が来るようになっている。



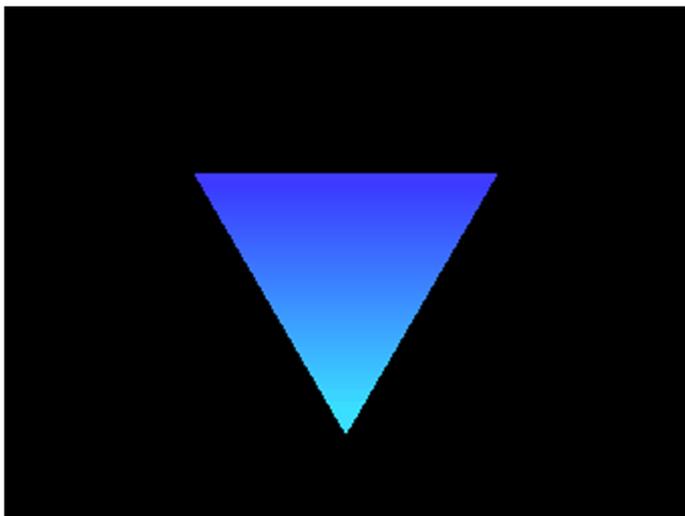
また、次元観察者と『負荷・反映・等化・中和』が関係していることを、前回で説明した。  
 そこで、『負荷』(1番目)と『等化』(3番目)がノウスで、  
 『反映』(2番目)と『中和』(4番目)がノスに該当するのである。

つまり以下のようにになっている。

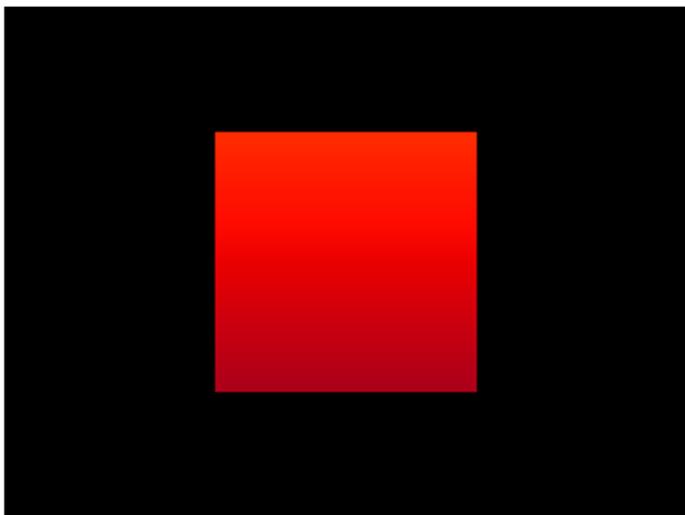


特に『等化』はノウスの力に近く、『中和』はノスの力に近い。  
これらはセットで理解すると深まる関係になっている。

ノウスとノスはまるで奇数と偶数みたいな関係ということで、  
これも純粋な「陽と陰」みたいな関係になってくる。  
その関係に優劣といったものはないが、奇数はとんがっていて先駆者みたいな役割を持ち、  
一方で偶数は必ず安定するような形になる。



〔アニメーション：奇数の多角形が回転〕



〔アニメーション：偶数の多角形が回転〕

とんがった力は『等化』、安定する力は『中和』のようなものであり、  
これはノウスとノスの力にも通じている。

それらは必ず対の関係として捉えるもので、  
絶対的にどっちかが善でどっちかが悪とかはない。

ただ、スピリチュアルの界限だと、中和とかノスみたいに物質的で人間的で科学的なものはネガティブに捉えられがちである・・・

ヌーソロジーも危うくそうなりがちと言えるかもしれないが・・・

実際はどちらもアリなものである。

だから、ヌーソロジーをちゃんと学んでノウスとノスの関係も正しく分かるようになると、

実は何でもアリのような気がしてくる。

偶数系のものを取り込んで前向きになるものがヌーソ的思考であるし、そもそも、『等化』という概念自体がそうでないと成り立たないため、ヌーソロジーはそういう力を持つ。

また、『変換人型ゲシュタルト』も同様にそういう力を持っているわけである。

なにせよ、**奇数先手で等化していくのが意識進化の方向性**であり、

それこそがノウスの方向性となる。

そんなノウス(NOOS)の力は「能動的知性」と呼ばれたりするものであり、

ヌーソロジー(Noosology)では主にそれを追い求めていくわけである。

奇数と偶数、ノウスとノスの関係は、

変換人型ゲシュタルトの基礎でもあるので覚えておこう。

## 12. 基礎用語④ ケイブコンパス

これまで「基礎用語編」ということで、

ヌーソロジー用語について主に説明してきたけど、基礎用語編は今回で最後にしたい。

『次元観察子』について、 $\psi 1 \sim \psi 14$  まであることを以前説明したが、

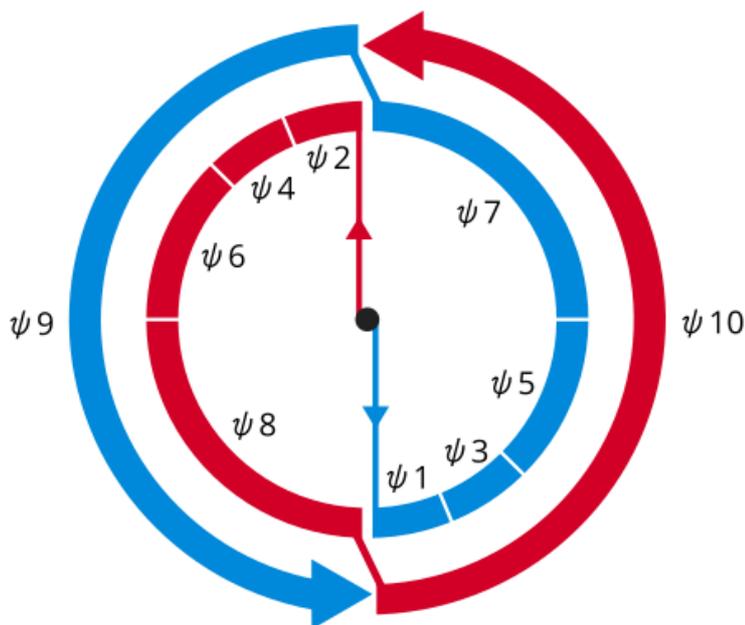
これは整理されていて、今は『ケイブコンパス』という図で説明されるようになっている。

(ちなみにこれは約 2000 年頃辺りにコウセンさんが編み出したものらしい。)

ケイブコンパスは以下のような形のものであり、

$\psi 1 \sim \psi 10$  まで割り当てられているものが基本になっている。

( $\psi 11 \sim \psi 12$  以降の割り当てについては別途説明が必要になる。)



$\psi 1$  から  $\psi 8$  までが内側にあり、 $\psi 9$  と  $\psi 10$  は外側にある。

$\psi 3 \sim \psi 7$  の奇数組は右側に集まり、

$\psi 4 \sim \psi 8$  の偶数組は左側に集まっている。

あと、奇数番号は青、偶数番号は赤になっているのは、

前回の『ノウス (NOOS)』と『ノス (NOS)』の関係で説明した。

特徴的なのは、 $\psi 5$  や  $\psi 7$ 、 $\psi 6$  や  $\psi 8$  がだんだんと大きくなっていることである。

これは、より数字の大きい上次元は下次元の概念を含んでいるみたいな意味を持つらしい。

それから、 $\psi_9$  と  $\psi_{10}$  は外側にあるのも特徴的である。  
 これは、 $\psi_9$  と  $\psi_{10}$  は別格であるという見方もできるし、  
 $\psi_9$  は  $\psi_4 \sim \psi_8$  を裏で関与していて、 $\psi_{10}$  は  $\psi_3 \sim \psi_7$  を裏で関与しているみたいな見方もできる。

あと、ケイブコンパスについては何やらカッコよさげなムービーも作られている。

[Youtube 動画 : cave compass ver. 2011]

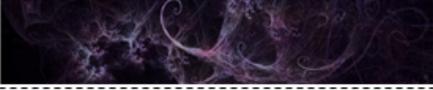
ちなみに、筆者 (Raimu) の作った図で次元観察子を整理すると以下みたいな感じになる。

ノウス側ーノス側

$\psi_{13}$ ( $\psi_{14}$ )	人間の観察精神(とその反映)
$\psi_{11} - \psi_{12}$	人間の定質と性質
$\psi_9 - \psi_{10}$	人間の思形と感性
$\psi_7 - \psi_8$	意識進化と時空
$\psi_5 - \psi_6$	自己と他者
$\psi_3 - \psi_4$	主体と客体
$\psi_1 - \psi_2$	空間と時間(またはマイクロとマクロ)

こういう図でも整理できるけど、  
 公式が重要視しているのはさっき挙げたケイブコンパスの形なので、これについて説明する。

## ■ 「 $\psi 1 \sim \psi 8$ 」にある二つの方向性

	$\psi 1 \sim \psi 2$	第一層	← now
	$\psi 3 \sim \psi 4$	第二層	
	$\psi 5 \sim \psi 6$	第三層	
	$\psi 7 \sim \psi 8$	第四層	
	$\psi 9 \sim \psi 10$	第五層	
	$\psi 11 \sim \psi 12$	第六層	
	$\psi 13 \sim \psi 14$	第七層	

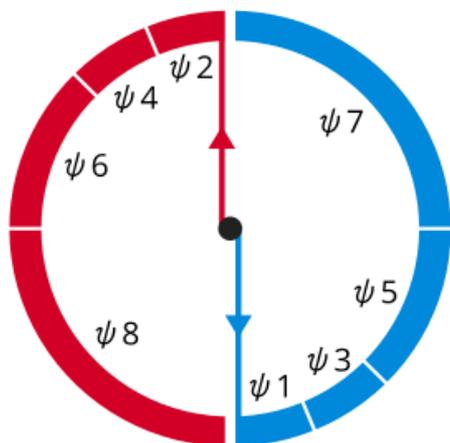
以前にも書いたことだが、**現在、我々のいる位置は $\psi 1 \sim \psi 2$** である。

それを『等化』すると $\psi 3$ になり、『中和』すると $\psi 4$ になる。

さらに $\psi 3$ と $\psi 4$ を等化すると $\psi 5$ になり、さらに中和すると $\psi 6$ になり・・・とやっていき・・・

ひとまず、 **$\psi 8$ までで一旦区切り**がある。

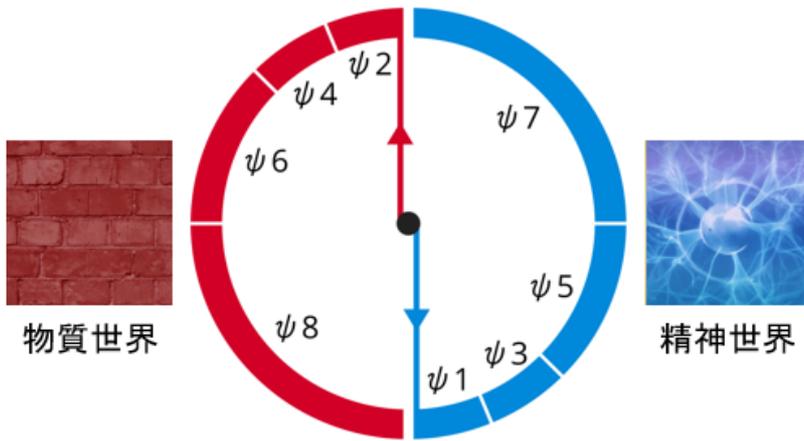
ケイブコンパスだと内側に位置する段階までのものである。



そして、この図の左側にある観察子は物質を強固にするもので、

右側のものは精神を強固にするものとなっている。

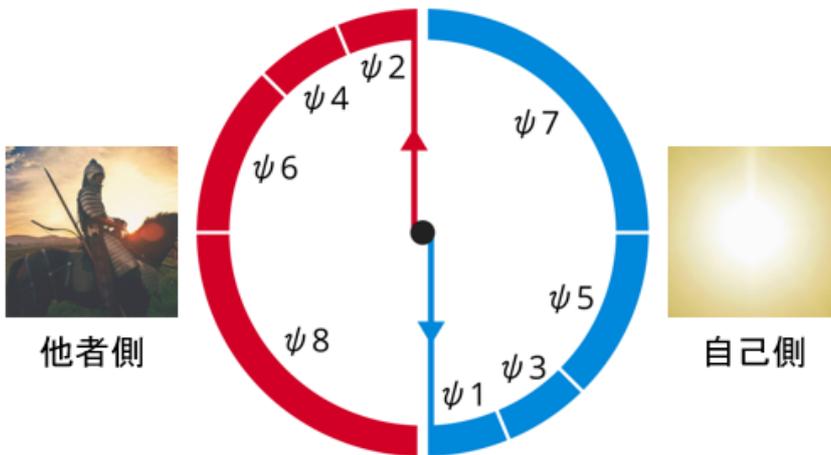
いわば、**左側は物質世界**、**右側は精神世界**という対応になっている。



何故ならば、これも奇数と偶数の関係だからである。

奇数の一群 $\psi_1, \psi_3, \psi_5, \psi_7$ は『ノウス (NOOS)』側なので、霊性進化的なものの要になっていて、偶数の一群 $\psi_2, \psi_4, \psi_6, \psi_8$ は『ノス (NOS)』側なので、地上の力を強めるものとなる。「科学」も概ねそっち側の意識をベースに作られているわけである。

あと、「自己×他者」問題との絡みだと、  
右側は自己側で、左側は他者側に該当する。



これもまた重要なことであり、奇数系の $\psi_1, \psi_3, \psi_5, \psi_7$ へ進んでいくと、どんどん「自己」が深まって行くようになり、

逆に、偶数系の $\psi_2, \psi_4, \psi_6, \psi_8$ へ進んでいくと、どんどん「他者」として強くなるような意識になってくる。

したがって、奇数系の先には以前に説明した「**Sprit Self**」のようなものがあり、偶数系の先には「**他者化**」がある。

さらに、最近のニューソロジーでよく使われるのは「奥行き」と「幅」というワードで、「自己」のある奇数系の精神世界は「奥行き」の世界で、逆にどんどん他者化していく偶数系の物質世界は「幅」の世界だとも言われている。

『人間型ゲシュタルト』だと偶数系である左側しか認知できないが、『変換人型ゲシュタルト』では奇数系である右側を認知しつつも、対の関係があることを意識し、次元観察子を『等化』していくのがニューソロジーでやっていくことである。

まとめると、[奇数系・ノウス(NOOS)・負荷と等化・精神世界・自己側・奥行き・変換人型ゲシュタルト]

と、[偶数系・ノス(NOS)・反映と中和・物質世界・他者側・幅・人間型ゲシュタルト]が、 $\psi 1 \sim \psi 8$ において強くリンクしていることを覚えておこう。

### ■ 「元止揚」について

こうした次元観察子 $\psi 1 \sim \psi 8$ までは人間たちの空間認識を作っている次元で、『元止揚』と言う名前が付いている。

これもオコツトが言ったニューソロジー用語だ。

元止揚が作っている空間は『元止揚空間』と呼ぶ。

ひとまず $\psi 1 \sim \psi 8$ が正確に分かれれば、ほとんど変換人型ゲシュタルトを理解したも同然である。

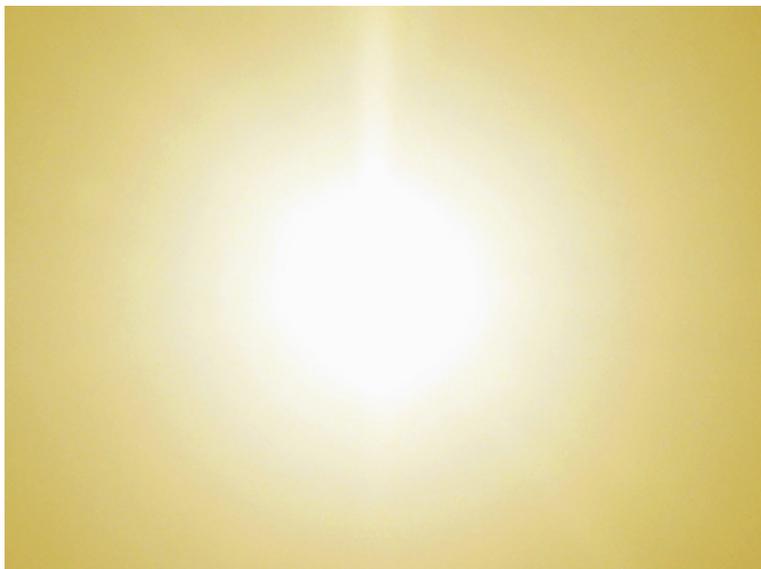
これは基盤の部分なので、まだ先の概念はあるけど、基盤を理解するだけでもかなりのことが分かるし、その先の理解の目処も立ってくるわけである。

あと、実践的には『次元観察子 $\psi 5$ 』まででも十分な成果がある。

$\psi 5$ はオコツトが「自己が形成されている空間領域のこと」と言っているため、

「自己」の発見に大きく関係している。

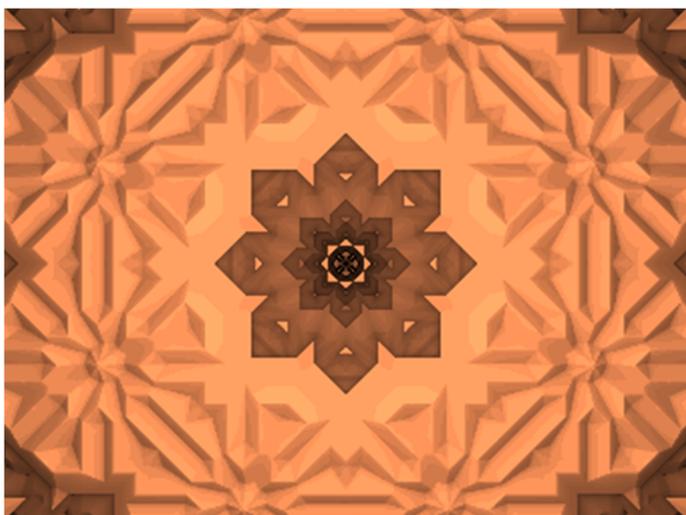
「Split Self」の感覚も、そこまでやればそこそこ掴めると言っても良い。



次元観察子は全部で「14」あり、区切りとなるのは「8」となる。  
あるいは、13～14番目は特別とすると、「12」で区切りがあるとも言えるかもしれない。  
大体、この辺りが宇宙にとってキーとなる神聖な数字である。

特に「8」は人間にとって重要な数だと言うことができる。

古事記に登場する八尋殿や、空海の胎蔵界曼荼羅における中台八葉院、  
スサノオが対峙したヤマタノオロチ（八岐大蛇）に、八百万の神・・・  
神話や伝説によく「八」が出てくるのも何か意味があるのかもしれない。



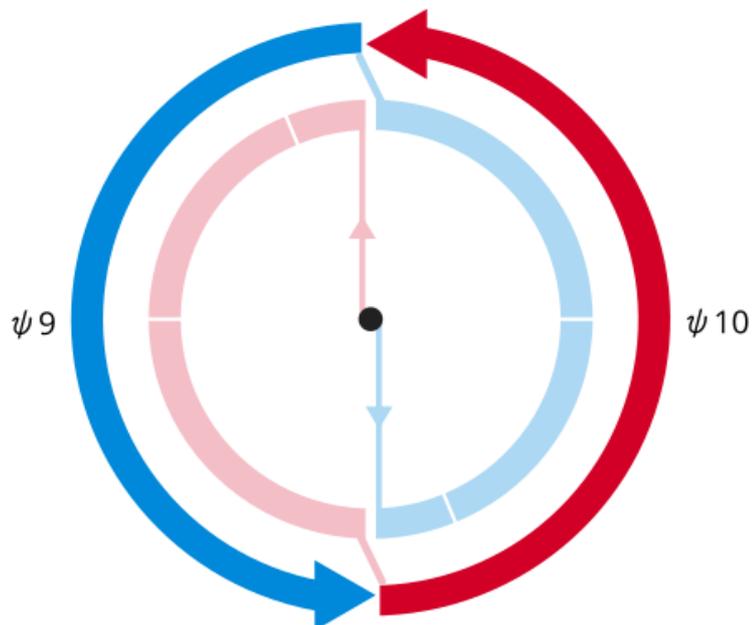
〔アニメーション：「八」の世界を進む〕

古代グノーシス主義の神話によると、  
この宇宙を創造したのは名前を持たない至高神だが、  
人間の世界を創造したのは「デミウルゴス」という別の存在だと言われている。

このデミウルゴスが創造したのは「八」までの世界？と言えるかもしれない。

### ■ 人間の「思形」と「感性」

次に、 $\psi 9$  と  $\psi 10$  についてである。



$\psi 9$  と  $\psi 10$  に行くと、

『思形』と『感性』というワードが出てくる。

$\psi 9$  は『人間の思形』、 $\psi 10$  は『人間の感性』と言われているからである。

『思形』と『感性』は $\psi 9$  と  $\psi 10$  だけでなく、もっと広義な意味を持つものでもある。

『思形』は「思考」の「思」と、「形成」の「形」の言葉が使われてるので、思考や理性を使って何かを形作る力みたいな・・・そんな意味を持っている。

一方で『感性』はそのまま日本語の「感性」という理解もできるけど、思形とは違って感受性を用いるような、フワフワした掴み処のない力みたいな意味を持っている。

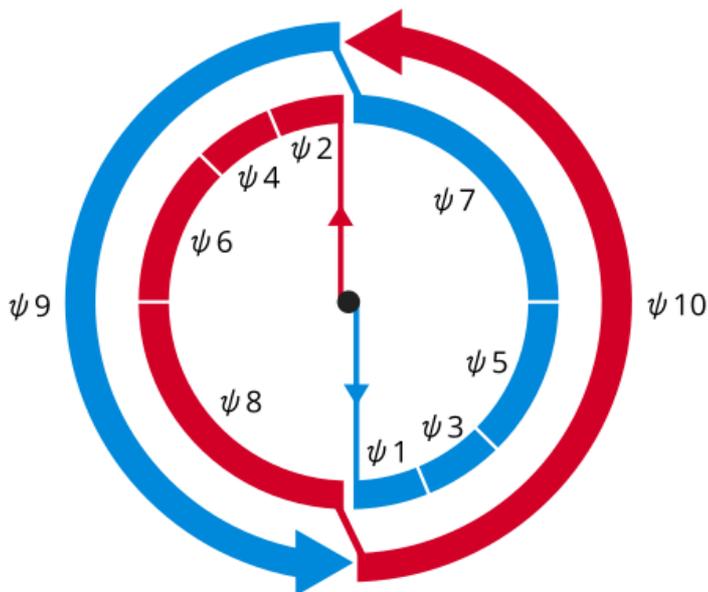
『思形』は男性的な力、『感性』は女性的な力であるため、この二つは男性原理と女性原理にも関係している。



また、『 $\psi 9$ ：人間の思形』は「言語」を作っているものであり、  
『 $\psi 10$ ：人間の感性』は「感覚」を作っているものであるため、  
「言語」と「感覚」の対のワードと合わせて理解していこう。

「普段の我々は意識は、基本的に他者の影響を受けることが多い。」  
・・・ということを以前に書いたが、  
「言語」はさらにその影響力を強固にしていくものである。

これは『思形（ $\psi 9$ ）』がケイブコンパスで左側にあることと関係している。



偶数の観察子の一群 $\psi 2, \psi 4, \psi 6, \psi 8$ は、人間の意識を「他者先手」にするものであり、  
 $\psi 9$ は裏でそれを支えるような形になっている。  
その観点からすると、言語は非常にノス的で地上的なものとなり、意識進化の方向性とは異なるものにな

る。  
奇数（ノウス）の番号を持ちながらも、偶数（ノス）の力を持つのが『 $\psi 9$ ：人間の思形』ということになるわけである。

しかしながら、動物を人間に進化させたのも言語であるし、  
幼児が成人に進化するのにも言語が必要である。  
あるいは、人間は成人になっても言語が正しく扱えてるかどうかは怪しいもので、ちゃんとした習得が必要なこともよくある。そういうシチュエーションの場合は言語の力は進化の方向へと行く。  
これは奇数系の観察子（ノウス）としての『思形』の力である。  
いわば、人間の意識が幼児のような段階だったりすると、『思形』はノウスとして機能するわけである。

ただ、言語を受動的に使うようになると偶数系（ノス）として作用してしまう。  
『思形』とノスの関係もまた、そういう仕組みと関係している。  
『思形』はそんな二面性を持つ概念だと理解しておこう。

もう一方である『感性』も同様で、  
『人間の感性』の観察子の番号は $\psi 10$ （偶数）だが、  
 $\psi 1$ ,  $\psi 3$ ,  $\psi 5$ ,  $\psi 7$  を裏で支えているので、奇数系（ノウス）の力を持っていることになる。  
したがって、これも二面性を持っているような概念である。

以上。ケイブコンパスで『思形』と『感性』が外側にあって、  
ノスとノウスの関係がねじれていることについてよく理解しておこう。

## ■ 人間の「定質」と「性質」

さらに、 $\psi 11$  と  $\psi 12$  に行くと、  
『定質』と『性質』というワードが出てくる。  
これは以前にも説明したヌーソロジー用語である。

$\psi 11$  は『人間の定質』、 $\psi 12$  は『人間の性質』と言われている。  
これは以前に出てきたものと似ているが、  
正確に言うと違うものらしい。

しかし、 $\psi 11$  と  $\psi 12$  はほとんど次元観察子の最高位みたいなものなので、  
次元観察子自体のノウスとノスを統括しているような力になる。  
したがって、 $\psi 11$  は「次元観察子内でプレアデスからオリオンへと向かう力」で、 $\psi 12$  は「次元観察子内でオリオンからプレアデスへと向かう力」だと言うことができる。

『思形』と『感性』は「男性原理」と「女性原理」が関係しているように、  
『定質』と『性質』は「植物」と「動物」が関係しているらしい。



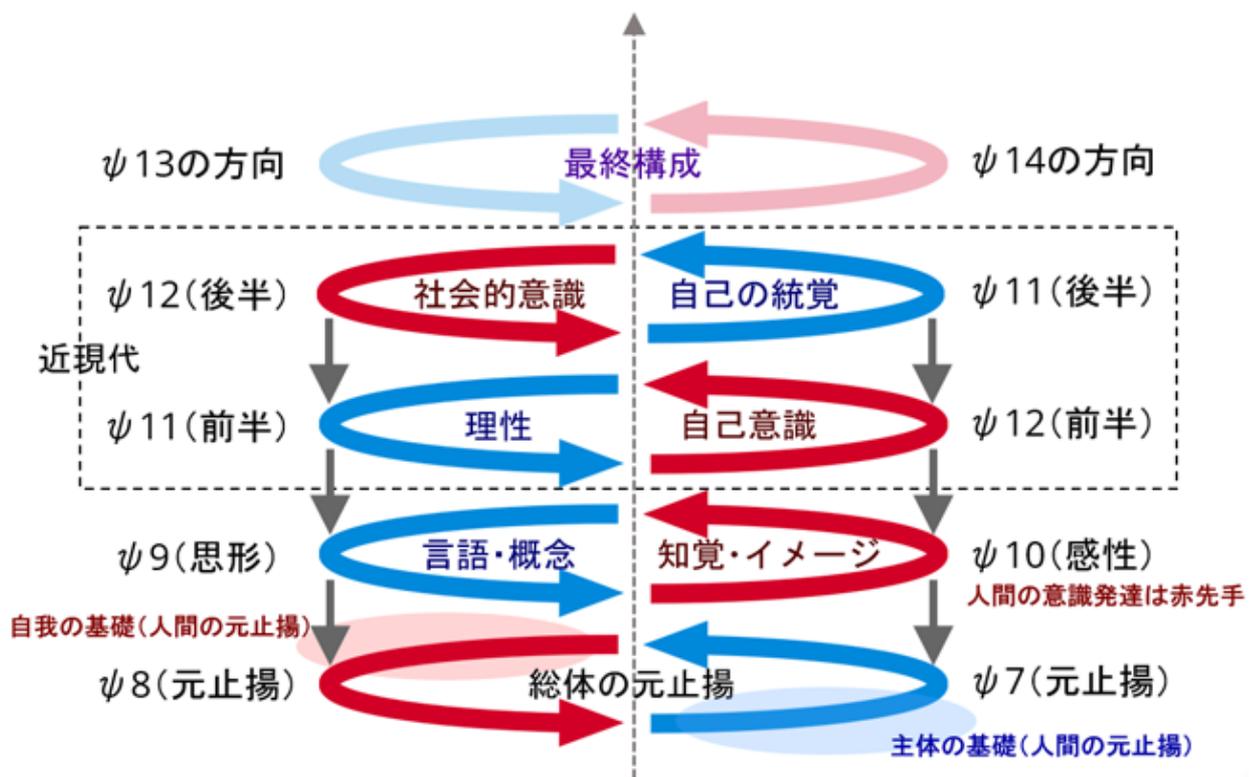
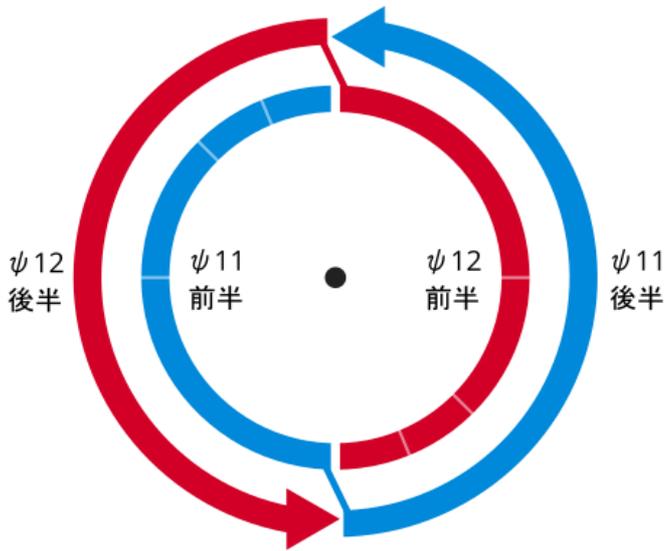
生態系（ノウス）は植物の意識が元で発展するものであり、それが『定質』を作り出す。  
科学（ノス）は動物の意識が元で発展するものであり、それが『性質』を作り出す。  
・・・と解釈することもできる。

あと、『思形』と『定質』も関係していて、  
『定質』は言葉を作り出すものとの関係があるらしい。  
以下、オコツトとの対話録「シリウスファイル」にあった情報である。

「思形とは言葉を送り出すところ、定質とは言葉を作り出すところ。合ってますか。」  
「はい、そうです。」  
——シリウスファイル 19900910

以上が『定質』と『性質』の理解の為のヒントである。

それから、『ψ11:人間の定質』と『ψ12:人間の性質』には前半と後半があり、  
ケイブコンパスに割り当てると以下のような形になる。



この辺を掘り下げると色々な話が出てくるけど、  
上級編ということで後回しで良いかな・・・

先に変換人型ゲシュタルトの理解を進めていきたい。

### ■ 次元観察子のまとめ

今回出てきた用語と、次元観察子 $\psi 1 \sim \psi 14$ で絡む概念をまとめると以下のようなになる。

$\psi 13$ ( $\psi 14$ )	人間の観察精神(とその反映)	変換質
$\psi 11$ ー $\psi 12$	<u>人間の定質と性質</u>	中性質
$\psi 9$ ー $\psi 10$	<u>人間の思形と感性</u>	調整質
$\psi 7$ ー $\psi 8$	意識進化と時空	} <b>元止揚</b>
$\psi 5$ ー $\psi 6$	自己と他者	
$\psi 3$ ー $\psi 4$	主体と客体	
$\psi 1$ ー $\psi 2$	空間と時間(またはミクロとマクロ)	

もっと詳細をやると、 $\psi 9$ ~ $\psi 10$ に『調整質』とか、 $\psi 11$ ~ $\psi 12$ に『中性質』といった名前がついていたり、 $\psi 13$ と $\psi 14$ についてとか、もうちょっと説明したいことがあるのだが・・・

あんまり内容を詰め込み過ぎると頭がこんがらがるので止めておこう。

とりあえず、『元止揚』『思形』『感性』『人間の定質』『人間の性質』について説明したので、最低限この辺のワードだけでも覚えておこう。

## 13. 基礎用語のおさらい

『変換人型ゲシュタルト論』の基礎用語編を①～④までやった。

とりあえずこれでヌーソロジーの基礎知識については一通りできたということで完了としよう。

ここで「ヌーソロジー用語」についてのおさらいをする。

ここまですべて以下のヌーソロジー用語が出てきた。

プレアデス、シリウス、オリオン、  
最終構成、変換人、人間の内面、人間の外面、  
次元観察子 $\psi$ 、定質、性質、反性質、反定質、  
負荷、反映、等化、中和、対化、ペンターブ・システム、  
ノウス (NOOS)、ノス (NOS)、  
ケイブコンパス、元止揚、思形、感性、人間の定質と性質

(5) で出てきたものは以下。

・ プレアデス、シリウス、オリオン

(6) で出てきたものは以下。

・ 最終構成、変換人

(7) で出てきたものは以下。

・ 人間の内面、人間の外面

(9) で出てきたものは以下。

・ 次元観察子 $\psi$ 、定質、性質、反性質、反定質

(10) で出てきたものは以下。

・ 負荷、反映、等化、中和、対化、ペンターブ・システム

(11) で出てきたものは以下。

・ ノウス (NOOS)、ノス (NOS)

(12) で出てきたものは以下。

・ ケイブコンパス、元止揚、思形、感性、人間の定質と性質

それぞれの用語の意味が分からなくなったらまた復習しよう！

## ■ 「ニューソロジー基本概要+（プラス）」のワード

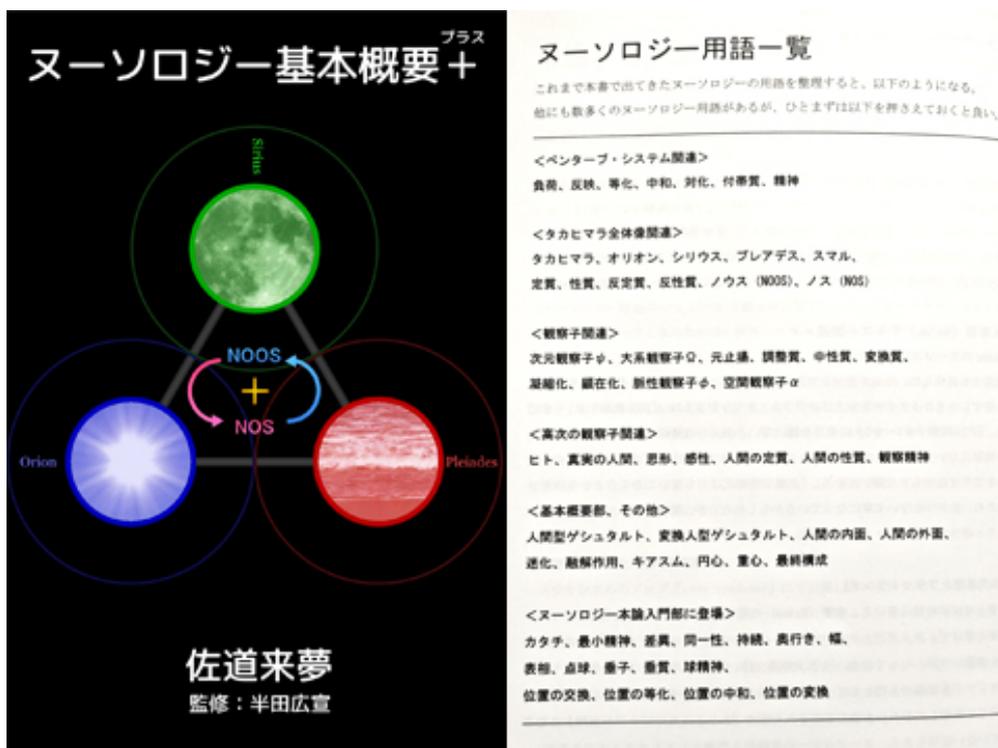
もちろんニューソロジー用語はまだまだたくさんあるし、  
基本概念に該当するものももうちょっとある。

例えば、次元観察子 $\psi$ 1~ $\psi$ 14より上位に大系観察子 $\Omega$ 1~ $\Omega$ 14があることや、  
 $\psi$ と $\Omega$ の関係についてはここでは説明していない。

その辺も本当はやりたい所だが、『変換人型ゲシュタルト』で早速出てくる概念ではないのでとりあえず飛ばすことにした。

他にも別の機会に説明したい概念がいっぱいある。

筆者（Raimu）の書籍『ニューソロジー基本概要+（プラス）』では、  
本の最後の方に以下の用語についてが書かれている。



負荷、反映、等化、中和、対化、付帯質、精神

タカヒマラ、オリオン、シリウス、プレアデス、スマル、

定質、性質、反定質、反性質、ノウス（NOOS）、ノス（NOS）

次元観察子 $\psi$ 、大系観察子 $\Omega$ 、元止揚、調整質、中性質、変換質、

凝縮化、顕在化、脈性観察子 $\phi$ 、空間観察子 $\alpha$

ヒト、真実の人間、思形、感性、人間の定質、人間の性質、観察精神

人間型ゲシュタルト、変換人型ゲシュタルト、人間の内面、人間の外面、

迷化、融解作用、キアスム、円心、重心、最終構成

カタチ、最小精神、差異、同一性、持続、奥行き、幅、

表相、点球、垂子、垂質、球精神、

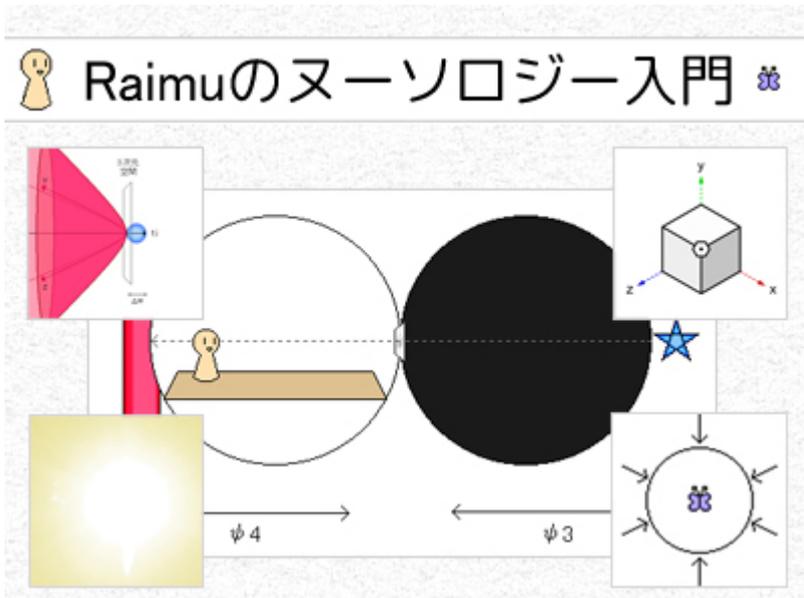
位置の交換、位置の等化、位置の中和、位置の変換

ここでもニューソロジーの基礎となる用語が一通りまとまっているので、気になる人はそっちも参照して欲しい。

あと、『Raimuのニューソロジー入門』では、

これらの用語も漏れなく取り扱っているので、より詳しく知りたい人はそっちを読むのも良いと思う。

[リンク : Raimuのニューソロジー入門]



## ■ 「シリウス革命」のワード

現存で情報量の多い代表書籍といたら『2013:シリウス革命』である。



『シリウス革命』に載っていて、『ニューソロジー基本概要+（プラス）』に載ってない用語もいっぱいある。

以下のあたりがそれである。

妙性、感性作用、推進方因、次元の交替化、対化の交差、  
次元等化、付帯質の変成、点意志、止核作用、精神の中和、  
反環、重性、核心、本因、真因、重形、観察化、  
プレアデスの内面と外面、シリウスの内面と外面、  
顕在化の内面と外面、タカヒマラにおける内面と外面、  
力の変換、力の転換、力の等換、  
位置の開花、位置の等換、位置の融和、  
形質、核質、脈質、次元核、妙性質、完全性質

これらの用語について全部やっていくとキリがない。

そもそも、『シリウス革命』を読んでいる限りだと、ニューソロジーには膨大な情報がある。  
こうして膨大な情報がある中、どうにか必要な情報に絞ってまとめねば・・・と5年以上かけて出来上がったのが、筆者(Raimu)が書いた『ニューソロジー基本概要+ (プラス)』という書籍だった。  
とりあえず、そこに出てくる用語を押さえておけば、  
ニューソロジーの基本的な話は一通りできると思う。

ちゃんとした学習のためには、『2013:シリウス革命』に出てくる難しい用語であまり混乱しないように、  
『変換人型ゲシュタルト』の習得にまずは集中した方が良いと思う。

とはいえ、「形質は意識のカタチを作り上げていく力」とか、「妙性質は人間のこと」とか、「神とは重心であり、力を持たないもの」とか、「鉄は人間型ゲシュタルトの本質であり、人間が持った次元核に相当する」とか、「日本人は今の人間の核質である」とか・・・  
その辺の用語について考えてみるのも面白いんだけど・・・  
それはそれで好きにして良いと思うし、  
基本を理解した後に『シリウス革命』の未知のワードに読むと、  
新たな発見があってそれはそれで面白いと思う。

なにせよ、ニューソロジー学習に最低限必要な基礎用語はここまでで一通り押さえることができたということで、  
いよいよ『変換人型ゲシュタルト』の本格的な学習に入っていこう。

## 14. 変換人型ゲシュタルトの本論に入る前に

いよいよ変換人型ゲシュタルトの中身の話に入ろう。

いわば、変換人型ゲシュタルトについての本論である。

ここまでのニューソロジーの話は、これでもかなり省略した。

書籍『2013：人類が神を見る日』を読めば分かるが、まだまだたくさん情報がある。

ニューソロジーの在り方とか、学ぶ意義とか、実用性とかについても色々と思う所はあるし、それについて書いていくとキリないぐらい書きたいことがある。

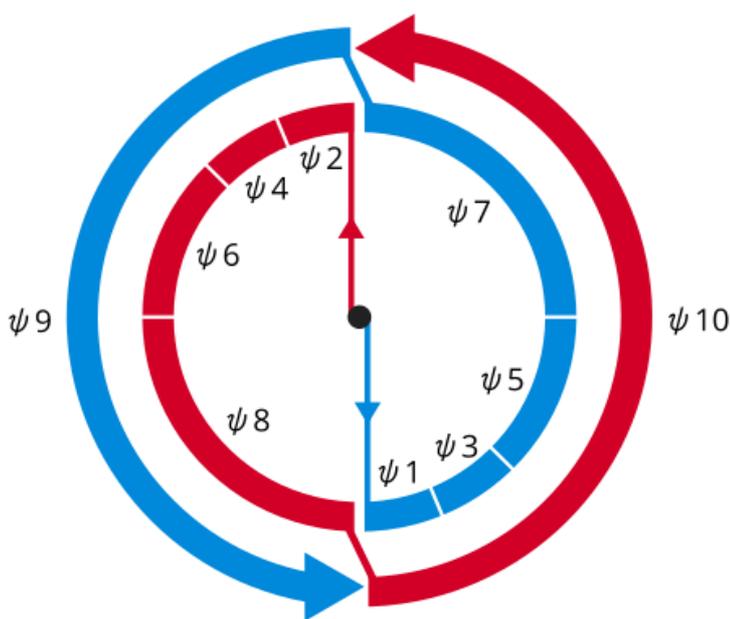
ちなみに「学ぶ意義とか実用性」については、以下の記事で書いたので気になる人はそちらも読んで欲しい。

[リンク：ニューソロジーと変換人型ゲシュタルトを学ぶ意義→他者への執着が治まることについて考える]

しかしながら、ニューソロジーに付随することについて書いていくと、キリがないぐらい長くなってしまふので・・・

とりあえず今回は**変換人型ゲシュタルトの説明に特化していく方針にする。**

これまで色々説明したが、簡単に言うと次元観察子が以下のようにある。



別の記載の仕方をする以下のようになる。

ノース側—ノース側

$\psi 13$ ( $\psi 14$ )	人間の観察精神(とその反映)	変換質
$\psi 11$ — $\psi 12$	人間の定質と性質	中性質
$\psi 9$ — $\psi 10$	人間の思形と感性	調整質
$\psi 7$ — $\psi 8$	意識進化と時空	} 元止揚
$\psi 5$ — $\psi 6$	自己と他者	
$\psi 3$ — $\psi 4$	主体と客体	
$\psi 1$ — $\psi 2$	空間と時間(またはマイクロとマクロ)	

今現在の普段の人間がいる次元は $\psi 1$ ~ $\psi 2$ であり、  
とりあえず $\psi 7$ ~ $\psi 8$ までで区切りがあり、  
ここまでは『元止揚』と呼ばれているわけである。  
したがって、とりあえずは  
[ $\psi 1$ ~ $\psi 2$ ⇒ $\psi 3$ ~ $\psi 4$ ⇒ $\psi 5$ ~ $\psi 6$ ⇒ $\psi 7$ ~ $\psi 8$ ]  
まで理解していけば良い。

そこまで分かれば変換人型ゲシュタルトがほとんど分かったようなものだし、  
もうかなり本格的にニューソロジーを理解できてる方になると思う。

(まあそれが難しくて詰まる人が多いんだけど・・・)

大体、 $\psi 1$ ~ $\psi 2$ は通常の物理内にあるものをよく理解する話になる。

$\psi 3$ ~ $\psi 4$ はそれを突破する話になる。

経験上、 $\psi 3$ が分かると見た目に騙されずらくなるので有意義なことになると思う。

$\psi 5$ ~ $\psi 6$ はそれをさらに深めていく話になる。

経験上、 $\psi 5$ が分かると「自己」がはっきりと確立してくるので有意義なことになると思う。

$\psi 7$ ~ $\psi 8$ は、元止揚内ではいちばん難しい話になる。

経験上、ここまでやればスピリチュアルなことはかなり本質的に分かってくる。

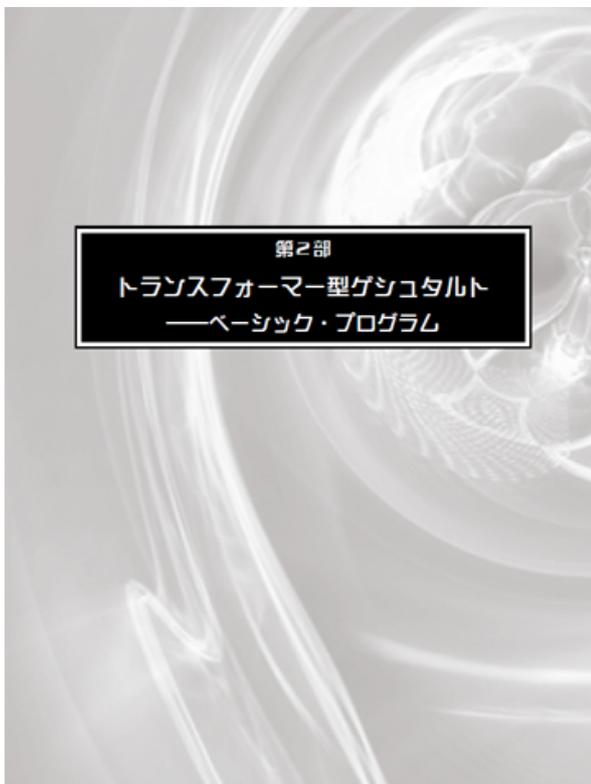
ψ9～ψ10は『思形』と『感性』と呼ばれてて、  
「言語」と「感覚」の話とか、  
「男性原理」と「女性原理」の話とかになる。  
ちゃんここまで『等化』するかはさておき、  
男性原理と女性原理の話を概念として知っていくのもそれはそれで有意義なことだと思うし、  
実はψ3～ψ4とψ9～ψ10の話はニューソロジー的に繋がってくる。

そして今回、重点的にやるのはψ7～ψ8までにしておこうと思う。  
そこまでをちゃんとやることで変換人型ゲシュタルトのベースを掴んでいくわけである。

(※本音を言うと、ψ7～ψ8までの説明もどこまでちゃんとできるか見通せてないので、生暖かく見守ってください。)

・・・ということで、次回から変換人型ゲシュタルトの本論の説明に入っていこう。

変換人型ゲシュタルトについては、書籍『2013：人類が神を見る日 アドバンストエディション』にある  
「トランスフォーマー型ゲシュタルト・ベーシック・プログラム」をベースに書いていくことにする。



内容のメインタイトルも以下みたいな感じにそって進めようと思う。

- ・プログラム1 次元観察子 $\psi_1 \sim \psi_2$  方向の対化
- ・プログラム2 次元観察子 $\psi_3 \sim \psi_4$  位置の交換の対化
- ・プログラム3 次元観察子 $\psi_5 \sim \psi_6$  位置の等化と中和
- ・プログラム4 次元観察子 $\psi_7 \sim \psi_8$  位置の交換と転換

ここに書いてあることを理解できるかが、ニューロロジーの本論をちゃんと理解できているかになるので、本格的にニューロロジーをマスターしたい人は頑張ってやっつけていこう。

# 15. プログラム1 次元観察子 $\psi_1 \sim \psi_2$ 方向の対化

いよいよ変換人型ゲシュタルトの本論の説明へと入っていこう。

まずは今現在われわれがいる位置とされる次元観察子  $\psi_1$  と  $\psi_2$  の理解からである。

	$\psi_1 \sim \psi_2$ 第一層	←
	$\psi_3 \sim \psi_4$ 第二層	
	$\psi_5 \sim \psi_6$ 第三層	
	$\psi_7 \sim \psi_8$ 第四層	
	$\psi_9 \sim \psi_{10}$ 第五層	
	$\psi_{11} \sim \psi_{12}$ 第六層	
	$\psi_{13} \sim \psi_{14}$ 第七層	

早速、書籍『2013：人類が神を見る日』より、以下の引用を参照する。

次元観察子  $\psi_1$  と  $\psi_2$  は、現在あなたがたが空間と時間と呼んでいるものに相当しています

——シリウスファイル：19900107（168頁）

人間の空間認識において、無限小から無限大へと向かうところに観察されている空間が次元観察子  $\psi_1$  で、無限大から無限小へと向かうところに観察されている空間が次元観察子  $\psi_2$  です。

——シリウスファイル：19910512（177頁）

冥王星のオコットによると、次元観察子  $\psi_1$  は空間、次元観察子  $\psi_2$  は時間と呼んでいるものに相当するとのことである。

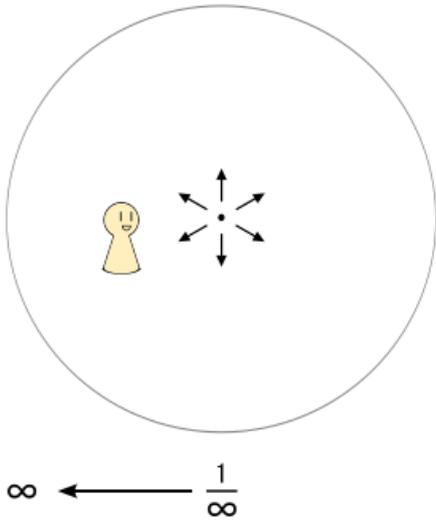
それから、次元観察子  $\psi_1$  は「無限小から無限大」、次元観察子  $\psi_2$  は「無限大から無限小」へ向かうところに観察されるということで、

次元観察子  $\psi_1$  はマイクロ、次元観察子  $\psi_2$  はマクロに対応するとも言われている。

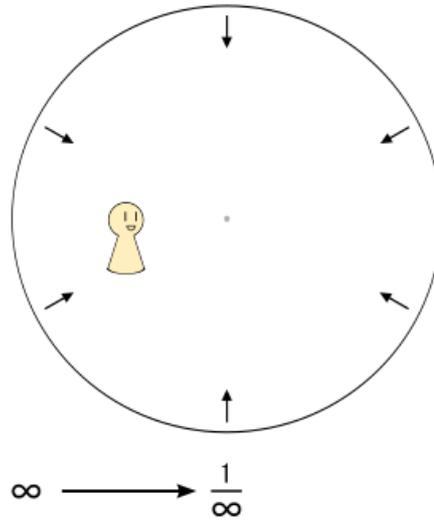
つまり、以下のワードが次元観察子  $\psi_1 \sim \psi_2$  の理解のための鍵となる。

- ・次元観察子  $\psi_1$ ：空間・無限小から無限大へ・マイクロ
- ・次元観察子  $\psi_2$ ：時間・無限大から無限小へ・マクロ

<次元観察子 $\psi 1$ >



<次元観察子 $\psi 2$ >



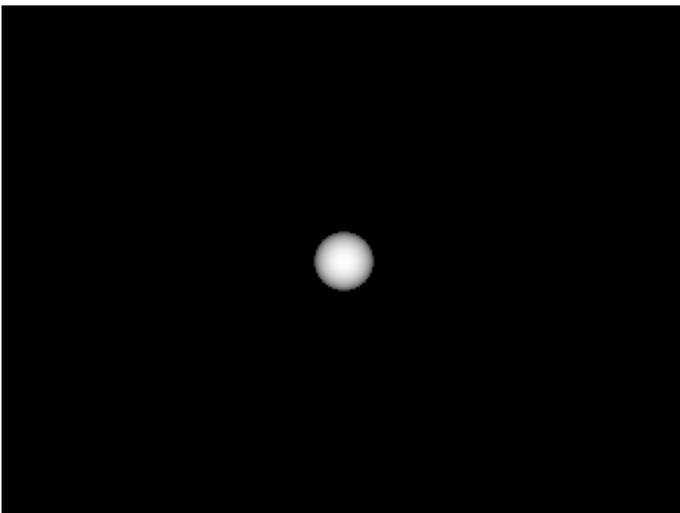
まずは、基本として空間と時間の対化、ミクロとマクロの対化が次元観察子 $\psi 1$ と次元観察子 $\psi 2$ であることを覚えておこう。

### ■ アニメーションにしてみる

オcottの言う「無限小から無限大へと向かうところに観察されている空間が次元観察子 $\psi 1$ で、無限大から無限小へと向かうところに観察されている空間が次元観察子 $\psi 2$ 」のイメージをアニメーションにしてみると、

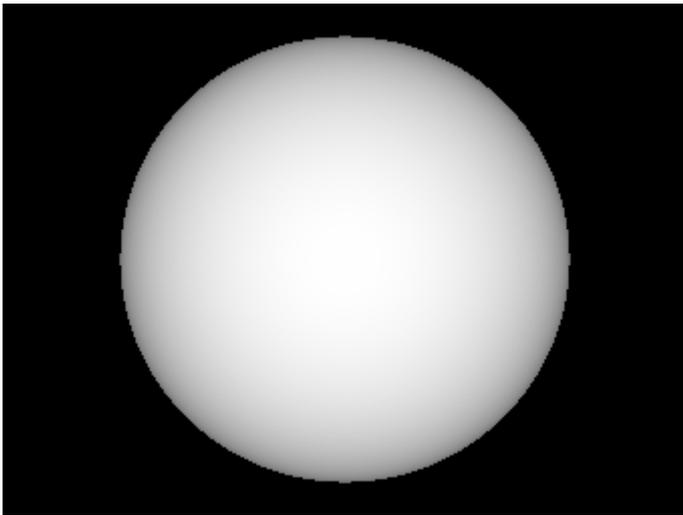
以下のような感じになる。

#### 次元観察子 $\psi 1$ のイメージ



[アニメーション：だんだん大きくなる球]

## 次元観察子 $\psi 2$ のイメージ



〔アニメーション：だんだん小さくなる球〕

次元観察子 $\psi 1$ であるミクロと空間の関係は、ミクロから空間が広がる感じであり、その反映が次元観察子 $\psi 2$ のため、その逆が時間ということになるらしい。

こうした $\psi 1 \sim \psi 2$ の二つの概念に挟まれている次元を、  
ヌーソロジーでは『点球次元』と呼ぶ。

これがヌーソロジー的な「普通の世界」の基本となることを理解しておこう。

### ■ 「表相」について

次元観察子 $\psi 1 \sim \psi 2$ に関する話をもう少ししていこう。  
それは『表相』という概念で説明されるものでもあるらしい。

これについては、書籍『2013：人類が神を見る日』を引用すると以下のように書かれている。

ただし、 $\psi 1 \sim \psi 2$  はもう一つ別の意味として解釈されることもある。それが本文の方にも何度か登場していた「表相」という概念である。表相とは、単純に言えば、ある角度から見た、対象の「見え姿」そのもののことをいう。

表相とは「ある角度から見た、対象の見え姿そのもの」とのことであり、  
それも $\psi 1 \sim \psi 2$ の世界にあるものと解釈されるらしい。

これについては、以前に紹介した「[視点変換3Dルーム](#)」に出てくる  
**KitCat 実験**の図で説明すると分かりやすい。



〔アニメーション：缶が自転しているように見える〕

「ある角度から自身が見ている、KitCat 缶の姿」もまた、  
ヌーソロジー的な『表相』と言えるわけである。

それから、「視点変換 3D ルーム」で早速出てくる景色などもそうである。



我々にもこういった「世界を観測した景色」があって、  
その景色は見ている人によって違う。

わりと当たり前の話だが、

ヌーソロジーの着実な理解はこうした常識からスタートする。

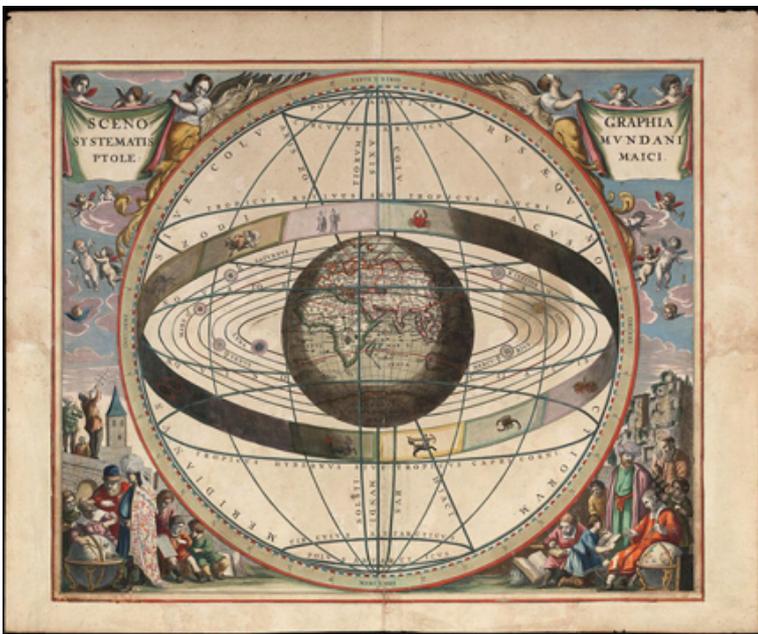
## 16. 「天球」についてとミクロとマクロ

次元観察子 $\psi_1 \sim \psi_2$ の理解をもう少し深めるために占星術の話をしてしよう。

占星術には「天球」という概念がある。

今の天文学では「地動説」が当たり前となっているが、昔は星が地球を中心に周っているようにしか見えなかったため、「天動説」が当たり前となっていた。

そして、天動説的に夜空の星を見た場合、その星の姿はものすごく大きな球に張り付いているように見えると認識しても、別におかしい話ではない。



このように星の姿が張り付いていると仮定した球を「天球」という。

例えるなら、プラネタリウムで再現する星空もそうである。

あれは投影機から発した光をドーム状の天井の内側に設置された曲面スクリーンに映し出すことで、夜空の内容を再現している。

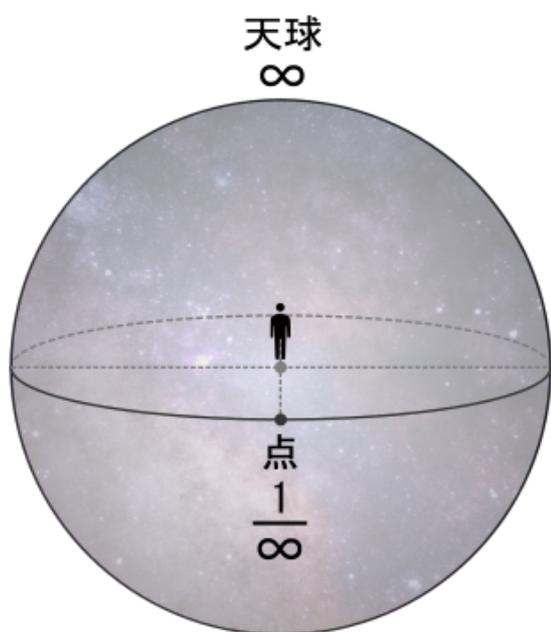
これはいわば「天球」の再現と同義となる。



つまり、天動説的に星をみた場合、そういう見方をすることができるということだ。

天動説的な世界とは、いわば、無限の大きさをした天球がこの世界を包んでいて、そこに夜空が写っていたり、太陽のようにとても遠いものがあるという世界である。こうした「マクロ世界」は次元観察子 $\psi 2$ に該当する。

そして、天球が「次元観察子 $\psi 2$ ：マクロ」にあるのに対して、その中の一点は「次元観察子 $\psi 1$ ：ミクロ」に該当するわけである。



ヌーソロジーでは「無限遠点」というワードが出てくるのだが、一般的に「無限遠点」という言葉を使った場合、この「天球」のように「無限の大きさをした球に張り付いている点」みたいなイメージとなるだろう。しかしながら、ヌーソロジー的に出てくる「無限遠点」はそういう意味ではない。

それは「点」を中心に眺めると出てくるものであり、  
人間型ゲシュタルトの中にあるものではない。  
マクロ側にあるものではなく、どちらかというミクロ側にあるものである。



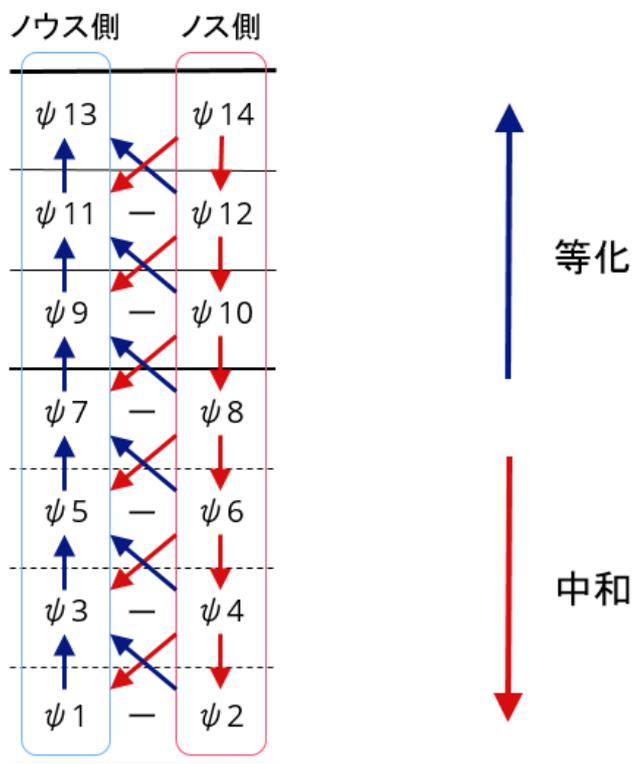
それから、夜空の星には「北極星」と呼ばれるものがある。  
これは「天球」が自転している中で、その回転の軸の中心にあって止まっているように見える星のことを言う。



このような「不動の点」の中に「無限遠点」があるので、  
北極星はニューソロジー的にも重要なものと言えるかもしれない。

## ■ $\psi 1 \sim \psi 2$ における意識進化の方向性

ここで、ノウスとノスの関係について思い出して欲しい。



ノウスとノスはそれぞれ奇数と偶数に対応していて、  
**次の次元へ進んでいくための鍵となるのは奇数側の概念**ということだった。  
 つまり、次元観察子 $\psi 1 \sim \psi 2$ においては $\psi 1$ であり、  
 「 $\psi 1$ : ミクロ」に該当する方である。

したがって、ミクロ側のものが**意識進化の鍵**を持っていることを、  
 念頭に置いておこう。

以上。『2013:人類が神を見る日』では次元観察子 $\psi 1 \sim \psi 2$ について、あとは以下のように書かれている。

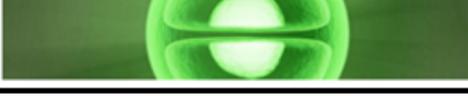
この $\psi 1 \sim \psi 2$ の領域の本質は、実は、ここで説明したほど単純なものではないのだが、今の段階では、このくらいの説明で終わらせておいた方が無難だ。

実はもっともっと深いものらしいが、  
 ひとまずはこれぐらいの説明にしておいた方が無難とのことである。  
 ・ ・ ・というわけで、次は次元観察子 $\psi 3 \sim \psi 4$ の話へと進んでいこう。

## 17. プログラム 2 次元観察子 $\psi_3 \sim \psi_4$ 位置の交換の対化

いよいよ『次元観察子 $\psi_3 \sim \psi_4$ 』について説明する。

この辺はニューソロジー的アセンション（次元上昇）の入り口のような概念なので、ニューソロジーの本番はここから、みたいなものである。

	$\psi_1 \sim \psi_2$	第一層	
	$\psi_3 \sim \psi_4$	第二層	←
	$\psi_5 \sim \psi_6$	第三層	
	$\psi_7 \sim \psi_8$	第四層	
	$\psi_9 \sim \psi_{10}$	第五層	
	$\psi_{11} \sim \psi_{12}$	第六層	
	$\psi_{13} \sim \psi_{14}$	第七層	

これについては、書籍『2013:人類が神を見る日』でコウセンさんが以下のように書いていた。

さて、いよいよ、トランスフォーマーが発見する最初の観察子のペアである次元観察子 $\psi_3 \sim \psi_4$ の説明に入っていこう。何分にもこの空間は人間型ゲシュタルトには明瞭に意識化されていない空間であるから、説明は $\psi_1 \sim \psi_2$ のときほど容易ではない。今から読者の無意識構造（未だ意識化されていないという意味で）の中にゆっくりとメスを入れていくことになると思うので、どうかゆっくりと考えながら読んでほしい。

そんなわけで、ここから先は「明瞭に意識化されていない空間」を探っていく作業になるので、禪の修行でもするように心してかかっていこう。

まずは、オコツトからのメッセージの引用をする。

——人間の内面（ $\psi_1$ と $\psi_2$ ）においては無限大と無限小を対称的な方向として把握することは決してできません。これらの描像のためには人間の外面にある無限遠点を発見することが必要です。——シリウス  
ファイル：19910512（177頁）

『人間の内面』と『人間の外面』というワードが出てきた。

これについては以前の記事でも説明した。

[リンク：■変換人型ゲシュタルト論(7) ～変換人型ゲシュタルトとは？(前編)～]

オコットによると「人間の内面とは、あなたがたが外在と呼んでいる世界、人間の外面とは同じくあなたがたが内在と呼んでいる世界のことを指します」とのことなので、

簡単に言うと『人間の内面』は「外在」ということで「通常の世界」ということになる。

そして、『人間の外面』は「内在」と言われているが、変換型ゲシュタルトにおける基本的なモノの見方は通常から「反転」しているので、

目の前に見える世界にそれ（内在）が表れている状態となる。

以前に説明した、「内と外の関係が逆になってる」とか「表と裏の関係がメビウスの輪のように繋がってくる」とか「身体の内側に外在世界（物の世界・宇宙）があり、身体の外側に内在世界（心の世界）があるみたいになってる」とか・・・

そんな話のことである。

したがって、『人間の外面』は「反転した世界」と言うこともできる。

そして、 $\psi_1$ と $\psi_2$ は通常の物理空間という話なので、こっちは『人間の内面』というわけである。

それから、「無限大と無限小を対称的な方向として把握する」というのは、いわば「ミクロのマクロの等化」であり、

$\psi_1$ と $\psi_2$ の等化ということになり、つまり次元観察子 $\psi_3$ の発見である。

その描像のためには、『人間の外面』が分かり、さらにそこにある『無限遠点』を発見する必要があるらしい。

### ■ 「等化」と「対称性」についてのおさらい

ここで、『等化』という概念についておさらいをしよう。

等化はニューソロジーにおいて常に出てくる概念だし、等化を制するものはニューソロジーを制する、というぐらい重要なものだが、それでいて理解の難しい概念の筆頭でもある。

等化は次のような意味だと以前に説明した。

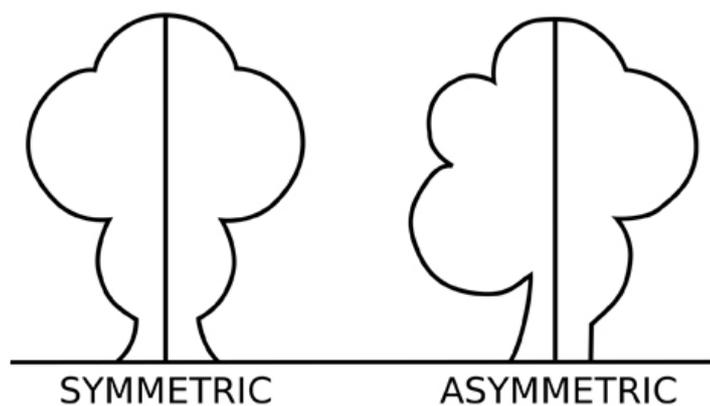


『負荷』と『反映』という、  
 背反するものを統合するような「回転」の作用、  
 または、対象性を見出す作用にあたる。  
 数字では「3」に対応する。  
 『負荷』と『反映』を新たな次元の視点で見る力を持つ。

「対称性を見出す作用にあたる」と書いてある通り、  
 「対称性」が等化を理解するためのキーワードとして重要となる。

では**対称性 (Symmetric)** とは何なのか？

数学的な対称性は「**回転や反転などの変換しても不変であること**」を言う。  
 例えば、左右対称の場合は左右を入れ替えても形が変わらないことになる。



しかしながら、意識物理学（ニューソロジー）における「対称性」の意味はそれとは微妙に違うかもしれないが、

「**変換によって入れ替え可能であること**」みたいな意味だと言っても良いだろう。  
 これについてもっとしっかりと説明しよう。

例えば、以下のような一次元（線）にある2点について考えてみる。

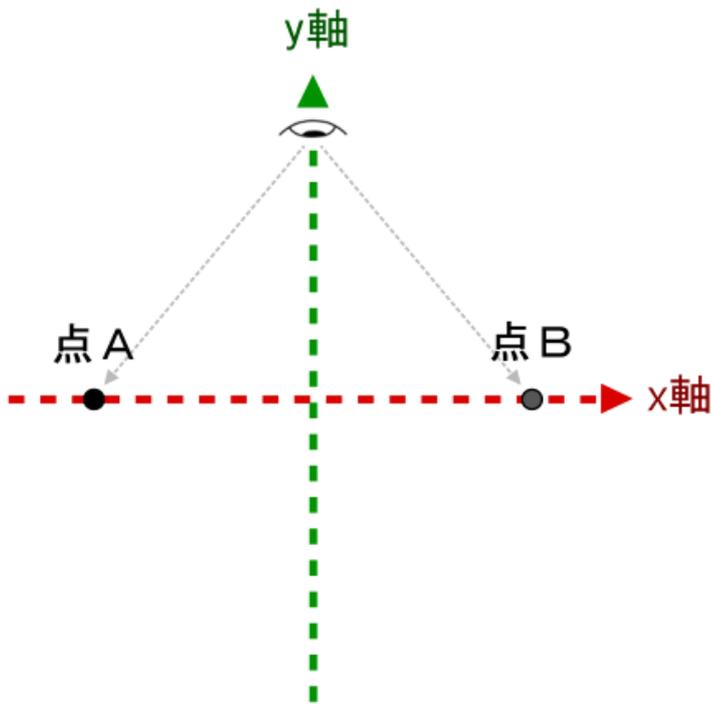


ここで、点Aの立場から見た点Bについてを想像してみよう。

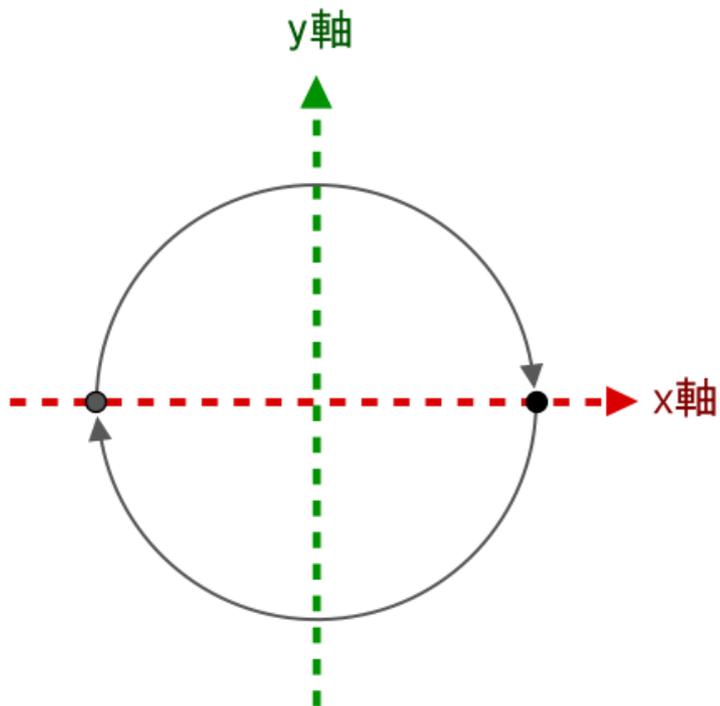
そうすると、ただ目の前の方向にある点Bが見えるだけになるはずである。一次元においては「前後」という概念があるだけなので、そこで点Bが動いたとしても、点Aにとってはなんとなく「近い」と「遠い」ぐらいの関係しかない。

そこで、90度方向に軸を新たに一本増やして二次元にした場合どうなるか？

すると、以下のように移動の自由度が増し、点Aと点Bを観測する視点が出てくるようになる。

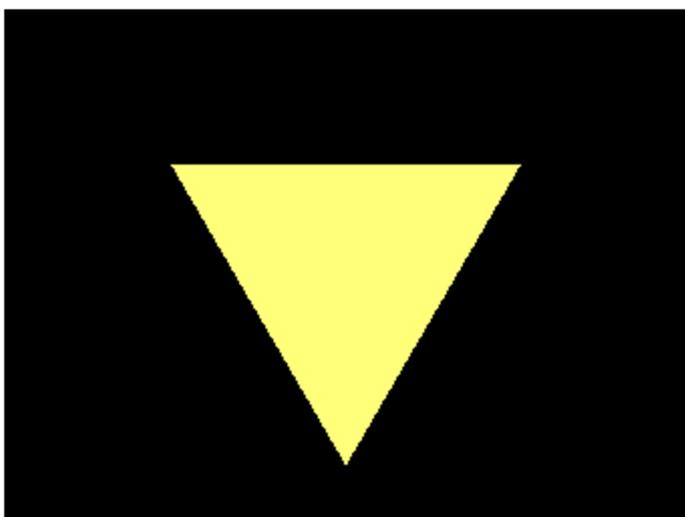


そしてさらに、y軸方向へ移動しての回転によって、入れ替えることも可能となる。



以上のように「入れ替え可能なものとして見る事ができる」ことが、  
ヌーソロジー的に「対称性を見出すことができる」ことになるわけである。

さらに、二次元を三次元に増やした場合はどうなるか？  
以下のように、z 軸方向へ移動する回転によって、  
場所を入れ替えることができる。



〔アニメーション：正三角形の板が縦回転する〕

このように、「入れ替え可能な前後や左右のような概念」が「対称性」というわけである。

これが実際問題、人の意識の中でやるとなると、各々自身が持つ「心」の問題もまた重要になってくるの  
だが、

ニューソロジーでは構造的に捉えることが特に重要となる。

### ■ ミクロとマクロの対称性とは？

次元観察子 $\psi_3$ は、次元観察子 $\psi_1$ と $\psi_2$ の等化によって見出すことができるため、  
以上のような「対称性」の法則を「ミクロ」と「マクロ」に対してや、  
「空間」と「時間」に対して適応させることが重要となるわけである。

原理的には、まず、z軸方向に加えて90度方向にある新たな軸を発見して、  
そこから入れ替え可能なものとする・・・ということになる。

それはどういうことなのか？

・・・というのをこれからじっくりと理解していかなければならない・・・

この辺の具体的な説明の難しい所が、ニューソロジーの難しさになってくる。

そもそも、『等化』という概念自体がかなり抽象的な領域にあり、なかなか理解が難しいものである。  
しかしながら、次元観察子 $\psi_3$ を理解することは、等化を具体的に理解することと同義であるため、  
その辺をマスターすることで、抽象的な領域にある世界を具体的に理解することができる。  
コウセンさんが「ニューソロジーは具体的なアイデア論」と説明しているのはそのためである。

さらに、等化という概念自体は、  
 $\psi_3$ と $\psi_4$ の等化で $\psi_5$ を発見する時にも必要なもので、  
そこでさらに等化の理解が深まっていくわけである。

### ■ $\psi_3$ 理解のためのヒント

さて、あらためて『次元観察子 $\psi_3$ 』とは何なのか？

人間の意識との関係だと、  
 $\psi_3$ は「主体」が形成されている空間領域だということが言われている。

したがって、 $\psi_3$ の位置を「主体の位置」とすると、  
以下の推論が導き出せることが『人類が神を見る日』には書かれている。

- ※ 主体の位置は3次元空間の中には存在していない。
- ※ 無限遠点とは主体の位置が存在するところである。
- ※ 主体の位置と対象の位置とを結ぶ空間に人間の外面世界がある。

次元観察子 $\psi_3$ の発見と理解のために、  
こうしたことについてしっかりと考えていこう。

# 18. 「4次元」を理解する話

前回、以下の推論があった。

- ※ 主体の位置は3次元空間の中には存在していない。
- ※ 無限遠点とは主体の位置が存在するところである。
- ※ 主体の位置と対象の位置とを結ぶ空間に人間の外面世界がある。

その中で、まずは「主体の位置は3次元空間の中には存在していない。」についてを掘り下げていこう。

## ■ 次元論の基本

まず、「3次元空間」ってワードが出てきたので、「次元」の話をおさらいしておこう。

「次元」とは何か？

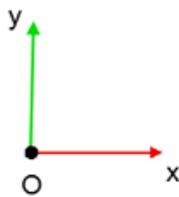
数学的なそれは「軸の数」で決まるものなので、

以下のように一本だと1次元（線）、二本だと2次元（面）、三本だと3次元（立体）、四本だと4次元・・・みたいなものになる。

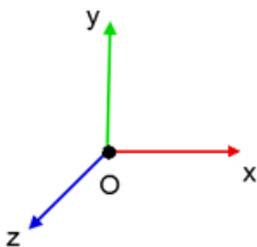
～1次元～



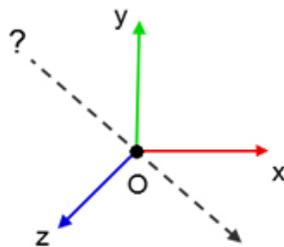
～2次元～



～3次元～



～4次元～



それから、それぞれの軸は必ず90度の関係になっているという法則がある。

ちなみに、当たり前の話だけど、この世界は3次元空間になっているので、4次元から先は謎に包まれた世界ということになる。だから、そうした謎の研究をする物好きな数学者や数学好きもたまにいたわけである。

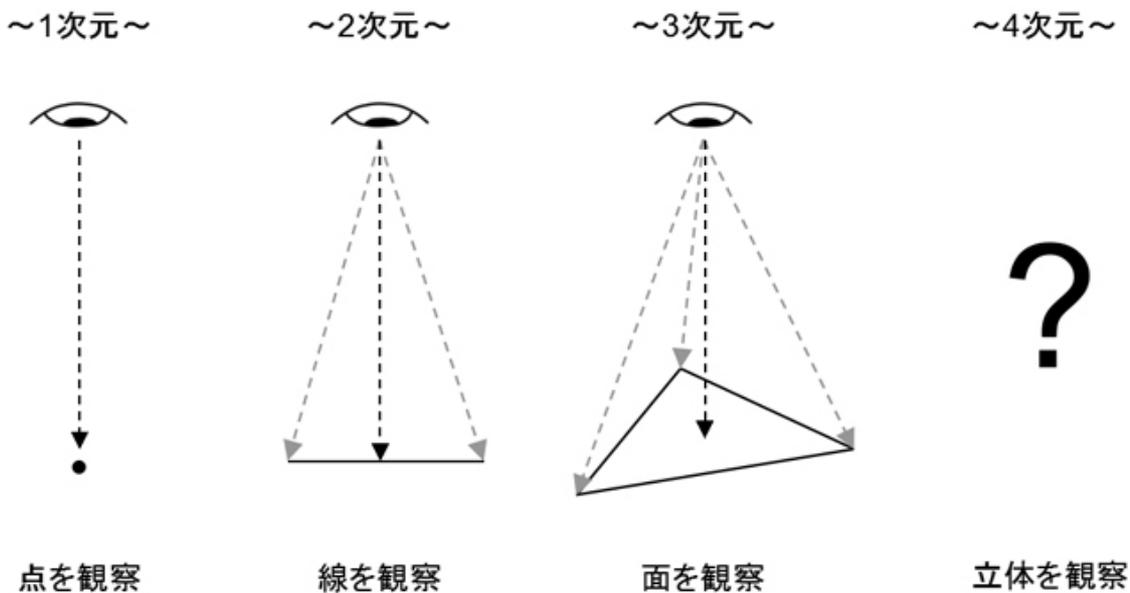
ちなみに、一般的に「4次元」と言うと「空間3次元+時間1次元」という「4次元時空」を指すこともある。

これは「ミンコフスキー時空」と呼ばれるもので、ごく普通の世界である。かの有名なアルベルト・アインシュタインはこちらを支持していたので、物理学の界隈で「4次元」と言うとそれが主流となっているが、ここで扱いたいのは空間に次元を一つ足すような概念なので「4次元空間」のことを指す。

### ■ 観察の次元は1次元上位にある

そして、「観察の次元は1次元上位にある」という法則が、ノーソロジーでは重要視される。

まず、それぞれの次元の観察の様子は以下のようにになっている。



これを元に、書籍『人類が神を見る日』では以下のように書かれている。

- 1、点の観察は1次元の線によってなされる。
- 2、線の観察は2次元の面によってなされる。
- 3、面の観察は3次元の立体によってなされる。
- 4、立体の観察は4次元の超立体によってなされる。

観察される次元を  $n$  とすると、観察する次元は  $n+1$  というように一次元上位にあることになる。

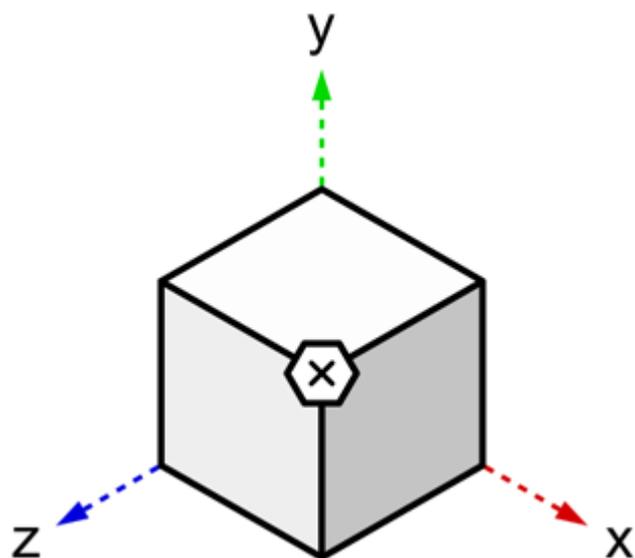
したがって、空間が3次元であるという認識を持っている者の位置は4次元にある・・・という推論が可能になる。

これをヒントにもうちょっと考えてみよう。

### ■ 4次元を発見するための図

それから、「立体の観察は4次元の超立体によってなされる」を理解するために、書籍『人類が神を見る日』に書かれているとても重要な図がある。

それは以下のような図であり、とある科学雑誌の記事でコウセンさんが見つけたものらしい。



4次元をイメージするための一つの例を挙げましょう。上に立方体が描かれています。この立方体は、今、平面世界に落とし込まれているわけですから、この平面自体を一応3次元世界と考えることにします。ここで立方体の一つの頂点に×印をつけます。この×印のところに鉛筆を一本立ててみてください。どうですか・・・・・・・・・・その鉛筆は立方体が存在している平面世界に対して直交していますね。この平面自体は3次元空間を意味しているわけですから、この鉛筆を立てた方向に4次元が存在することになります・・・・・・・・・・

理論上、4次元目の軸の方向は3次元目の軸（z軸）より90度方向にあるはずだが、単純にそれをイメージしようとするのは困難である。

しかし、3次元世界を平面世界に落とし込んだ場合・・・  
それらの軸と90度方向にある4次元目の軸の発見が可能となる。

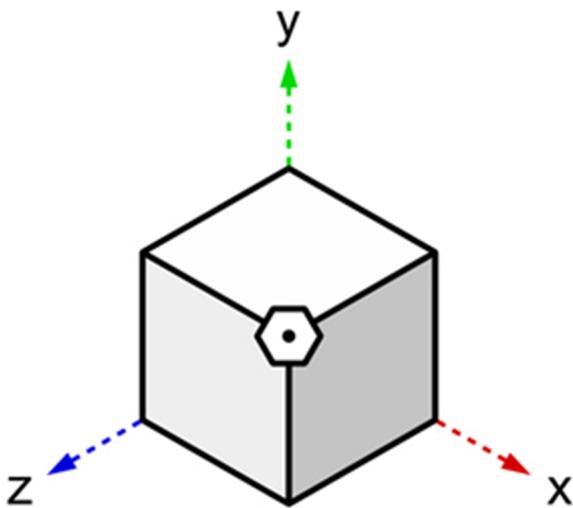
先の説明のように、ここで立方体の一つの頂点のところに、垂直方向に鉛筆を一本立ててみると・・・それが4次元の方向だと言えるわけである。

そして、その方向は「奥行き」と同義になるため、

ヌーソロジーでは「4次元は奥行き方向にある」ということが言われている。

その原理と「立体の観察は4次元の超立体によってなされる。」という法則とを合わせると、4次元空間の発見の糸口が掴めてくる。

以下の図をヌーソロジー理解や4次元理解の基本として使ってみよう。



### ■ 4次元より上の次元

ちなみに、これはちょっと先の話になるが、

「次元」についてオコツトは次のようなことも言っている。

以下は、太陽が起こしている働き（水素からヘリウムへの核融合）が何をもたらすか？

について、コウセンさんとオコツトが話をしているシーンである。

「しかし、水素とヘリウムの原子がタカヒマラと一体どのような関係を持っているというのですか。その説明がなければ、あなたのおっしゃっていることは何の意味もなさないではありませんか」

「それについてはまだお答えする時期ではありません。あなたがたの意識に**位置の等化**が起これば、それは自然と理解されてくるはずですよ」

——イチノトウカ………またもやしリウス言語だ——

「何なのですか、その位置の等化というのは」

「西暦1999年に予定されているわたしたちの調整作用です。位置の等化とは、人間の意識が次元観察子 $\psi$ 5領域に入ることの意味します。その時は人間の意識に**5次元対称性**の世界が見えてくるでしょう」

「1999年……5次元対称性？ ……ちょ、ちょっと待ってください。それは人間が5次元空間の何たるかを理解するということですか？」

「はい、位置の等化が起これば、理解のみならずその描像も可能となるでしょう」

『位置の等化』というワードが出てきた。これは「人間の意識が次元観察子 $\psi$ 5領域に入ること」に該当するので、次元観察子 $\psi$ 3からはちょっと先の話になる。

それから、**5次元対称性**というワードが出てきた。

次元観察子 $\psi$ 5まではっきり分かるようになると、5次元対称性の世界なるものが見えてくるらしい。

そして、そこまでの変換人型ゲシュタルトが理解できれば、太陽で起きている核融合の本質がなんとなく分かってくるとかなんとか……

「4次元」に加えて、「5次元」の話にまで飛躍していったが……

ヌーソロジーはこれらの「次元」について理解するための大きなヒントを持っているわけである。

## 19. 変換人型ゲシュタルトの基礎

『次元観察子 $\psi 3$ 』の認識は「変換人型ゲシュタルトの基礎」とも言えるぐらい重要な関門である。

それをどのように理解していけば良いのか？

これから本格的に説明していこうと思うが、  
必要なことを一旦おさらいしておこう。

まず、次元観察子 $\psi 3$ の発見のためには、

マイクロとマクロが対称性を持ったものとして見る視点を発見すること。

また、それは3次元空間の中にはなく、4次元の方向にあるということ。

それから、以下の推論によると、

3次元空間の外側であるそこには「無限遠点」と「主体」があるということ。

主体の位置と対象の位置から「人間の外面世界」が分かるということ。

- ※ 主体の位置は3次元空間の中には存在していない。
- ※ 無限遠点とは主体の位置が存在するところである。
- ※ 主体の位置と対象の位置とを結ぶ空間に人間の外面世界がある。

書籍『人類が神を見る日』によると、

「 $\psi 3$ が主体を構成している空間」と書かれているので、

「 $\psi 3 \Rightarrow$ 主体」と紐づけて理解しておこう。

問題は、実際にどうすればそれが分かるようになるのか？

あるいは、どうやったら「主体」「無限遠点」「人間の外面世界」が発見できるのか？である。

それについてこれから考えていこうと思う。

ニューソロジーで扱うここから先の意識は、

思考の域を超えた思考みたいなものなので、理屈を捨てる必要があるかもしれない。

あるいは、もしかしたらコツが掴めればすぐ分かるかもしれない。

そんな感じで心してかかっている。

### ■ 変換人型ゲシュタルトの基礎となる概念

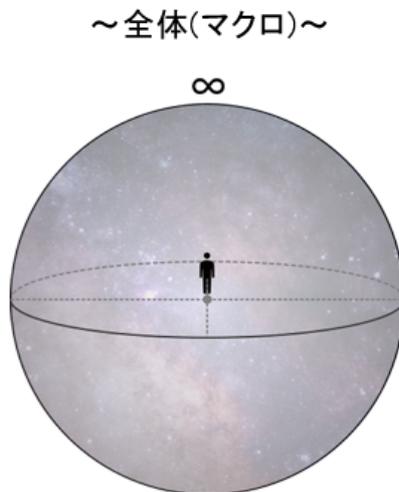
ニューソロジーと変換人型ゲシュタルト論は、

次元観察子 $\psi 3$ の理解からが本番となるわけだが、

そこから先の基礎となる概念をおさらいしよう。

まずは、点(ミクロ)と全体(マクロ)の二つ。  
それから、前(奥行き方向)と後ろ(手前方向)である。

～点(ミクロ)と全体(マクロ)～



～缶の奥側(前)と缶より手前側(後ろ)～



これは、次元観察子 $\psi_1$ (ミクロ)と次元観察子 $\psi_2$ (マクロ)の対化でもあり、  
これがすべての基本となる。

これを実際に動いて確認していこう。



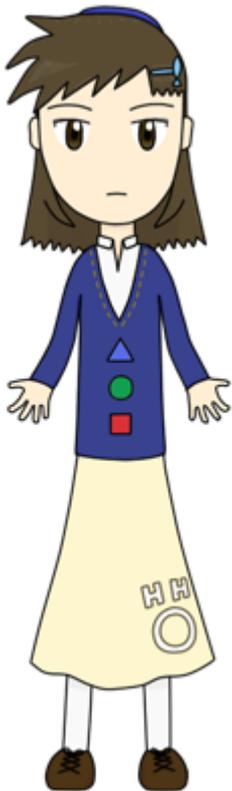
※久々にヌーソロジーたんを登場させます

まず、手を指差して前に出すポーズを試みよう。



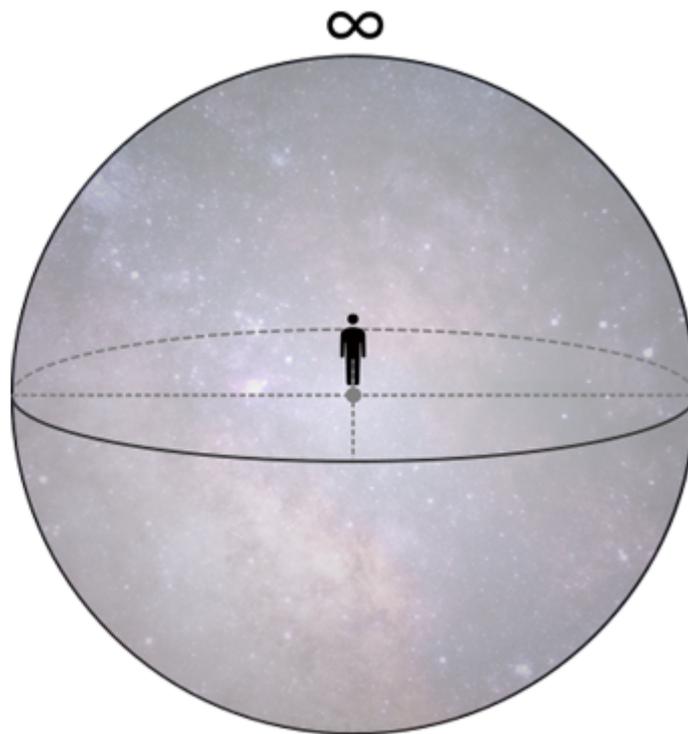
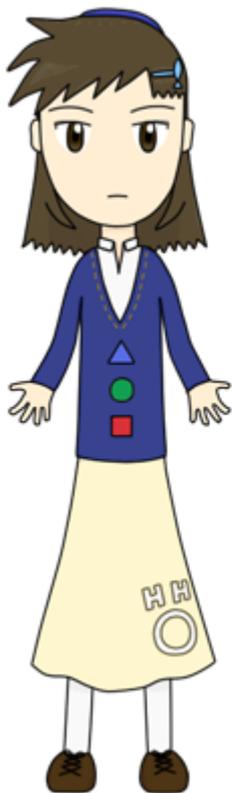
これはミクロと奥行きを意識する時のサインである。

次に、両手を適度に広げて世界の全体を感じてるかのようなポーズをしてみよう。  
(顔の位置はなんでも良いけど、正面よりちょっと上を向いておこう)



これはマクロと、対象より手前側にある世界（幅）を意識するサインである。  
以上の二つのポーズを繰り返してみよう。

そして、以下の二つを繰り返しながら「ミクロ・奥行き」と「マクロ・幅」も意識するようにして、その両方の感覚を強めるようにしよう。



これは次元観察子 $\psi 1$ と次元観察子 $\psi 2$ の意識みたいなものであり、  
変換人型ゲシュタルトにおける『負荷』と『反映』の基本でもあるため、  
今後の『変換人型ゲシュタルト論』でも基本になってくる。

## ■ ミクロについて意識する

それから、ニューソロジーでは $\psi_1$ が奇数系ということで、ミクロ側を重点的に意識していくわけである。



指差しポーズと共にミクロを意識するのも良いが、ひたすら瞑想するように意識していくのも良いと思う。

ニューソロジー的にはミクロのものにこそ可能性があるため、より具体的に素粒子ほどの大きさのものを理解できると良いわけである。

このように、理屈を超えてミクロを知覚をすることを「ミクロ知覚」と呼ぼう。

## ■ ミクロを先手として光景を見る



純粹なただの一点を見続けていると、どうなるだろうか？

その点はどれほどに離れていても、同様な点のように見えてくる。

そうすると、大きさも距離も関係ないように見えてくるのではないだろうか？

そうしながらも、一点に集中しながら空間全体を見ることをやってみよう。

すると、空間全体に対しても、大きさも距離も関係なく見えてくる。

その感覚が大事である。

このように、「大きさも距離も関係ない」状態になったら、

それは「ミクロとマクロが対称性を持ったものとして見ている」ことと同義である。

なぜなら、それはミクロとマクロはほとんど変わりなく一緒という視点であり、

ミクロのように大きさや距離が存在しない概念としてマクロが見えてくるからである。

また、それを続けていくとニューソロジーで『最小精神』と呼ばれる意識が芽生えてくるかもしれない。

最小精神はオコツトが言ったニューソロジー用語で、以下のように説明されている。

最小精神は顕在化における最初の位置となります。（シリウスファイル）

※『顕在化』は「次元観察子 $\psi 1 \sim \psi 14$ の意識の顕在化」という意味であり、変換人型ゲシュタルトの形成と同義。

もし、そんな意識が芽生えた場合、それがニューソロジーの基本にもなるため、大切に育てていこう。

## 20. ダグラス・E・ハーディングの手法

前回は変換人型ゲシュタルトの基礎についてを書いた。

加えて、変換人型ゲシュタルト理解の基本となり得るワークがある。

それはダグラス・E・ハーディングが提唱した『頭がない方法』という自己発見メソッドの中にあるワークである。

これはヌーソロジーとは直接関係はないが、

やっтерることがヌーソロジーでやりたいこととほとんど一緒だということで、前々からヌーソロジー界隈の一部で注目されてるぐらい画期的なものなので紹介したい。

### ■ 指差し実験

ハーディングの『頭がない方法』は、簡単に言うと自己発見メソッドなのであるが、つきつめると、まるで一つの宇宙論というぐらい壮大な哲学を含み持っているものなので、そこまでやるとかなり長い話になってしまうが・・・

とりあえず『指差し実験』が有名かつ基本的なワークとなるため、それだけ紹介しておきたい。

以下の動画にて、基本的なことが一通り説明されている。

(基本ワークは0:55~2:35あたりにあるので、そこだけでも見ると良い)

[Youtube 動画 : 1B 私たちの本質とは何か?.mov]

また、公式サイトの中にあるページでも説明されている。

[リンク : ここを指さす - The Headless Way]

このワークの内容を要約すると・・・

まず、目の前に何か物があるとする。リンゴでも何でも良いので例えばリンゴを指差した場合、リンゴを対象として「それ」がある。

今度は下の方に指を差してみる。下の方には自分の足元があるので、自分を足元を差していて、やっぱり「それ」がある。

最終的に自分の方向に指を差してみる。すると何があるのか・・・？



※『Youtube 動画：1B 私たちの本質とは何か?.mov』より引用

そこに「主体」があると、ハーディングは言っている。

そして、ここでいう「主体」は、ヌーソロジーの『次元観察子 $\psi$ 3』が構成している「主体」とも同義なのである。

ヌーソロジーたんてで説明すると・・・

以下のポーズが「奥行き」を意識している時で「 $\psi$ 1」に対応するものだった。



この時点では「奥行き」を意識しながらも、前側にある「それ」を指さしている状態である。しかし、そのまま指の方向を180度逆にして「奥行き」の直線上のものを意識すると・・・次元観察子 $\psi_3$ や「主体」の意識を探り当てることができるわけである。

ハーディングが開発した方法は、ニューロロジーや変換人型ゲシュタルトの感覚を掴むのにも使えるので、理解を深めていきたい場合は何度もワークをやってみよう。

## ■ ハーディングの宇宙論

以上の「指差し実験」のようなやり方を基本に「わたしとは何か？」と自己探求をしていき、さらにはこの世のすべてを解き明かそうとしているのがハーディングの哲学である。

それは「ハーディングの宇宙論」と呼ぶに相応しい。

Youtubeチャンネルの内容を軽くみただけでも、その壮大な感じが伝わると思う。

[Youtube 動画：あなたは何ですか？]

以下の著作も出ている。

[書籍：ダグラス・E・ハーディング『存在し、存在しない、それが答えだ (- To Be and not to be, that is the answer -)』(2016) ナチュラルスピリット ]

「To Be and not to be, that is the answer」

日本語訳で『存在し、存在しない、それが答えだ』になっている。

この本のタイトルも面白い。

実はニューロロジーの『等化』が分かった時の感覚は、この「存在し、存在しない、それが答えだ」にも近いので、これは『等化』を表すメッセージと言っても良いかもしれない。

「負荷と反映の対称性が分かる」が等化の意味だが、それは二つの状態は両方とも答えだという視点でもある。

「指差し実験」のようなワークから等化に通じる答えを導き出している所も、ハーディングの宇宙論はニューロロジーっぽい。

ニューロロジーは難しく感じることが多いけど、こうした方法論を併用しつつ理解していくと分かりやすくなると思う。

## 21. 「知覚正面」を平面として空間を見る

『次元観察子 $\psi$ 3』の理解に肝となるのは、今の目の前の光景である「知覚正面」を平面として見ることである。

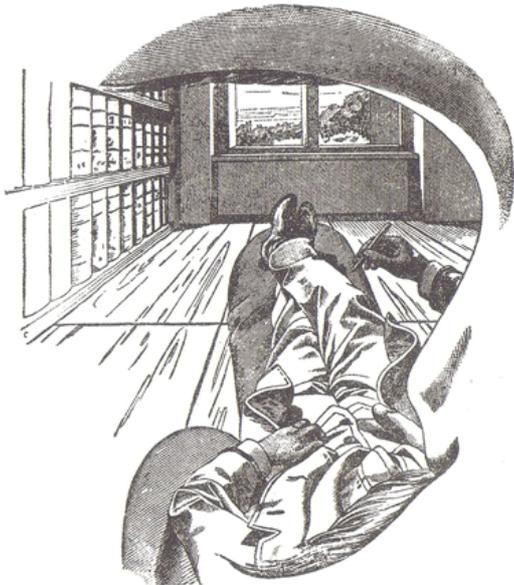
「知覚正面」という概念は、 $\psi$ 3以降の『変換人型ゲシュタルト』の基礎にもなるので、ここでちゃんと説明しておこうと思う。

### ■ 「知覚正面」とは？

「知覚正面」とは何か？

まず、19世紀の物理学者であるエルンスト・マッハが書いた有名な以下の絵がある。

マッハは物理学者でありながら、「認識とは何か？」について考える認識論について研究する哲学者だった。



この絵は、自身が展開する認識論の説明のために、マッハが左目で観た視覚体験をイラストにしたものであり、**純粋な視覚体験として目の前の光景を見ると、「平面」として見ることができるのではないか？**ということを表している絵である。

このように平面化した「知覚正面」は、ヌーソロジーや変換人型ゲシュタルトの基本にもなるぐらい重要なものなため、念入りに意識していこう。

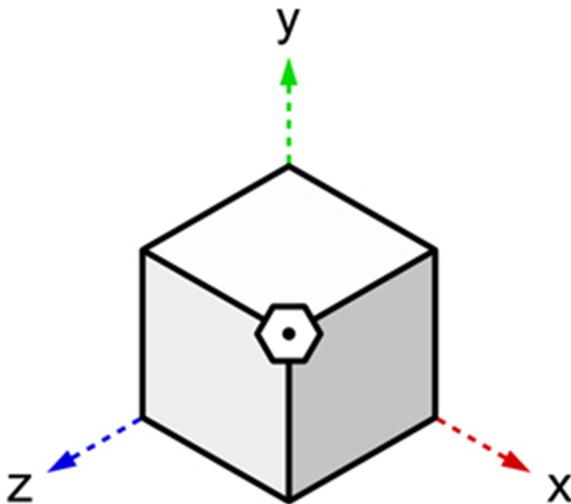
つきつめると、前々回や前回で説明した「ミクロを意識する瞑想」や「指差し実験」とも繋がっており、それらのワークを繰り返すと、目の前の光景がどんどん「知覚正面」みたいな認識になっていくはずである。

このことが分かるだろうか？

### ■ 4次元と知覚正面

また、「知覚正面」が分かるようになると、

以下の「4次元を発見するための図」も機能するようになる。



これは「目の前の立方体を平面に落とし込むこと」を前提としている図であり、その状態の時に垂直方向の軸を差し込むと、4次元目の軸が分かるという理屈だった。

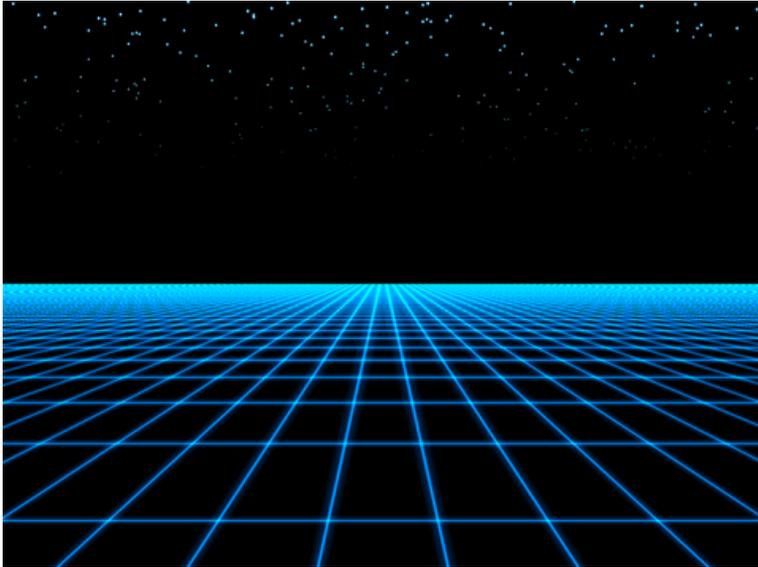
しかし、そもそもこの図から4次元を理解するためには「知覚正面」が見えていないと分からない。

この図は「4次元の方向」を表すと同時に「知覚正面」を表すものであるため、これも変換人型ゲシュタルトの基本ということで今後も使っていく。

### ■ 「知覚正面」認識用のCG

それから、ニューソロジーの理解に役立つようなCGをちょっと作ってみよう・・・

ということで、以下のCGをシェーダープログラミングで作ってみた。



[Youtube 動画 : Star and Grid]

このCGは普通に見ると「奥行きのある光景」のようにも見えるが、  
「奥行きがあるかのような形で光が出力されているだけの平面」のようにも観ることができる。

これもニューロロジーで必要な「知覚正面」を認識するためのツールとして使えると思う。

以上。「知覚正面」について分かっただろうか？

**「目の前の光景は知覚正面であり、それは平面のように認識することができる」**

・・・これは理屈としては分かるけど、  
実際にはそう見えないだろうか？

確かに、ここは人間型ゲシュタルトだと簡単にはいかないとよく言われる所でもあるため、そう簡単にはいかないかもしれない。

このことを実体験として理解するためには、次に説明する「止観」という瞑想方法が大事になってくるため、それと並行して理解してみよう。

## 22. 究極の瞑想方法？「止観」について

仏教には「止観」という瞑想方法がある。

これについては、『[変換人型ゲシュタルトとは？（前編）](#)』の項でもチラッと紹介したが、ヌーソロジーの基本においても重要なので詳しく説明していこうと思う。

### ■ 原始仏教・中国から伝わる瞑想方法

まず、「止観」とは何か？

これは元々は原始仏教の教えから派生してできた瞑想方法である。

書籍『[「止観」の源流としての阿含仏教](#)』によると、

原始仏教的な思想において、仏教は人間が内在的に持っているものを体験して自覚していく宗教であり、その体験の基礎となるものが「**瞑想・禪定**」だとされている。

※禪定：心を一つの対象に集中して、平静を保つこと

〔書籍：桐山靖雄『[「止観」の源流としての阿含仏教—天台智者大師の二つの謎をめぐって](#) 北京大学講演録』（1998）平河出版社 〕

さらに、先の書籍では「止観」について以下のように書かれている。

仏陀の瞑想・禪定は、**止・観**という言葉で表現されます。

心を練って一切の外境や乱想に動かされず、心を特定の対象に注ぐのを**止 (Samatha 舎摩他)**といい、それによって正しい智慧を起し、対象を観るのを**観 (vipasyana 毘婆舍那)**といいます。

仏陀は経典の中で、止を修したならばいかなる貪欲でも断じ、観を修したならば最高の智慧を獲得することができるかと述べています。

これは、仏陀の修行の基本となるもので、この見解はそのまま後代に継承されており、先に述べた天台智頭の『摩訶止観』も、これを承けているわけです。

このように、心を特定の対象に集中する「**止 (サマタ)**」と、そこから対象を純粹に観る「**観 (ヴィパッサナー)**」を基本とし、それを両輪のように合わせたものが「**止観**」となるわけである。

それから、天台智頭の『摩訶止観』という文言が出てきた。

これは6世紀頃の中国で天台宗を創始した**智顛(ちぎ)**という僧侶のことを言っている。

天台教学の大成者と言われるほどに有名な僧侶だった智顛は、法華経に書かれているような仏教の教義を重視しつつも、

「止観」の実践も同様に重視し、『天台小止観』や『摩訶止観』という講義を行った。  
それが講義録として残され、後世において有名な瞑想マニュアルとして伝えられるようになった。

『天台小止観』は短めにまとめた初心者向けのマニュアルで、  
『摩訶止観』はそれより長く色々なことが書かれているため上級者向けな位置づけになる。

『天台小止観』の内容を引用すると、止観について以下のことが書かれている。  
(関口真大訳の現代語訳天台小止観より引用)

夫泥洹真法、入乃多途、論其急要、不出止観二法。所以然者、止乃伏結之初門、観亦断惑之正要、  
止則愛養心識之善資、観則策発神解之妙術、止是禅定之勝因、観是智慧 之由籍。  
若人成就、定慧二法、斯 乃自利利他法皆具足。

涅槃（さとり）の世界は、そこに入るためには種類の途（みち）があるけれども、そのなかでも最も効果的で肝要なものはなにかといえば、止と観の二法に勝るものはない。なぜかといえば、止は、まよいへのとらわれをおさえつける第一歩であり、観は、まよいそのものも断ちきる力であるからである。また止は、人の心識（こころ）を愛養するためのよきたすけ、観はものごとの正しい理解を発すための妙術である。止は、禅定を得るためのすぐれた因となり、観は正しい智慧を発するよりどころであるからである。

もしこの禅定と智慧の二法をなしとげれば、自分を利益し、他の人人のためにもなる生活態度がおのずからその人の身に備わって来ることになる。

後に、平安時代前期に最澄が天台宗を日本に伝えるため、  
日本の天台宗でもこうした文献が重宝され、止観が重視されるようになっている。

『天台小止観』と『摩訶止観』は、  
日本語訳されたものが一般に売られているし、  
調べると色々な情報が出てくる。

〔書籍：『天台小止観—坐禅の作法』(1974) 岩波書店 〕

〔書籍：『摩訶止観 上—禅の思想原理』(1989) 岩波書店 〕

また、『天台小止観』に関しては当サイトでもまとめたことがある。

〔リンク：天台小止観まとめ - 哲学思考のなれの果て〕

そもそも、智顓は始めは「禪」を重視していたらしい。  
禪は「心が動揺することのなくなった状態」を意味するサンスクリット語の「ディヤーナ (dhyāna)」と

という言葉から派生しているものなので、とにかく心を静める瞑想の方向に向かう。  
これは確かに純粋な瞑想に近い分分かりやすく、東洋思想としてよく注目されている。

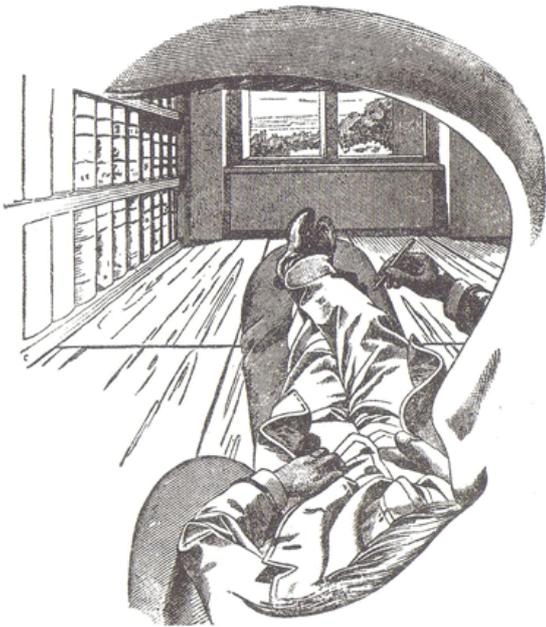
しかし、仏教の修行を続けているうちに、  
「止観」の方が重用だということに気付いたらしい。  
こちらの方が「止」と「観」のハイブリッドさがあり、  
「静」にも「動」にも転じることができるため重要ということだろうか？

仏教とニューソロジーは、やっていることが一致する箇所がチラホラあるが、  
悟りの入門あたりの話だと「止観」が肝になってくるようである。

まるで、智顛もニューソロジーに近いセンスを持っていたかのように、その辺の考え方が似ていると思う。

### ■ 哲学における「止」と「観」

さて、さらに西洋哲学の話をしていこう。  
前回、エルンスト・マッハの哲学についてを取り上げた。



マッハは上記のイラストのように目の前の光景を「知覚正面」として見ることを重要視した。  
このように物事を見ることで、本来は認識することが難しい「事象そのもの」へと向かうことができるの  
ではないか？  
というような哲学的視点から、独自の現象学が提唱された。

エルンスト・マッハの哲学は、後にエドムント・フッサールにも影響を与えて、マッハの現象学よりも、もっと改良された現象学が発案されるに至った。

さらに、フッサールの弟子のマルティン・ハイデガーの哲学の話にも繋がってくる。

こうした一連の現象学を掴んでいくために、

フッサールは「エポケー」という行為を重要視した。

エポケーは原義においては「停止、中止、中断」を意味する古代ギリシャ語であり、哲学において使われるようになってからは特別な意味を持つようになった哲学用語である。

哲学用語としての「エポケー」の意味を分かりやすく言うと、「判断を留保すること」になる。

フッサールの現象学においては、現象を純粋に捉えるためにこの「エポケー」が必要になる。

「エポケー」とは具体的にどういうことなのか？

まず、我々は一般的に「目に見えるものや五感で認識できるものが客観的な実体としてに存在する」という認識で目の前の光景を見ている。

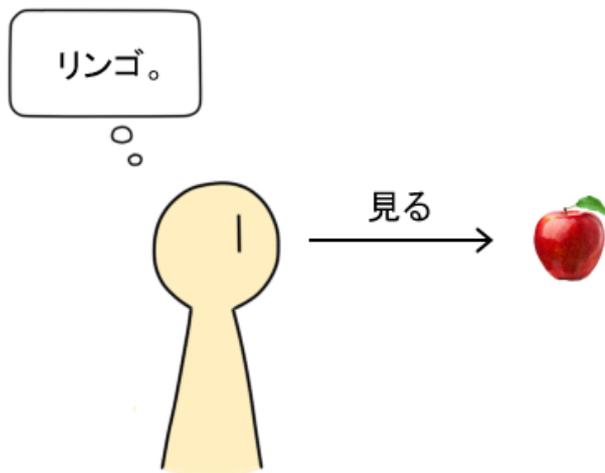
例えば、「目に見える対象」を「リンゴ」としてみよう。



自分が今いる場所に、すぐ手の届く範囲にリンゴがあったとしよう。

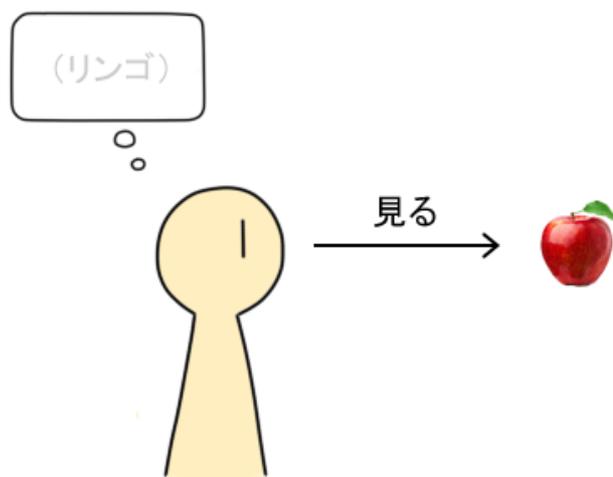
我々が普通にそれを見ると「リンゴがそこに見えるんだから、リンゴがそこに実体として客観的に存在するだろう」みたいに認識するはずである。

フッサールはこれを「自然的態度」と呼んだ。



しかし、フッサールの哲学における「エポケー」は、そうした自然的態度を「カッコに入れる」ことを意味する。

これは「正しいことにはしないで横に置いておく」みたいな意味である。



こうしたエポケーをすることで初めて、目の前のリンゴの「存在」や、リンゴがあるという「現象」を正しく捉えることができると主張されているのが、フッサールやハイデガーの「現象学」である。

そして、この行為は、目の前に何が見えても、それが何であるかの思考は一旦「止（サマタ）」することと同義だと言えるのではないだろうか？

あるいは、目の前にリンゴがあるのに、そうした「自然的態度」を素直に受けないとすると、思考を止めるような行為が必要になる。

つまり、「エポケー」と「止（サマタ）」は、「エポケー＝止（サマタ）」と言えるように同様の行為であり、この二つは西洋哲学においても仏教においても真理に通じていると言えるわけである。

エポケー  
(epoché) = 止  
(śamatha)



フッサール



お坊さん

それから、現象学でやるべきことだと「エポケー＝止（サマタ）」の後は「現象を捉える」流れになる。これも「ただ観る」ことから始めることが大事になるため、今度は「観（ヴィパッサナー）」が重要になってくると言うことができる。

このように、西洋哲学にある「エポケー」の発想を取り入れて、「止観」のような瞑想をやってみるのも良いと思う。

### ■ ニューソロジー入門の真髄とは？

何度も書くようだけど、

ニューソロジー入門において最初の関門となるのは『次元観察子ψ3』の発見である。

その真髄となる行為は何だろうか？

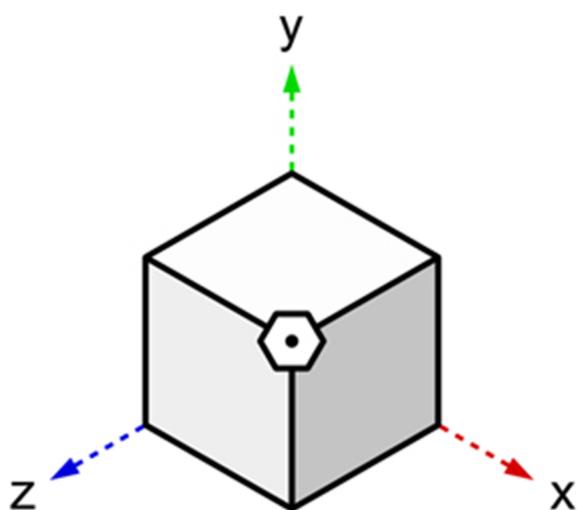
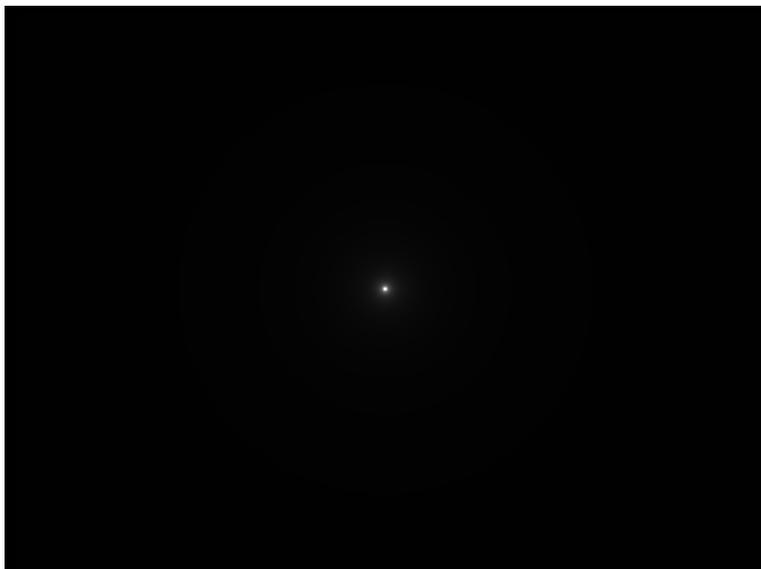
それは・・・

**「ただ観る」**

ということにつきるかもしれない。

観るものは何でもいい。

純粋な「点」とか「4次元を知覚するための図」とかも良いと思う。



とにかくこれらを「何も考えないで観ること」が大事である。  
ここでは分かりやすい説明のため「リング」を使用しよう。



目の前にリンゴがある。

しかし、「リンゴがあるなあ」とは認識しない。

目の前にあるものは「リンゴ」とも分からない。

また、「分からない」という言葉すらも出てこない。

ただ目の前のなんだか赤い物体を観るし、

「赤」という認識もしない。

ただとにかく無心で観るように観る。

そうしていると、とにかく物事を「分別しない」境地に行き着くようになる。

この境地が古今東西で色々と言い換えられていて、「無」だとか「空（くう）」だとか「ゼロの状態」だとか呼ばれて、古今東西の識者によって説明されているのかもしれない。

古今東西で説明されているそんな「無」の境地は、  
ヌーソロジーの道にもなっているわけである。

### ■ 他のことも取り入れつつやるなど

以上のように「ただ観る」だけでも次元観察子 $\psi 3$ の境地に達することは可能である。

しかしながら、これだけでは難しいので・・・

前々回で説明した、ダグラス・E・ハーディングの方法とかも組み合わせると良いと思う。

[リンク：■変換人型ゲシュタルト論(20) ～ダグラス・E・ハーディングの手法～]



※Youtube 動画『1B 私たちの本質とは何か?.mov』より引用

これをやっているとな「止」「エポケー」「無分別」・・・みたいな状態にならないだろうか？  
もしそうなることができれば成功の糸口をつかんでいると思う。

次元観察子 $\psi_3$  についての話はまだまだ続きがあるので、  
これから後述していくやり方を合わせることで、  
理解ができるようになるかもしれない。

## 23. 「ミクロ知覚」がカギとなる

『[変換人型ゲシュタルトの基礎](#)』の項で書いたように、  
ニューロロジー的な高次元認識の基礎となるものは  
『次元観察子ψ1』に対応する概念の「ミクロ」である。

そのため、理屈を超えてミクロを知覚をする「ミクロ知覚」が大事となる。

そこで、自分（Raimu）が以下の書籍でもよく書いている重要な話がある。

〔書籍：佐道来夢『4次元思想とフラットランド』（2016）〕

〔書籍：佐道来夢『ニューロロジー基本概要+(プラス)』（2017）〕

〔書籍：佐道来夢『リアル魔法使い研究：～魔法の仕組みとその他の仕組み～』（2017）〕

それは・・・

人間の「意識」は人間の「脳細胞」で出来ていると言えるし、人間の「脳細胞」は「原子」で出来ている。それから、「原子」は「素粒子」で出来ている。従って、我々の「意識」も、「素粒子」のようによく分からないものに通じていてもおかしくないのではないか？

・・・という話である。

これはニューロロジーを抜きにした素粒子論でも言えることかもしれない。

ちなみに、水素原子の大きさは「約10のマイナス10乗m」、  
その中の原子核の大きさは「約10のマイナス15乗m」と言われているので、  
「素粒子」はそれ以下の世界ということになる。

したがって、人間の身体は1m～2mなので、その10のマイナス1乗（10分の1）を15回以上続ければ素粒子に辿りつくってことになる。

人間の手の大きさは10cm～20cm。人間の指や目の細さ1cm～2cmなため、それを目安にすれば・・・

1~2m



1m

0.1m

0.01m



イメージできるだろうか？

・・・困難そうな話ではあるけど・・・

これについては『サイキックの研究と分析』シリーズの『ミクロの世界に着目できるか？』の項でも書いている。

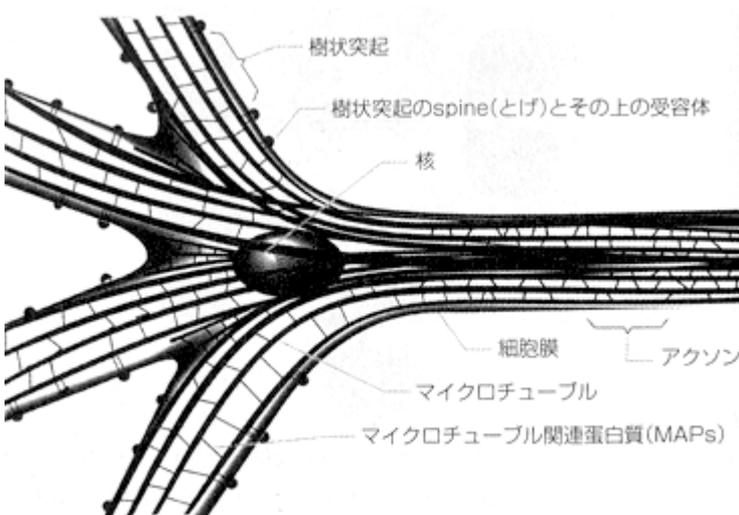
[リンク：■サイキックの研究と分析(17) ～ミクロの世界に着目できるか？～]

### ■ ペンローズの「量子脳理論」

さらに、ロジャー・ペンローズの「量子脳理論」についてが重要である。

これは「脳細胞が素粒子と繋がってるのなら、我々の意識も素粒子に繋がっているのでは？」という仮説に近いものであり、

脳細胞にある「マイクロチューブル（微小管）」が量子の性質を持つため、意識と量子は関係しているというものだった。



著書『ペンローズの“量子脳”理論』より引用、ニューロンの中央部分の概念図

[リンク：量子脳理論 - Wikipedia]

量子脳理論はペンローズが提唱したものというより、昔から提唱していた人達がいて、ペンローズはシュワート・ハメロフと共同で独自のアプローチをしている立場になる。ペンローズ達は「客観的収縮論」というものを提唱していて、それを元にした量子脳理論が成立すると考えられている。これを詳しく説明するとなかなか難しい。以下でも説明しているが・・・

[リンク：■サイキックの研究と分析(12) ～「量子脳理論」というもの～]

つまり、重要なのはアカデミズムの界限でも有名な物理学者であるペンローズが、「意識の問題に量子力学的な性質が深く関わっている」系の考え方を採用していることである。これはニューロロジー的にもとても心強い。

それから、量子力学や素粒子の振る舞いが意識と関係しているということは、それらミクロの存在をどれほど意識できるかが重要になってくる。

ちなみに、『サイキックの研究と分析』の以下の記事では、さらにサイキックや魔術の観点から「ミクロ知覚の方法」についてを書いているので、そちらも参考にしてもらいたい。

[リンク：■サイキックの研究と分析(18) ～「ミクロ知覚」の方法いろいろ～]

## ■ 「無」のコツはミクロのイメージ？

ミクロを意識する話は、前回の主題であった「止観」のコツにも通じた話になってくる。

「止観」の瞑想において、まずは「止（サマタ）」や「エポケー」から入らなければならないことを前回説明した。

これはつまり「何も考えない」状態になるということであり、完全な「無」の状態になれと言ってるのと同義である。

「完全に何も考えない」ということを、やってみてできる人間はどれほどいるだろうか？

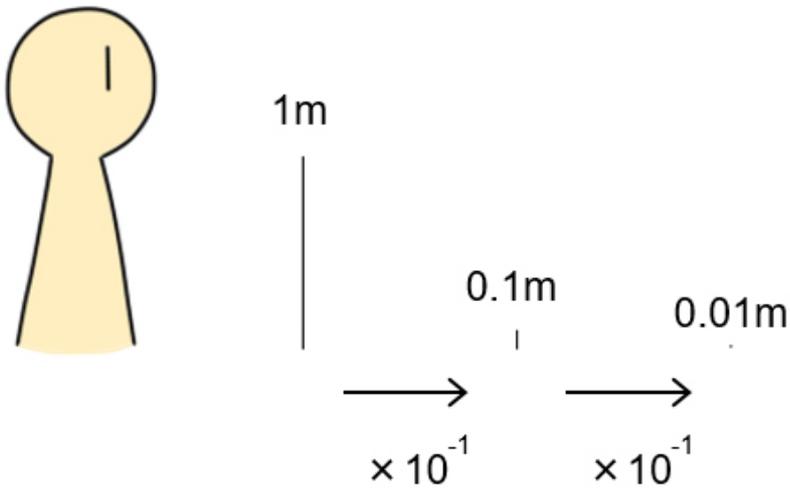
・・・思うに、ほとんど人間にとっては、それができれば苦労はしないだろう・・・

しかし、コツとして言えるものがある。

それは「ミクロ」をイメージしてみることである。



1~2m



人間の身体は1m~2mなので、その10のマイナス1乗（10分の1）を15回以上続ければ素粒子に辿りつくってことになる・・・

それをイメージしようとしてみたらどうなるだろうか？

そうすると思考が止まる領域に近づくし、

ミクロをイメージすることはそれと同義なのではないだろうか？

そんな感じで、ミクロや素粒子についての理解を深めることで、ニューロロジー的な理解を深めることができるし、変換人型ゲシュタルトの認識もできるようになってくるのである。

## 24. 量子力学における「重ね合わせ」の原理について

量子力学に「重ね合わせの原理」というものがあることを知っているだろうか？

これはニューロロジック的にも大事だし、

『等化』と『次元観察子 $\psi$ 3』の理解にも繋がるので、

ちゃんと説明しておこうと思う。

量子力学における「重ね合わせ」を、

ちゃんと数学的に厳密にやると数式が出てきて、

「状態ベクトルの線形結合」とかいうワードが出てきて難しそうだけど・・・

[リンク：重ね合わせ - Wikipedia]

「シュレーディンガーの猫」による例え話が有名である。

[リンク：シュレーディンガーの猫 - Wikipedia]

「シュレーディンガー猫」は、オーストリアの物理学者エルヴィン・シュレーディンガーが発表したもので、猫を使った思考実験とされている。

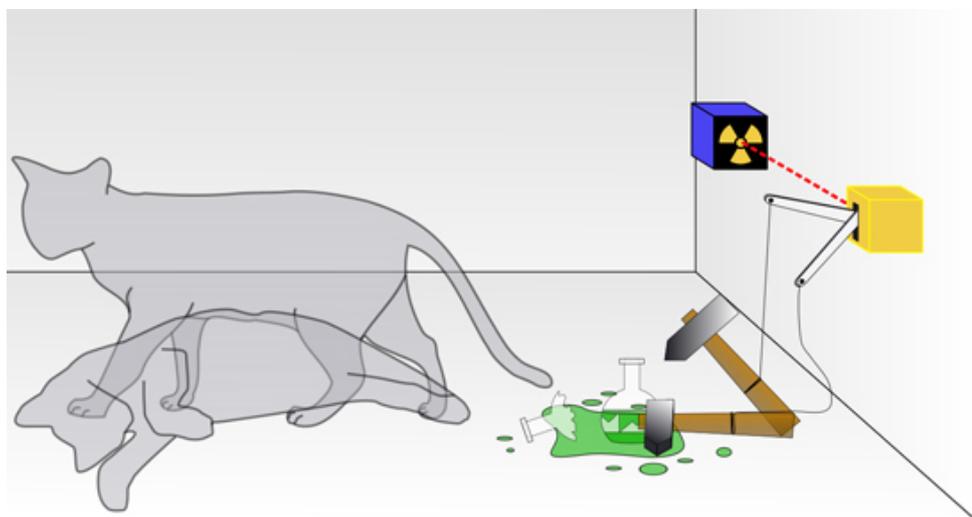
まず、量子力学に基づいて猫の生死を決める特殊な装置を仮想する。

量子力学的に原子の放射性崩壊確率が 50%の状態のものを用意して、

原子崩壊を検知すると電気が流れて毒ガスによって猫が殺される、

そんなかわいそうな装置をなんとかして作ったとしよう。

(あくまで思考実験である)



そうすると・・・猫は観測するまで生きてる状態と死んでる状態を同時に持っている・・・という、よく分からない状況になる。

これが「シュレーディンガー猫」である。

この話は「量子力学の確率解釈が誤っていること」を説明するためにシュレーディンガーが用いたものである。

したがって、物理学者にとっても解釈の困難な事象であり、その解決のためにコペンハーゲン解釈や他世界解釈など、さまざまな解釈が生まれたらしい。

さて、話が少しそれたが・・・

要するに「猫は観測するまで生きてる状態と死んでる状態を同時に持っている」という事象において、**生きてる状態と死んでる状態の「重ね合わせ」**が起きていることが重要である。

「重ね合わせ」については『サイキックの研究と分析』シリーズでもちょっと説明した。

[リンク：■サイキックの研究と分析(7) ～コペンハーゲン解釈と重ね合わせ状態～]

あと、「重ね合わせ」の物理現象が実際に起きている「量子コンピューター」についても説明した。

[リンク：■サイキックの研究と分析(11) ～量子コンピューターについて～]

つまり、「二つの状態の重ね合わせ」が実際に起きているのは量子力学的に確認されており、それをどのように認識していくかがニューロロジー的に重要となる。

## ■ 「等化」と「重ね合わせ」

そして、量子力学的な「重ね合わせ」はニューロロジーの『等化』においても重要な概念となっている。

実は、ニューロロジー的に「『負荷』と『反映』を対称的に見る視座に行く」と、

「『負荷』と『反映』を重ね合わせ状態としてどっちもあり得る視座に行く」の二つは、ほとんど同義なのである。

つまり、『等化』と「重ね合わせ」はやることがほぼ一緒ということである。

さて、スピリチュアルや引き寄せの法則の界限でも、量子力学について出てくるのがよくある。

[書籍：足立育朗『波動の法則』(2007) ナチュラルスピリット ]

[書籍：村松大輔『時間と空間を操る「量子力学的」習慣術』(2021) サンマーク出版 ]

さらにはそれによるアセンション(次元上昇)を目指す人もいる。

そこにはちゃんとやれば上手くいく構造があるので、注目するのは間違いではない。

確かに、「重ね合わせ」の視点を得ることによって、次元上昇することが可能ではあるのだが・・・  
量子力学はスピリチュアル的にも重要とはいえ、あんまり雑に扱って欲しくないジャンルでもあるので・・・

ノーソロジーはそれをもっと厳密にやりたい立場である。

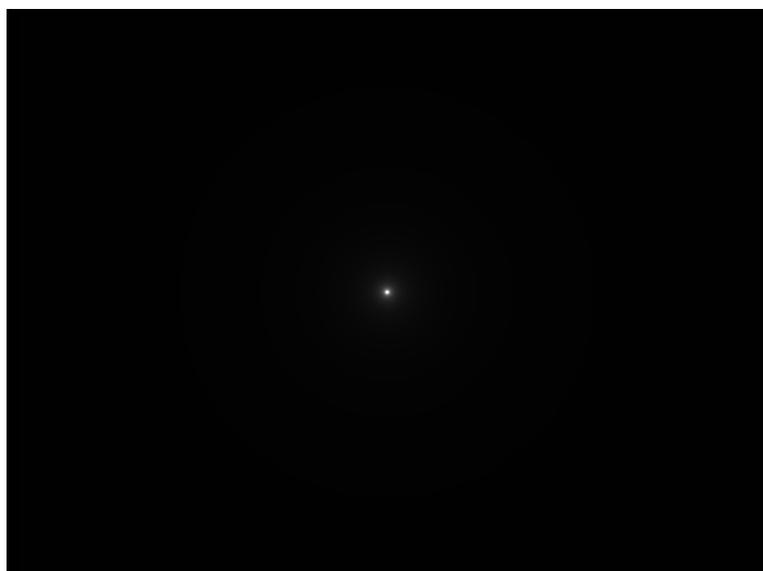
### ■ ミクロとマクロを重ね合わせは可能か？

「重ね合わせ」と『次元観察子 $\psi 3$ 』の話をさらに深めていくと、  
 $\psi 3$ は $\psi 1$ （ミクロ）と $\psi 2$ （マクロ）を等化しているので・・・

「ミクロ」と「マクロ」の「重ね合わせ」をすることになる。

前々回の「止観」でやったような

「点をひたすら観る」とか「りんごをひたすら観る」ワークを思い出そう。



これをずっと観ていて、

「知覚正面」が見えるほどにまで成功したら、

「ミクロ」と「マクロ」はどちらも決まっていない「重ね合わせ」の状態になり、二つの違いは消失する・・・とも言えるだろう。

「距離」や「大きさ」の概念も消失するから、観ている光景が「知覚正面」となる。

さらには、 $\psi_1$ と $\psi_2$ は「空間」と「時間」にも対応しているので・・・

「空間」と「時間」がどちらも決まっていない「重ね合わせ」の状態になると、「時間」と「空間」の違いも消失するから、普段意識しているような「直線的な時間の感覚」も消失するんじゃないだろうか？

ヌーソロジーではその時に立ち上がる新しい時間間隔を、

アンリ・ベルクソンの哲学を参照して「持続」と呼んでいる。

以上のように、量子力学における「重ね合わせの原理」と、

ヌーソロジーの『等化』の関係が分かってくると、

変換人型ゲシュタルトをより深めていくことができる。

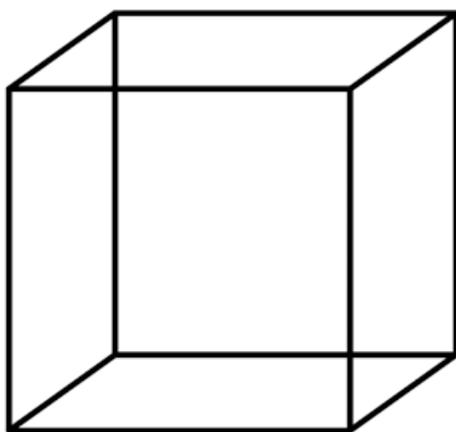
## 25. 能動的に空間を見る

『次元観察子 $\psi$ 3』を認識していくには、  
一種の「能動性」が必要になるため、  
「能動的に空間を見る」ことが鍵になるだろう。

・・・と言っても、それだけでは分かりにくいと思うので、  
便利なツールを紹介しつつ説明する。

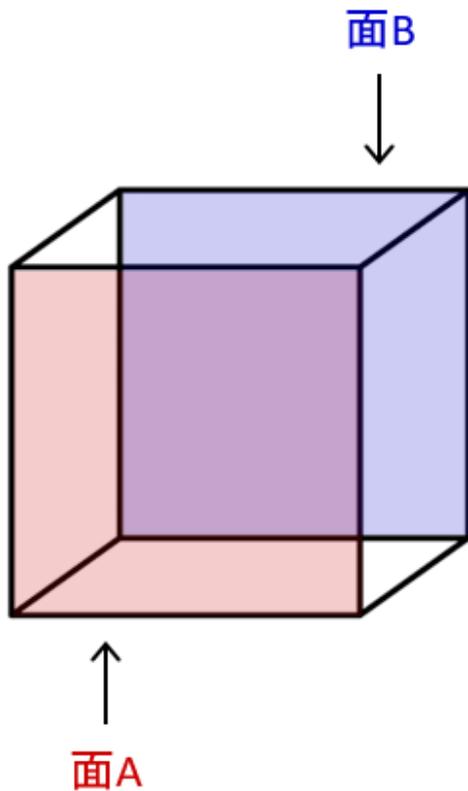
### ■ 「ネッカーの立方体」について

「ネッカーの立法体」と呼ばれるものがある。



これはスイスのルイス・アルバート・ネッカーという人物が考案したので  
そんな名前がついているが、どういう図形かなんとなく分かるだろうか？

図形の左下の面を面A、右上の面を面Bとすると・・・



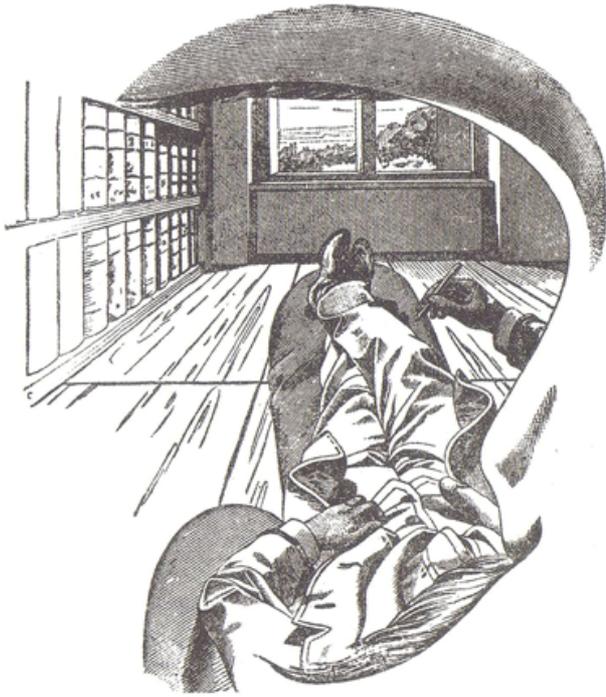
面 A が手前にあって面 B が奥にあるのか、  
それとも、**面 A が手前にあって、面 B が奥にある**のかが決まっていなくて分からない。  
そんな図形が「ネッカーの立法体」である。

これはヌーソロジーの『等化』や『次元観察子 $\psi$ 3』を理解するのもにも使えるわけだが、  
そこで「3次元」と「4次元」の話が関係してくるため、その話もしていこう。

### ■ ネッカーの立方体と4次元の関係

我々はこの世界を「3次元空間」として捉えているが、  
実は**3次元目の軸（z軸・奥行き方向の軸）**に関しては直接見ることができないのが分かるだろうか？

なんとなく3次元を生きているから奥行き方向の軸もあるだろうと思えるけど、  
実際に我々が観ている光景は「エルンスト・マッハの描いた絵」のように平たいものなので、  
3次元目の方向を直接認識しているわけではない。



そして、どうやってそれを認識しているかという・・・実は4次元からの視点によって想像しているのである。

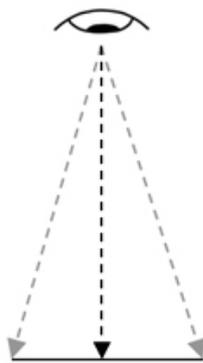
3次元の空間を俯瞰して捉えるためには、一つ上の4次元からの視点が必要になるという原理がある。これは「観察する視点は一つ上次元」の法則からも言うことができる。

～1次元～



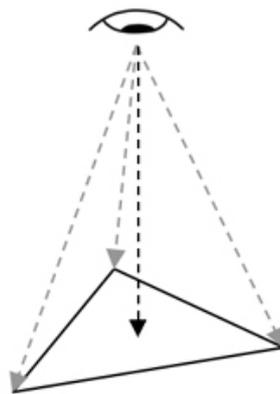
点を観察

～2次元～



線を観察

～3次元～



面を観察

～4次元～



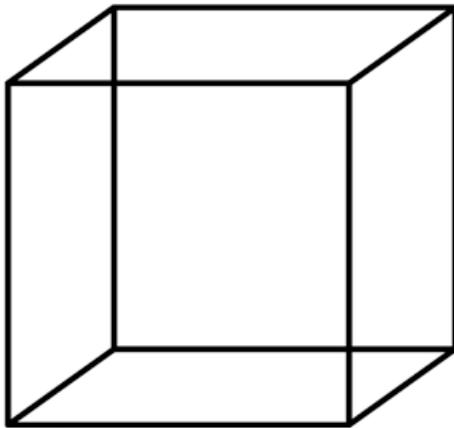
立体を観察

また、先ほどの「ネッカーの立法体」も、

面Aと面Bの関係が曖昧ということは、3次元目の奥行き軸が曖昧ということにもなる。

我々が空間を捉える際も、まぎらわしい形をしたものを見た場合は4次元の意識から想像を働かせなければならず、それが無い場合はどれが手前にあってどれが奥にあるのか分からなくなってくる。

つまり、ネッカーの立法体において、面 A を手前として 3 次元をイメージするか、面 B を手前として 3 次元をイメージするかは、4 次元の意識によってなされているのである。



そんなことを考えつつ、

面 A を手前とするか、面 B を手前とするか、どちらも「重ね合わせ」のようにアリだとした時・・・  
「知覚正面」も分かるようになるし、  
『等化』も分かってくるようになるはずである。

### ■ 「キットカット実験」について

次に、ニューロロジーで有名な「キットカット実験」について説明する。

これは正確には『次元観察子 $\psi$ 5』に対応する事象を作り出した実験だが、  
『次元観察子 $\psi$ 3』の意識や「能動的に空間を見る」意識を開くのにも役立つものである。

元々は、ニューロロジーを理解するために大阪のとある人物が、  
手作りの装置を作って、それを半田広宣さんが取り上げたことから始まった。

その装置では、外から見るとキットカット缶が人を中心に周っているように見えるが、本人から見るとキットカット缶は不動の状態ですべて回って見えるようになっている。

Twitter で「キットカット実験」のワードで検索すれば動画が見つかる。

[リンク : [キットカット実験 - Twitter 検索 / Twitter](#)]

これを自分 (Raimu) がアレンジしたものが「KitCat 実験」である。  
先の実験の内容を模倣して、Unity 上で動かして再現した。

『[視点変換3Dルーム](#)』の4番目の部屋にあり、

『[変換人型ゲシュタルトとは？（後編）](#)』の項でも載せたものである。

#### 他者視点（客観）



〔アニメーション：自身が自転していて、缶がそれを中心に公転している〕

#### 自己視点（主観）



〔アニメーション：自身が見ている缶の公転だが、缶が自転してるようにも見える〕

上記の缶の様子を見て、

「自分が缶の周りを周っている」と思うようにしてみよう。

すると、そうした意識は反転認識のための能動的な意識となってくる。

また、こうした意識は客観からではなく主観を先手にして生まれてくることも重要である。

## ■ ミクロイメージのおさらい

ヌーソロジーでは主観性を大事としながらも、  
「ミクロとマクロの等化」や、  
「止観」や「重ね合わせの原理」といったことも大事ということになる。

これらの作業を能動的に複合してみよう。

まずは『変換人型ゲシュタルトの基礎』の項でやったようにミクロを意識してから・・・



さらに「止観」の要領を踏まえて「エポケー」をしつつ・・・  
以下の「KitCat 実験」のトレーニングをやってみるとどうなるだろうか？

[Youtube 動画：視点変換 3D ルームでの KitCat 缶回転 (KitCat 実験)]

そうすることで『主体』を発見できるだろうか？  
また、『主体』を意識した上でこれをやったらどうなるだろうか？

ヌーソロジーを真面目に理解したい人は、  
そうしたことを試して行って、能動的に空間を観て欲しい。

## 26. 光速度イメージが使えるか？

『人間の外面』を知覚するにおいて、  
個人的に(Raimu が)すぐしっくり来たやり方がある。

それは「光速度をイメージする」やり方である。

これは有名なので書籍『2013：人類が神を見る日』にも書かれているため、  
詳しく説明していこう。

### ■ ローレンツ収縮について

まず、「ローレンツ収縮」という現象がある。

これはヘンドリック・ローレンツとジョージ・フィッツジェラルドが発見したとされるもので、ちゃんと説明すると長くなるのだが・・・

物体が光速度に近づくにつれて、物体が進んでいる方向に長さの収縮するという現象である。  
式にすると以下のようなになる。

$$l = l_0 \sqrt{1 - \frac{v^2}{c^2}}$$

※ $l$  は物体の長さ。 $v$  が速度。 $c$  が光速度

「 $v$  の速度で動いてるものは、その物体の長さに対して[0.9999……]が掛け算されるようにちょっとだけ縮みますよ」

という式である。分かるだろうか？

光速度 ( $c$ ) の大きさは約 30 万 km/s と、俗に「1 秒間に地球を 7 周半回ることができる速さ」と言われるぐらい絶大なものであるため、

ローレンツ収縮によって縮む長さも微々たるものなのだが、

何故、物体が縮むなんて突飛なことが起きるのだろうか？

これは 1887 年の実験で発見された「光速度不変の原理」から始まり、

最終的にはかの有名なアルベルト・アインシュタインの特殊相対性理論によってまとめられるようになるのだが・・・

まあ要するに、アインシュタインが正確な解明をしたぐらい、物理的に正しいとされている現象である。

## ■ ローレンツ収縮によるタキオン空間入り

物体はローレンツ収縮によって光速に近づくほど長さが縮んでいき、光速に達したときには0の大きさになる。

式にすると、以下のようなのが分かるだろうか？

$$\text{長さ} = \text{静止時の長さ} \times \sqrt{1 - \frac{\text{約}299792457^2}{\text{約}299792458^2}}$$

※速度が光速に限りなく近くなると・・・ルートの中の数値も0にすごく近くなり、物体の長さも小さくなる

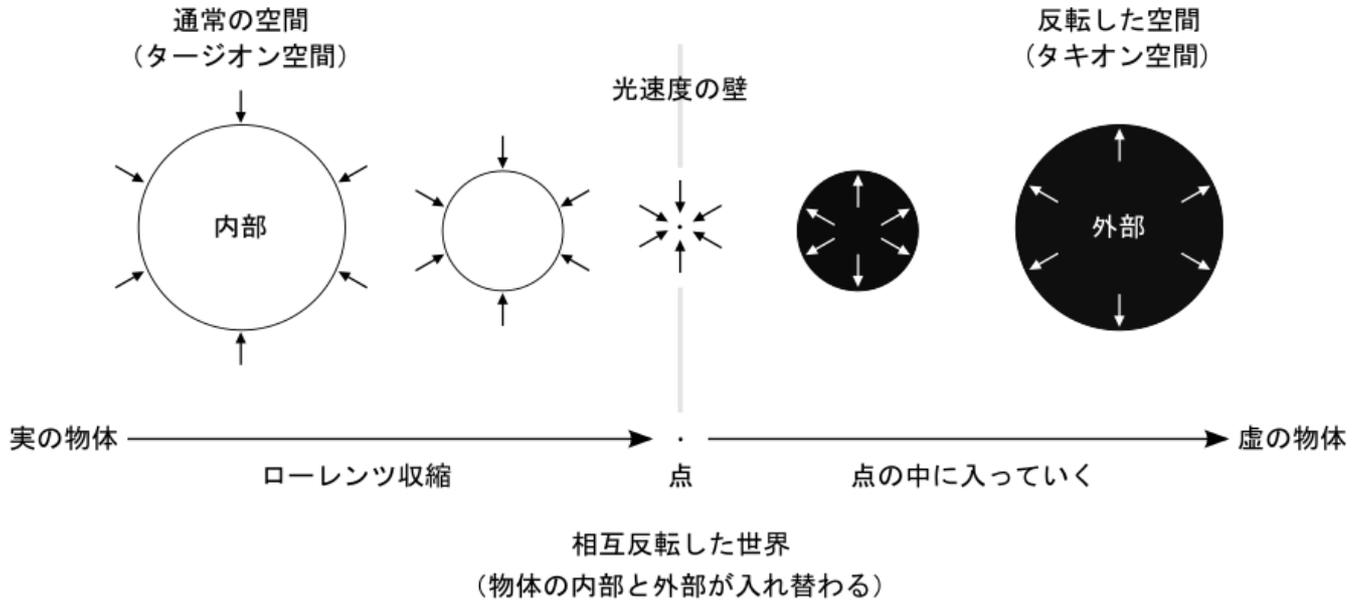
さらに0の大きさから突き抜けると、今度はルートの中の数値がマイナスになる。

ルートの数値がマイナスになるということは**虚数**になるということである。

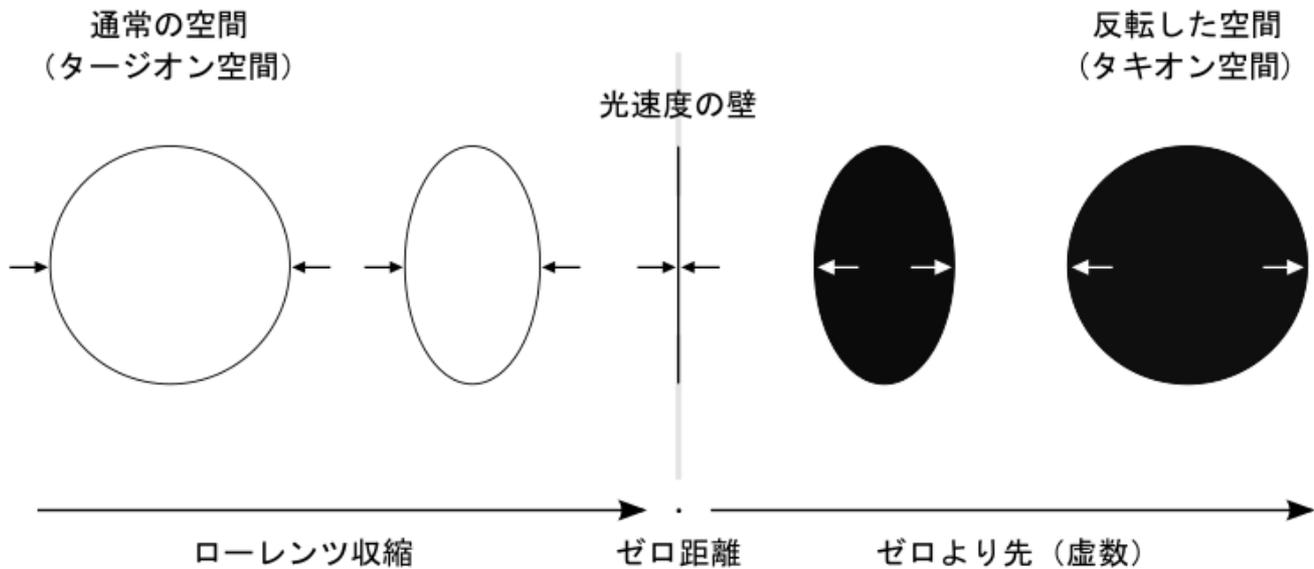
そして、書籍『人類が神を見る日』によると、

それが起きると空間が反転して「タキオン空間」と呼ばれるものに移行するらしい。

書籍『人類が神を見る日』に載っているイメージだと以下のようなかんじになっている。



ローレンツ収縮は進行方向に縮むことを考えると、以下のイメージもありだと思ふ。



さて、そんな「光速度の到達」はどんな感じでイメージしていけば良いか？  
 Youtube で近いことをやっている動画もあるので、それを見ても良いと思う。

[Youtube 動画 : Captain Einstein]

[Youtube 動画 : 【光速】体験 光速で移動するとどうなるのか]

こうしてできた「反転した空間」は、  
 実はヌーソロジー的には『人間の外面』にもなっていくため、  
 光速度のイメージは『次元観察子ψ3』の発見にも有効ということになる。

### ■ 虚数の空間

先ほども説明した通り、光速度を突破すると、  
 ローレンツ収縮の式にあるルートの中の値がマイナスになり、その時の数値は虚数になる。

$$\text{長さ} = \text{静止時の長さ} \times \sqrt{1 - \frac{\text{約}299792459^2}{\text{約}299792458^2}}$$

微小のマイナス値⇒虚数

この「虚数となった距離」が大事であり、  
これによって光速は『人間の外面』へとつながるようになる。

ニューロロジーによると、これは「タキオン粒子」というものとも関係しているらしく、  
半田広宣さん自身も、タキオンについてのイメージを深めていく中で「反転」のイメージが出来たと、書籍『2013：人類が神を見る日』に書かれている。

反転……。冒頭で書いたように、それは当時、わたしが常々イメージしようとしていたタキオン領域の時空間的特性であった。

(中略)

わたしのタキオン空間に対するイメージはローレンツ効果の延長線上にあったものだ。ローレンツ変換式によれば、物体が光速に達したときにはその長さはゼロとなる。これは言い換えれば物体が消滅するという意味に等しい。では、光速以上になると一体、どうなるというのだろうか？ 妙なたとえばかもしれないが、わたしは「点の内部に入る」というイメージでタキオン空間のビジョンを描こうとしていた

そして、冥王星のオコットによると、こうした反転のイメージは変換人型ゲシュタルトの第一プログラムとなっているらしい。

「そうです。やっとお分かりになりましたね。あなたは超光速の世界のイメージについていくつかのモデルを組み立てておられました。そして、実空間と虚空間の関係性を対称的に見出す意識の位置を発見されたのです。そのことによってシリウスのハーベスト・ビーコンの焦点化が容易になったというわけです。あなたがたがタキオンと呼んでいるものは、地球人の意識の方向性に反転作用を作り出す力だと考えて下さい。意識の方向の反転によって生み出されてくる新しい形態概念を確実化させることが、変換人型ゲシュタルトの第一プログラムです」

「つまり、タキオン空間とは、僕たちの内部、外部という空間認識を反転させた世界と考えてよいのですね」

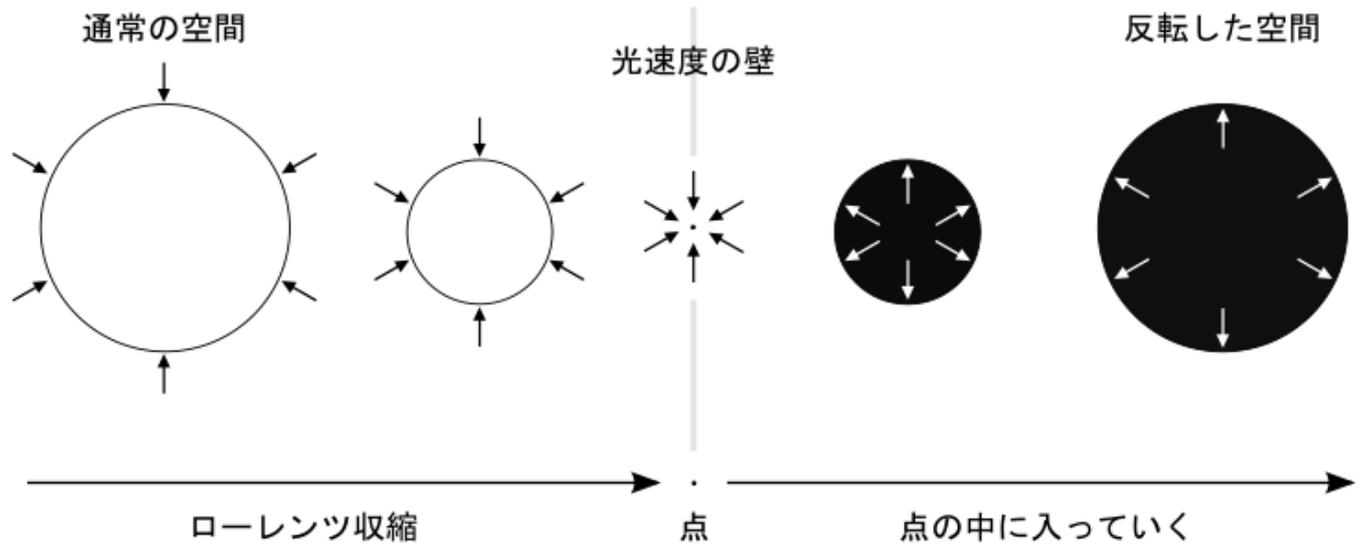
「はい、現段階ではそのように考えられて結構です。人間の意識の方向性の反転によって、変換人の意識が生み出されてきます」

それから、ニューロロジーでは「素粒子は光速を越えた世界にある」といったことが言われているため、物体の光速到達の話はミクロの世界や素粒子の構造に繋がってくるらしい。

### ■ 「次元観察子 $\psi_3$ 」 との関係を整理してみる

さて、これまで習ったことを踏まえつつ、  
今回説明した光速イメージを重ねていこう。

空間は以下のように反転することができるとして・・・



反転した空間を『人間の外面』としよう。

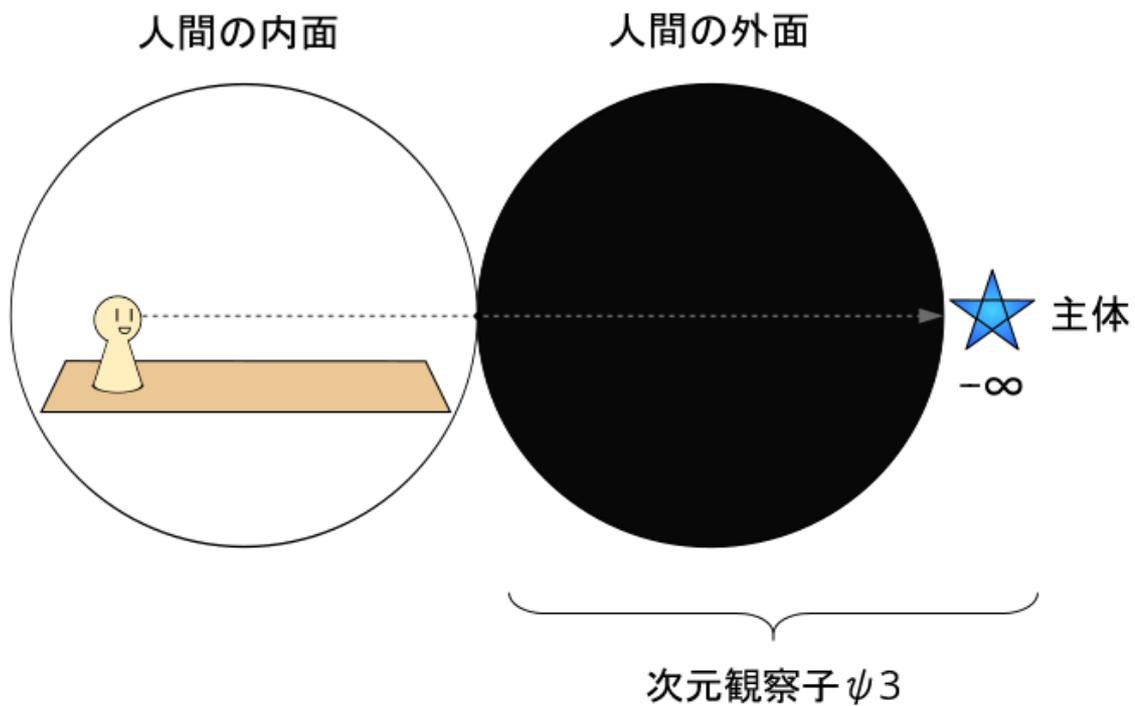


また、『人間の外面』を前側の位置におき、  
そこにある無限遠点 ( $-\infty$ ) に『主体』があるとしよう。

それから、『主体』は以下のシンボルで表すとしよう。

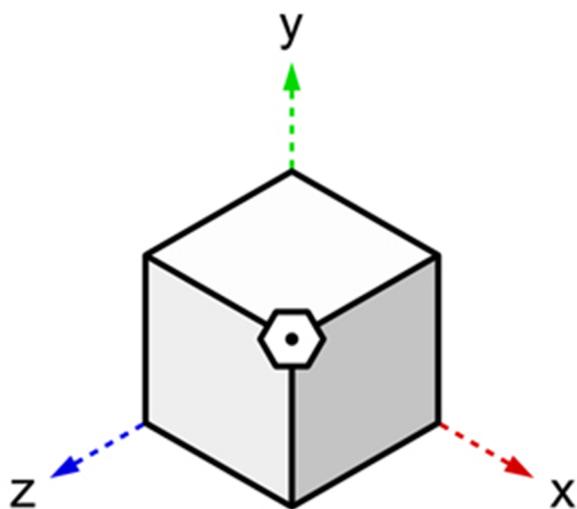


それらを整理して図示すると以下のようなになる。



■ 「知覚正面」と重ねてみる

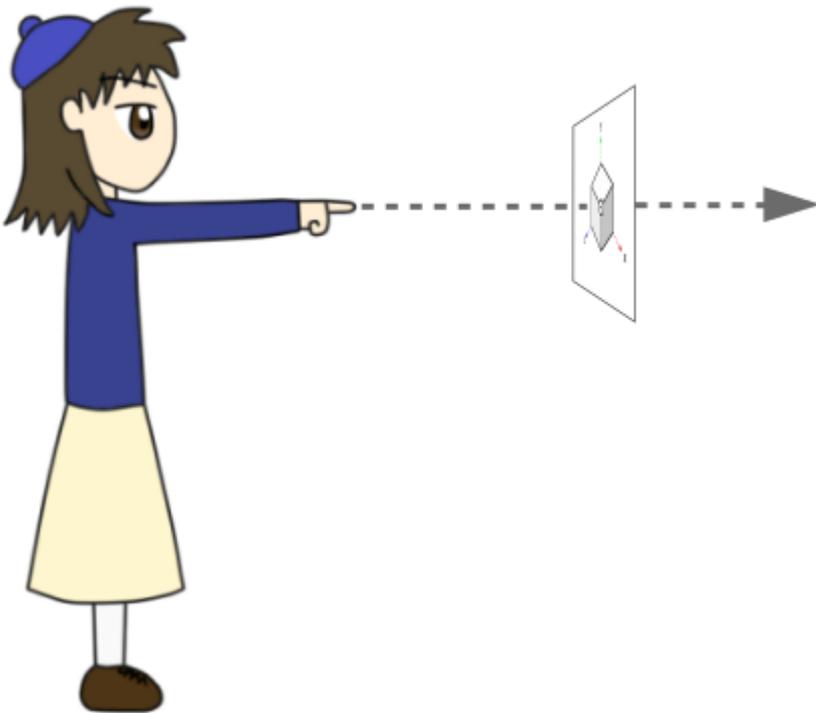
さらに、これと「奥行き」のイメージを重ねてみよう。



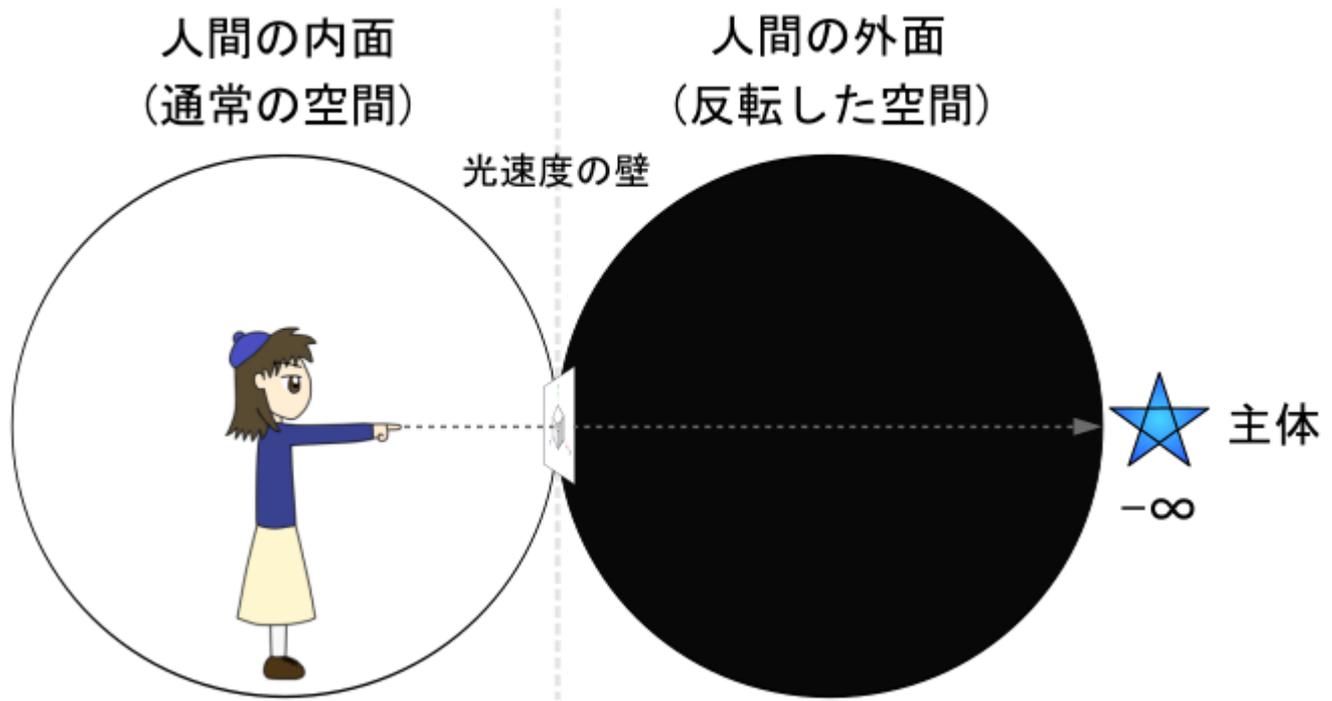
(4次元認識のための図)



(ヌーソロジーたん正面図)



(ヌーソロジーたん+4次元認識のための図)

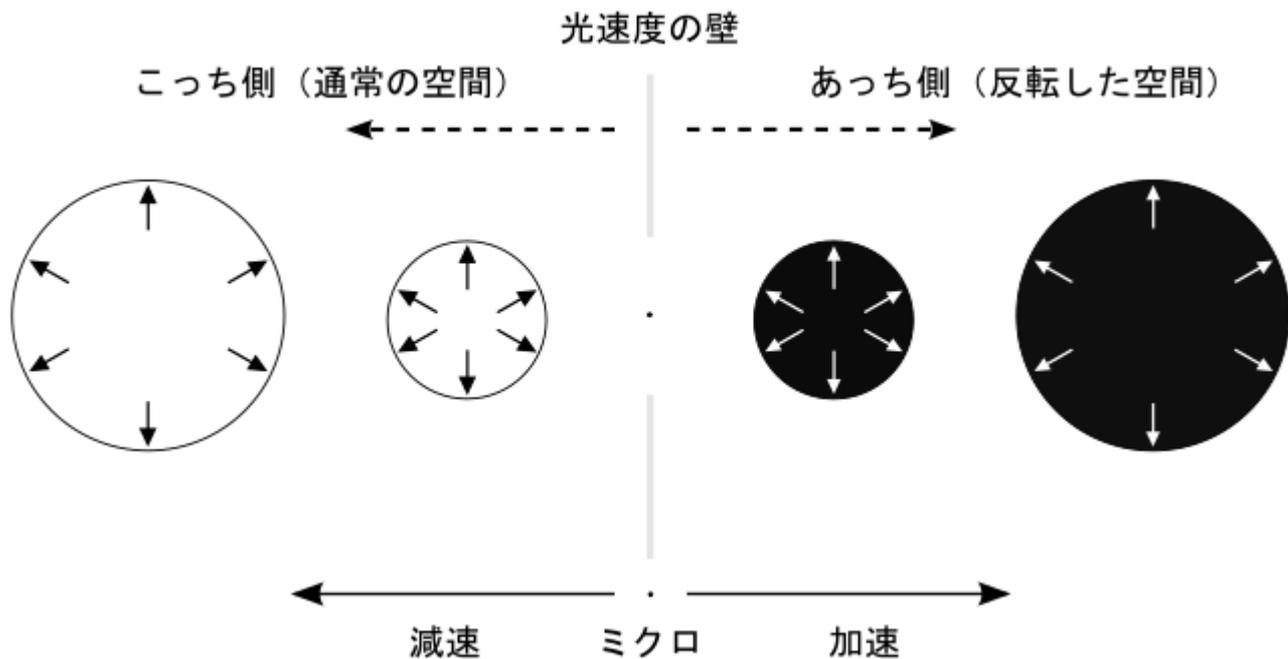


(ヌーソロジーたん+4次元認識のための図+反転した空間+主体)

以上のようなことをすることによって『人間の外面』の認識が深まらないだろうか？

自身の「知覚正面」においてこうしたことをやってみて欲しい。

加えて、光速度状態のもの大きさはマイクロになっていて、その手前と奥で、あっち側（人間の外面）とこっち側（人間の内面）の境界があることも理解しておこう。



この境界が分かるようになると、  
「あっち側」を知覚する際にも心強くなってくる。

### ■ 時間を反転させると・・・

難しい話になるが、もう一つ付け加えておこう。

ローレンツ収縮に繋がった話で、相対性理論における「時間の遅れ」の現象があり、  
物体が光速に達した時、時間の進み方もゼロになり、  
さらにそれを超えた場合は時間の反転も起きるようになる。

光速度の突破によって起きる時間の反転を応用するとどうなるのか？

そうすると、ミンコフスキー時空と呼ばれる4次元時空から4次元空間への移行が可能となるのである。

これに関しては、数学的に説明が煩雑になるので・・・

気になる人は、半田広宣さんが書いた『時間と別れるための50の方法』シリーズの以下を読んで欲しい。

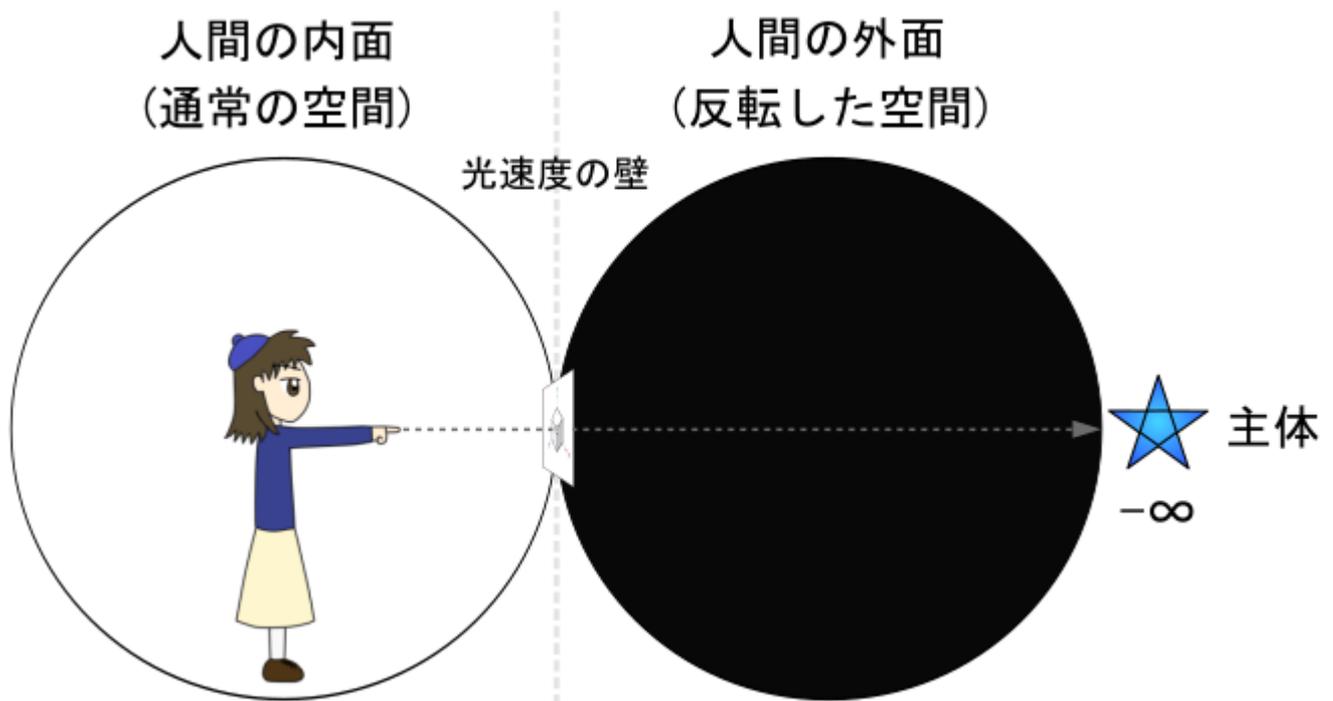
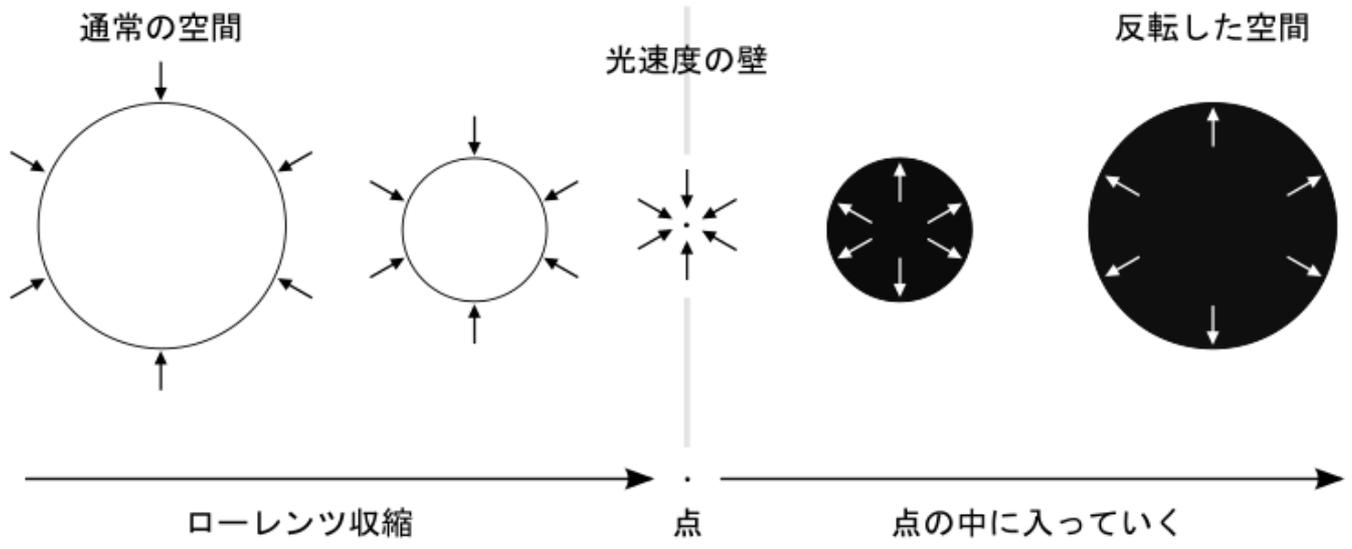
[リンク：時間と別れるための50の方法 (17) - cave syndrome]

[リンク：時間と別れるための50の方法 (18) - cave syndrome]

以上。

今回は説明が長くなってしまったが・・・

「光速度イメージ」と「奥行き方向」を上手いこと重ねて、  
『人間の外面』を理解していこう。



## 27. 右脳と速読の話

前回は「光速度イメージ」の話をした。

個人的に自分がこれを理解しやすいと思ったのは

「右脳」と絡んでいると思ったからである。

右脳は人間が持つ脳の右の部分で、それに対する左の部分は「左脳」と呼ばれている。



左脳が「言語処理力、計算力、分析力、論理的思考力」などの能力を持ち、右脳が「空間把握力、直観力、美的センス、芸術的創造力」などの能力を持つことは、脳科学の話で俗に普及して有名である。

また、左脳には「直列処理機能」があるのに対し、右脳には「並列処理機能」があって、高速処理に向いているとされている。

右脳的に特殊な高速処理は、突き詰めると光速処理にもなるのではないだろうか？

・・・みたいなことを漠然と考えたりもした。

そして、自分がニューロロジー以前に興味を持ったものの一つに「右脳速読」があるので、それについて書いていこう。

### ■ 速読の話

自分が速読に興味を持ったきっかけは、以下の書籍である。

〔書籍：七田眞『七田式成功脳をつくるスーパーリーディング』（2006）総合法令出版〕

この本はとても影響を受けたので、過去に内容のまとめをブログに書いたこともある。

〔リンク：「七田式成功脳をつくるスーパーリーディング」重要な所メモ〕

右脳速読についてちゃんと説明すると、書籍一冊分のボリュームになるようだが、実践的にやるべきことは簡潔にまとめることができる。

まずは以下の二点である。

- ・本の文字を映像としてとらえる
- ・映像として捉えた文字群から内容を理解する

そして、次に「目の動かし方」の話で。

「アイトレーニング」というワードがあるぐらい目の動かし方が大事になってくるが、最終的には「一目でページ全体を観るようにする」のが目標となる。

- ・目の焦点を調整して、立体的に見る（文字が3Dのように浮き上がってくるらしい）
- ・視野を広げる
- ・目をスムーズに動かす
- ・はじめは一行を一目に、三行を一目に、五行を一目で読み取れるように増やしていき、最終的にページ全体を一目で読み取れるようにする

観る時は視線の動きを最小限にするので、「一点を観るように全体を観る」ようにするのがコツである。

以上が右脳速読の要点である。なんとなくやり方は分かっただろうか？

実に高度そうな技術なわけだが・・・肝は「一点を観るように全体を観る」ように情報を捉えて読む所である。

これも、ニューソロジーの『次元観察子ψ3』の知覚で求められる「全体を観る」能力や、「知覚正面」を捉えることに通じているのではないだろうか？



さて、ちなみに先の本『七田式成功脳をつくるスーパーリーディング』は、右脳速読の感覚を鍛えに鍛えようと、「書店に行って良い本がある時、求める本の題名だけが光ってるように見える」とか「予知能力ま

でついでしまう」とか、ほとんどオカルト的なことまで書かれている。

そうした所もより一層、ニューソロジーと相性が良いかもしれない。

さらには、右脳を鍛えるために「[オレンジカード](#)」と呼ばれるものを使ったトレーニング方法も提唱されている。

これもニューソロジー的な知覚能力に通じているのだろうか？

ネットで検索するとそれに関する情報はたくさん出てくるので、

気になる人は調べてみると良いと思う。

あと、余談だけど、自分も大学時代に過集中的に右脳速読をやり込むことで、何となくできたような気がしたことがあったが、

それをやると脳があまりにも疲弊して、脳細胞がほとんど活動停止になったかのようになり、次の日の脳が使い物にならなくなった・・・みたいなことがあった。

なので、「速読は役立つものじゃないな」と理解して、今は普通に本を読んでいるか、無駄な箇所を読み飛ばす時や、本の内容の雰囲気全体を把握したい時に、右脳速読のスキルを多少使っている感じである。

## ■ 速読と他のジャンルの話

以上の速読は「一点を観るように全体を観る」能力が使われているが、

それを「文字認識」に限定する場合の技術と言えるかもしれない。

つまり、**空間全体認識能力を本に書いてある文字に限定すると速読技術になるわけである。**

もし、空間全体認識能力を身体を動かすことに使うとどうなるのだろうか？

もしかしたら何かしらの体術に応用できるかもしれない。

そうすると、元々は『次元観察子ψ3』の知覚に通じた一つの能力を、

文字認識に応用するか、体術に応用するかの違いで別々の技術になるということなのかもしれない。

そんな感じで、ψ3を応用したような技術について考えてみると面白いと思う。

## ■ 感性空間と思形空間の話

以上。「右脳」を使った技術の一種として「右脳速読」の話をした。

やはり「右脳」こそがニューソロジー理解の鍵を握っているのではないだろうか？

「右脳」は「空間把握力、直観力、美的センス、芸術的創造力」を司り、「左脳」は「言語処理力、計算力、分析力、論理的思考力」を司っているとされている。

それを踏まえると、「右脳」で捉えた空間はニューソロジー的には『感性空間』と言えるし、逆に「左脳」

で捉えたのが『思形空間』と言えそうである。

前者は『人間の外面の意識』と繋がるし、後者は『人間の内面の意識』と繋がる。

また、『感性空間』と『思形空間』は女性性と男性性にも関係しているため、それらと右脳と左脳の関係もニューロロジー的に奥が深そうである。

ニューロロジーはそんな感じで、二つの機能についてを両輪のように理解しつつ、普段使わなさそうな方（右脳）について意識していくわけである。

## 28. 等化は「無数化」の方向にある

ここまでの説明で『次元観察子 $\psi_3$ 』についてが分かっただろうか？  
分からないだろうか？

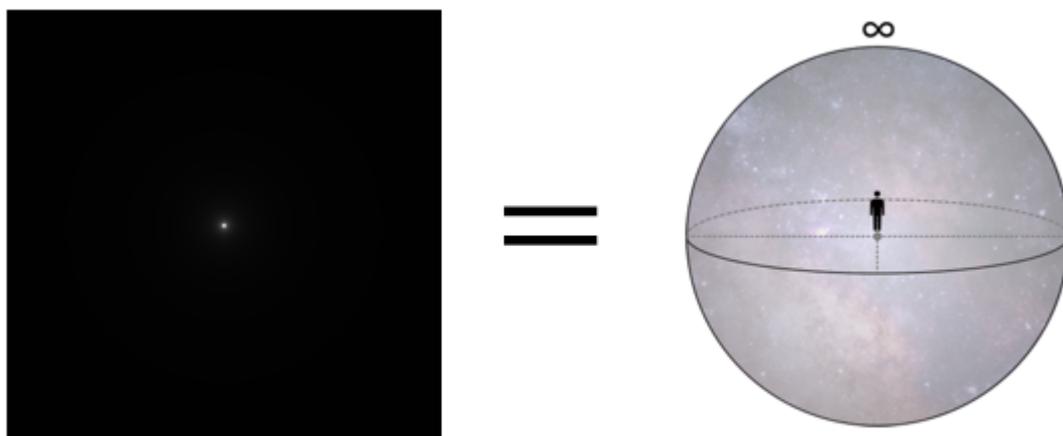
次元観察子 $\psi_1$ と次元観察子 $\psi_2$ の等化によって分かる次元観察子 $\psi_3$ は、  
等化を理解するためにも核心となる所である。

あらためて説明すると、

『等化』は「対称性が分かる」という意味であり、

$\psi_3$ においては「マイクロとマクロの対称性が分かる」ということになる。

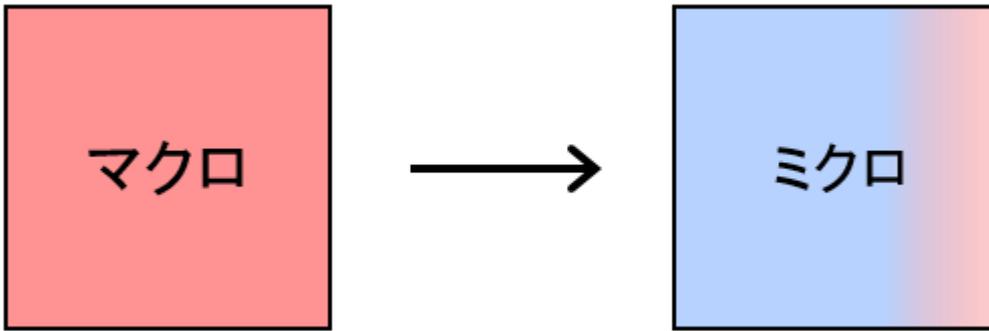
これを言い換えると「マイクロとマクロが入れ替え可能で同じようなものに見える」ということにもなる。



おなじもの？

したがって、等化が起きた時には、実は「マクロがマイクロのようになる」みたいな現象が起きるのである。

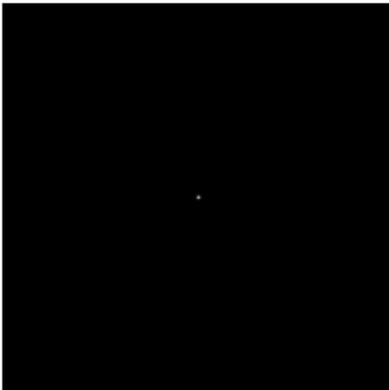
安易なイメージだと、マクロって概念に対してマイクロって概念がどんどん浸食して上書きされるイメージ？



(マクロは偶数系なので赤。ミクロは奇数系なので青のイメージ)

それから、ミクロは「一点」で、マクロは「全体」とほぼ同じ意味である。

一点

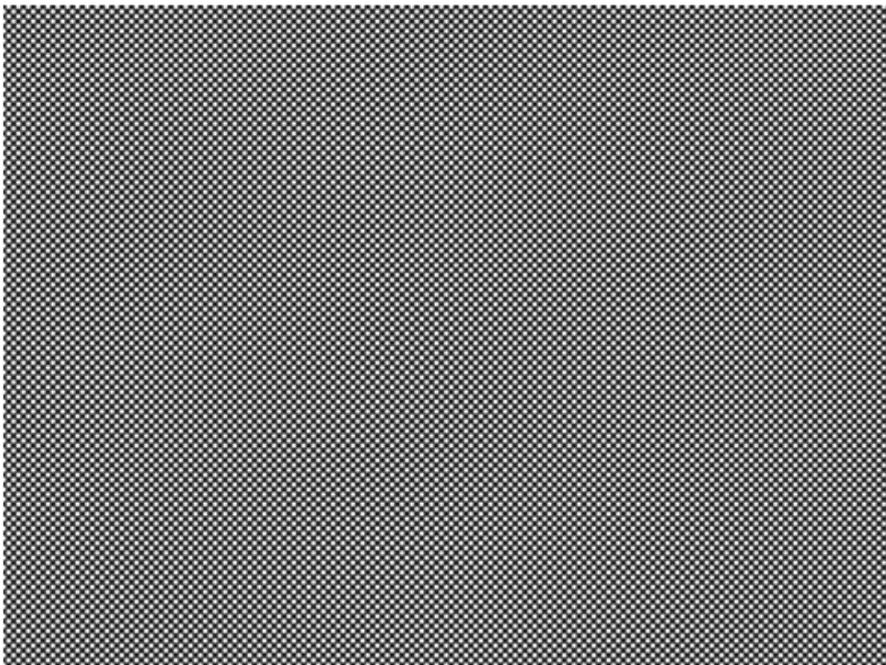
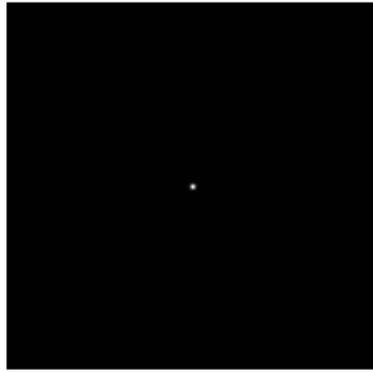


全体



そこで、ミクロとマクロが等化するとどうなるのか？

「全体（マクロ）」に対して「一点（ミクロ）」が無数に敷き詰められたような状態になるとも、言うことができる。



(上記の図は例えなので有限的な表現だが、もっと無限のミクロが空間全体にある感じ)

そして、実は『等化』は『負荷』側のものが無限のようにたくさんある状態になることと同義なのである。

今回の場合は「負荷⇒ミクロ」なため、ミクロがたくさんある状態である。

たくさんある状態になるということは「数かぎりなく多いことになる」という意味で「無数化」とも呼べる。

ミクロが「無数化」すると、マクロのような存在にもなり、「入れ替え可能で同じようなものに見える」こととも同義になってくる。

このように、等化は「無数化」の方向にあるという原理は、 $\psi_1 \sim \psi_2$  の等化だけでなく、 $\psi_3 \sim \psi_4$  の等化でも出てくるし、

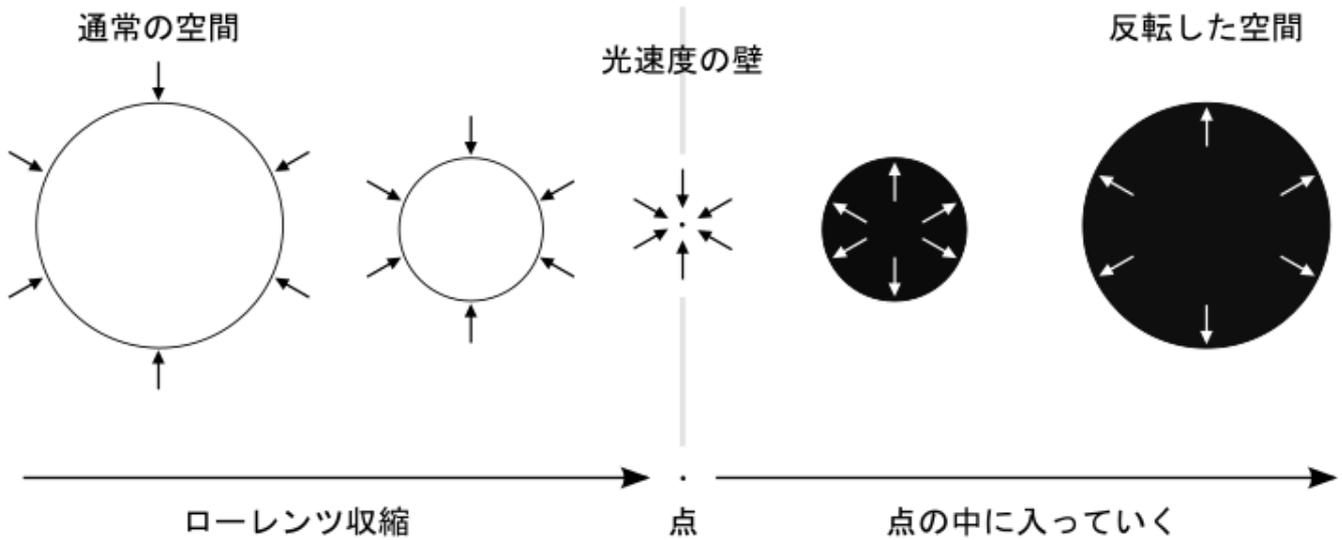
今後のニューロロジー学習でもずっと出てくるため、頭に入れておこう。

### ■ 光速度イメージと無数化

それから、どういう時に「ミクロの無数化によるマクロとの等化」の現象が起きるのか？

以前に「**光速度のイメージ**」についてを説明した。

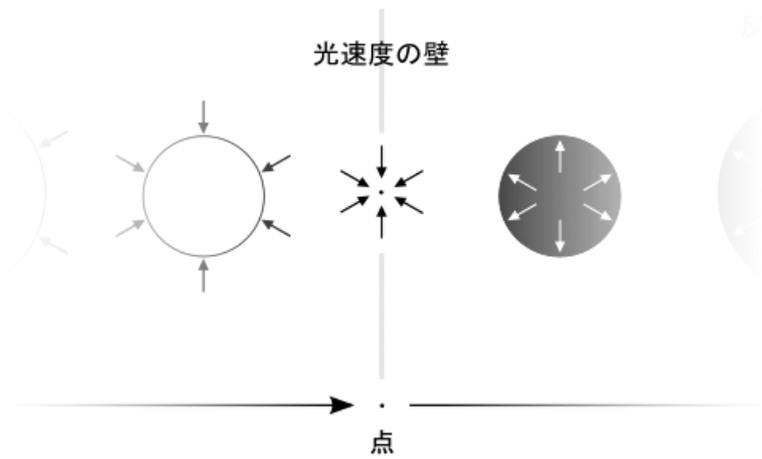
[リンク：■変換人型ゲシュタルト論(26) ～光速度イメージが使えるか？～]



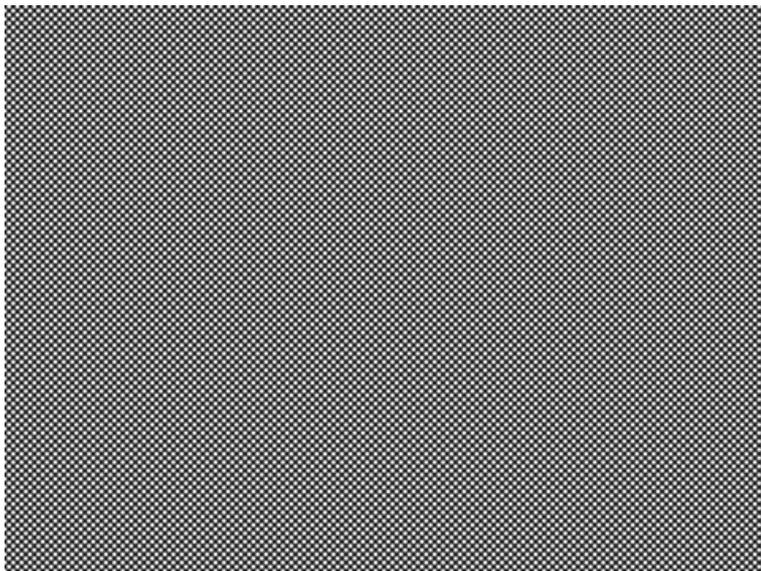
「光速度のイメージ」のように点の中に入ることができた時、そこから先に『人間の外面』があるわけだが、その臨界点は「**光速度の壁**」と一致して点になった時である。

その時の状態は、完全に「一点（ミクロ）＝全体（マクロ）」になっている状態なので・・・

実は「全体（マクロ）に対して一点（ミクロ）が無数に敷き詰められたような状態」とほとんど一致しているのである。



一=全？



全=一？

それらの関係が分かってくると、『人間の外面』についての理解がもっと深まってくると思う。

以上。「無数化」について説明した。

この「無数化」という発想は、次元観察子 $\psi_3$ と次元観察子 $\psi_4$ を等化する時にも出てくるので・・・『変換人型ゲシュタルト論』でこれからも出てくるものとして覚えておこう。

## 29. 「外面(前)」と「内面(後ろ)」のおさらい

今回はここまでの内容を総括しつつ、

『次元観察子 $\psi$ 3』の核心部分についてまとめておこう。

これまで説明した $\psi$ 3の知覚方法を列挙すると以下のようになる。

- ・ ミクロを先手として光景を観る
- ・ 一点を観るように全体を観る
- ・ ダグラス・E・ハーディングの「指差し実験」を使う
- ・ 「知覚正面」を平面として空間を観る
- ・ 「4次元を発見するための図」を使う
- ・ 「止観」のような瞑想をやってみる
- ・ 「エポケー（判断を留保）」をする
- ・ とにかく無心で目の前のものを「観る」
- ・ 極小の大きさのものとしてミクロを意識してみる
- ・ 「重ね合わせの原理」を捉えるように空間を観る
- ・ 「ネッカーの立方体」を使ってみる
- ・ 「KitKat 実験」の動画を使ってみる
- ・ 光速度をイメージする
- ・ 光速度のイメージと、知覚正面を重ねる
- ・ 右脳を鍛えて、右脳速読のようにやってみる
- ・ 「無数化」の発想を取り入れて、ミクロを無数化させる

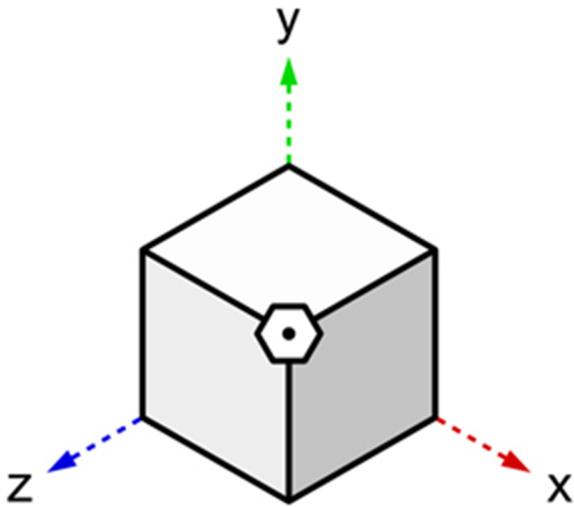
これらの実践によって得られる「前」の空間が『人間の外面』となり、

それが顕在化してくると『[変換人型ゲシュタルトとは？（前編）](#)』の項で説明した「内在が外面、外在が内面」の意味も分かってくる。

また、「主体の位置」と「無限遠点」が分かることで、以下の意味も分かってくるようになる。

- ※ 主体の位置は3次元空間の中には存在していない。
- ※ 無限遠点とは主体の位置が存在するところである。
- ※ 主体の位置と対象の位置とを結ぶ空間に人間の外面世界がある。

さらに、「知覚正面」がはっきり観えるようになると、その垂直方向にある「4次元目の軸」も分かるようになる。

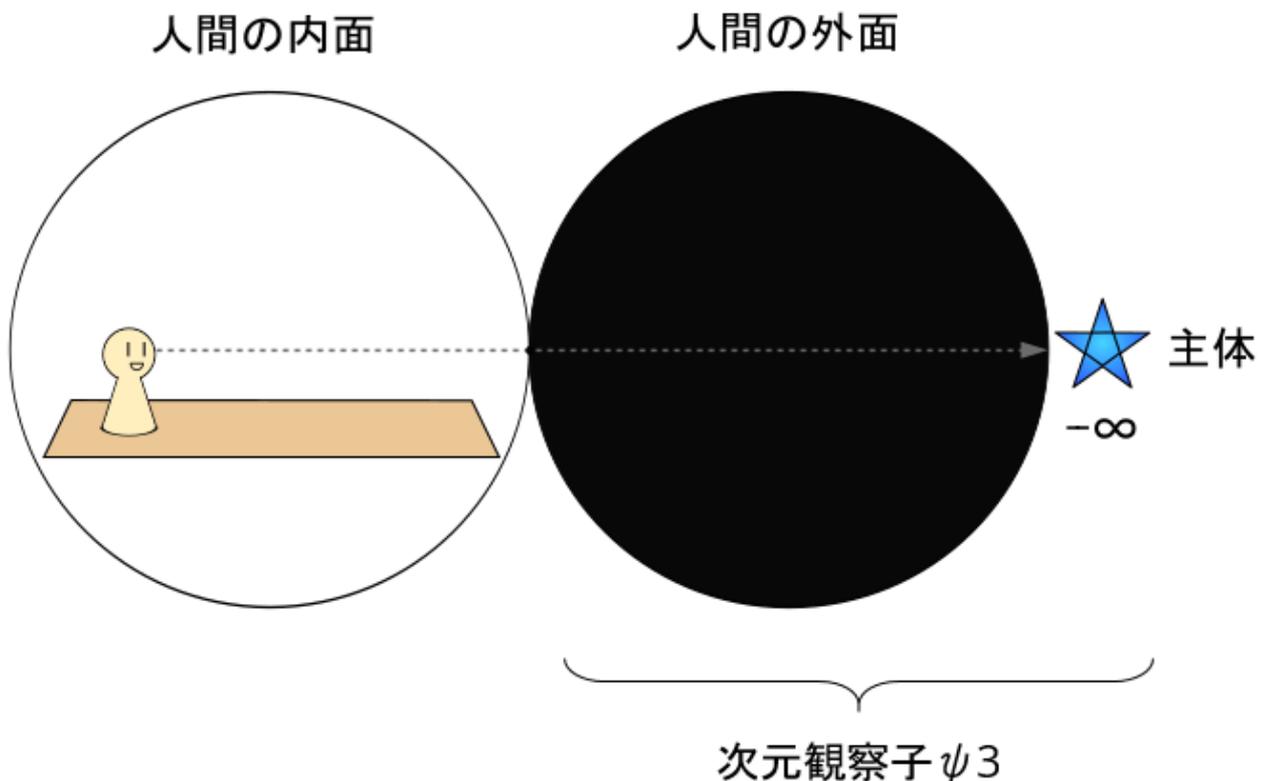


そして、4次元空間へ向かう一本の垂直の線のことをニューソロジー用語で『垂子』と呼ぶ。  
 これは次元観察子 $\psi_3$ へと繋がる垂直線でもあるため、 $\psi_3$ のある次元は『垂子次元』と呼ばれる。

■ 前側と後ろ側、外面と内面のおさらい

『垂子』が見えた状態で「前」にあるのが次元観察子 $\psi_3$ であり、  
 この時の「前」が『人間の外面』になっている。

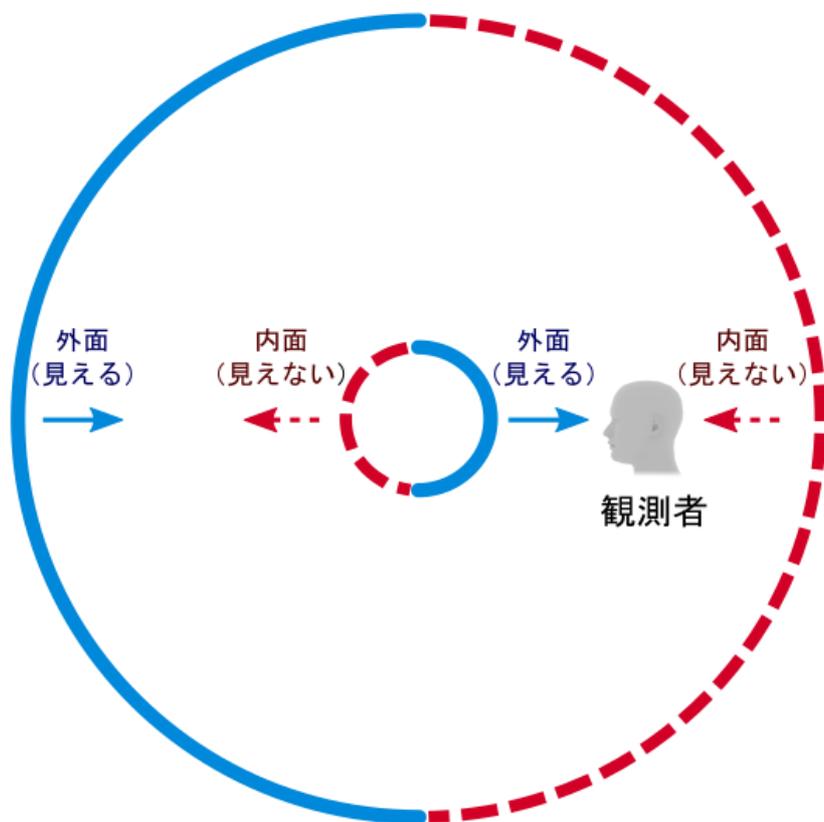
また、垂子の先には前側の無限遠点「 $-\infty$ 」と「主体」がある。



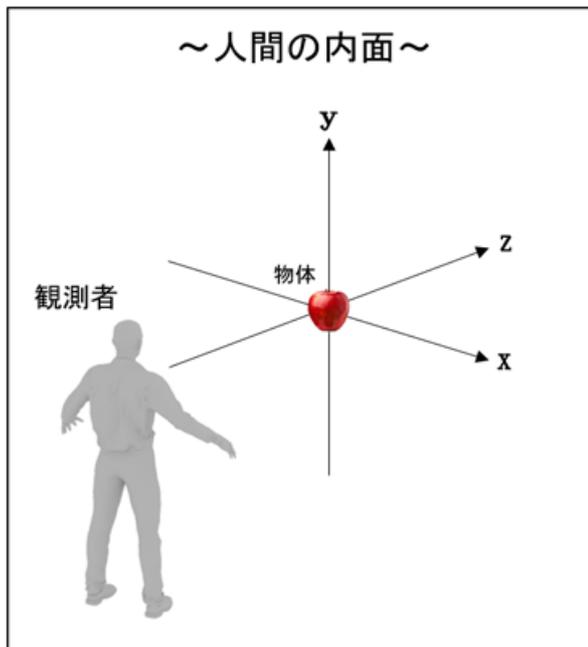
逆に「後ろ（手前）」にあるのが次元観察子 $\psi_4$ であり、  
そっち側は『人間の内面』となっている。

次元観察子 $\psi_4$ の説明は後ほど詳しくするが、  
これは普通の空間（次元観察子 $\psi_1\sim\psi_2$ ）がある場所でもある。

ニューソロジーでよくされる説明だと、  
前側の『人間の外面』は「見える世界」になっていて、  
後ろ側の『人間の内面』は「見えない世界」になっている。  
また、物の向こう側も「見えない世界」になっているが、  
背景側は「見える世界」になっている。  
そのため、以下のような構造になっている。



それから、次のような図で説明されることもある。  
物体を座標的に観ている客観が『人間の内面』であり、  
主観から観ているのが『人間の外面』に該当する。

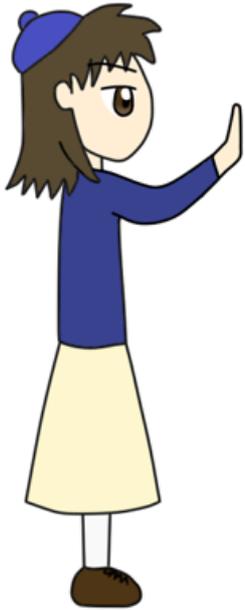


■ 平手を出して観てみる

試しに、同じことを平手を出してやってみよう。

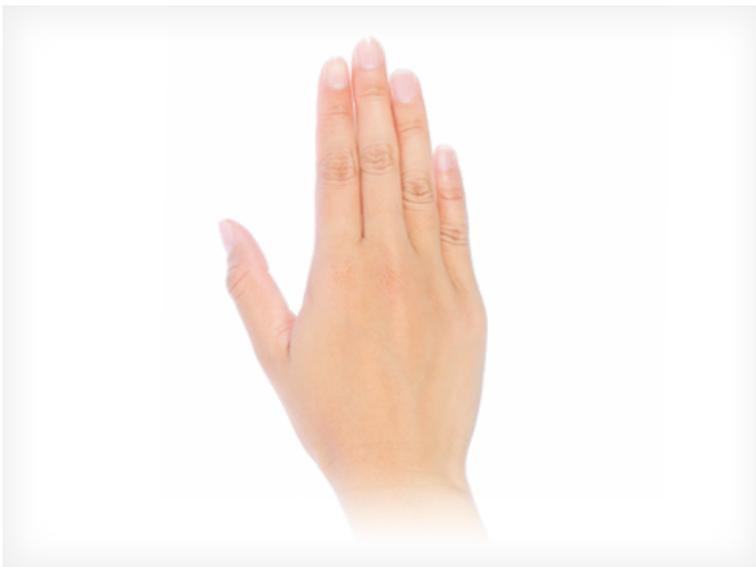
以下のように前に平手を出してみる。



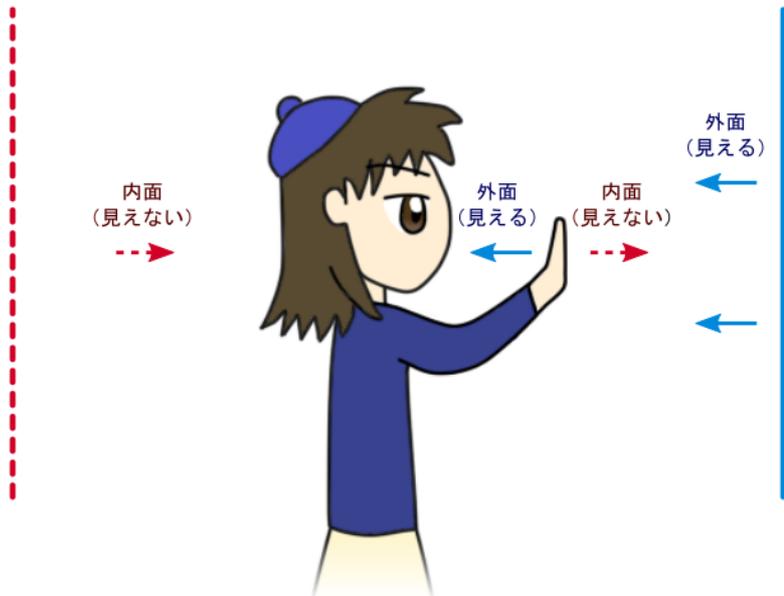


※平手の位置は見やすいように適宜調整していこう

そうした時、「平手を出してる人」側からの視点だと、  
以下のように自身の平手が見えているはずである。



この時、「見える世界」「見えない世界」の関係は、  
次のようになっている。



また、平手を出した状態だと、『人間の内面』と『人間の外面』の関係は次のようになる。



このように、「内面（後ろ）」と「外面（前）」の関係は単純なものだが、実際に自分で身体を動かしてみると、しっかりと理解できて良いかもしれない。

### ■ $\psi_1$ 、 $\psi_2$ 、 $\psi_3$ との対応づけ

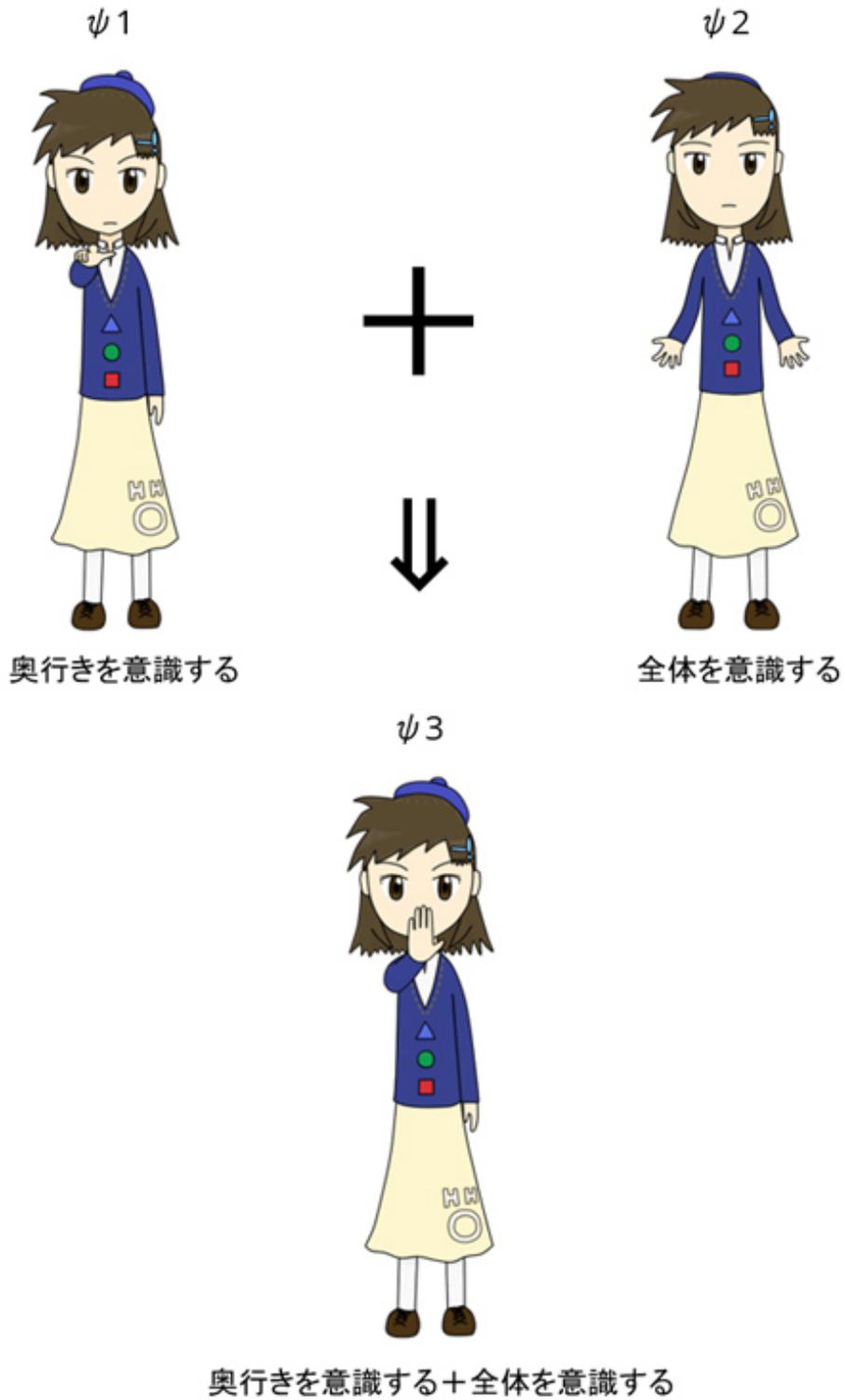
さらに、「平手を出す」行為を「次元観察子 $\psi_3$ を認識する」際のサインだとして、 $\psi_1$ と $\psi_2$ を以下のように対応づけしてみよう。

指差しをする  $\Rightarrow \psi_1$

手を広げて全体を意識する  $\Rightarrow \psi_2$

平手を出す  $\Rightarrow \psi_3$

そうすると、以下のようになる。



以上。次元観察子 $\psi 1 \sim \psi 3$ までを整理することができた。

ここまでの内容が分かったらどうか？

次元観察子 $\psi_3$ に関する構造的な話はここで一旦終わりとするので、  
分からない場合は何度も復習したり実践したりしてみよう。

## 30. 夢の世界のビジョン

ここまでの『変換人型ゲシュタルト論』では、意識の「構造」の話に重点を置いて書いていった。

これから「こころ」や「心理学」にもちょっと触れた話をしていく。

「こころ」や「心理学」のような話は『変換人型ゲシュタルト論』ではあえて詳細まで触れないようにしておくが・・・

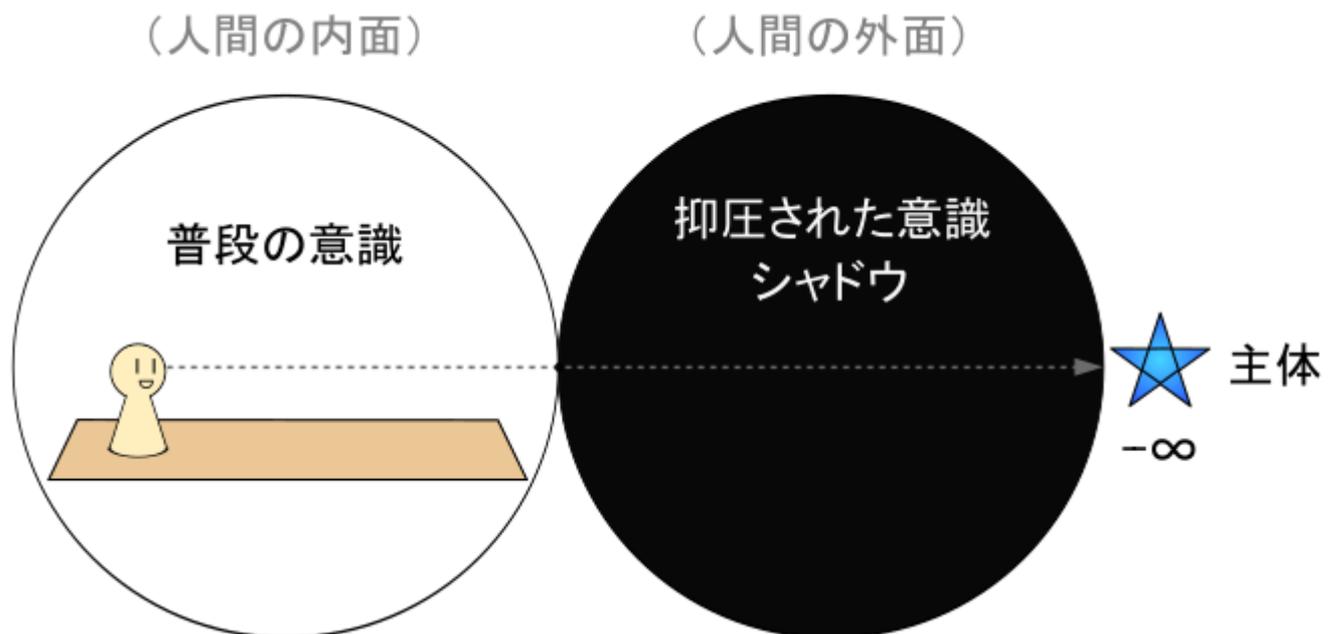
(やりたくないわけではないが、やるとなると内容が長くなり過ぎてしまうため)  
当ブログでは『河合隼雄を読み直す』というシリーズも書いていて、そっちはニューソロジー用語の出てこない心理学的な内容になるが、変換人型ゲシュタルト的にも重要な内容なので気になる人はそちらも読んでもらいたい。

[リンク：■河合隼雄を読み直す(1) ～はじめに、書籍紹介～]

### ■ 『人間の外面』と「シャドウ」

さて、『次元観察子ψ3』や『人間の外面』を発見するとどうなるのか？

人間の通常の意識は『人間の内面』側に留まるようになっているから、それより外の意識の方向に行くとすると、普段意識しているものとは違うものが出てくるようになる。



以前書いた『[変換人型ゲシュタルトとは？（後編）](#)』の項でもちょっと説明したが、

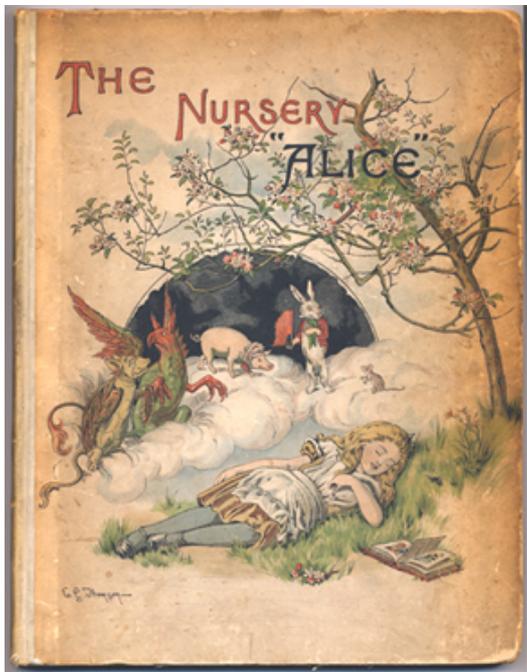
そうすると、ユングが「シャドウ」と呼んだものが目前に出てくるかもしれない。

「シャドウ」とは「自身が今まで無意識に抑圧してきた、向き合うことを避けた負の感情」「認容しがたいと思っている心的内容」「その人の暗い部分」などと説明されるものである。



それから、シャドウ的なものは無意識的なものと絡み、**夢世界的なもの**と絡んでくる。

「夢世界的なもの」とは、人間が夜に見る夢のような世界のことである。



書籍『2013：シリウス革命』にて、「**夢の世界は死後の世界である**」と冥王星のオコツトは言っているため、夢の世界は人間の意識や死後の意識の解明のための大きな入り口にもなっている。

## ■ 夢世界的なものの様々なイメージ

「夢の世界」のイメージについては、  
古今東西の美術や芸術でも、  
様々な表現がされているジャンルである。

『サイキックの研究と分析』でもそれについて書いたことがある。

[リンク：■サイキックの研究と分析(26) ～「夢の世界」と「無意識の世界」～]

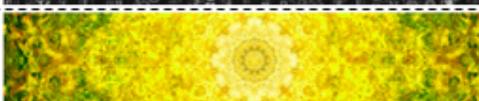
こうしたものが表現されている芸術や美術は、各々がどんな文化で育ってきたか、どんな文化が相性良いかによって好み異なるため、各自で好きなものを見つけて慣れ親しんでいくと良いと思う。

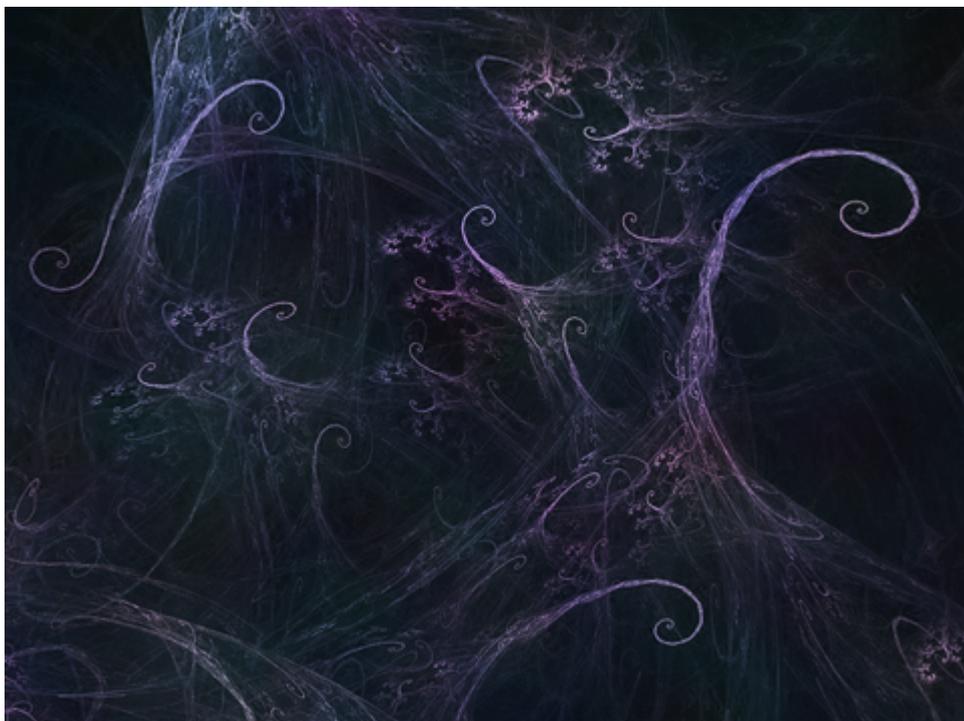
自分 (Raimu) は『東方 Project』シリーズが大好きなので、  
この作品からニューソロジー理解においても重要なインスピレーションを得たと思う。  
最近、プレイ動画をアップしている。

[Youtube 動画：【東方原作プレイ動画】東方妖々夢 HARD 霊夢 B]

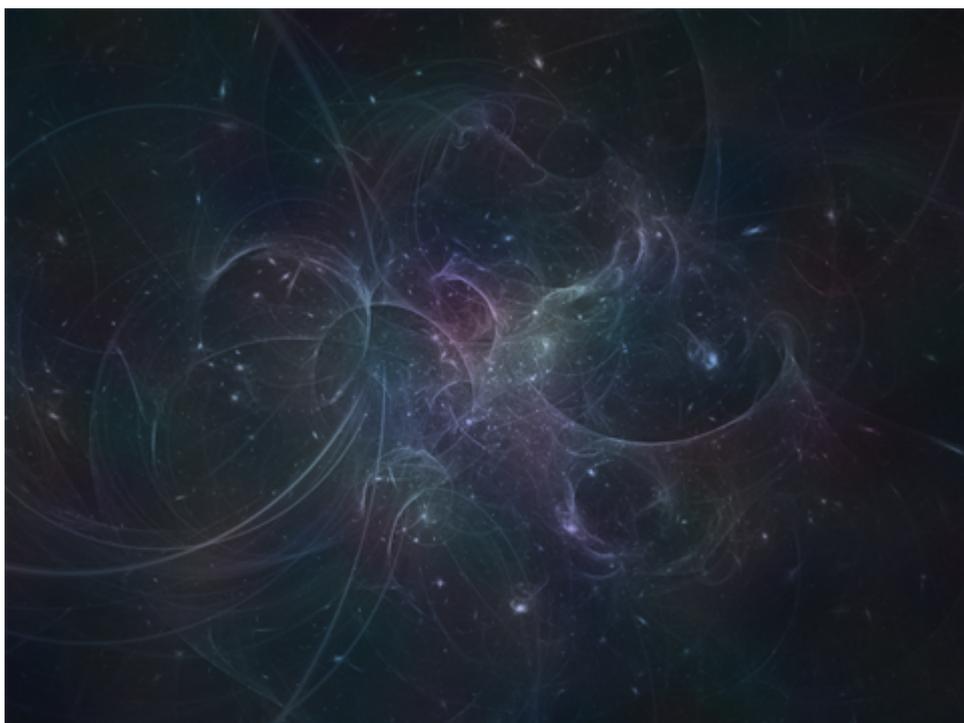
まあ、この辺の趣味の話をしだすと長くなるので置いといて・・・

自分が用意した以下のグラフィックも、  
そんな感じのイメージを目指して作ってみた。  
(著作権フリーの CG 素材を基に色彩加工したもの)

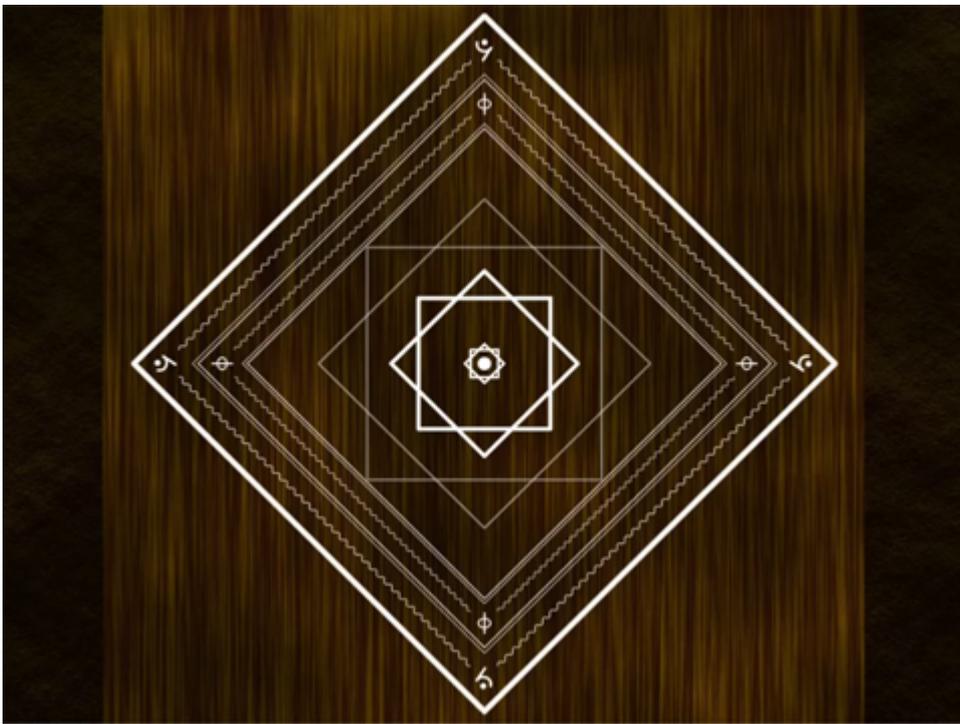
	ψ1～ψ2	第一層
	ψ3～ψ4	第二層
	ψ5～ψ6	第三層
	ψ7～ψ8	第四層
	ψ9～ψ10	第五層
	ψ11～ψ12	第六層
	ψ13～ψ14	第七層



なんとなく「虚数 (imaginary number)」をイメージして、以下みたいなグラフィックも作ってみた。  
(これも CG 素材がベース。割とお気に入り)



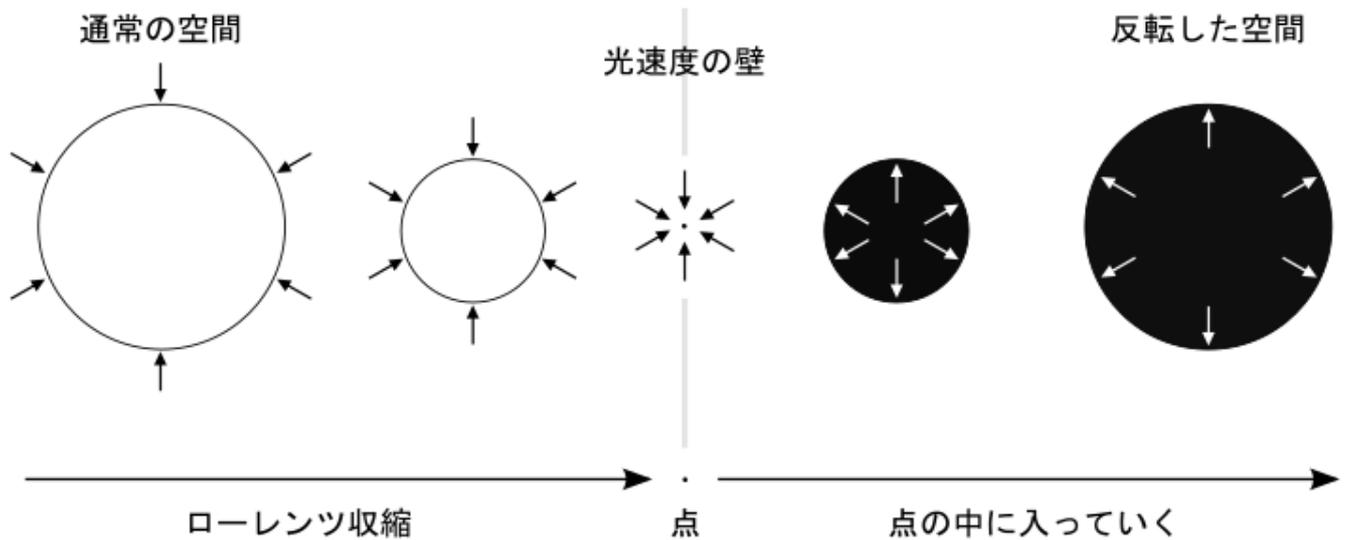
あと、「反転の門」というタイトルの作品も作ったことがある。



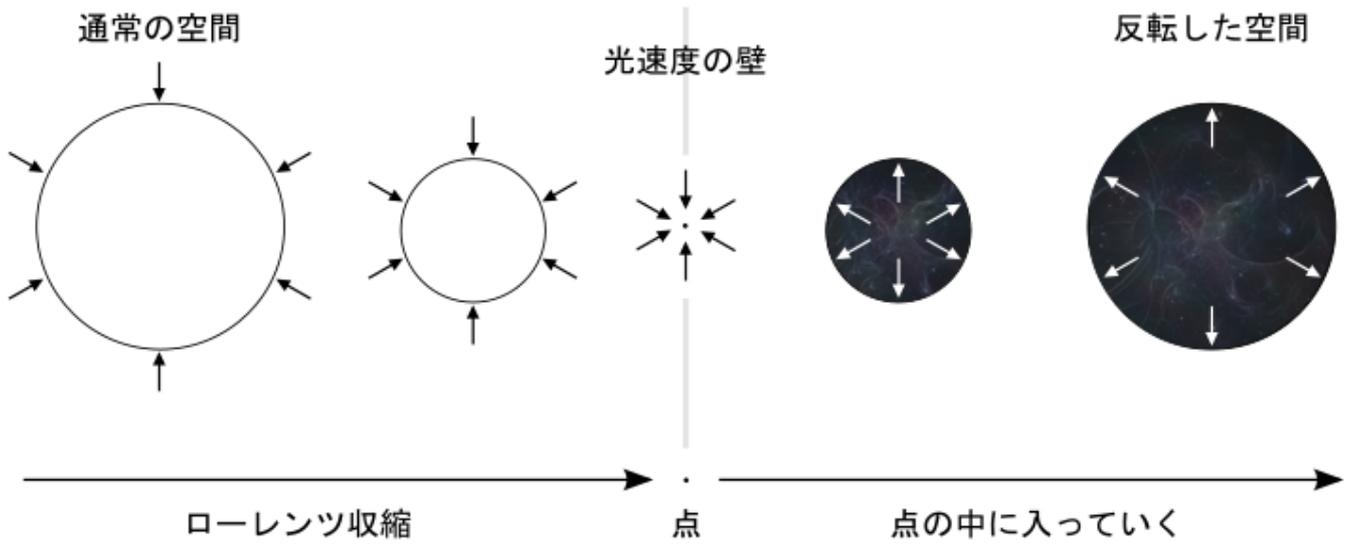
このように、ニューロロジーを無機質な幾何学イメージで理解するだけでなく、色彩つきのイメージも絡めると良いのかもしれない？

### ■ $\psi$ 3 移行ワークと夢世界

以前に「光速度イメージ」についてを書いた。



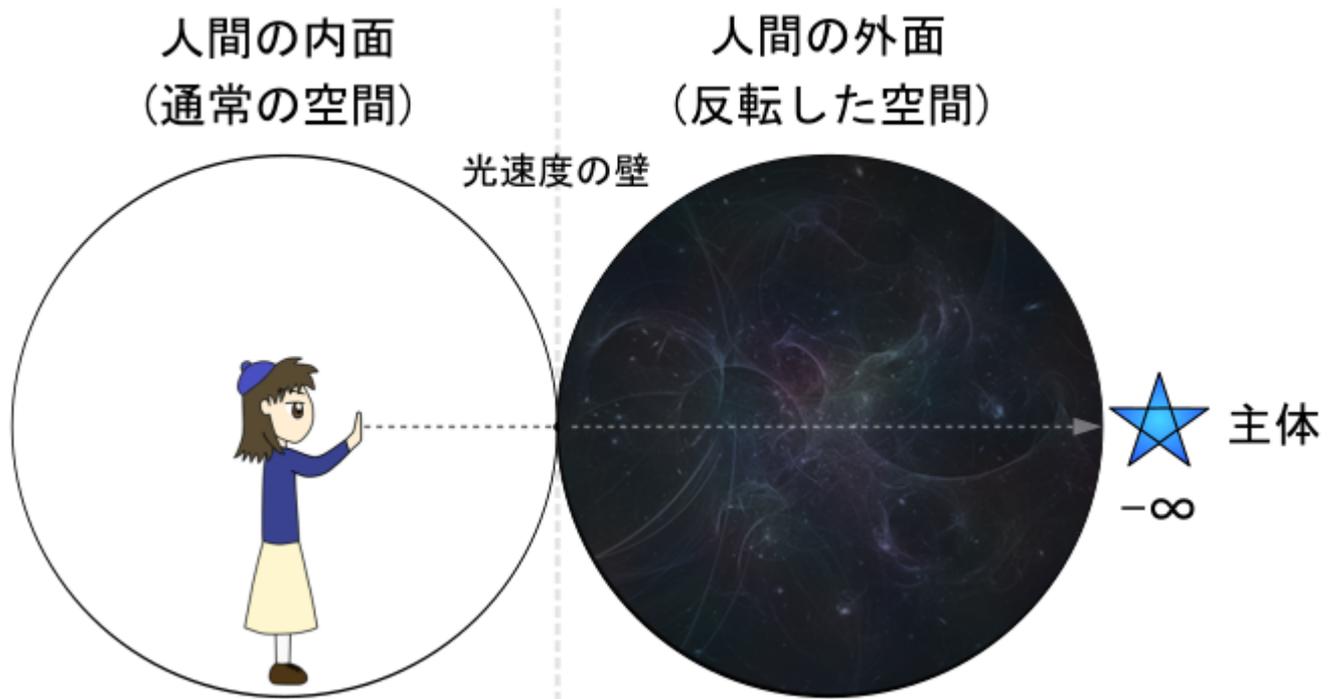
もしかすると、光速度の先にある「反転した空間」のイメージも実際にやると夢世界的なナニカが出てくるかもしれない。



それから、「平手出し」をするポーズについても書いた。



実際にそれをやってみると、そこに重なるイメージもあるかもしれない。



そんな感じで、ニューソロジーで定番となるカタチの認識のための業法でも、何か付随するイメージがあればそれと絡めてみるのも良いと思う。

### ■ 「アニマ」と「アニムス」

ユング心理学には「アニマ」「アニムス」という概念がある。

これも「無意識に付随するイメージ」として重要なため、軽く説明しておこう。

簡単に説明すると、**アニマは「男性の無意識人格の女性的な側面」**であり、**アニムスは「女性の無意識人格の男性的な側面」**に該当する。

ユング心理学的な無意識探求を行っていると、通常の性別とは異なる人格が無意識の中から生じてくる。

そして、それは自身を無意識の世界へ誘導するような役割を持っている。

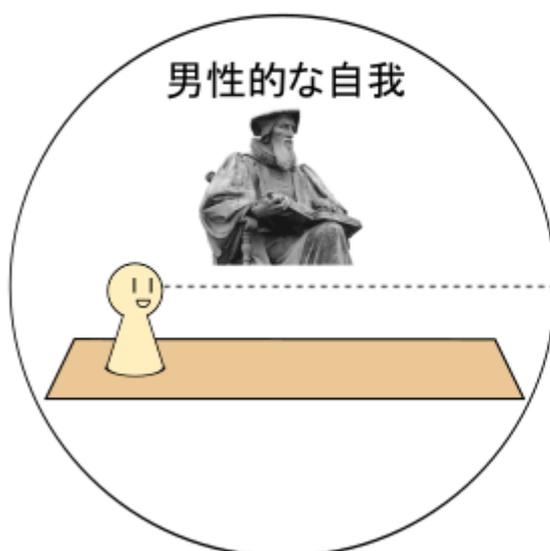
その時に出てくるイメージは「男性の場合は女性的人格」で「女性の場合は男性的人格」とされているが、実際の性別がどうなっているかが重要ではない。普段の自分の意識はどちらの性別に近いかが重要である。

つまり、女性でも普段の意識が男性に近ければアニマが生じるし、男性でも普段の意識が女性に近ければアニムスが生じる。

ユング的には、『人間の内面』側にある自我が男性に近ければ『人間の外面』にはアニマが生じるし、逆に女性に近ければアニムスが生じることになる。

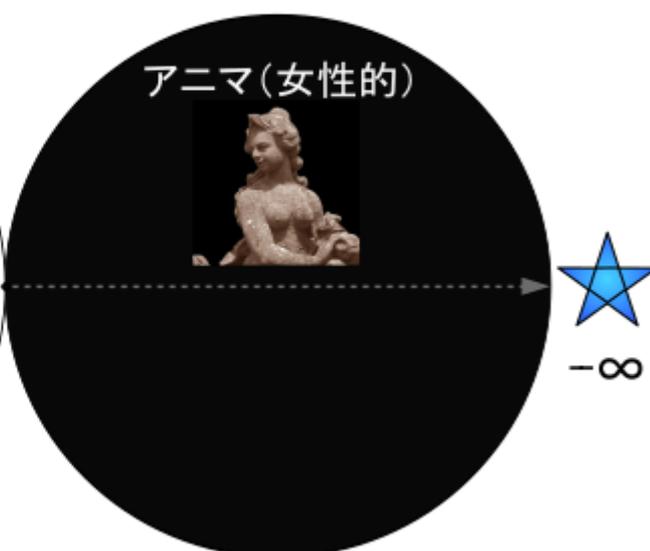
(人間の内面)

男性的な自我



(人間の外面)

アニマ(女性的)



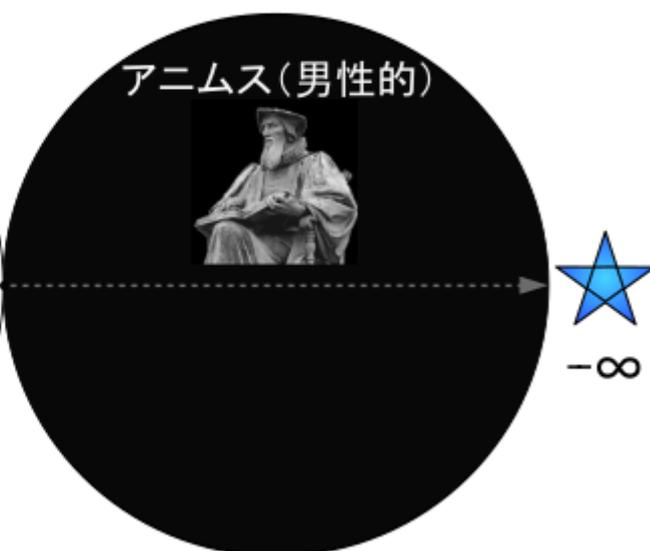
(人間の内面)

女性的な自我



(人間の外面)

アニムス(男性的)



無意識にある夢世界的なイメージの先には、アニマやアニムスのような存在のイメージもあるかもしれない？

## ■ 様々なイメージ

次元観察子のそれぞれに付随するイメージは色々あるだろうが、 $\psi$ 3の段階だと「スピリチュアル的にキラキラしてる」というよりかは、どっちかというとなんとなく暗い」に近いと思う。

実は、冥王星のオコットが言うには、『人間の内面』は昼に対応しているのに対し、『人間の外面』は夜に対応しているらしい。

[リンク：シリウスファイル解説-マクロ宇宙も単なる時空として見ちゃいけない - cave syndrome]

OCOT 情報も、昼と夜は「対化」の表現だと言っていた。昼は人間の内面で、夜は人間の外面の現れだということ。確かに、人間は昼間は客観世界（延長）の中で生き、夜は主観世界（持続）に生きるのが基本。これは表相が等化された世界と、表相を中和した世界（表相の等化を無効にする）の関係と言っているかもしれない。

$\psi$ 3 や『人間の外面』に付随する「なんとなく闇の世界」感は、そんな原理に基づいているのかもしれない。

日本文化で「夜」みたいな世界にいるものといったら「妖怪」が挙げられる。



妖怪には多種多様なものがあるけど、本質的には「身体性が確立していない段階の霊みたいなもの」と捉えると、

$\psi$ 3に付随してくるイメージだろうと思う。

また、 $\psi 3$ は惑星だと「水星」が関係してくるとして、  
自分は水星のイメージを作ったりもした。



厳密には、ニューソロジー的に水星が対応しているものは $\psi 3$ ではなく、  
その上位にある『大系観察子 $\Omega 3$ 』や『次元観察子 $\psi 9$ 』とされていて、水星の本質をつきつめるとそちら  
に該当するのだが、

$\psi 3$ を認識すると、その背後にある大系観察子 $\Omega 3$ である水星イメージが浮上してくると捉えて良いと思  
う。

### ■ 死後世界的なものに入り込めるか？

色んなイメージの話をしてきたが、  
要するに次元観察子 $\psi 3$ は主観に紐づく世界であり、  
オコツトが「昼は人間の内面で、夜は人間の外面の現れ」と言ったように、  
「夜」のようなものとして表れるのである。

また、そうした世界は、次元観察子 $\psi 1 \sim \psi 2$ に紐づく自我が死んでいくという意味での「死後の世界」と  
言えるかもしれない。

古今東西にある芸術や美術を探すと、  
そうした世界を探求している作品もあるため、  
それを的確に表現している芸術はニューソロジー的にとても価値がある。

そんな「死後世界探求」の発想があると、  
ニューソロジーの理解もスムーズになっていくと思う。

## 31. エーテル空間を知覚していく

今回は神智学や人智学に出てくる概念と  
ヌーソロジーとの絡みについて説明していく。

### ■ 「エーテル体」について

ヌーソロジーでは『次元観察子 $\psi$ 3』からの概念を理解することによって「エーテル空間」が開けてくると言われている。

これによって「エーテル体」が分かるようになる。

「エーテル体」とは何なのだろうか？

これは19世紀にヘレナ・P・ブラヴァツキーが確立した神智学において出てくる概念で、「物質体とは違った、目に見えない意識エネルギーのようなもの」を「〇〇体」という呼び方をしたものである。

東洋だと「氣」とか「プラーナ」とか呼ばれているものに近いと理解すると分かりやすいと思う。

この概念はルドルフ・シュタイナーも引き継いで使うことになり、シュタイナーが確立した人智学においても「エーテル体」という用語がよく出てくる。特に、ヌーソロジーは『シュタイナー思想とヌーソロジー』という書籍が出ただけあって、シュタイナーの人智学と絡めた説明がよくされている。

〔書籍：半田広宣，福田秀樹，大野章『シュタイナー思想とヌーソロジー 物質と精神をつなぐ思考を求めて』（2017）ヒカルランド〕

ちなみに、スピリチュアルの界限だと、こうした「目に見えない意識エネルギーのようなもの」は18世紀の魔術師エリファス・レヴィの提唱した「アストラル・ライト」という用語から、「アストラル」という呼称が使われることもあるのだが・・・

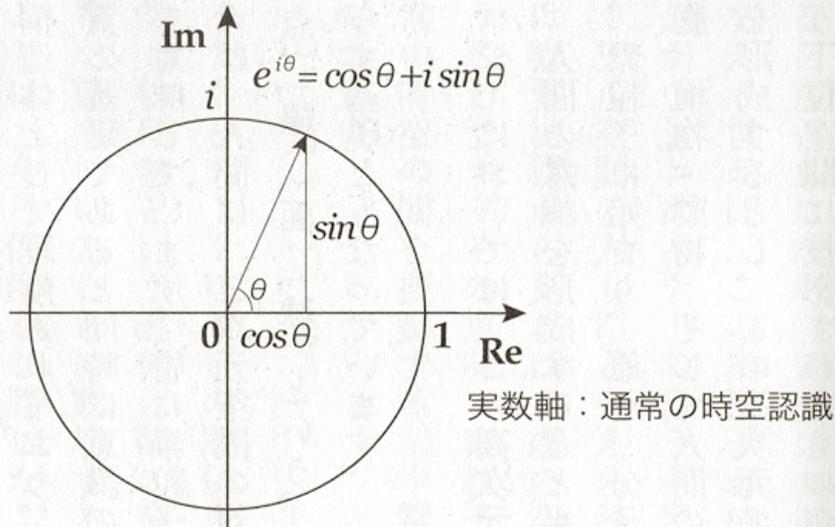
神智学や人智学の文脈だと、ヌーソロジーでまず初めに出てくるものは「エーテル体」とするのが正解なので、その呼び方で統一する。

### ■ 意識の反転とエーテル空間

ヌーソロジーでは「意識の反転」の先には「エーテル界」があるとも言われている。

書籍『シュタイナー思想とヌーソロジー』でも以下のように書かれている。

虚数軸：エーテル界



- ・ 素粒子の挙動を表す波動方程式はオイラーの公式を基礎に持つ
- ・ このオイラーの公式の虚数部分がエーテル界、実数部分が通常の時空認識の形成を表すと思われる。つまり、波動関数で表わされる素粒子は、高次空間の入り口であるエーテル界と、通常の時空認識の間を振動する、物質と知覚の基礎となる、半霊半物質の存在と思われる
- ・ 光子においては、この虚数軸が視覚における「モノ」と「背景の」の一体化を表し、実数が「モノ」と背景の分離状態を表している

この図はオイラーの公式とエーテル界の関係についてであり、「虚数軸：エーテル界」と書かれている。さらには素粒子の挙動を表す波動方程式はオイラーの公式を基礎に持つということで、素粒子との関係についても書かれていて、「オイラーの公式の虚数部分がエーテル界、実数部分が通常の時空認識の形成を表す」と書かれている。

ここにある「虚数軸」は「奥行きの軸」と同義でもあるし、『人間の外面』や「前」の方向とも同義である。

そもそも、書籍『シュタイナー思想とニューソロジー』では、シュタイナーが目指す意識進化の道と、ニューソロジーが目指す意識進化の道は通じているのではないかと、シュタイナー思想とニューソロジーについてのすり合わせが行われていた。

したがって、シュタイナーの人智学の入門の際に出てくる概念の「エーテル体」も、ニューソロジーの概念と一致してくるわけである。

さらには、ニューソロジーでは「素粒子の正体は意識である」という世界観の通り、「エーテル体は素粒子である」といったことまで言われているので、素粒子の構造からエーテル空間の仕組みを明らかにすることまで目指している。

## ■ シュタイナー思想におけるエーテル体

さて、シュタイナーがエーテル体についてどのように説明したかを軽く見てみよう。

書籍『いかにして超感覚的世界の認識を獲得するか』から引用する。

人間のエーテル体の各部分はたえず活動している。無数の流れがエーテル体をあらゆる方向へ導いている。人体はこのような流れを通して、その生命活動を保持し、制禦しているのである。すべての生物はこのようなエーテル体を持っている。植物、動物もエーテル体を持っている。それどころか鉱物にも、注意深く観察すれば、エーテル体の痕跡が認められる。

エーテル体は人間が持っているものでありながら、いたるところにあると書かれている。そして、シュタイナー思想においては、エーテル体は意識進化のために開発するものなため、瞑想や集中を用いて、宇宙の法則と調和していくように扱っていく。

神秘道を修行していくと、人間世界の進化と法則に対して調和的な在り方を示す流れや動きを自分のエーテル体にもたらしようになる。行法は常に世界進化の偉大な法則のエーテル体の行模像であるように考えられている。前にふれた瞑想（メディテーション）と集中（コンセントレーション）はまさにそのような行であり、これが正しく実践されるなら、今述べたような結果をもたらしてくれるであろう。

なんとなく目指していくべき方向性が分かるだろうか？

シュタイナーはこうした神秘的な修行を含んだ学問に挑む者を「神秘学徒」と呼び、神秘学徒について以下のように書いている。

神秘学徒は毎日、わずかの時間でもよいから、日々の仕事とはまったく異なる事柄のために費す時間を確保しなければならない。時を費す仕方もまた、日常の他の場合とはまったく異なっていなければならない。とはいえこの特別の時間が対象とすべき事柄と日々の仕事の内容との間にまったく何の関係もないかのように考えるべきではない。反対である。正しい仕方でのこの特別の時間を費す人は、やがてこの時間の中から、日々の課題のための充実した力が受け取れることに気づくであろう。

もしこの規則のために費すべき時間が本当にもてないというのなら、毎日五分間だけで十分である。むしろどのようにこの五分間を使用するかが大事なのである。この時間の中で、人は完全に自己を日常生活から隔離する。思考と感情のいとなみは日常の時間における場合とは異なる色合をもたねばならない。

ここに書かれていることは、『変換人型ゲシュタルト論』に出てくる構造のイメージを修行やトレーニングのノリでやっていくためにも適した心構えだと思う。

書籍『いかにして超感覚的世界の認識を獲得するか』は、シュタイナーが出したもののなかで一冊は持っておいた方がよい本だと思う。

もはやニューソロジーの学習と一緒に読んだ方が良いのでは？と思えるバイブルのようなものなので、特にオススメである。

〔書籍：ルドルフ・シュタイナー『いかにして超感覚的世界の認識を獲得するか』（2001）筑摩書房〕

以上。「エーテル体」と「ニューソロジーの反転」の関係について書いていった。

ニューソロジー外の分野で「エーテル体」の扱いについて学んでいる人は「ニューソロジーの反転」が理解しやすいかもしれないし、

「ニューソロジーの反転」が分かった人はニューソロジー外の分野で「エーテル体」を扱うことができるかもしれない。

そうすると、色んな応用が考えられるのでは？と思う。

そして、次元観察子 $\psi_3$ は、まだ「エーテル体の糸口を掴んだ」ぐらいの段階になり、そこにどっぴりと入り込むのは次元観察子 $\psi_5$ から・・・という話になるので、引き続き『変換人型ゲシュタルト論』を進めていこう。

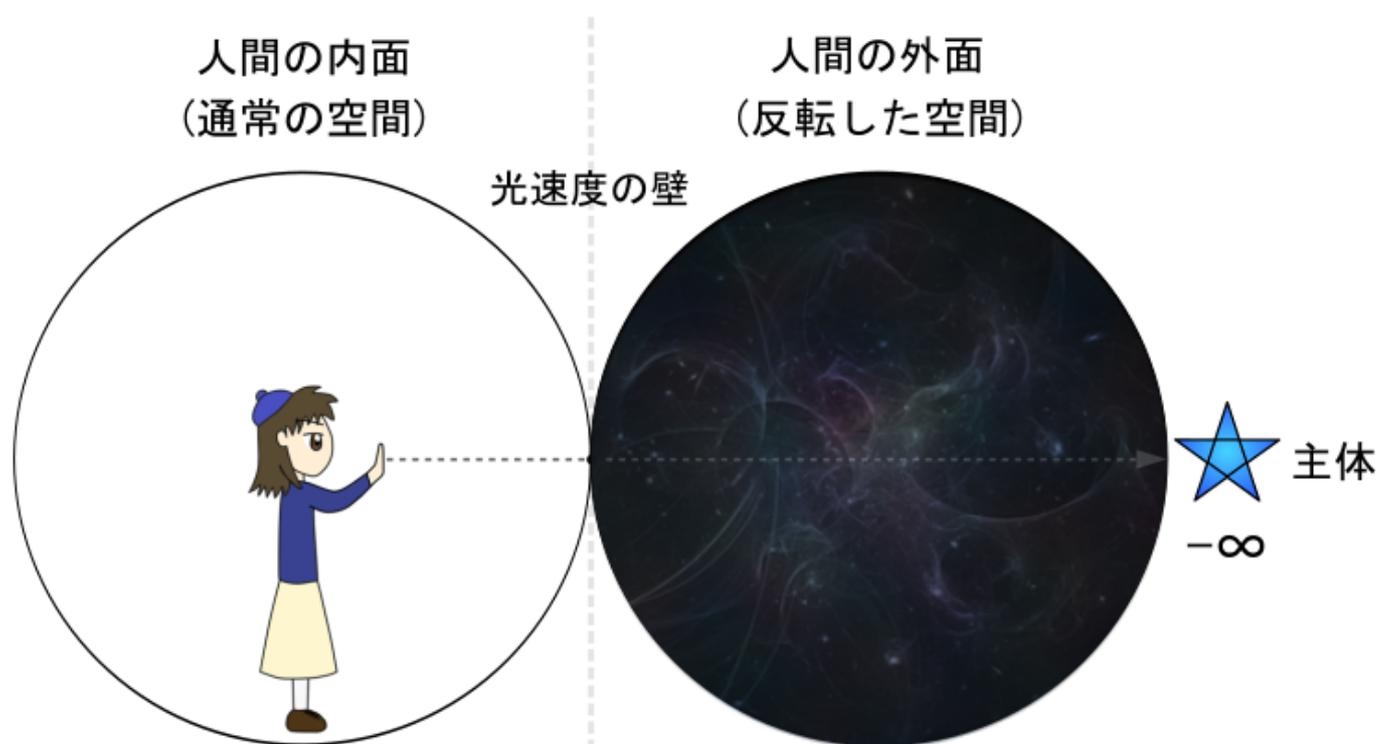
## 32. 火のイメージを応用する

前回は「夢の世界」や「エーテル体」など、抽象的なイメージベースの話をしてきた。

今回の話は Raimu オリジナルの手法である。

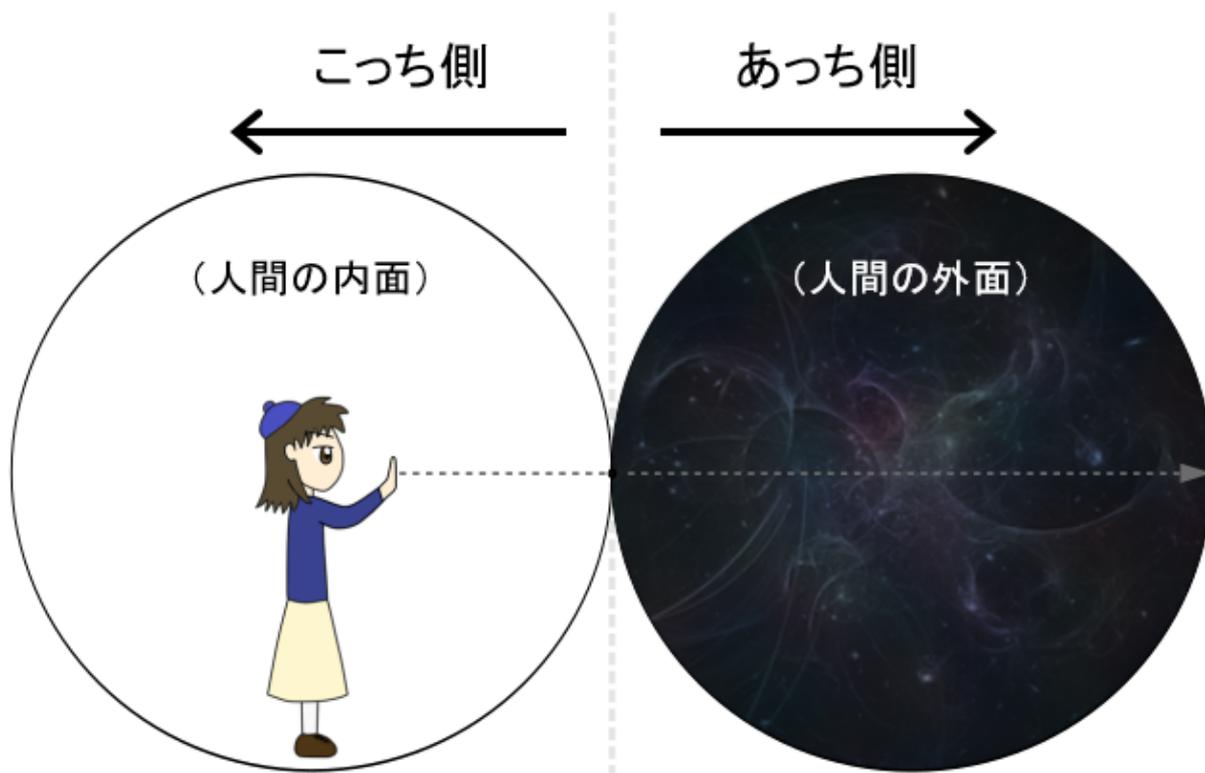
これまでのヌーソロジーについてをおさらいしよう。

前方向に『人間の外面』と「反転した空間」があり、後ろ方向に『人間の内面』と「通常の空間」がある・・・という話だった。



また、上記のイメージは光速度イメージと重ねることもできて、光速度を突破すると『人間の外面』側へ、その手前だと『人間の内面』側の世界となる。

『人間の内面』側を「こっち側」、  
『人間の外面』側を「あっち側」としよう。



そして、「こっち側」と「あっち側」は、  
**四大元素論**だと「**地のエレメント**」と「**火のエレメント**」の関係になっている・・・と解釈することができる。

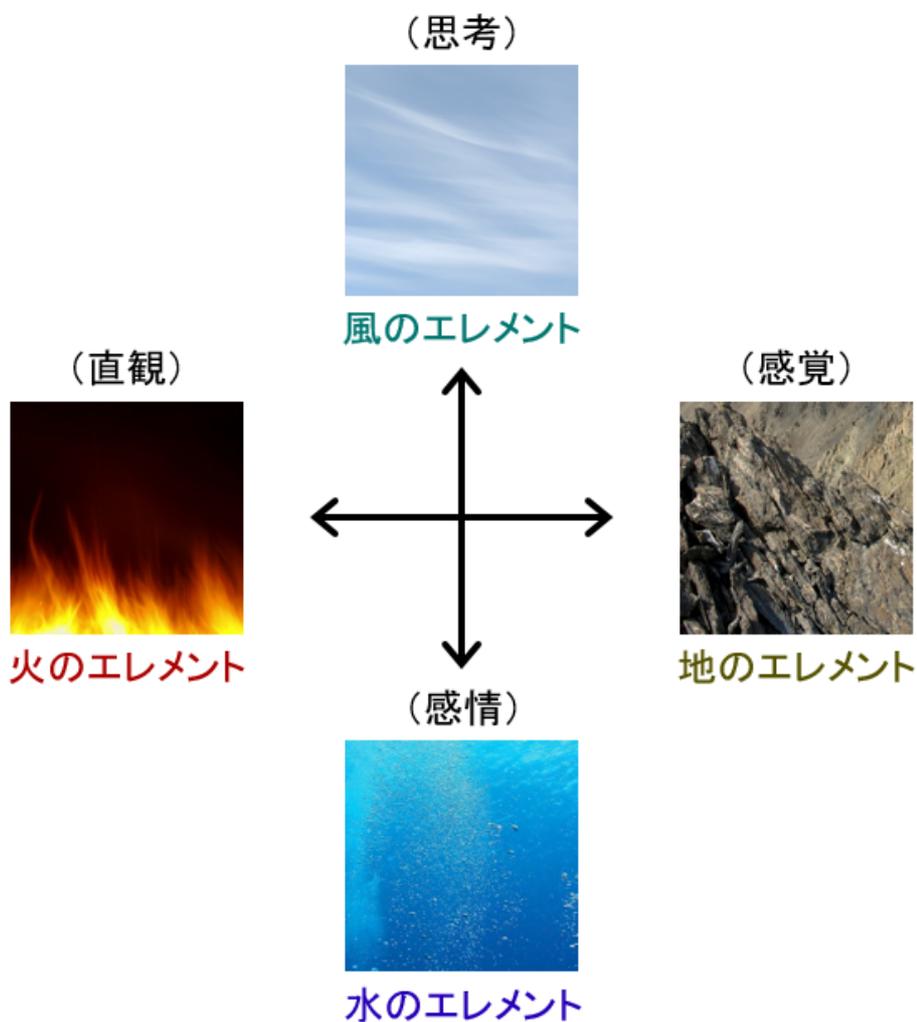


ここで言う「**地と火**」は概念的なものの話である。

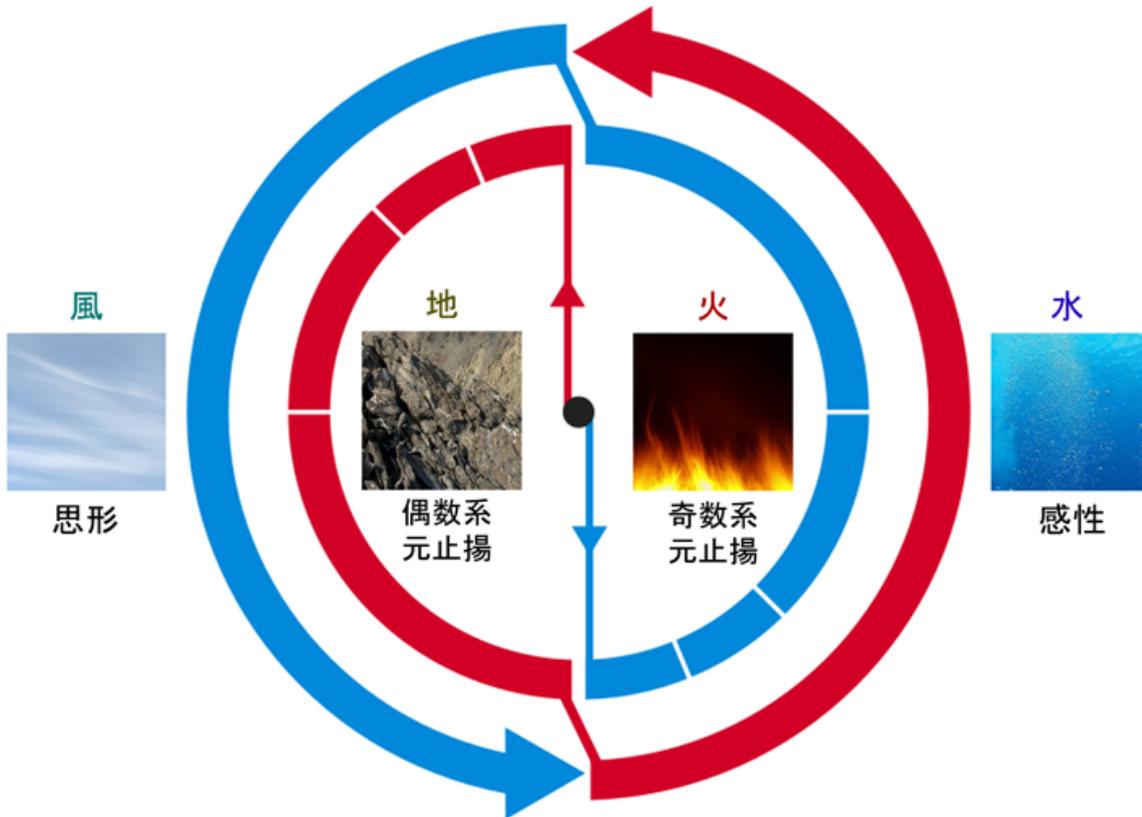
まず、西洋で古代から伝えられている四大元素論は「**火地風水**」で構成されている。

それぞれの元素は「**直観**・**感覚**・**思考**・**感情**」を司ると言われていて、

「**火と地**」が対の関係、「**風と水**」が対の関係になっている。



また、ケイブコンパスにおいても、『偶数系の元止揚』は「**地のエLEMENT**」、『奇数系の元止揚』は「**火のエLEMENT**」に対応し、『思形』は「**風のエLEMENT**」、『感性』は「**水のエLEMENT**」に対応していると解釈することができる。



なぜなら、『偶数系の元止揚』が持つ要素は「物質世界・他者側・幅・感覚や経験・直線的な時間・四次元時空のゲシュタルト」であり、**地**の物質的な方向性がそれと関係してくる。

一方で、『奇数系の元止揚』が持つ要素は「精神世界・自己側・奥行き・直観・持続的な時間・四次元空間のゲシュタルト」であり、**火**の精神的な方向性がそれと関係してくる。

また、**風**は思考を司るので『思形』が関係し、**水**は感情を司るので『感性』が関係してくる。

ニューソロジーと四大元素論の関係については、以前にもブログでまとめたことがある。

[リンク：ニューソロジーと四大元素論（火・地・風・水）の関係について その1]

それから、四大元素論的に**火のエレメント**が表すものは、

**生命力、純粹さ、情熱、闘志、芸術、流動性、能動性、破壊と創造**・・・といったものである。

それらを扱う感覚は「直観」でもあるため、

**火のエレメント**が強い性格は「直観タイプ」とも言われる。

ニューソロジーで脱却する「人間型ゲシュタルト」は、いわば「安定をもたらす世界」でもあるため、

それを脱却する強いエネルギーとなると、不安定さに向かってそれを制するような**火のエレメント**の力ということになるのではないだろうか？

以上のように『奇数系の元止揚』と「**火のエレメント**」の二つの概念は、絡めて理解すると良いと思う。

## ■ 火のイメージの応用

そんなわけで、火のイメージを使ってヌーソロジーの概念を理解してみよう。



前回「エーテル体」の説明をしたが、  
ここで使う「火」のイメージはそれとも近いと思う。

また、抽象的な「火」のイメージはスピリチュアル的に重要と言える事例がある。

前回、神智学の創始者として名前を挙げたヘレナ・P・ブラヴァツキーは、  
「エーテル体」という言葉を使った先駆者でありながら、  
19世紀の時代にアメリカのスピリチュアルのベースを作った人物でもあるので、  
現代スピリチュアルのルーツにもなっている。

そんなヘレナ・P・ブラヴァツキーが代表書籍として残した『シークレット・ドクトリン』では、  
「火」を重要とする記述がある。

[書籍：H・P・ブラヴァツキー『シークレット・ドクトリン 宇宙発生論《上》』（2013）宇宙パブリッシング]

神秘学は“唯一の实在”を次のように概括する。神は神秘的な生きている（または動いている）火であって、この見えない実存の永遠の証人達は光と熱と湿気である。この三者は自然界のあらゆる現象を包含しており、またその原因である。宇宙内運動（intra-cosmic moton）は永遠であって止まることはない。

現代スピリチュアルの発端のような立場の者が残した本の一節にこうしたことが書かれているのはとても重要なことだと思う。

俗物的なスピリチュアルの場合は、「直観」よりも「感情」の方が大事とされることもあり、むしろ「水のエレメント」みたいなイメージのものも多くあるが、元祖スピリチュアルのような神智学ではやはり「火のエレメント」みたいなイメージの方が重要なわけである。

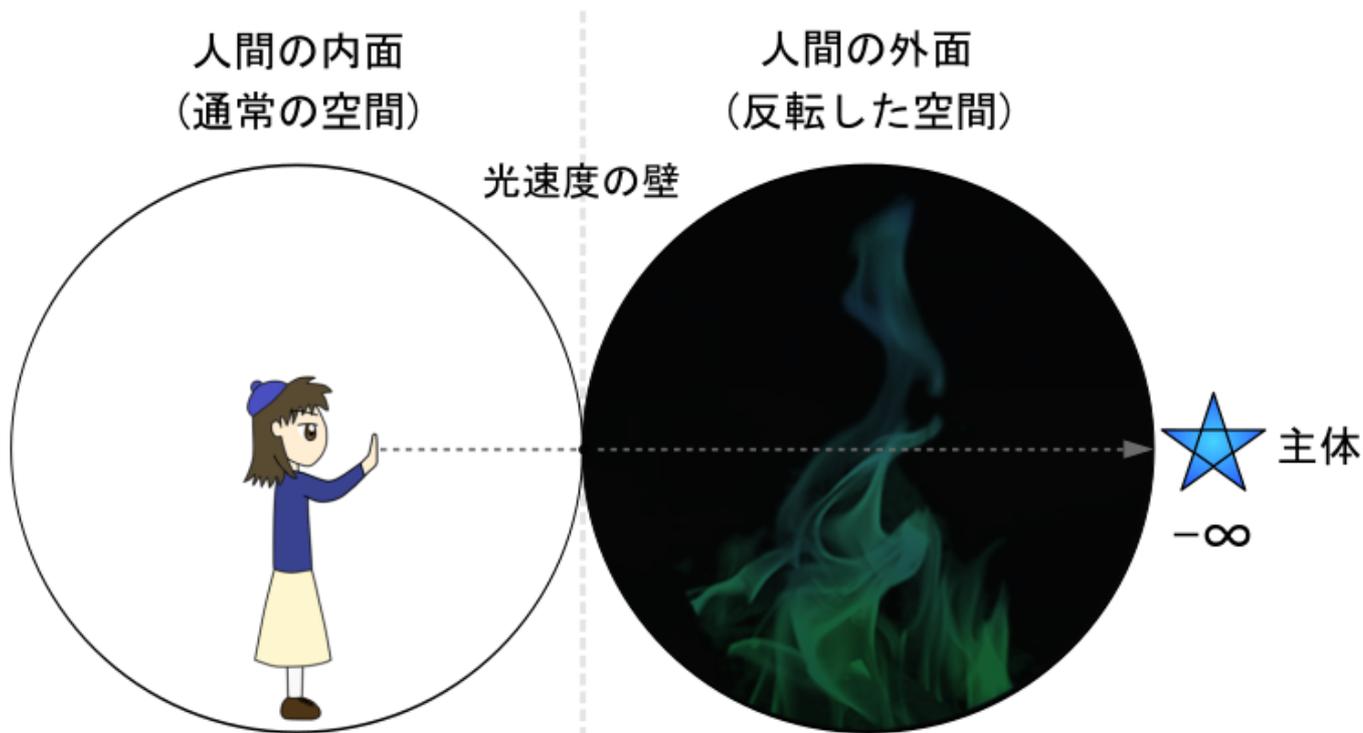
### ■ 火のイメージと反転

さて、火のイメージをヌーソロジーの反転のイメージと絡めてみよう。

色は何でも良いけど、安易な「赤」よりも、シリウスやオリオンを表す「緑」や「青」のが良いかもしれない。



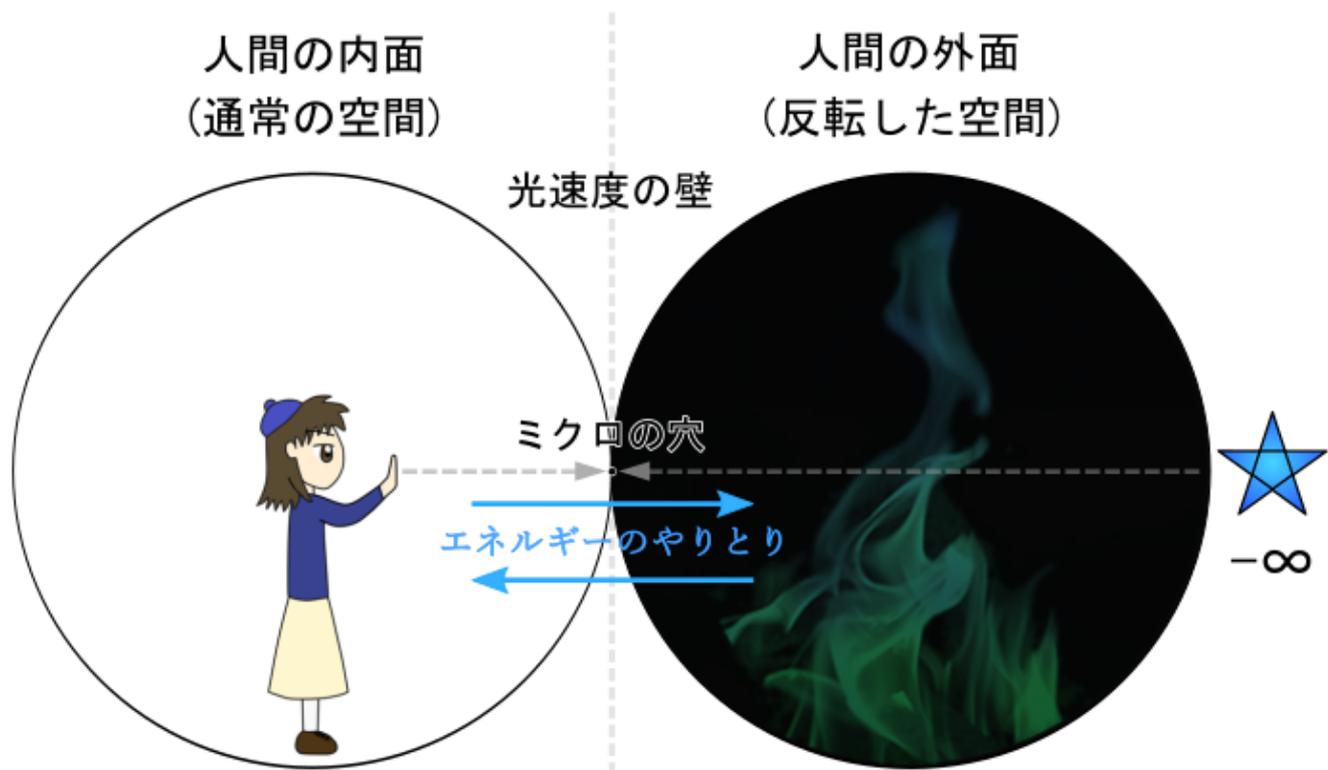
「反転」と『人間の外面』を意識した時、その先にはそんなイメージのものがあるかもしれない。



さらに、それは反転のイメージと同様に、目の前のイメージと重なってくるかもしれない。



ヌーソロジー的には「あっち側」と「こっち側」の境界はどうなっているかというと、「光速度に達した時の点」のように、ものすごく微小な大きさの点のようになっている。したがって、その先の世界に繋がるには、まるで針の穴に糸を通すような感覚になってくる。



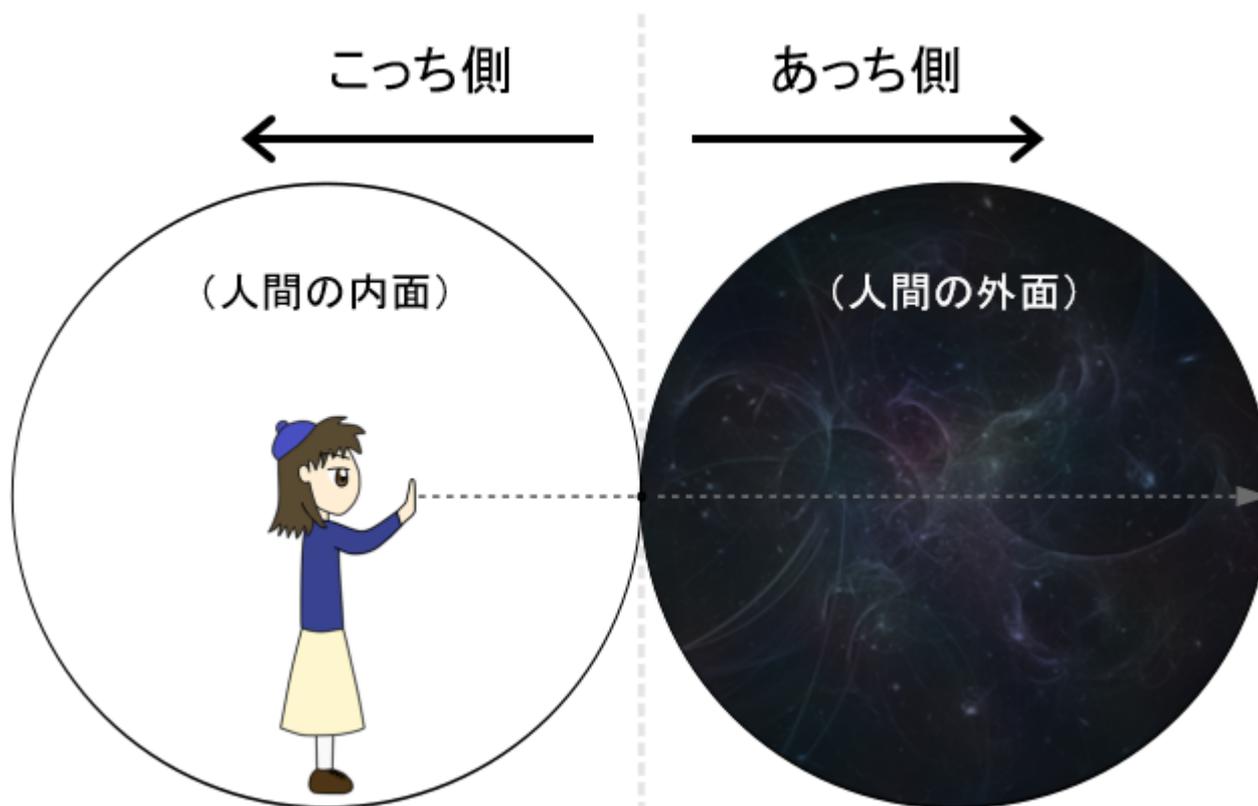
そんな感じで「あっち側」にある「火のイメージ」を、  
 針の穴に糸を通すような感じで・・・それも素粒子のような大きさの穴に対して、  
 「こっち側」に通るようにやってみる。

また、「こっち側」のエネルギーを「あっち側」に通すこともできるので、やってみる。

そんな感じで「あっち側」とのやり取りができるようになると、  
 ヌーソロジー的に分かってくることがあるのではないか？と思う。

### 33. 非物質世界の知覚と霊能者について

前回、「火のイメージ」についての話をしつつ、「あっち側」と「こっち側」の話をした。



「こっち側」は普通に物質の世界で、  
「あっち側」は通常の物質ではない見えない存在がメインの世界である。  
つまり、それは「**非物質の世界**」と言うこともできる。

俗っぽい言い方をすると「**霊界**」ってことになるんだろうか？

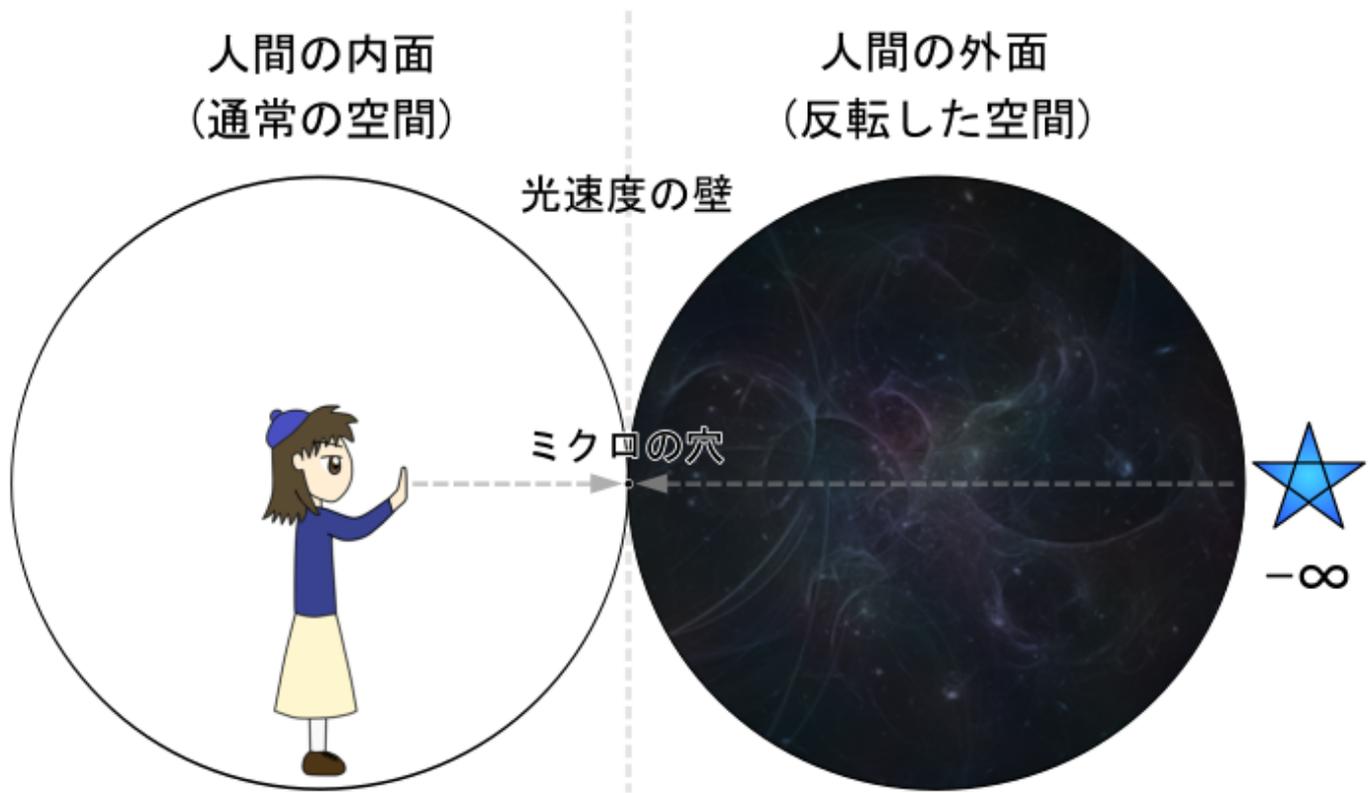
「霊界」となると人が作ったイメージも混ざるのでなんとも言いづらいけど・・・

なににせよ、普通の人間が知覚できない思念や意識があるかもしれない世界がそこにあるわけである。

#### ■ 「あっち側」とのアクセス方法

ニューロロジー的に「あっち側」にアクセスする方法は、  
何度も書いている通り「**反転**」である。

そして、「反転した空間」と「普通の空間」の境目はミクロの大きさの点のようにになっている。  
そのため、前回説明した通り「針の穴に糸を通す」ようにそれを行う。



そんな感じのイメージができるだろうか？

そして、それをさらに応用すると、

「人間でないもの」と意識をつなげて交信みたいなこともできる。

例えば、南米ペルー・アマゾンのシピボ族のシャーマンの間では、

「特定の植物の精霊と契約を結び、植物の意識に繋がること」を「**ディエタ**」と呼ぶ。

これは植物療法やヒーリングに繋がる高度な伝統技術なため、とても奥が深いものだが・・・

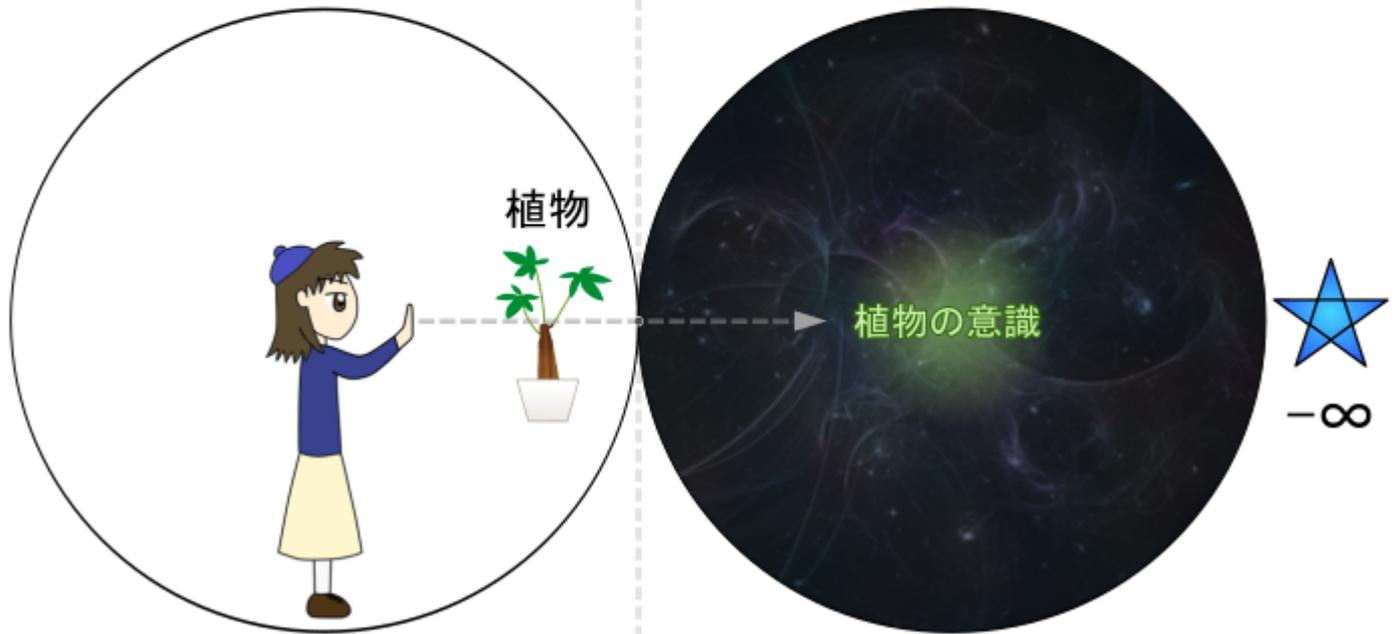
要するに、そんな感じのノリで植物との交信が可能とされている。

[リンク：シャーマン修行：ディエタとは | NATIVE SOON]

そんなノリと「反転」の要領によって、植物の意識と繋がることは可能だろうか？

人間の内面  
(通常の空間)

人間の外面  
(反転した空間)



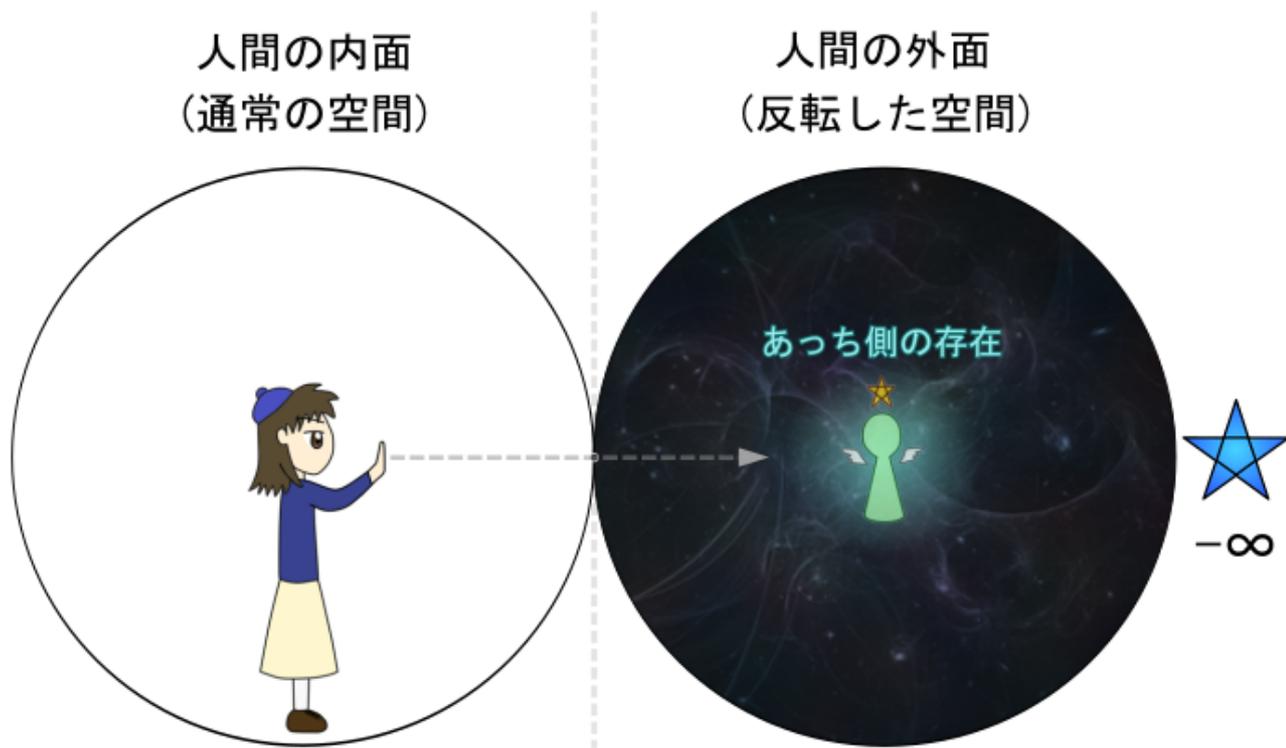
植物相手であれば概ね安全と言えるので、チャレンジしてみるのも良いかもしれない。

### ■ 非物質存在との交流

「あっち側」へアクセスする能力をもっと応用すると、「あっち側」の「人間でないもの」との交流が可能になる。

それがより具体的になると・・・「チャネリング」になるわけである。

特にニューロロジーは確実に「主体」や「自己」と繋がることのできる手段なので、それらに紐づいた存在と繋がるのが容易になる。



一部の界隈で「タルパ」というものが流行っていて、  
『サイキックと研究と分析』シリーズでそれについて書いたことがある。  
「タルパ」とは「人工精霊」とも呼ばれるもので、  
自身の中で自動的に動く人格みたいなものであり、人為的に作り出すこともできる。  
2chのスレッドで始まり、[タルパWiki](#)があり、それを見てやろうとする人がいるのでネットで流行っている。

[リンク：■サイキックの研究と分析(28) ～サイキックとタルパについて～]

それから、以前にブログで「ホ・オポノポノ」についてを書いた。  
これはハワイのシャーマンの伝統を基にしたスピリチュアルな実践技法である。  
自己探求法・問題解決法として様々な効力を発揮するものでもあるが、  
その中で「ウニヒピリ」と呼ばれるインナーチャイルドのようなものと交流したりもする。

[リンク：《内なる子供》と仲良くなる「ホ・オポノポノ」入門]

ちなみに自分 (Raimu) は、具体的なチャネリングをすることはできないが、  
これらのことを利用して、自己の中にある「あっち側」の存在を漠然と感じたり、  
第六感を高めることはしている。

チャネリングというほどではないけど近いことをする能力・・・

自分はこれを**ニアチャネリング能力**と呼んでいる。

スピリチュアルやシャーマニズムとしてニューソロジーを突き詰めていくと、そんな能力とも関わってくるようになると思う。

自分的なニアチャネリング能力によると、

シューマン派発生装置を使うと、とても調子が出るように感じる。

これは強力でコストパフォーマンスが良く、浄化効果もあってオススメなので色んな人に薦めたい。

[リンク：「シューマン波発生装置」のコスパが良いのでオススメできる]

## ■ 「他者」の意識との予期せぬアクセス

さて、自身より外部（あっち側）の意識に繋がる話だと、

最近では「HSP」とか「エンパス」みたいなものもよく聞く。

HSPは、生まれつき非常に感受性が強く敏感な気質もった人で「*Highly Sensitive Person*（ハイリー・センシティブ・パーソン）」の略である。

気疲れしやすく、メンタルが不安定になりやすい気質だともされ、

「繊細過ぎて生きるのが大変な人」みたいな意味で使われることが多い。

エンパスは「共感力、共感力の高い人」という意味である。

並外れた共感力を持っていると、一見するとちょっと離れた位置にいる人でも「相手の感情が、自分の感情のように感じられてしまう」ことが強く起きてしまう。

普通は五感を通じてそうした感情を連想するものだが、

エンパスの人は第六感に通じるレベルでそれが起きるので、非常に強く感じてしまう。

この二つの気質は似ているため、併発するように発生する。

「とにかく心が繊細過ぎる人」がこれらに当てはまるが、

非常に強力な人は外部の意識と繋がってしまうことによって起こるわけである。

これらはどういう原理で起こっているのだろうか？

恐らく、肉体（あるいは、自身が持っている意識体）に、

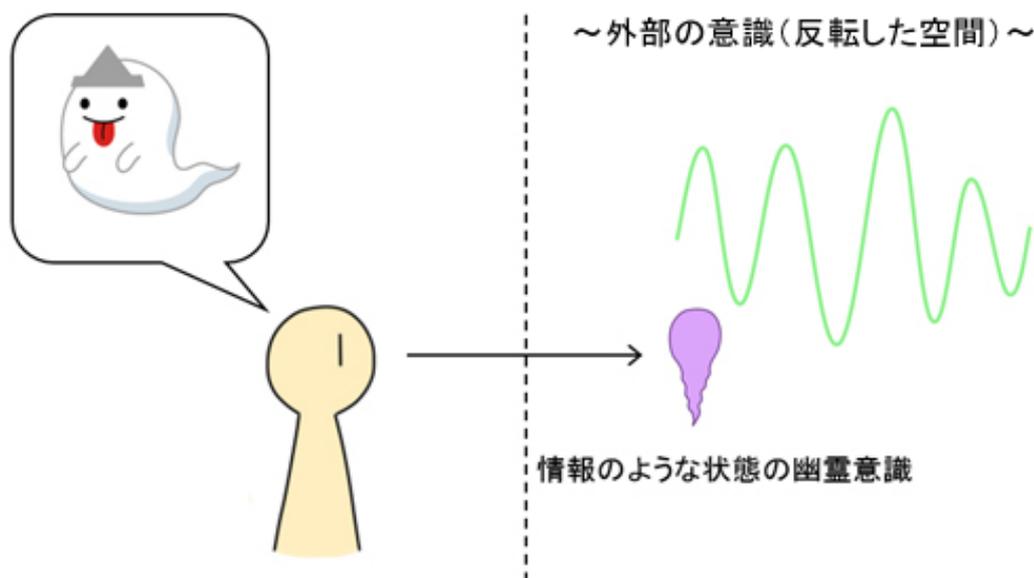
外部とアクセスする機能を持った「穴」のようなものが空いているのではないだろうか？

ニューソロジーでは、能動的な意識によって「反転の穴」を開けていくが、

先天的にそうした穴が開いている人もいるのではないだろうか？

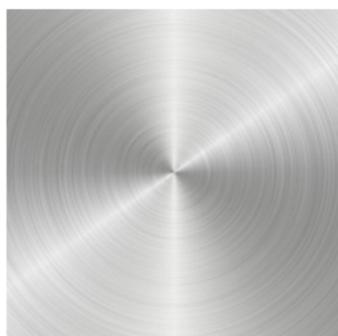
また、これは『サイキックの研究と分析』でも書いたことだが、  
いわゆる「幽霊が見える」系の霊視能力者の場合は、  
潜在的に感じ取った外部の意識が、自動的にイメージに変換されて目の前に現われてくるのかもしれない。

[リンク：■サイキックの研究と分析(15) ～「波の世界」に意識を飛ばせる～]

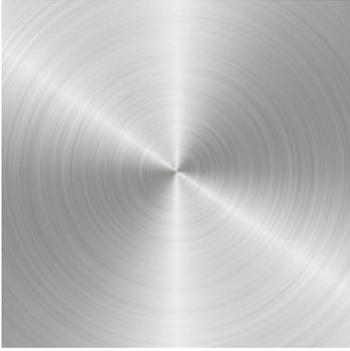


これについては仮説段階だが、そうした理由で起こるのではないだろうか？

こうした靈感や感受性の度合いは、持っている肉体によって異なってくる。  
感度が強いほど、自身の意識体がまるで浸透しやすい素材でできているみたいなものになっている。  
材質で例えるなら、  
鉄、木、スポンジ・・・などでできているようなものである。



感受性の度合いによって、自身の意識体がどのような材質でできているかが異なってくる。



鉄はほぼ全くと言って良いほど影響を受けない。  
むしろ共感力が低すぎてサイコパスめいてることもあるかもしれない。



木は強く影響を受けることはないにせよ、多少は受けることもある。  
木の柔らかさによっては感性が豊かかもしれないし、固いとそこまでではないかもしれない。  
はっきりとした靈感持ちと言える人間は少ないとされるが、それでも大体の人間は何かしらの影響を受けるものなので、木のような材質でできた者が一般的に多いかもしれない。



スポンジはあまりにも影響を受けすぎるような材質と言える。  
そこまで脆さだと自他の境界が曖昧になりやすく、ほとんど病的である。

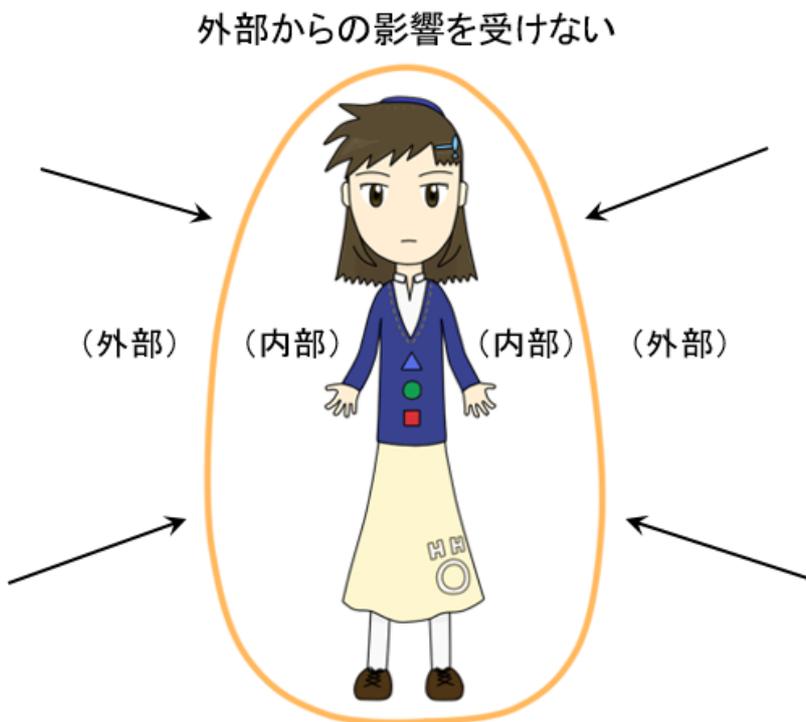
HSP やエンパスといったものについては、  
そんな感じで捉えてみると理解が進むかもしれない。

## ■ 「あっち側」とアクセスしないモード

ニューソロジー的に「あっち側」にアクセスする方法は「反転」だとして書いたが、逆にアクセスしない場合はどうするのか？

「あっち側」の意識は「奥行き」や「ミクロ」にあるので、  
「こっち側」はその逆で「手前方向にいる自分」や「マクロ」にある。

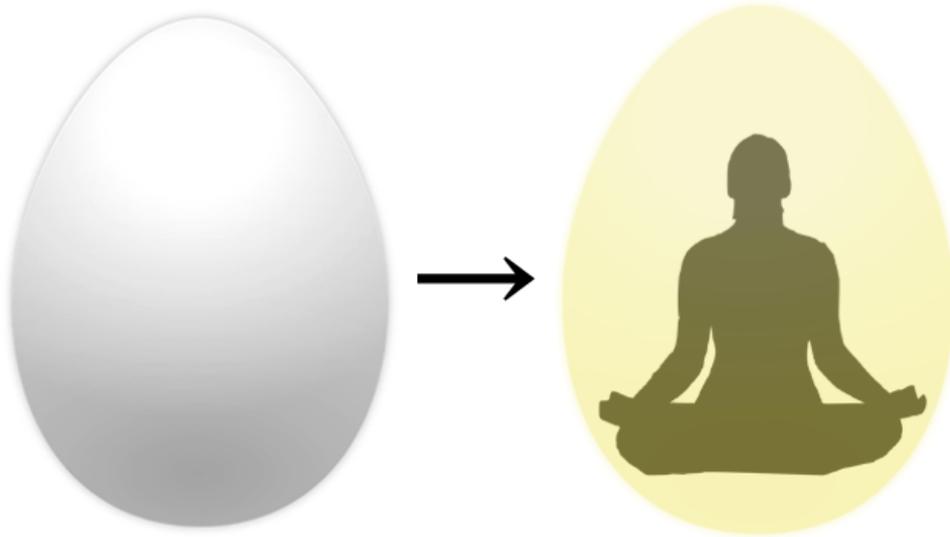
以下のような「マクロ意識のポーズ」の時は、  
外部の意識を寄せつけないようにするのが正解だと思う。



つつい感じたくなることもあるかもしれないが、  
周りが雑多な状況の場合は、なるべく影響を受けない方が良い。

他者の意識の影響を受けやすい肉体を持っている場合は、  
浸透しやすさの原因となってる「穴」を埋めないといけない。

スピリチュアル的なテクニックで、  
卵上のオーラをイメージすると、外部の意識を防ぐバリアーを張ることができるので、  
他者の意識の影響をあまりにも受けやすい人はそうしたイメージを練習するのもオススメである。



このように「あっち側とアクセスしないモード」も必要なため、  
ニューソロジー的には「アクセス用の穴は能動的に空けること」と「あっち側とこっち側のメリハリ」が大事になってくると思う。

HSP やエンパスの対策の参考になるだろうか？

### ■ 霊能者とは何か？

霊視能力とか霊を扱う能力とか・・・

俗に「霊能力」と呼ばれるものについてはいまだに謎が多い。

これも意識体に「穴」のようなものが空いている人、ということになるのだろうか？

先天性の霊能力者は徳の高い人が自ら能力を得ていることもあれば、  
遺伝性の病気や障害の類で力を持ってしまうこともあるらしい。

それから『冥王星のオコツト』は、霊や超能力者に関してあんまり明るい見解は持ってないみたいである。

以下、シリウス・ファイルに書かれている実際の交信記録を引用する。

——霊についてももう少し教えていただけますか。

人間の意識が方向を持つときに生み出した精神のカタチに関与されたオリオンとの交差の全く逆のカタチを持つ変化層。

——超能力者とは。

進化の方向が定質に反映されていない。等化が生み出されていないカタチのない次元を交差する力を持つ人間のこと。精神の変換ではなく意識の変換しています。人間が人間の内面（意識に反映されたもの）を等化するというのは位置が核質化してしまうということです。付帯質に変換されて人間が見えない次元を透視することができます。かれらは奇形です。人間が精神における内面（人間の意識と精神）の等化を行うことが必要です。

（交信記録 19911010）

『変換人型ゲシュタルト論』をここまで読んだ人ならなんとなく意味が分かるだろうか？

（ちなみに『付帯質』はノス、『精神』はノウスに近い意味として捉えると良い。）

あまり良い意味で言ってなさそうなのは、その能力の扱いの難しさゆえなのかもしれない。

あるいは、生まれつきの霊能力者のように穴が空いていると、

ニューソロジー的な「あっち側」へアクセスするにおいて、受動的になってしまうかもしれない。

そのため、ニューソロジー的にはなるべく能動的に自身に適した量の「穴」を開けるのが良いのだと思う。

そして、あくまでオコツトが目指すものは、

『変換人型ゲシュタルト論』で説明している『等化』の方向性なのである。

## 34. 次元観察子 $\psi_4$ の話に入ろう

これまでは『次元観察子  $\psi_3$ 』の話をしてきた。

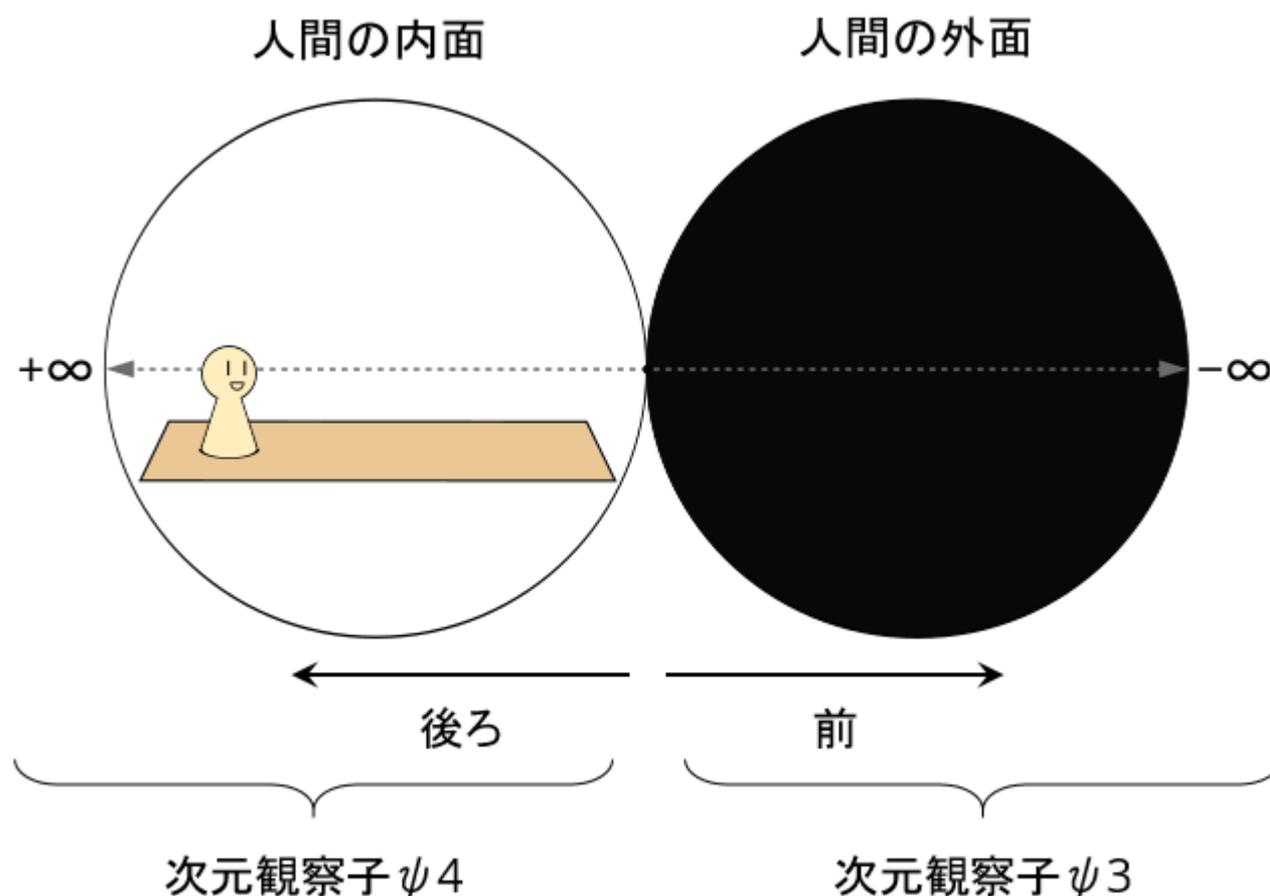
ここからはその次である『次元観察子  $\psi_4$ 』の話をしていこう。

奇数系である次元観察子  $\psi_3$  については「反転した空間」にあるため抽象的な上に重要なので説明にとっても長い手間をかけたが、

偶数系である次元観察子  $\psi_4$  は「普通の空間」にあるもので、それよりも説明が容易なため、サクッと説明して進めたい。

以前にも説明したが  $\psi_3$  が「前」にあるものとした上で、

「後ろ」にあるものが  $\psi_4$  である。



また、 $\psi_3$  と  $\psi_4$  はどちらも「無限遠点」にあるとされている。

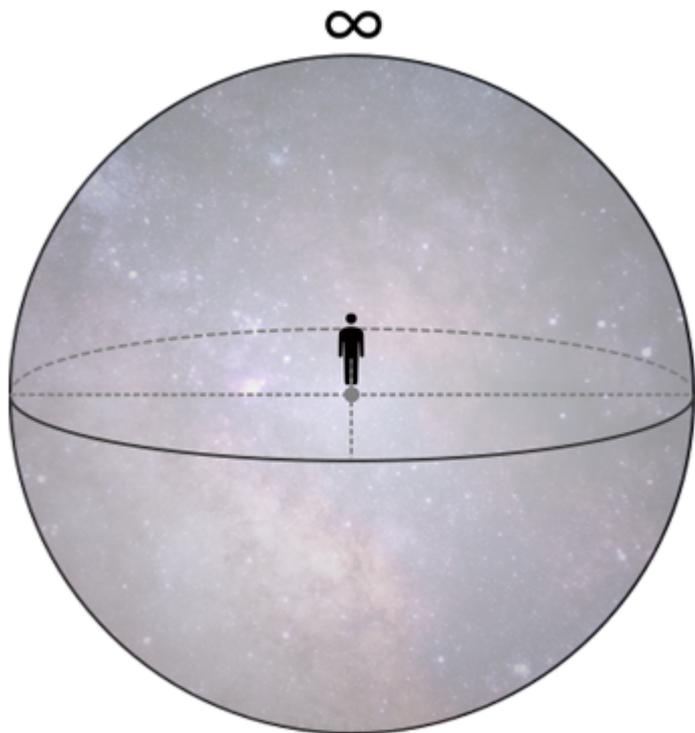
しかし、両者の意味は違う。

$\psi_3$  側の無限遠点は前方向にあり、「反転した空間」もとい「4次元空間」にあるとされていて、これは「 $-\infty$ 」と表記される。

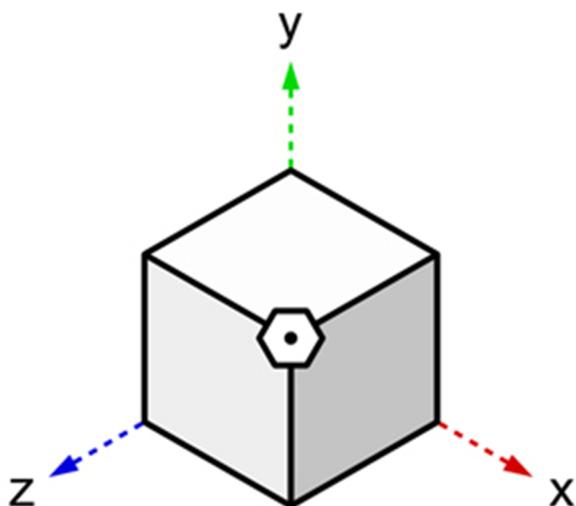
$\psi_4$  側の無限遠点は後ろ方向にあり、これは「 $+\infty$ 」と表記される。

この意味は $\psi_3$ 側の無限遠点よりも単純で、  
「われわれが考える無限の遠さにある点」と同様の意味である。  
つまり、とてつもなく遠いようなものである。

これは次元観察子 $\psi_2$ の「マクロ」が表す「無限」とも近い。



しかし、 $\psi_4$ と $\psi_2$ の違いは、『垂子』の線上を意識して  
「 $\psi_3$ の後ろ方向にあるもの」として捉えるかどうかである。



垂子は上記の「4次元を発見するための図」で立方体に垂直に差し込まれる線の方角にある。  
そこで「4次元」が発見できた時の「後ろ方向の無限遠点」に『次元観察子 $\psi 4$ 』があると理解しよう。

## ■ 主体と客体

また、 $\psi 3$ の無限遠点に『主体』があるように、  
 $\psi 4$ の無限遠点には『客体』がある。

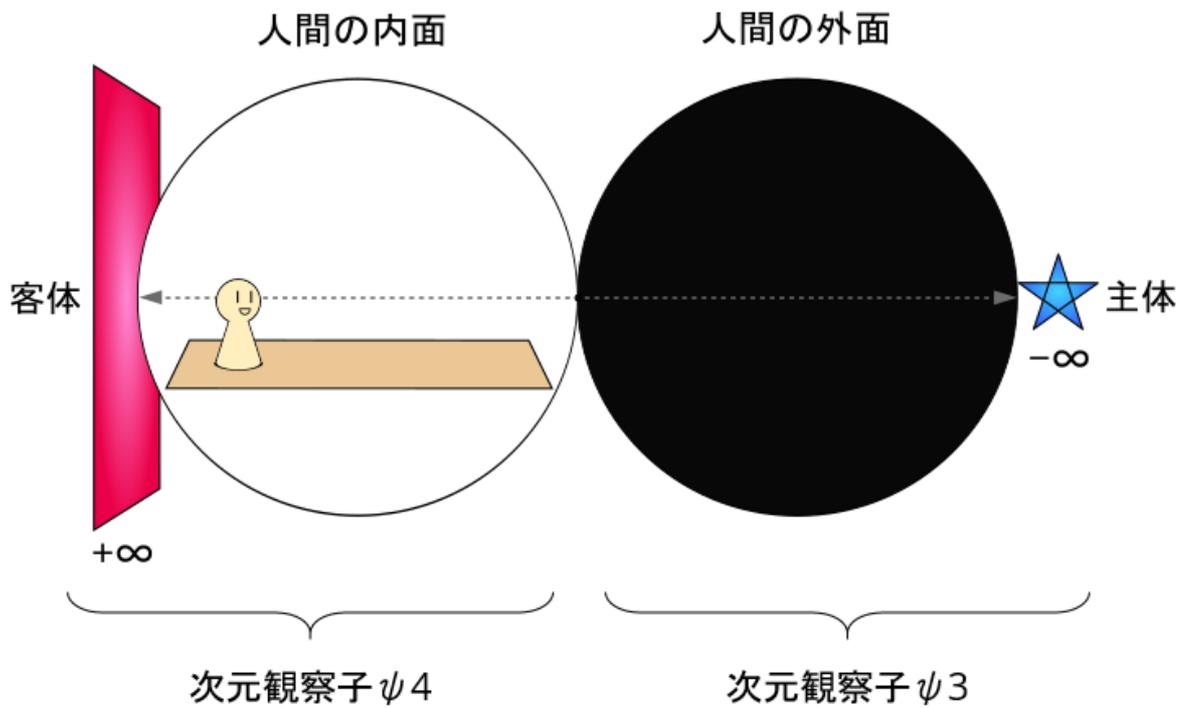
書籍『2013:人類が神を見る日』にも、

「 $\psi 3$ が主体を構成している空間ならば、 $\psi 4$ は客体を構成している空間ということになるのだ」と書かれている。

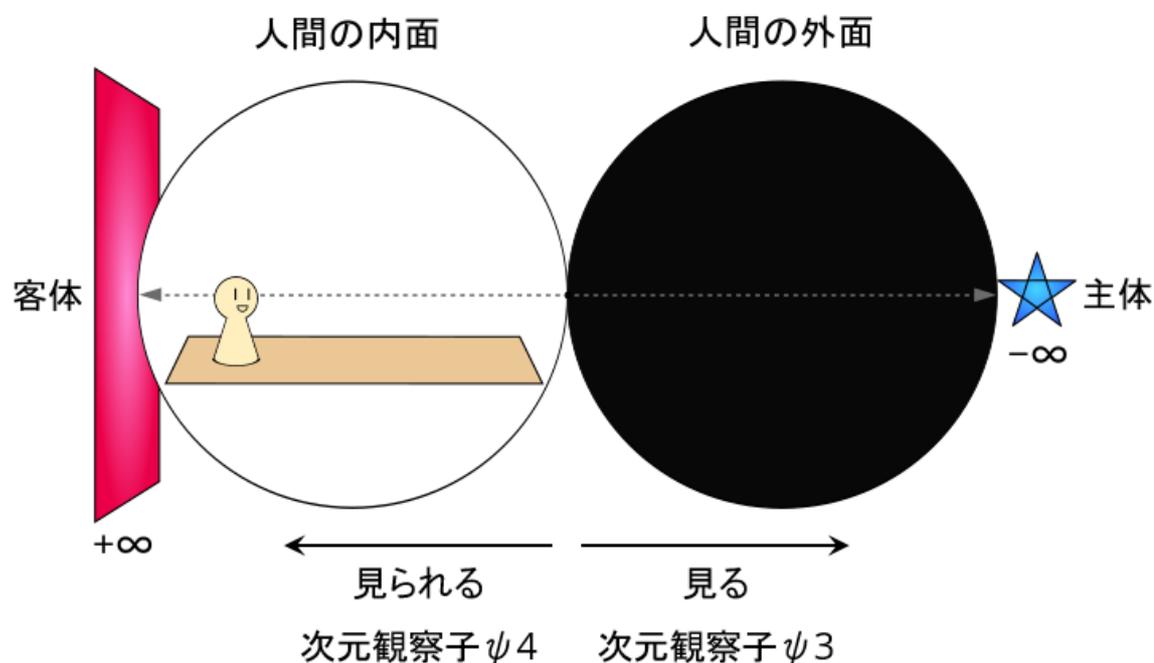
客体を以下のシンボルとして表してみよう。



すると、 $\psi 3 \sim \psi 4$ については以下の図のようになる。



さらに、ψ3は「見る」意識であり、  
ψ4は「見られる」意識であることが重要である



前側は「見る」、後ろ側は「見られる」の関係になっていることも、ニューソロジーの基本となるので覚えておこう。

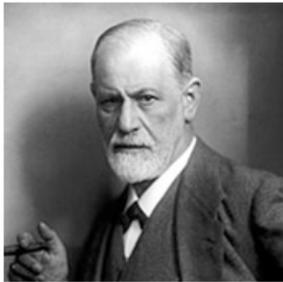
以上の基本を頭に入れれば、  
次元観察子ψ4についてが分かってくると思う。

## 35. 「鏡像段階論」について

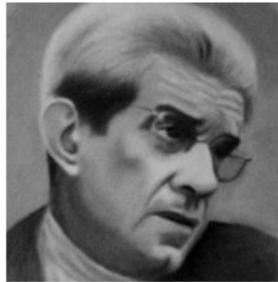
『次元観察子ψ4』をちゃんと理解するために説明しておきたい話がある。  
それはジャック・ラカンの「鏡像段階論」である。

ジャック・ラカンは20世紀に活躍したフランスの精神分析家で、  
ジークムント・フロイトを追って無意識を研究し、  
フロイトの精神分析学を構造主義的に発展させたパリ・フロイト派のリーダー役となっていたほどの人物  
である。

ジークムント・フロイト  
(1856～1939年, オーストリア)



ジャック・ラカン  
(1901～1981年, フランス)



ラカンの言っていたことはフロイトとは違った独自の理論のようなものになっていて、他に類を見ないほど難解で複雑な内容となっている。

そして、その理論とニューソロジーで言われていることも大まかな一致が見られるため、親和性が高いという  
ことでニューソロジーでもよく引用される。

ラカンの理論はコアなマニアには好まれているが、その理論の内容は難解なことでも有名なため非常にムズい。

しかしながら、「鏡像段階論」に関しては割と分かりやすいため、とりあえずそこだけ説明する。

### ■ 「鏡像段階論」についての説明

以前に『「自己」を見つけるために』の項で、

「普段の我々の意識は、基本的に他者の影響を受けることが多い。」

という話があったのを覚えているだろうか？

[リンク：■変換人型ゲシュタルト論(3) ～「自己」を見つけるために～]

そして、その理由の一つに「幼児から成長する際の意識形成の問題」を挙げた。



これをより詳しく説明している理論がラカンの「鏡像段階論」である。

生まれたばかりの幼児は「自分は人間である」という認知は無いし、記憶や経験が何もないため、自分の身体がどんな感じになっているかすら分からず、統一体のように捉えていない。

そこから少し成長して鏡を見ることによって、鏡に写った自分（鏡像）を見ることではじめて自分の姿を認知して、統一体であることに気付く。



あるいは、鏡を実際に見ない場合でも、お母さんやお父さんなどの「他者からの視線」を気にして、「他者から見た自分の姿」を想像する。

それが「鏡像」となって自分の身体についてが分かっていく。

したがって、鏡像段階論においては、「他者から見た自分の姿＝鏡に写った自分の姿」であり、それが人間の自我形成のベースとなる。

一般的には生後6ヶ月から18ヶ月の間にこの過程があるとされているらしい。

## ■ 鏡像段階論と次元観察子 $\psi_4$

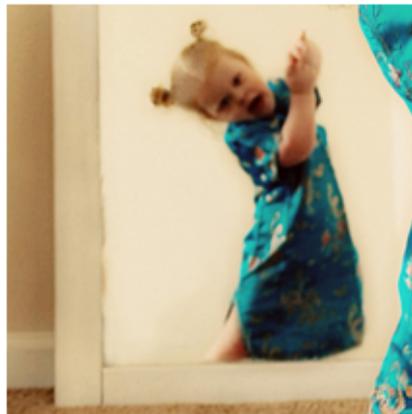
さて、以上の説明の中で鏡に写されている光景を「鏡面」と呼んだ場合、「他者から見た知覚正面」とそれは重なり、次元観察子  $\psi_4$  に紐づく「客体」の在り所とも一致してくる。

つまり、そんな「鏡面」にあるのが次元観察子  $\psi_4$  だということを覚えておこう。逆に「知覚正面」にあるのが次元観察子  $\psi_3$  だったわけである。

知覚正面  
⇒次元観察子  $\psi_3$



鏡面  
⇒次元観察子  $\psi_4$

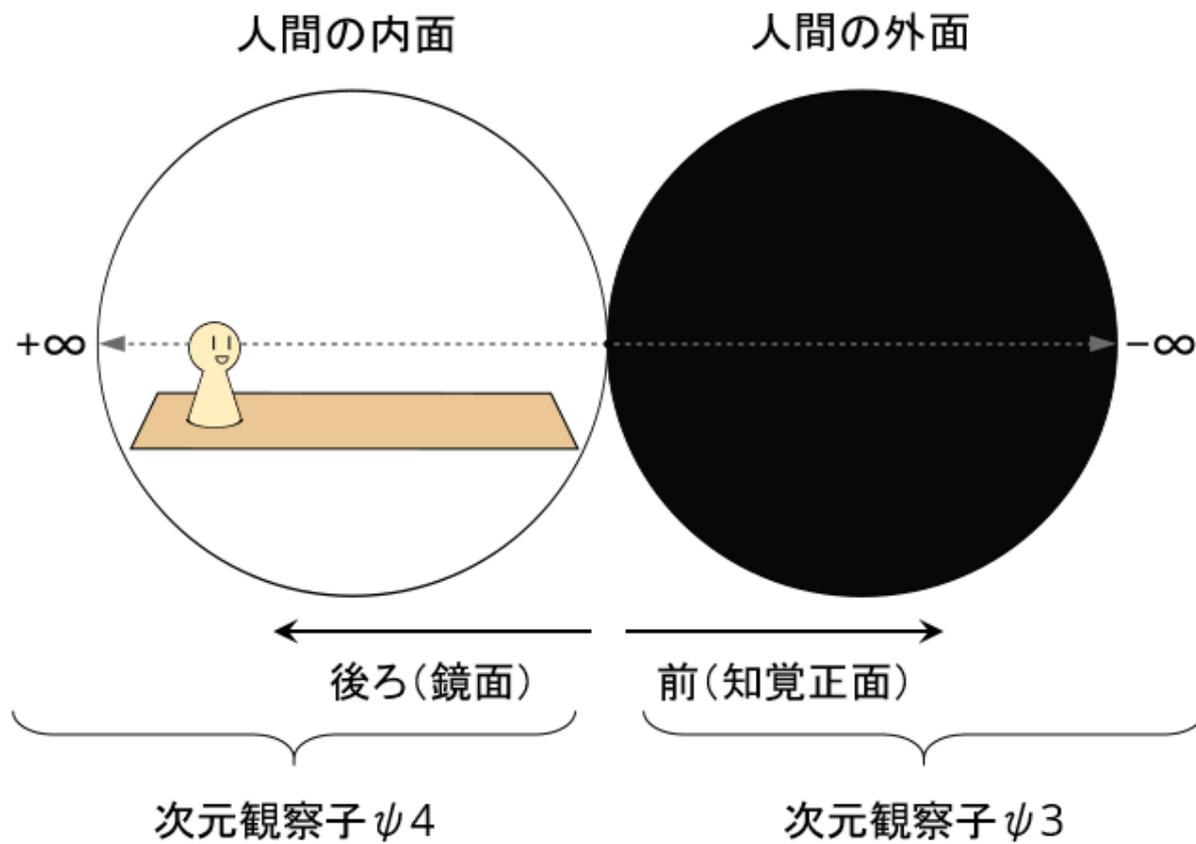


「鏡面」からさらに作られる「鏡像」は、人間の自我のベースになっていて、自我が確立するようになると今度は『次元観察子  $\psi_6$ 』の話になってくるが・・・

とりあえず「鏡面」の段階では次元観察子  $\psi_4$  だと頭に入れておこう。

また、「知覚正面」と「鏡面」の関係もまた、

「前」と「後ろ」の関係になっている。



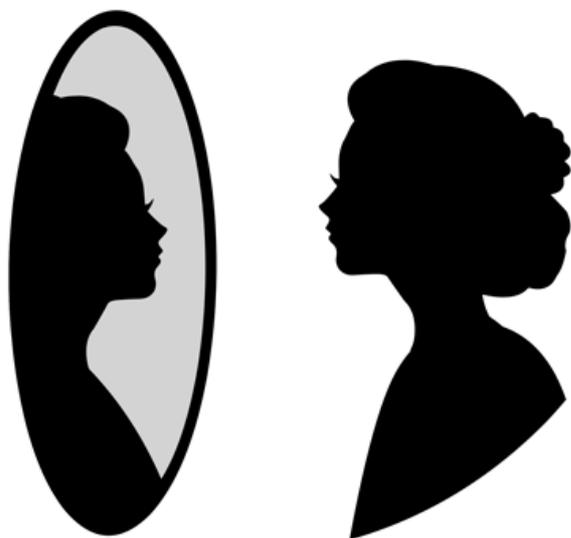
「知覚正面」は変換人型ゲシュタルトの基本だが、  
 一方で「鏡面」は人間型ゲシュタルトの基本になる。  
 それを覚えておいて欲しい。

## 36.化粧で理解する次元観察子 $\psi$ 4

今回は『次元観察子 $\psi$ 4』の理解を深めるべく、  
実生活との絡めてみよう・・・ということで、  
「化粧と次元観察子 $\psi$ 4」についてを考えてみる。

前回、「鏡面」と次元観察子 $\psi$ 4の関係についてを説明した。

日常生活において鏡を意識するシーンは色々あるだろうが・・・  
一番よく意識する行為は・・・「化粧」なのではないだろうか？



主に大人の女性がよくするもので、毎日人と会う場合は毎日やらないといけないこともあると思う。

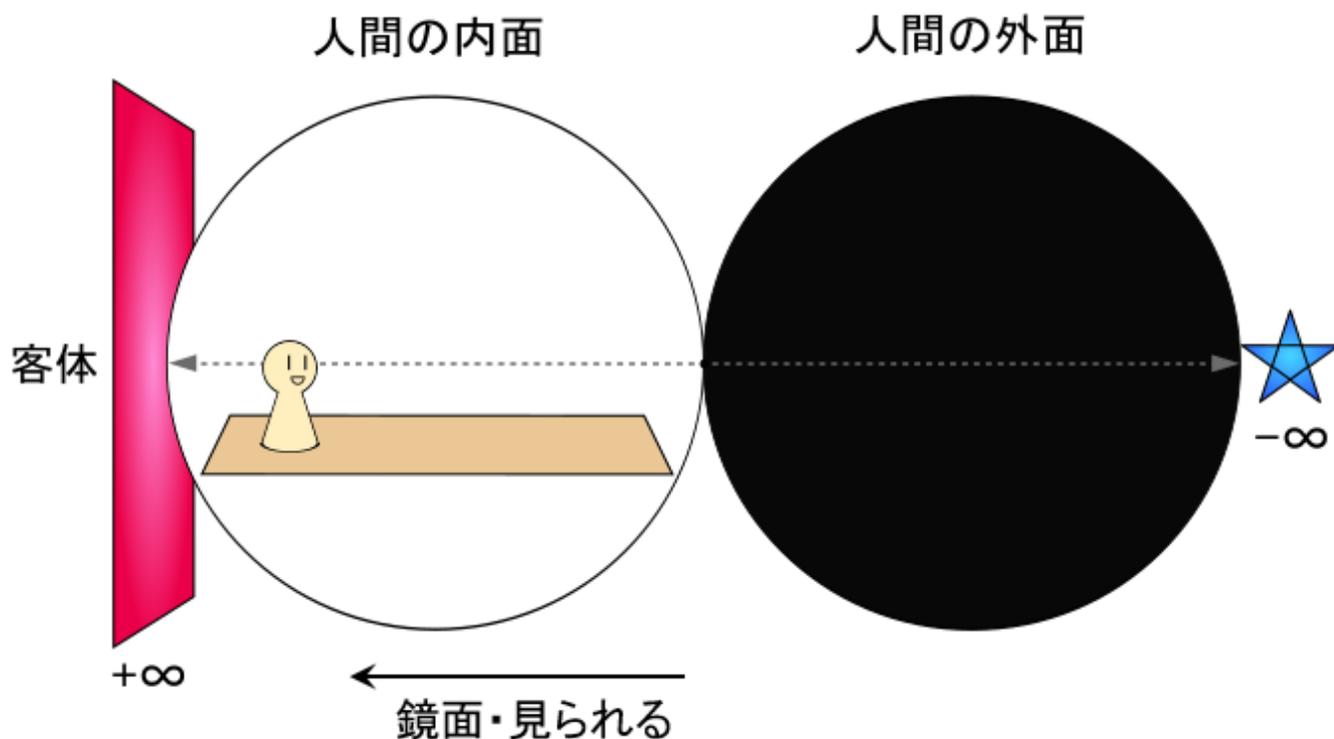
筆者（Raimu）はれっきとした男性なので、日常的に化粧をするわけではないということでちょっと疎いが、これに関して考察してみると良いと思う。

### ■ 化粧と次元観察子 $\psi$ 4 の接点

化粧と次元観察子 $\psi$ 4はどう繋がっているのか？

簡潔に書くと「鏡面をよく眺める行為だから」であり、  
鏡面から作り出される意識が次元観察子 $\psi$ 4になるからである。

さらに次元観察子 $\psi$ 4は「見られる」意識の中にあるため、  
化粧中に「見られる」ことが強調され、  
さらに「綺麗にしようとする」意識まで出てくるようになると、  
より一層、次元観察子 $\psi$ 4の意識へと近づいていくことになる。



化粧の意識と次元観察子 $\psi 4$ はそんな感じで繋がっているのである。

なんとなく分かってきたらどうか？

この問題は男性の場合はぼちぼちで、男性でも化粧まではしないものの、

ヒゲに沿ったり髪を整えたりする時に鏡を見て自分の顔を意識するかもしれない。

ただ、ヒゲに関しては物理的に綺麗にすることを意識すれば良い話であったりする。

髪型に関しては確かにこだわると美意識が必要になってくるが・・・その辺は個々の好みによるものもある。

とはいえ、どちらかというとな女性の方が強いものが「化粧の意識」だと思う。

さらに「全身を整える」のレベルまでいくと、それより上位の『次元観察子 $\psi 6$ 』とかの話になるが、「とりあえずの見た目」のレベルだと次元観察子 $\psi 4$ が重要となる。

分かりやすく言うと、インスタやSNSにでも写真だけアップして、パッと見て綺麗ならそれで良い次元が「鏡面の次元」とも言える $\psi 4$ の次元ということになる。動画で全身まで載せると $\psi 6$ の次元になる。

また、化粧と同様の話で、次元観察子 $\psi 4$ に付随する意識の世界は「なんとなくパッと見て美しいもの」がもてはやされるものなので、

次元観察子 $\psi 4$ の意識は「美意識」も絡んでくるものになる。

## ■ 男女差が出る話

つまり、化粧を日常的に行う女性は次元観察子 $\psi 4$ の意識に没頭しやすい・・・ということになる。

そうなると偶数系（他者側）に陥りやすいことにもなる。

だから男女差が出る話になるのだろうか？

そう。ニューソロジー的に男女のこうした違いは絶対に起きるものなのである。

もっともこれは奥が深い問題であり、一方で女性の『感性』がむしろ奇数系の認識に有利に働くこともある。

男性の場合は『思形』の力によって、別の理由で偶数系に陥りやすいこともあるし、一方で次元観察子 $\psi 3$ 的な意識に没頭することができれば奇数系の認識に有利かもしれない。

化粧に没頭できる美容系男子の場合は・・・『思形』の力と「見られる」の意識が両方とも強いことがあり得るので・・・これはとても偶数系（他者側）に陥りやすいと思う。

それが良いとか悪いとかはとりあえず置いといて・・・

まあ、男だろうと女だろうと、結局は $\psi 3$ 的な意識と $\psi 4$ 的な意識のどっちが強いのか、どういう個性を持っているか次第になる。

このようにニューソロジーと男女論の関係もめちゃくちゃ奥が深く、

次元観察子 $\psi 3$ と次元観察子 $\psi 4$ においても早速こうした男女差の問題が出てくる。

観察子と男女の関係をつきつめるともっと奥が深い・・・話が長くなるのでとりあえずこの辺にしておこう。

次元観察子 $\psi 4$ の意識と化粧の意識を絡めて考えると分かりやすいのではないだろうか？

偶数系の観察子の話は、奇数系と違って日常的に意識する側なので、普段の生活でやっていることから理解することができる。

## 37. 知性と情動の対化

前回の化粧の話で『次元観察子 $\psi$ 4』は「美意識」にも絡んでくることをちょっと書いた。それとも関連して、構造の話に付随するイメージの話をしていこう。

次元観察子 $\psi$ 3と『人間の外面』は「夜の世界のイメージ」となっていることを、『夢の世界のビジョン』の項で以前に説明した。

[リンク：■変換人型ゲシュタルト論(30) ～夢の世界のビジョン～]

一方で、次元観察子 $\psi$ 4と『人間の内面』は「昼の世界のイメージ」ということになっている。

OCOT情報も、昼と夜は「対化」の表現だと言っていた。昼は人間の内面で、夜は人間の外面の現れだつてこと。確かに、人間は昼間は客観世界（延長）の中で生き、夜は主観世界（持続）に生きるのが基本。これは表相が等化された世界と、表相を中和した世界（表相の等化を無効にする）の関係とっていいかもしれない。

『人間の内面』は昼のように明るい世界なので、綺麗なものが映えるようになるわけである。

それは、日光を存分に受けて輝く花のようなものだろうか？



また、次元観察子 $\psi$ 3は惑星だと「水星」が関係してくる話をした。 $\psi$ 3を認識すると、その上位にある『大系観察子 $\Omega$ 3』が微かに分かってくるからである。



一方で、次元観察子 $\psi 4$ は「金星」が関係してくると言うことができる。

これもつきつめると金星の本質は『大系観察子 $\Omega 4$ 』だったり、『次元観察子 $\psi 10$ 』だったりもするのだが・・・

次元観察子 $\psi 4$ とも紐づくので、そのように理解しておこう。



西洋占星術的な金星の意味は「美」「魅力」「恋愛」「喜び」「快楽」などである。

これらは「見られる」ことを先手とした人間の心から生じるものだったり、受動的な意識だったりするため、次元観察子 $\psi 4$ から出てくる付随イメージとして紐づけても良いと思う。

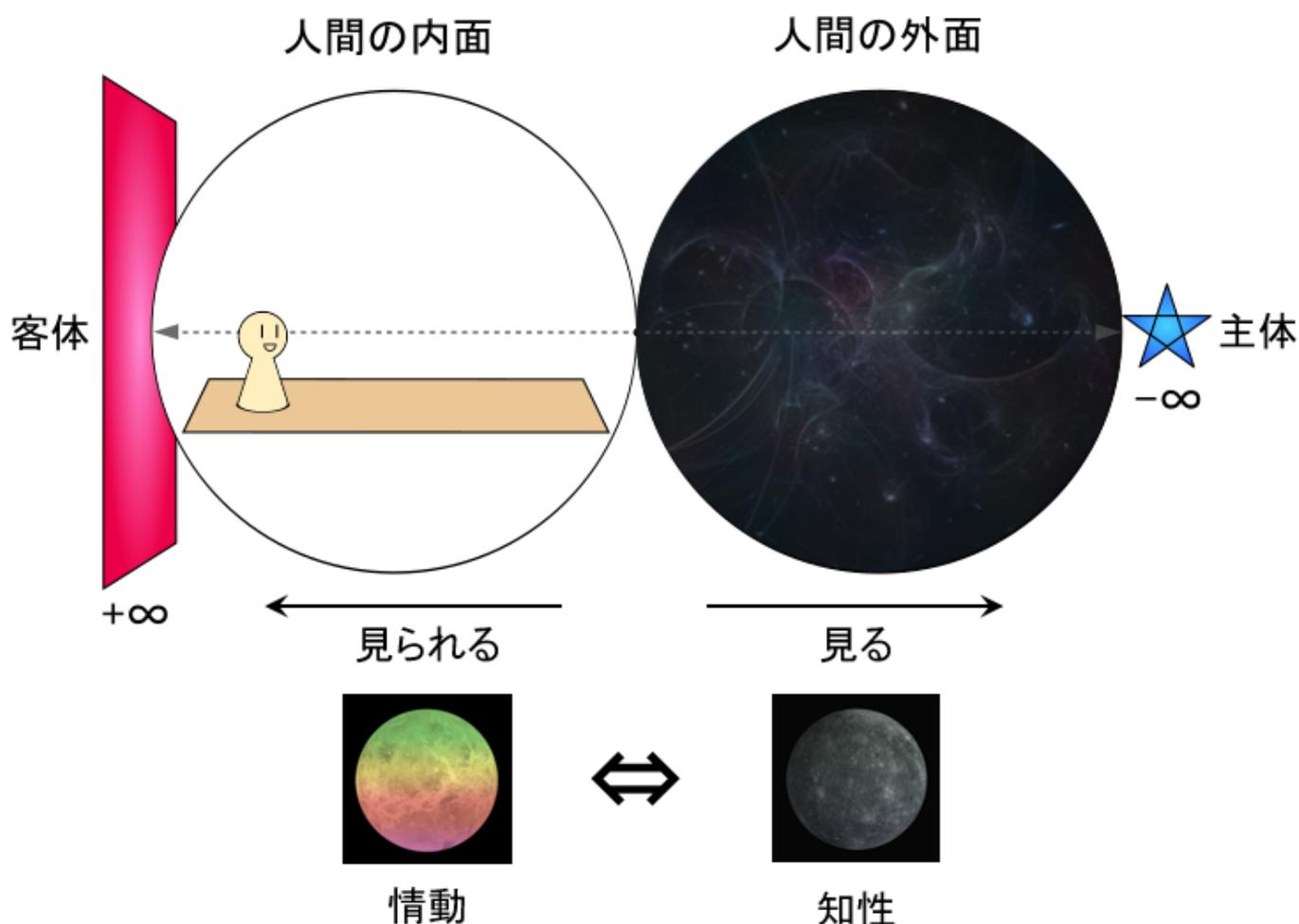
### ■ 水星と金星、知性と情動の対化

占星術における金星の意味は全体的に「情動」から発しているものなため、「情動」を象徴するものと言うこともできる。

一方で、水星は西洋占星術では「知性」を象徴するものだと言われている。  
 また、水星の知性は「能動的なもの」であり、金星の情動は「受動的なもの」だと言することができる。  
 ヌーソロジーの $\psi 3$ と $\psi 4$ の関係は「見る」と「見られる」の関係になっているわけだが、  
 「見る⇒知性で動くこと」「見られる⇒情動で動くこと」に繋がっていく場合、  
 「 $\psi 3$ と $\psi 4$ の対化」は「知性と情動の対化」にも付随してくるようになってくる。  
 また、 $\psi 3$ と $\psi 4$ の対化と連動して、それより上位の「 $\Omega 3$ （水星）と $\Omega 4$ （金星）の対化」が出てくること  
 にもなる。

つまり、次元観察子 $\psi 3$ と次元観察子 $\psi 4$ の対化を扱っていくと、  
 能動的な知性と受動的な情動の対化が繋がって表れてきて、  
 それは大系観察子 $\Omega 3$ と大系観察子 $\Omega 4$ の対化にもなるのである。

（つきつめると、それらは『 $\psi 9$ : 思形』と『 $\psi 10$ : 感性』の関係とも繋がってくるのだが・・・それはまた別の話・・・）



ヌーソロジーではそれら双方を『等化』していくわけだが、  
 「知性」と「情動」を能動的に使いこなすような意識と紐づいてくるため、その対の関係をよく理解して  
 おこう。

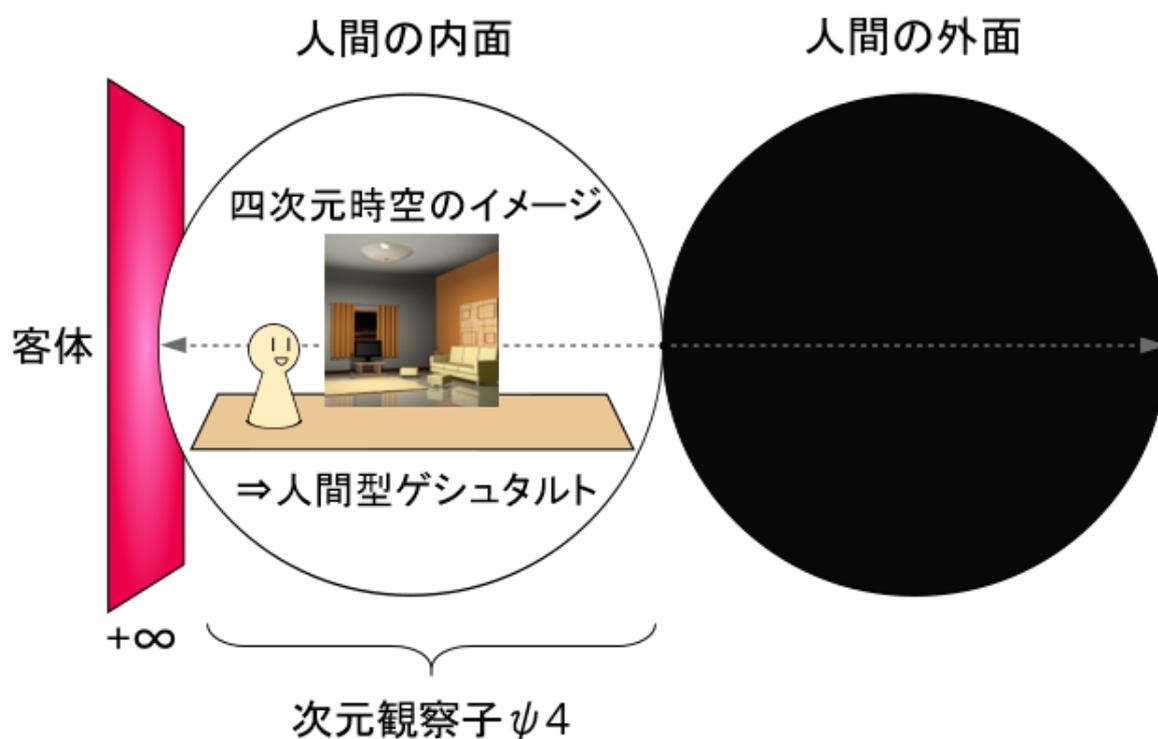
## 38. イメージの世界を脱却できるか？

『次元観察子 $\psi 4$ 』は「見られる」意識にあり、「鏡面」がベースになっていると、これまで説明していった。そして、そこから派生して「イメージ」が作られることが重要であり、その「イメージ」が『人間の内面』となる。

ヌーソロジーで『人間型ゲシュタルト』と呼ばれる四次元時空のイメージもそうしてできている。



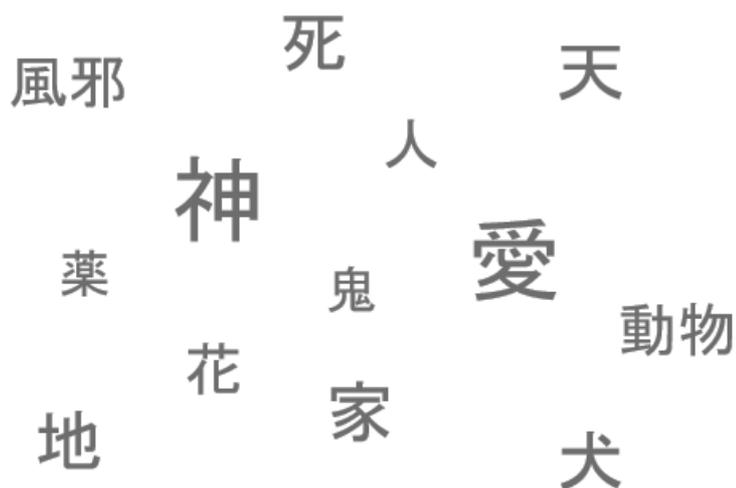
(四次元時空のイメージ)



したがって、次元観察子ψ4は「イメージ」の苗所として機能する特徴もある。

そして、「鏡面」の他にも「イメージ」を作る元となるものがある。

それは・・・「言葉」である。



そもそも、人間は動物の中でも、言語を扱うように進化した特異な動物であり、それによって他の生物を圧倒するような文明を作りあげていった。

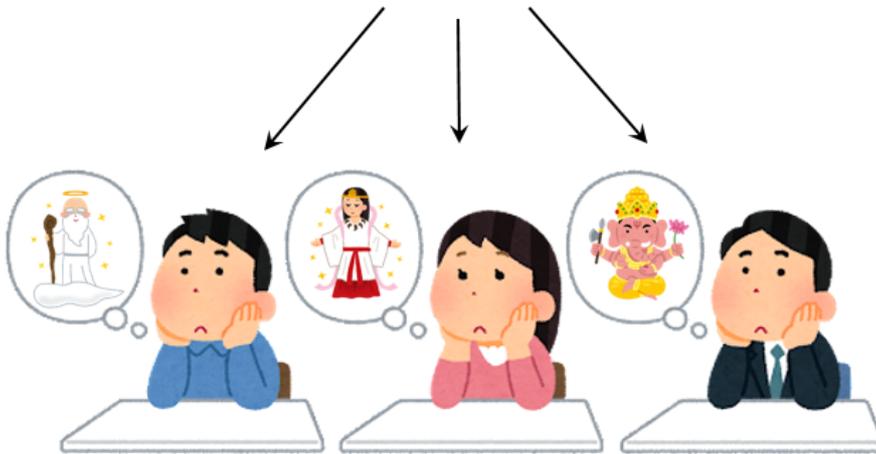
人間が使う言語の中にある様々な言葉も、イメージを作り上げて、そこに固執させるものとして機能する。

星の数ほどある人間が作った無数の言葉のうち、最も抽象度が高く最もイメージが難しい二大概念は、

「神」と「愛」の二つなのでは？と思う。

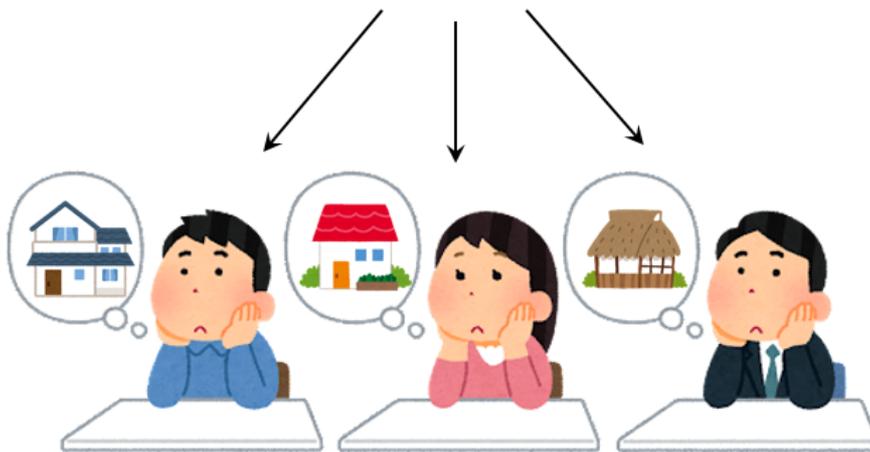
「神」といった言葉を聞いた時、人は何かをイメージするし、そのイメージは人によって異なる。

# 神



「家」みたいな言葉ぐらい具体的であれば、  
イメージもしやすいだろうが、やはり人によって微妙に異なるだろう。

# 家



人間はそんな感じでイメージをベースにして世の中を捉えているし、あらゆる思考のベースが自身の経験から浮かんだイメージに基づいていることもある。

また、自分が捉えたイメージが他人と同じとは限らないし、その違いには気付きづらい。

そして、自分が捉えたイメージが真実とは限らないし、エゴによって作られた偽造のようなものかもしれない。

ヌーソロジーのような真理に向かう道は、その偽造に気付く道でもある。

## ■ ヌーソロジーと言語学

ヌーソロジーは哲学なので、既存の西洋哲学が絡んでくることは言うまでもないが、この辺は特に言語学関連の哲学が絡んでくる。

近代言語学で有名なフェルディナン・ド・ソシュールは

19 世後半紀頃に活躍し、「シニフィアン」と「シニフィエ」という概念を提唱した。

シニフィアンは「記号表現」と訳されるもので、伝えたいことを言葉として表す際の表記や音声に該当する。

シニフィエは「記号内容」と訳されるもので、シニフィアンを受けて連想されるイメージや、その意味に該当する。

ソシュールのこうした哲学は、後にジャック・ラカンも影響を受けて、

ラカンの精神分析学でもシニフィアンとシニフィエについて扱われている。

シニフィアン  
(記号表現・言葉)

シニフィエ  
(記号内容・イメージ)

家



人が何か言葉を受けた場合、シニフィアン（記号表現）として表れているものを受け取り、その意味をシニフィエとしてイメージするが、

その言葉が伝えたい本来の概念と、自身のイメージしたものが異なっていることはよくあることである。

先ほども説明した通り、人が言葉を受けてイメージするものは人によって微妙に異なるため、正確なその本来の意味はそう簡単に分かるものではない。

特に「神」や「愛」のように抽象度の高い言葉ほどそうになってしまう。

そうした時、各自の浮かんだイメージが「その言葉が意味するもの」と捉えて、そのイメージに固執してしまう。

また、そうしたイメージには「それが真実であって欲しい」という欲望や情動がつきまとい、情動によって信じたいものを決めることもあるし、情動によってイメージから抜け出せないこともある。

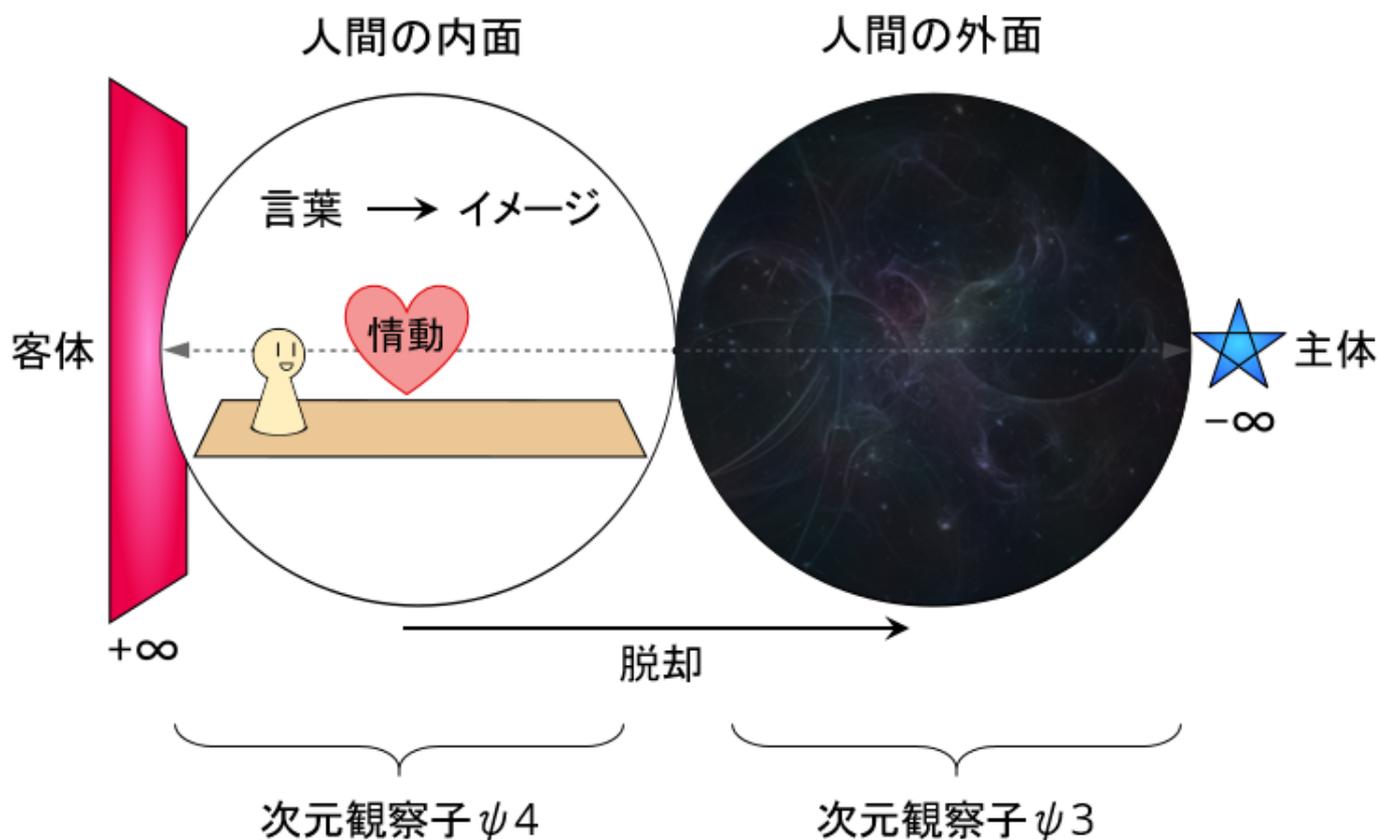
# 神



人間は次元観察子 $\psi$ 4のように受動的な意識でイメージを扱うのが普通であるため、  
前回説明したような「情動」がそこに結びつく。  
さらには利己的な欲望や自尊心もそこに結びつき、  
頑固なゲシュタルトを形成することが一般的によくある。

受動的な意識でいると、言葉が作るイメージの強固なゲシュタルトに固執するのが普通の間人であるため、言語によって人間型ゲシュタルトが強固になることが哲学では一般的な原理とされる。  
加えて、そこに欲望や情動が重なると一層強固になる。

そこで、ニューソロジー的に『次元観察子 $\psi$ 3』や『人間の外面』に向かうと、  
そこから脱却する方向性が開かれるわけである。



『変換人型ゲシュタルトの本論に入る前に』の項で、

「 $\psi_3$  が分かると見た目に騙されずらくなるので有意義なことになる」とちょろっと書いたが、それはイメージの固執から脱却する知性を得ることができるからである。

次元観察子 $\psi_4$  と次元観察子 $\psi_3$  の関係から、  
 そうしたことにまで気付くことができれば良いと思う。

## 39. $\psi_3 \sim \psi_4$ までを整理しよう

「次元観察子 $\psi_3 \sim \psi_4$ 」について一通り説明してきた。  
ここまでの内容を一旦整理しよう。

まず、『次元観察子 $\psi_3$ 』を認識しなければ、  
その『反映』である『次元観察子 $\psi_4$ 』を能動的に意識することはできない。

$\psi_1 \cdot \psi_2 \cdot \psi_3 \cdot \psi_4$ は、  
それぞれ『負荷』・『反映』・『等化』・『中和』の関係になっていて、  
4番目の『中和』は3番目の『等化』の『反映』と言うこともできるので、  
まずは3番目の理解をしっかりとやる必要がある。

あらゆる方法を駆使して次元観察子 $\psi_3$ を定着させよう。

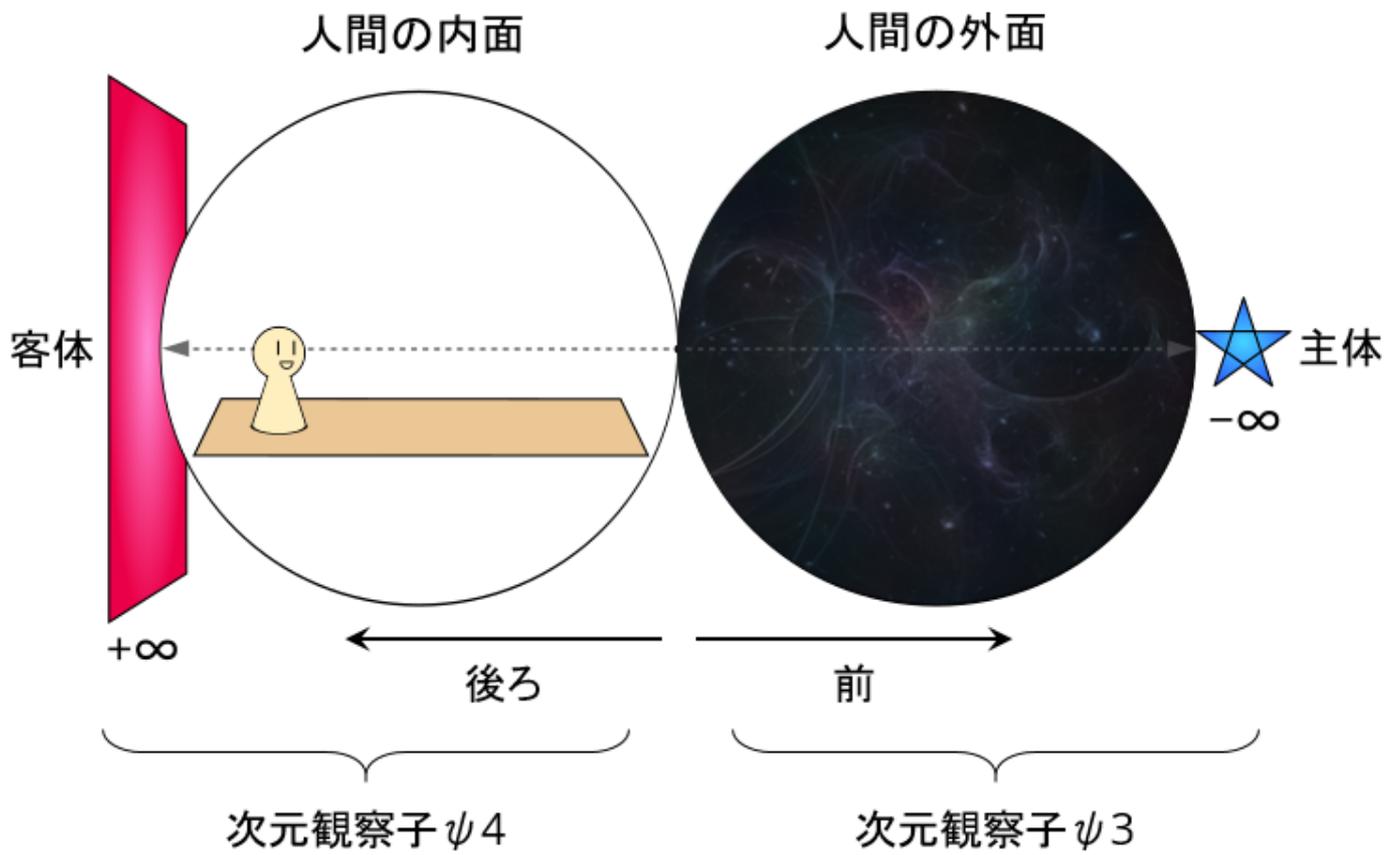
[リンク：■変換人型ゲシュタルト論(29) ～「外面（前）」と「内面（後ろ）」のおさらい～]

次元観察子 $\psi_3$ がある「知覚正面」の垂直方向にあるものが『垂子』である。  
その前方向の無限遠点には $\psi_3$ が紐づいていて、  
逆に、後ろ方向にある無限遠点には $\psi_4$ が紐づいている。

無限遠点と言っても、垂子次元の感覚だと距離はあまり関係ないため、  
 $\psi_3$ は単に「前にある」ように、  
 $\psi_4$ は単に「後ろにある」という理解でも良い。

それから、前側にあるのが『人間の外面』。  
後ろ側にあるのが『人間の内面』である。  
また、前方向の無限遠点に『主体』があり、  
後ろ方向の無限遠点に『客体』がある。

それらの仮像を図にすると以下のようなになるわけである。



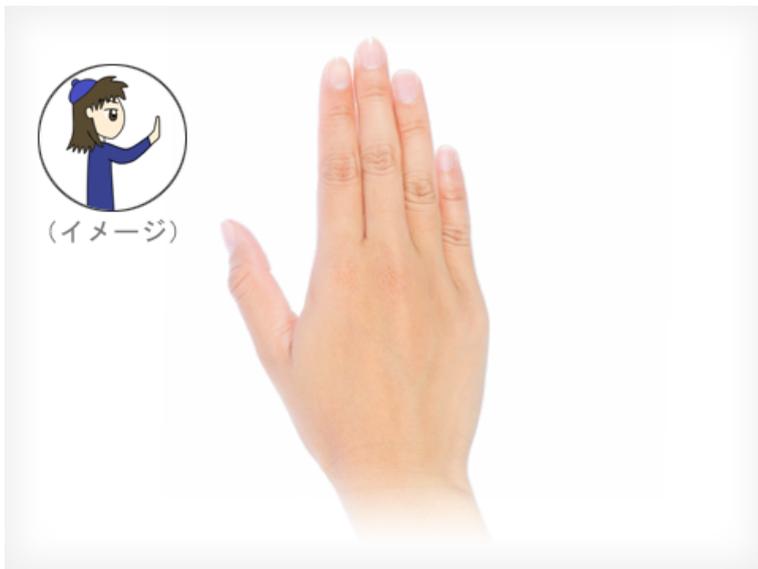
これをさらに、自身の知覚正面において行う。

次にあるヌーソロジーたんのように「平手出しの構え」をした場合、平手を出した状態の知覚正面に『主体』と『次元観察子ψ3』がある。



※「前」を先手とした場合

それから、平手を出した状態で「手前」と「手前より後ろの空間」を意識した場合、  
『客体』と『次元観察子 $\psi$ 4』がある。



※「後ろ」を先手とした場合

とりあえず、それらが整理できたら先に進んでいこう。

## 40. 「 $\psi_3 \sim \psi_4$ 」のキアスム

『次元観察子 $\psi_3$ 』と『次元観察子 $\psi_4$ 』についてこれまで説明してきた。

当たり前の話だが、これは自分だけが持っているものではなく、自分以外のたくさんの人達もそれぞれ持っているものである。

$\psi_3$ と $\psi_4$ は「主体」と「客体」を構成しているわけだが、100人の人がいたらそれぞれが固有の「主体」と「客体」を持っているように、 $\psi_3$ と $\psi_4$ は自分だけではなく色々な人がそれぞれ持っている。

つまり、自己にとっての $\psi_3$ と $\psi_4$ だけでなく、他者にとっての $\psi_3$ と $\psi_4$ も存在する。

他者にとっての $\psi_3$ と $\psi_4$ は「他者側の観察子」ということで、 $\psi^*3$ と $\psi^*4$ という記述で説明される。

( $\psi^*$ はプサイスターと読む)

他者側の観察子には「\*」をつけるのがニューソロジーの決まりであり、ニューソロジーを深掘りして学習していくと他者側の観察子の概念も出てくる。

それらを踏まえると、

「自己にとっての $\psi_3$ が、他者にとっての $\psi^*4$ の位置と重なり、自己にとっての $\psi_4$ が、他者にとっての $\psi^*3$ の位置と重なる」

という原理がある。

これを言い換えると、

「自己にとっての見える世界が、他者にとっての見えない世界であり、自己にとっての見えない世界が、他者にとっての見える世界である」

となる。

この意味が分かるだろうか？

今回はこれについて説明していきたい。

### ■ 他者の瞳孔と自己の瞳孔

自己と他者がシンプルに向き合った時、その二人がそれぞれ見ている景色がある。

ちょうど、[『視点変換3Dルーム』](#)で視点の切り替えができるので、それを使って説明しよう。

[リンク：「視点変換3Dルーム」というのをUnityで作りました]

視点変換3Dルームの2番目の部屋には誰がいるようになっている。

自分をA君として、この人をB君としよう。



まずは普通に映っている画面は「自分から見た景色」なので、「A君の視点」である。

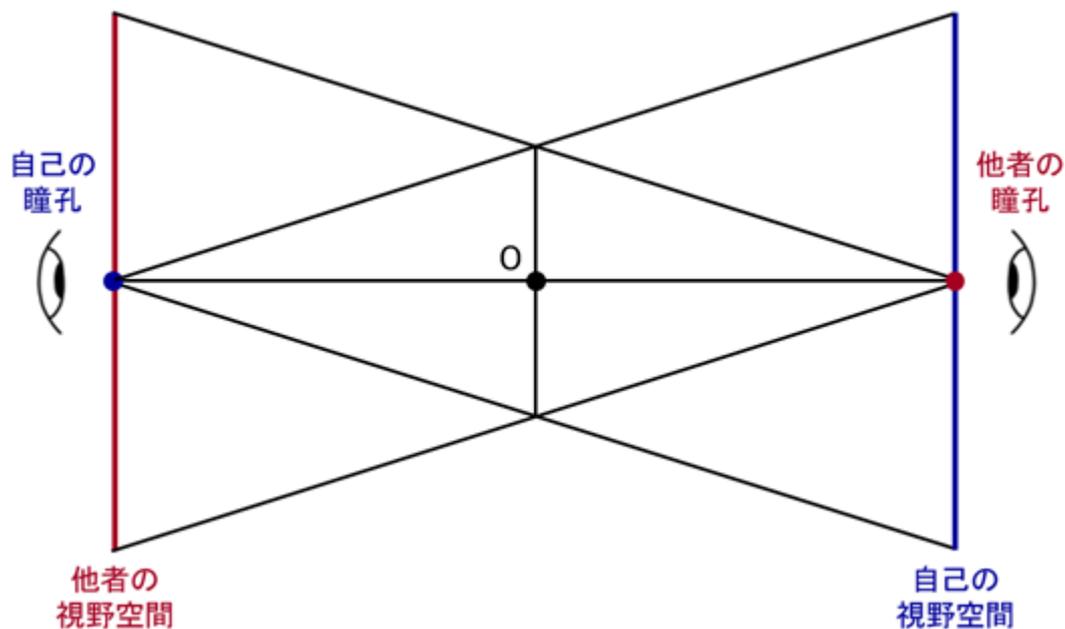
そこで「Please push space key.」というメッセージの通りに Space キーを押下すると、視点がB君に変わって「B君の視点」になる。



その時、自分の顔はB君からの視点になった時に初めて見ることができし、「自分の顔の後ろ側にある背景」もB君からの視点にならないと見えない。逆に、B君の顔は自分から見ることができし、B君の後ろの背景も見ることができし。しかし、B君の視点だとそれらを見ることができない。

ここで、B君の「後ろ側にある背景」をB君にとっての「見えない世界」、B君の「前側にある背景」をB君にとっての「見える世界」とした場合、A君からの視点と「見える世界」と「見えない世界」の関係が逆になっている。

また、A君の視点は「自己の瞳孔」で、B君の視点は「他者の瞳孔」とした場合、お互いの視野空間の関係は以下の図のようになっている。



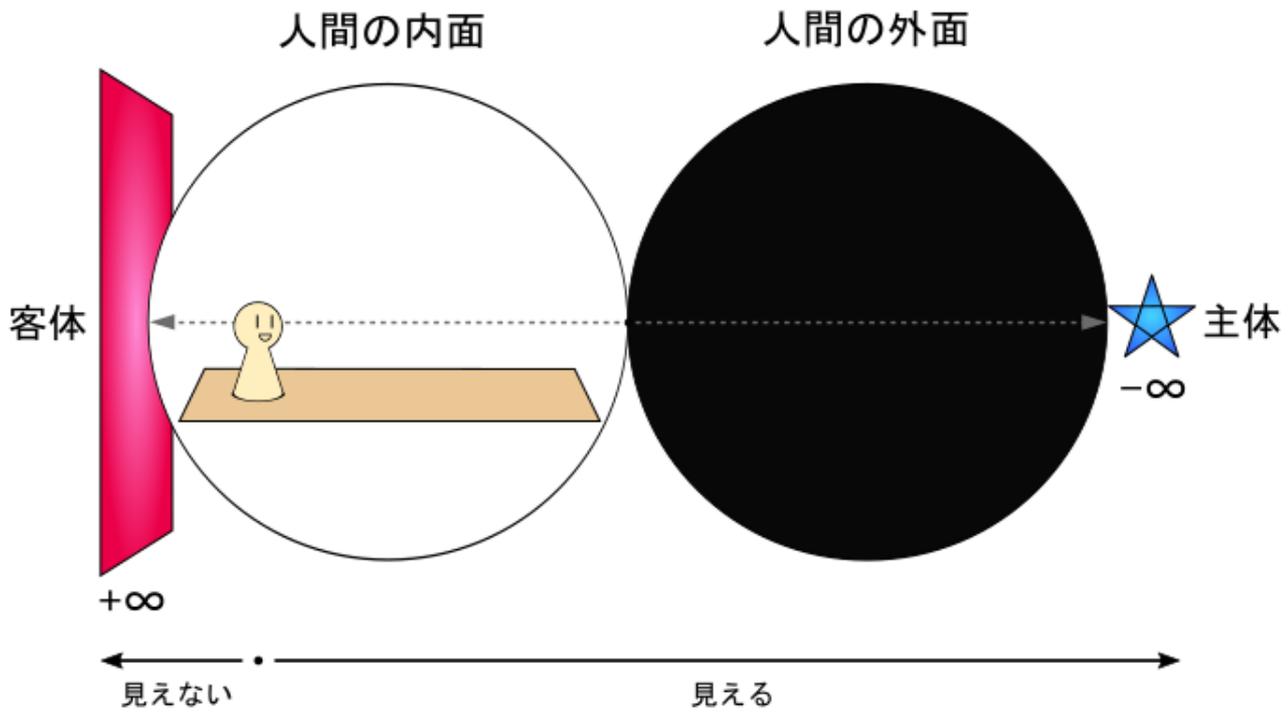
なんとなく分かってきたらどうか？

### ■ 図示して整理する

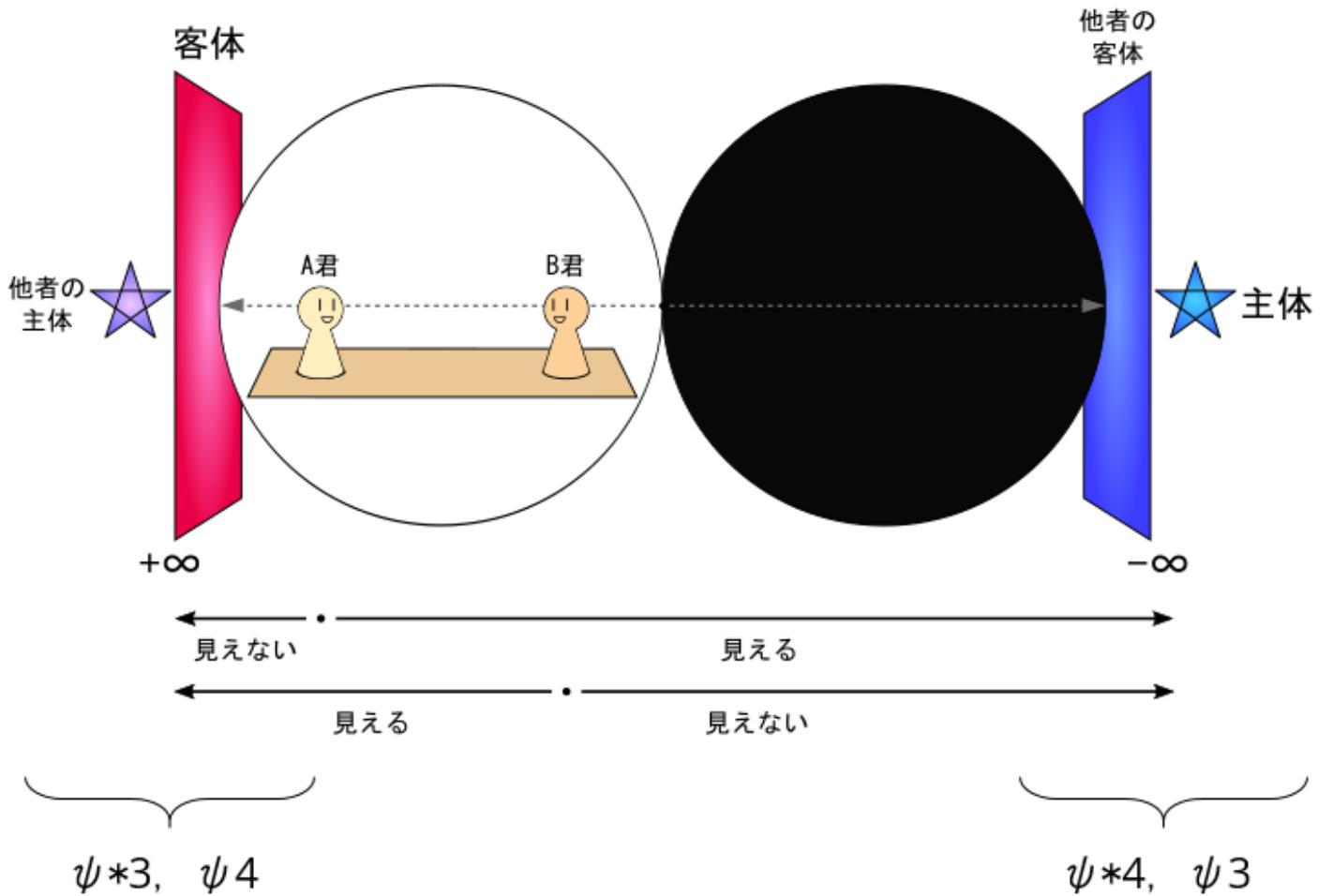
引き続き、自己と他者の視点の関係を整理していこう。

次元観察子 $\psi_3 \sim \psi_4$ においては、

自己側の観察子だけの図だと「見える世界」と「見えない世界」の関係は次のようになるが・・・



他者側の観察者も絡めると以下のようになる。



このように、他者視点まで考慮すると「主体/他者の客体」と「他者の主体/客体」の位置がそれぞれ重なったり、「 $\psi^*3/\psi^4$ 」と「 $\psi^*4/\psi^3$ 」の位置が重なったりする。

また、「見える世界」と「見えない世界」の関係も自己と他者で入れ替わったりするわけである。

以上のことから

「自己にとっての $\psi^3$ が、他者にとっての $\psi^*4$ の位置と重なり、自己にとっての $\psi^4$ が、他者にとっての $\psi^*3$ の位置と重なる」

「自己にとっての見える世界が、他者にとっての見えない世界であり、自己にとっての見えない世界が、他者にとっての見える世界である」

の意味がなんとなく分かっただろうか？

また、「他者の主体」と「他者の客体」を踏まえて人間関係を捉えてみるのも面白いと思う。

我々は普段の人付き合いにおいては、実は自身の「客体」と「他者の客体」同士で会話しているものである。

一見普通に会話してるようだが・・・お互いが「とりあえず見える部分で無難に話す」となると、浅いコミュニケーションのレベルの会話となる。

これは構造的に捉えると、客体同士のやり取りになっている。

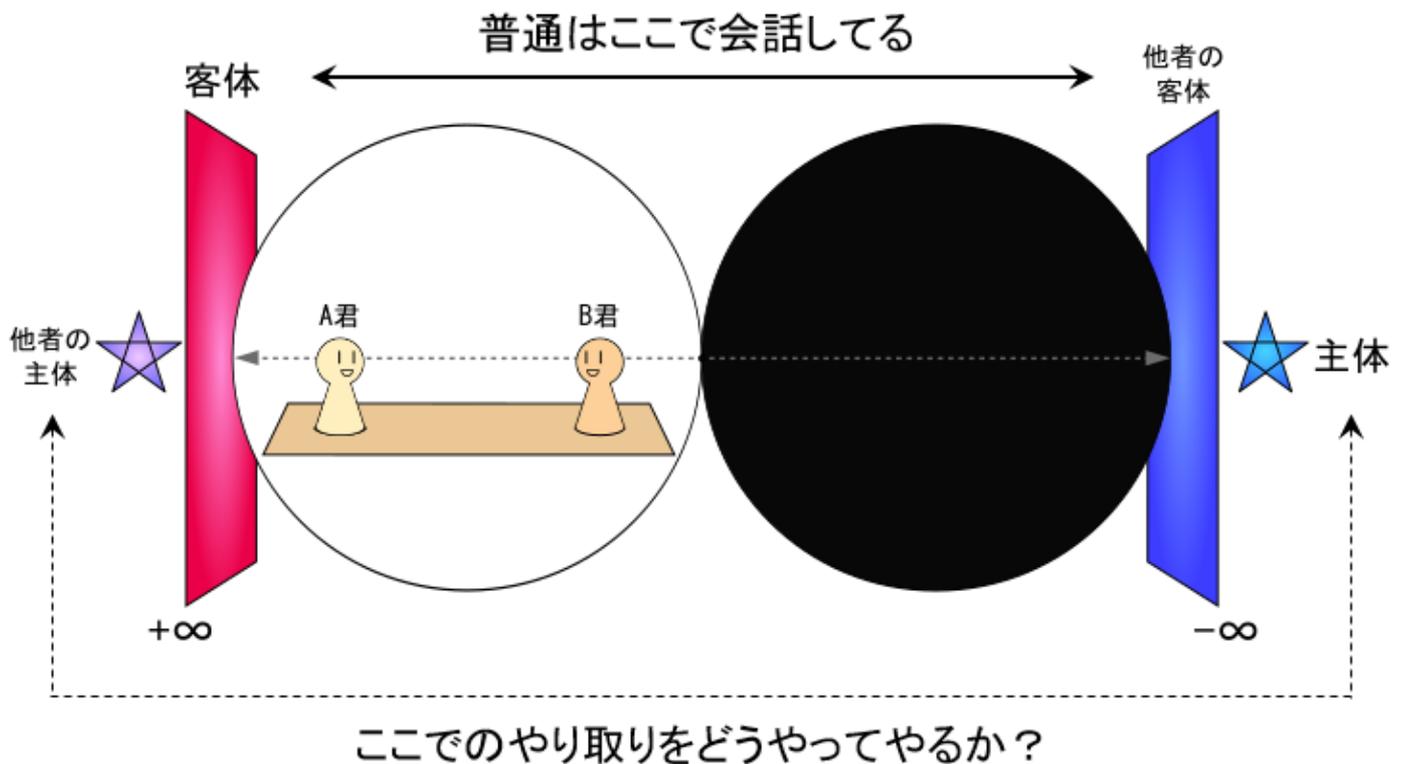
特にビジネス上での会話とか、打算と楽しさを重視するような浅いレベルの友人付き合いや、見た目を重視するような浅いレベルの恋愛付き合いだとその傾向が顕著になる。

もし、そこから深いコミュニケーションのレベルに入っていきたい場合は、

いかにして「主体」と「他者の主体」同士のやり取りに持っていくか・・・という話になる。

確かな「絆」とか「魂と魂のやり取り」はそういう所にあるため、

本質的な繋がりを作りたい人はそこに向かわなければならない。



日常における人間関係でそうしたことを考えてみるのも面白いと思う。

### ■ キアスムの奥深さ

このように、「自己×他者」で入れ替わる「2×2」の4要素の構造は  
ヌーソロジーで『キアスム』と呼ばれていて重要視されている。

『キアスム』は汎用性の高い概念であり、何か難しい社会問題について考える場合でも重要で役に立ったりする。

難しい社会問題で善悪の問題について考えると、実は「自己×他者」の間で「2×2」の構造があることが分かっていると考えが深まるようになる。

いわば、一見すると善悪の対立のように見えるものは、深掘りすると「善悪×悪善」みたいな二重の構造になっているということである。

その意味が分かるだろうか？

例えるなら・・・戦争などもそういう構造になっているのではないだろうか？

自分の国にとっては善である正義を元に、相手の国を悪と認定しても、

相手の国にとってはそれが善であり、自分の国でやっていることが悪と認識されている。

それから、どうしてそういう状況になるのか？ その原因は何か？まで突き詰めていくと、どっちが悪なのか分からない実状が出てきたりもする。

そういう視点に立った場合、絶対的にどちらが善とは言わずらくなるのではないだろうか？

漫画作品だと『進撃の巨人』とかはそういう事象がとてもよく表現されていて面白いと思う。  
この作品は最後まで読むほど色んなことが分かってくる。

〔書籍：諫山創『進撃の巨人（1）（週刊少年マガジンコミックス）』（2010）講談社〕

このように、「自己側が善で他者側が悪」という二元論思考では絶対に解決できない問題がそこにあり、これもまた『人間型ゲシュタルト』が作り出すものとされている。

ヌーソロジーの基本である『キアスム』の構造を理解することは、そこから抜け出すためにも必要なことだと言える。

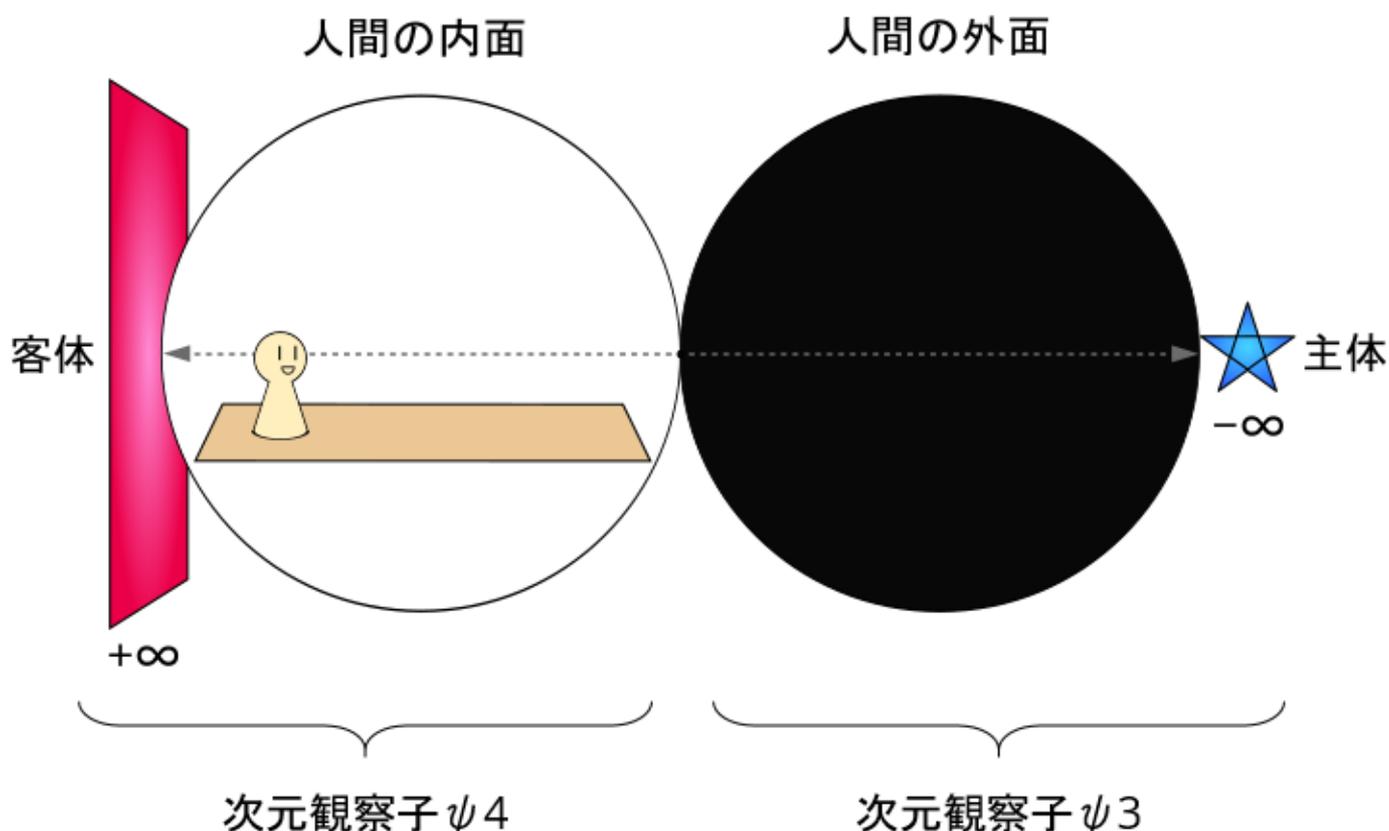
また、 $\psi 3 \sim \psi 4$ における『キアスム』が分かると、それより上位の『次元観察子 $\psi 5$ 』の理解もやりやすくなるため、

先ほど説明した「見える世界/見えない世界」の関係についても頭に入れておこう。

## 41. 複素空間モデル

『次元観察子 $\psi_3 \sim \psi_4$ 』についてこれまで色々説明してきた。

その中で、以下の図はニューソロジーを学習していた当初の自分（Raimu）がニューソロジー理解のために使っていたオリジナルのモデルである。



自分は長いことこれで理解していたし、今でもこれをベースにした学習をしている。  
ある程度はこれでどうにか理解することもできると思う。

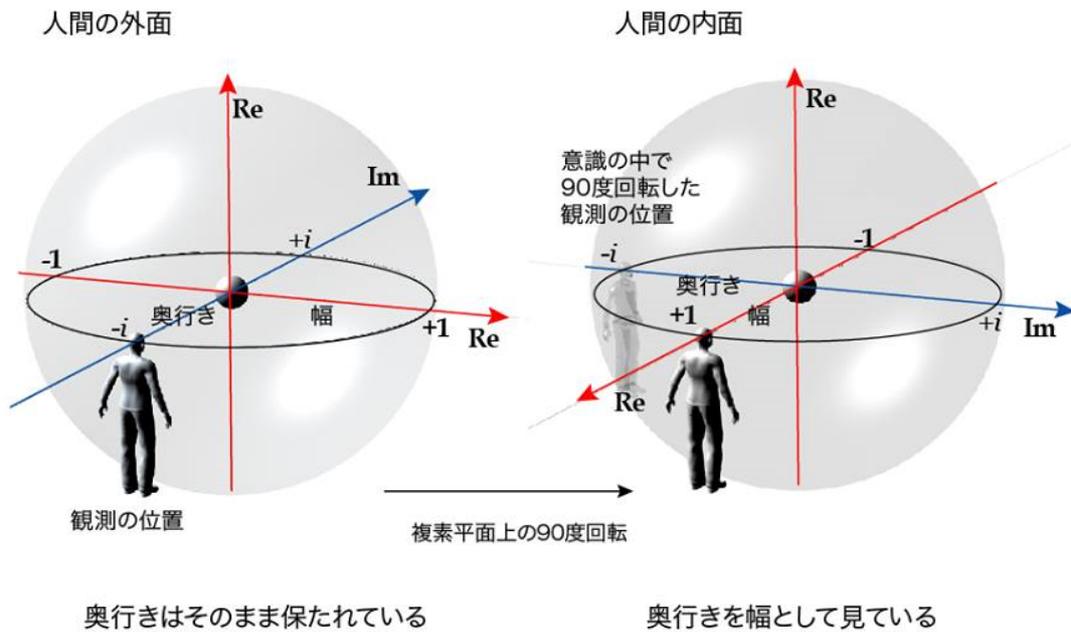
しかし、ニューソロジーでは別のモデルとして「複素空間」を使ったものもあるため、  
今回はそれについて説明していこうと思う。

### ■ 複素空間モデル

複素空間を使ったモデル・・・即ち「複素空間モデル」とは何か？

ニューソロジーで以下みたいな図を見たことあるだろうか？

## ●人間の外面・内面と複素空間の対応



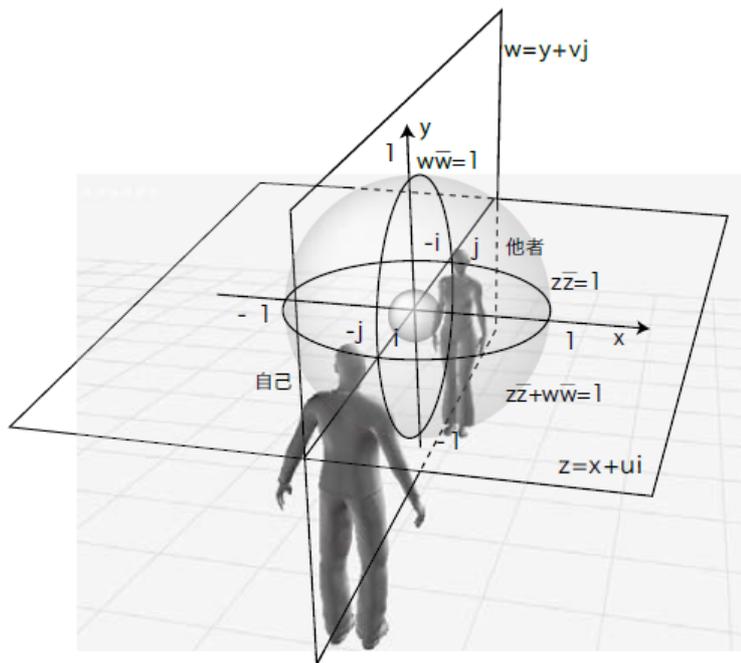
[リンク：【ヌースの基本概念】人間の外面・内面と複素空間 - cave syndrome より引用]

これはヌースロジーで行う認識を複素空間に対応させてできたものである。

既に 2005 年ぐらいからベースとなる考えはあったみたいだが、

『2013 年ヌースロジーレクチャー』シリーズでちゃんとまとまるようになった手法であるため、2013 年から積極的に使われるようになった。

近い図は 2009 年に出版された『2013：人類が神を見る日』の Advanced Edition 版の時から描かれている。

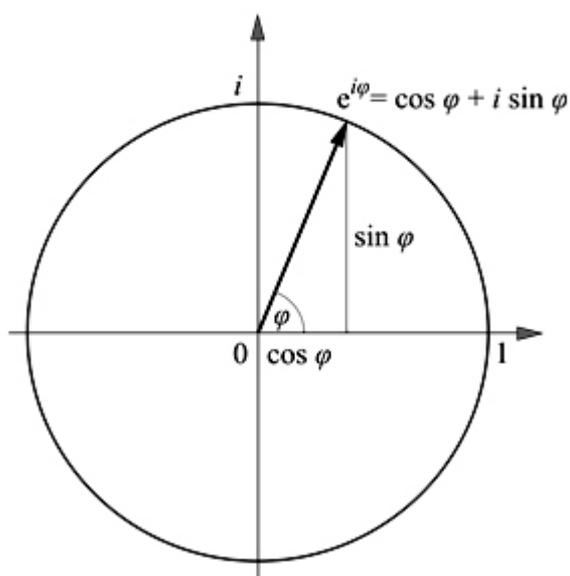


(書籍の最後の方。DL 版だと 443 ページより引用)

『2009 年ニューソロジーレクチャー』シリーズでも次元観察子 $\psi_3 \sim \psi_4$  や変換人型ゲシュタルトの説明はあったが、『2013 年ニューソロジーレクチャー』の説明ではだいぶ内容が違っている。

そのため、変換人型ゲシュタルトそのものの内容も変わったように見えるかもしれないが、「次元観察子を理解する」点においては行き着く所は一緒に、表現方法と説明方法が変わったと理解すると良い。

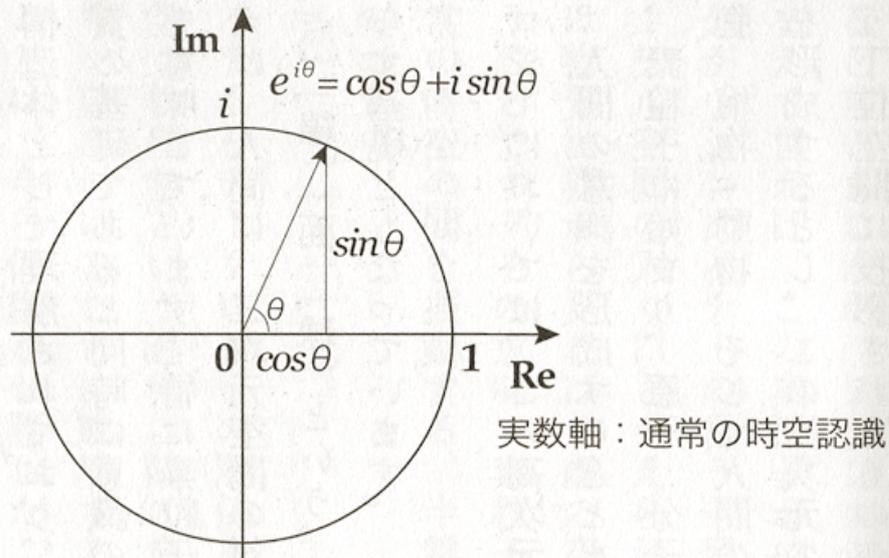
この複素空間モデルは、数学の界隈でも有名な「オイラーの公式」を使用している所がポイントである。



以前に『[エーテル空間を知覚していく](#)』の項で

書籍『シュタイナー思想とニューソロジー』を引用して以下の図を出したが、これも複素空間モデルの話である。

虚数軸：エーテル界



- ・ 素粒子の挙動を表す波動方程式はオイラーの公式を基礎に持つ
- ・ このオイラーの公式の虚数部分がエーテル界、実数部分が通常の時空認識の形成を表すと思われる。つまり、波動関数で表わされる素粒子は、高次空間の入り口であるエーテル界と、通常の時空認識の間を振動する、物質と知覚の基礎となる、半霊半物質の存在と思われる
- ・ 光子においては、この虚数軸が視覚における「モノ」と「背景の」の一体化を表し、実数が「モノ」と背景の分離状態を表している

この図においては x 軸方向の値が実数、y 軸方向の値が虚数となっている。

二つの軸を言い換えると実数軸と虚数軸となる。

このように実数と虚数の座標で表現できる空間を、数学では「複素二次元空間」と呼ぶ。

こうした数学的なものを意識の構造として説明する所がニューソロジーの肝である。

## ■ 複素空間モデルをじっくりと理解しよう

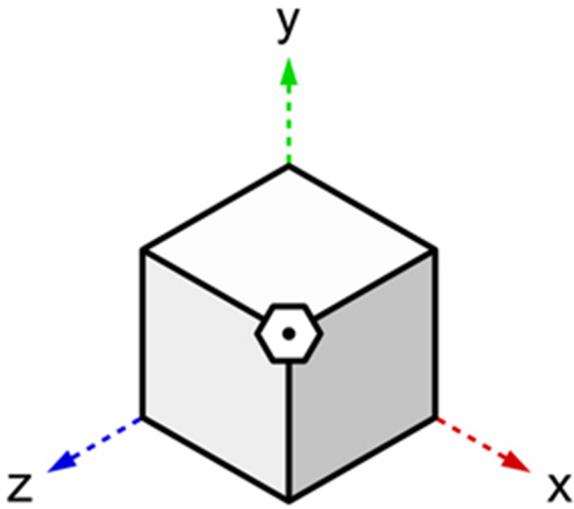
「複素空間モデル」について、

これまでの次元観察子ψ3の説明を踏まえつつちゃんと理解しよう。

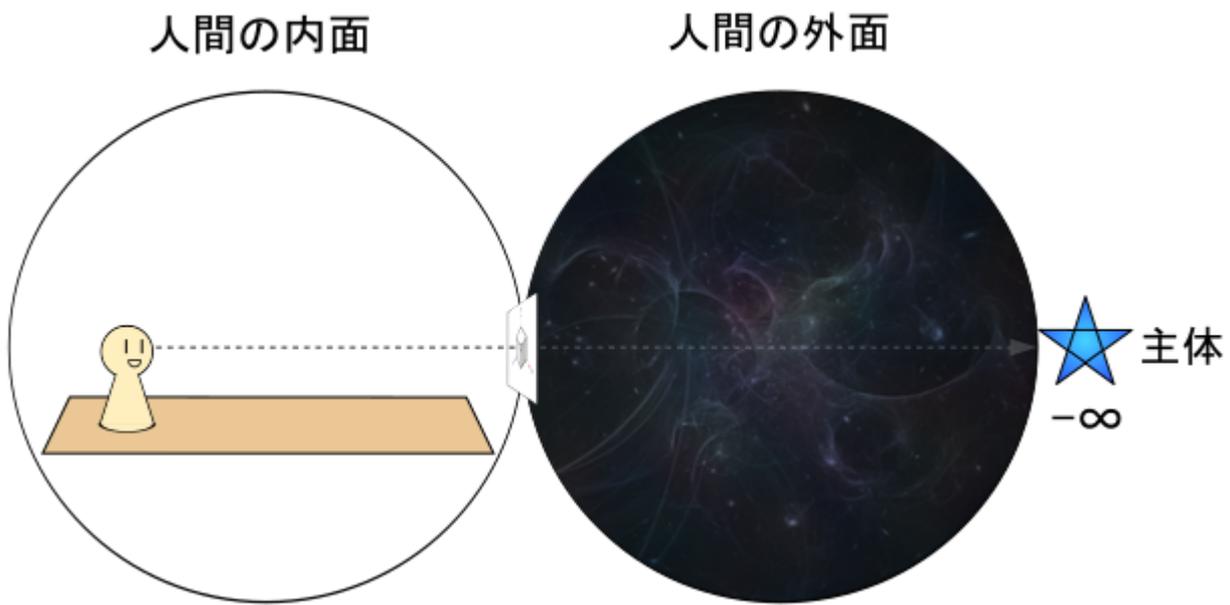
まず、「前」の発見が第一である。これは従来通りである。

以下の『4次元を発見するための図』を知覚正面に見立てて、

垂直方向となる「前」を発見しよう。



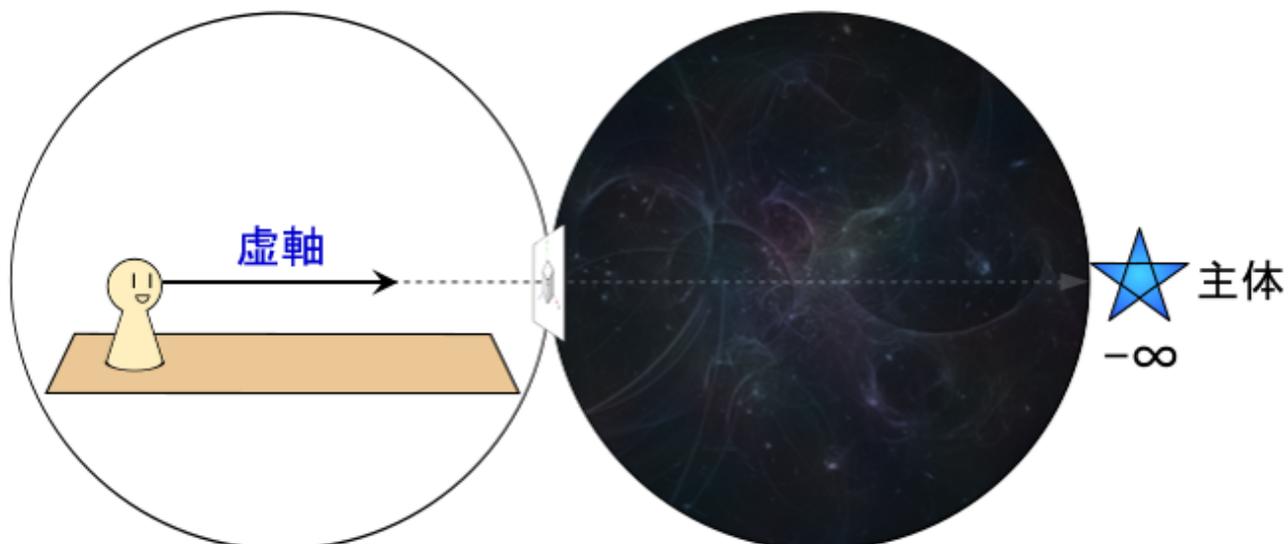
目の前の空間を「知覚正面」として見る事ができた場合、  
『人間の外面』や『主体』も分かってくる。



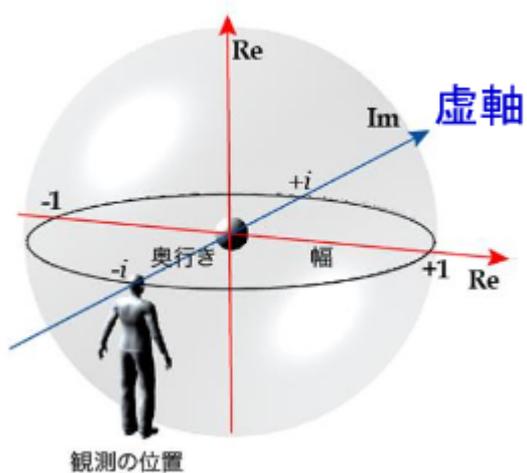
さらに、「奥行きを虚軸」とする。

## 人間の内面

## 人間の外面

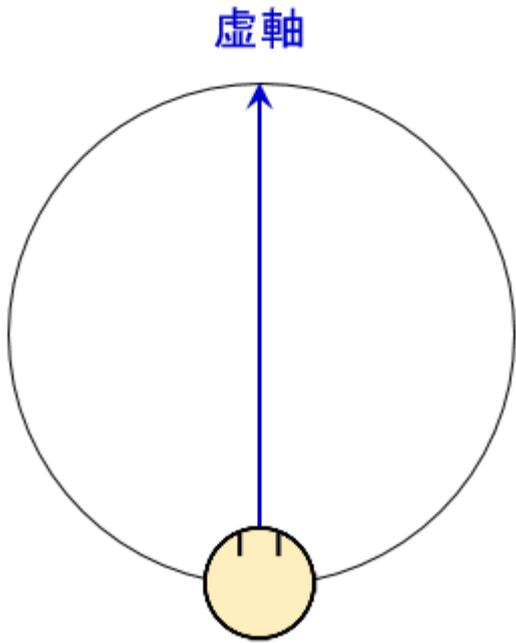


## 人間の外面

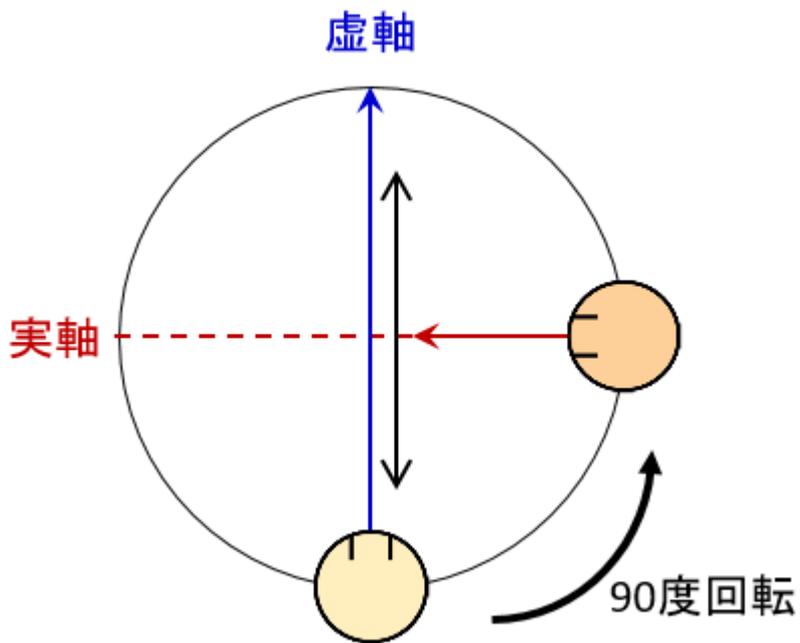


すると何が言えるのか？

虚軸を見ている人が「知覚正面」として目の前を見た場合、  
虚軸方向には距離が存在しないように見えるが・・・

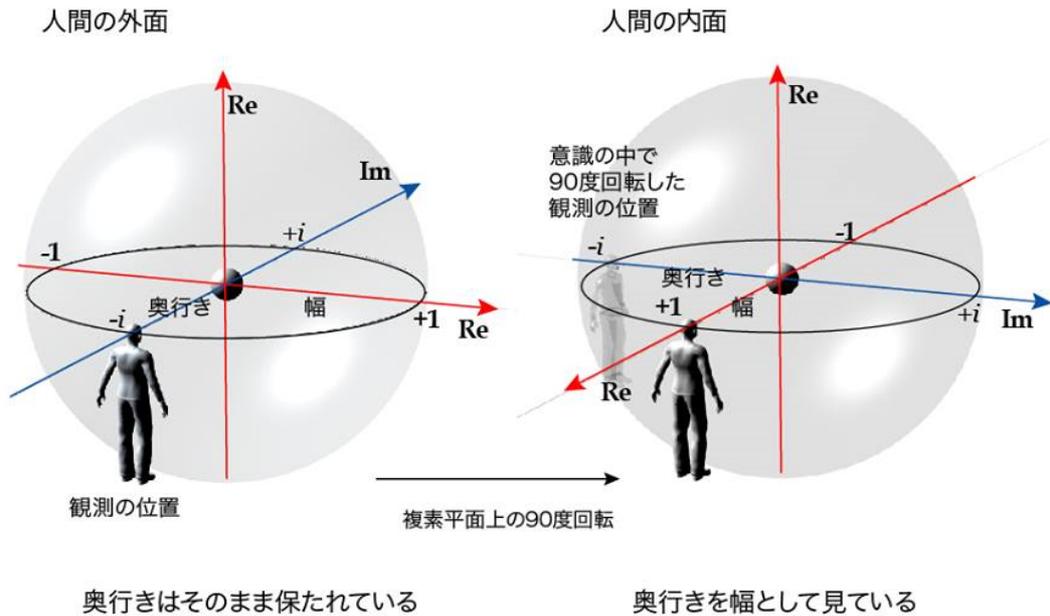


そこから 90 度回転した位置の真横からの視線だと距離が存在することが言えるのである。



これで先ほどの図の意味も分かるだろうか？

●人間の外面・内面と複素空間の対応

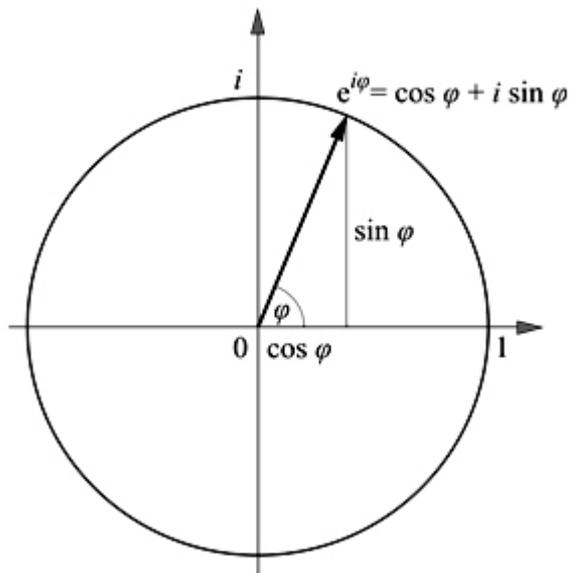


つまり、旧来モデルでは「手前」や「後ろ」を $\psi 4$ の位置とするが、複素空間モデルでは「横からの視線」あるいは「幅」を $\psi 4$ の位置とする。

さらに、複素空間モデルは「虚軸」を『奥行き』、「実軸」を『幅』と呼ぶ。そうすると「自己にとっての奥行きが、他者にとっての幅であり、自己にとっての幅が、他者にとっての奥行きである」ということが言える。

前回の『キアスム』の説明で「自己にとっての見える世界が、他者にとっての見えない世界であり、自己にとっての見えない世界が、他者にとっての見える世界である」ということについて書いたが、複素空間モデルにおいては「見える世界⇒奥行き」「見えない世界⇒幅」と置きかえると、同様のことが言えるわけである。

このように複素空間を解釈すると、以下の「オイラーの公式」の図が人間の意識の構造として使えるようになる。



さらに、「オイラーの公式」は実際の量子力学の基礎で出てくるものでもあるため、量子力学で説明される素粒子の構造は、人間の意識の構造を説明するものにもなるわけである。

何故、半田さんは複素空間モデルを 2013 年から積極的に使うようになったのか？

やはり、初版の『人類が神を見る日』の帯にも書かれていた「素粒子の正体は、我々の意識だった！」の格言が重要だからである。



このことを理解していくためにも、複素空間モデルを併用して使っていこう。

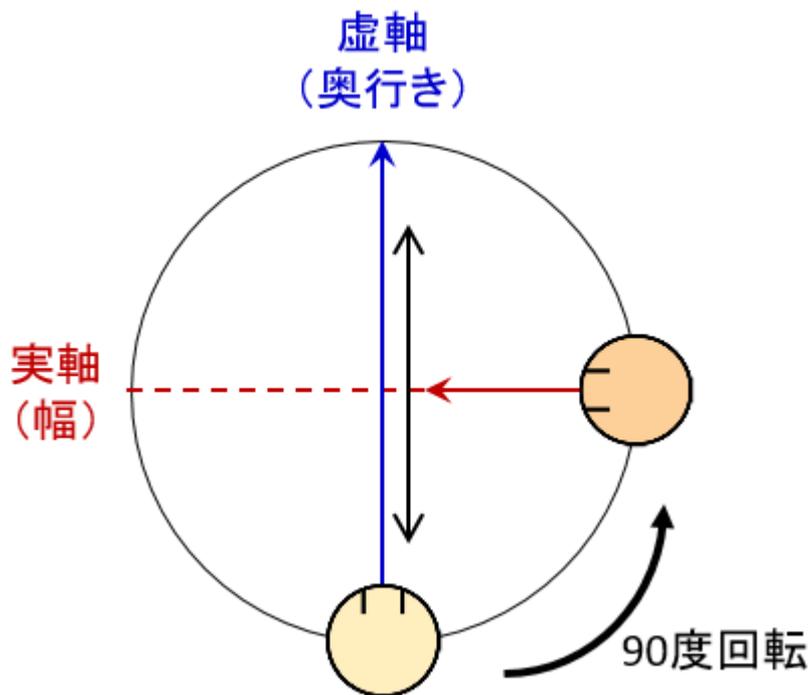
## ■ ミクロに潜む複素空間モデル

複素空間モデルにおいて重要なことを一言でまとめると・・・

自己にとっての奥行きは、横側から見た他者にとっては幅である

ということになる。

つまり、先ほど説明した通り、以下の図のようにになっているわけである。



そして、これが分かったから何なのか？

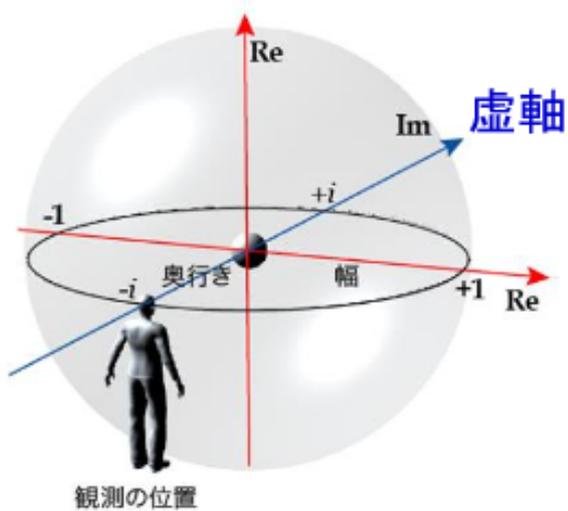
ただこの仕組みを頭に入れただけでは意味がないかもしれない・・・

ヌーソロジーでは最終的に「奥行き」と「幅」も『等化』されるようになる。

つまり、「対称的で同一のように見なすことができる」ようになる。

ヌーソロジーの複素空間モデルの図は、それぐらい深い意味を持つものである。

## 人間の外面



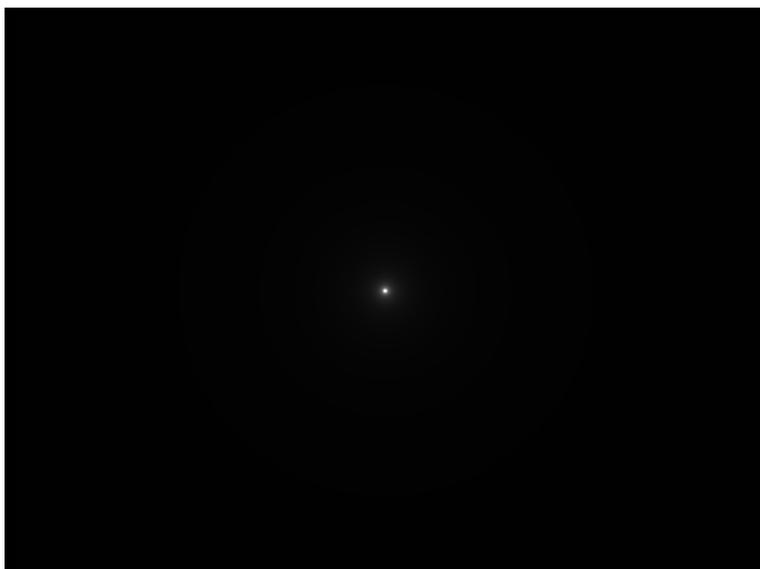
果たして物理現象としてそんなことがあり得るのだろうか？

思い出して欲しいのは、この複素空間があるのは素粒子の世界であり、即ち「ミクロの世界」なことである。

原子や原子核の大きさは「約 10 のマイナス 10 乗m」や「約 10 のマイナス 15 乗m」といった数値になる。

したがって、複素空間モデルを意識するという事は、それぐらい小さい世界を意識することと同義となる。

そのため、初めの方で説明した「ミクロを意識する」という基本に立ち戻る必要がある。



[リンク：■変換人型ゲシュタルト論(19) ～変換人型ゲシュタルトの基礎～]

こうしたミクロの世界の中での思考に成功し、何かしらの体感を得なければ、ニューソロジーが「分かった」とは言えないだろう。

以上。複素空間モデルについて分かっただろうか？

複素空間は「オイラーの公式」に含まれており、量子力学で実際に使う数式でもそれが出てくる。

$$e^{i\theta} = \cos \theta + i \sin \theta$$

しかしながら、こうした「難しそうな数式」が出てくると、一気にイメージがしづらくて悩む人もいると思うので・・・  
次回はそれをイメージで理解する方法を探っていく。

## 42. 実数と虚数の付随イメージ

前回の複素空間モデルの話でも出てきた「オイラーの公式」。  
ヌーソロジー学習においても重要なため、たまに出てくる。

$$e^{i\theta} = \cos \theta + i \sin \theta$$

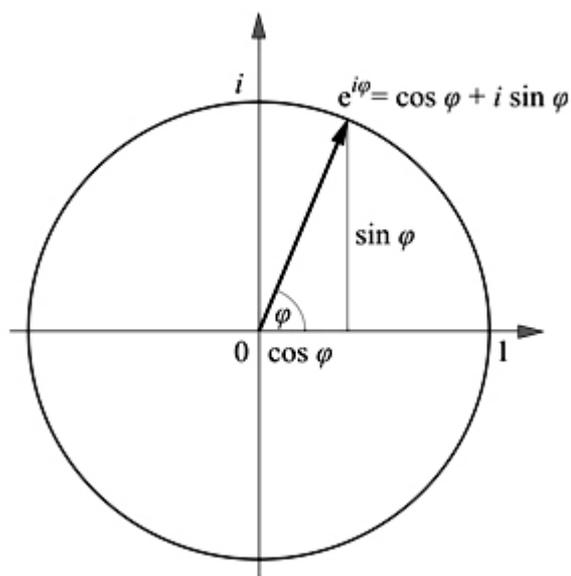
これは物理学者のリチャード・P・ファインマンが、  
「我々の至宝」や「すべての数学のなかでもっとも素晴らしい公式」と言っていたこともある。  
そんな異名を持つすごい公式である。

数学的には「オイラーの等式」に変化するということで、数学好きの間では人気が高いと思う。

$$e^{i\pi} = -1$$

しかしながら、以下のような数式と図は・・・

$$e^{i\theta} = \cos \theta + i \sin \theta$$



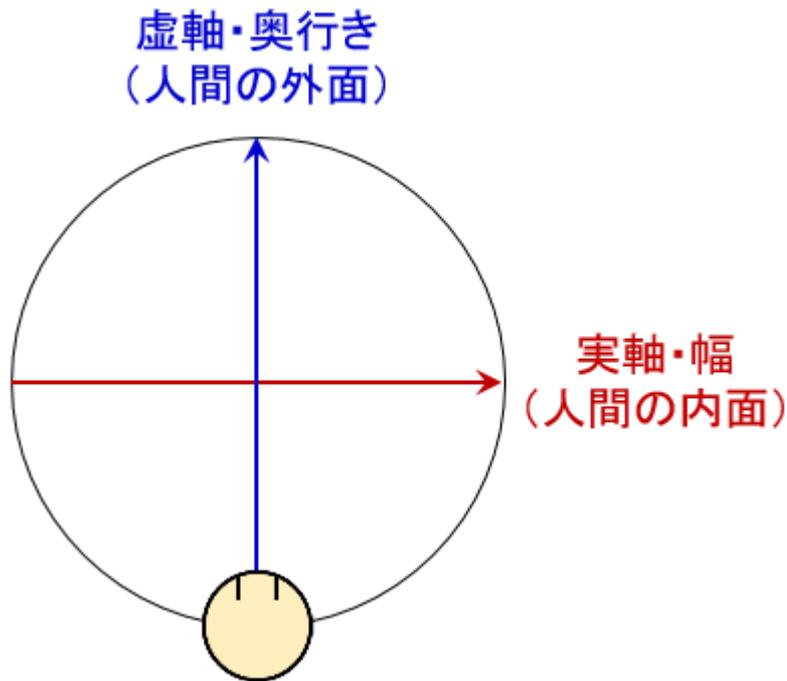
なんとも簡素であり、  
数学が苦手、数学アレルギーみたいな人にはよく嫌われる。

そこで、「イメージで捉えてみるとどうなるだろうか？」ということをお今回やってみようと思う。

### ■ 虚軸と夜、実軸と昼

前回説明した「複素空間モデル」によると、

虚軸は『人間の外面』の方向であり、実軸は『人間の内面』の方向である。



また、『夢の世界のビジョン』の項で説明したように

『人間の外面』は夜に対応し、『人間の内面』は昼に対応するとされている。

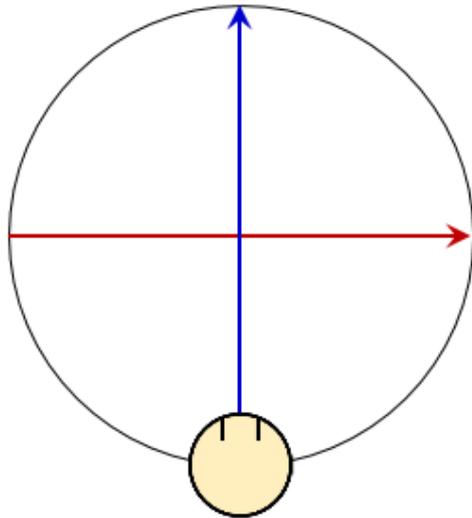
OCOT 情報も、昼と夜は「対化」の表現だと言っていた。昼は人間の内面で、夜は人間の外面の現れだっ  
てこと。確かに、人間は昼間は客観世界（延長）の中で生き、夜は主観世界（持続）に生きるのが基  
本。これは表相が等化された世界と、表相を中和した世界（表相の等化を無効にする）の関係と言っ  
ていいかもしれない。

そこで、夜と昼は、それぞれ以下みたいなイメージとしよう。



そうすると、虚軸と実軸はそれぞれ以下のイメージに向かうことになる。

外面



内面



### ■ オイラーの公式に当てはめてみる

それから、以下の式はどんなことを意味するか分かるだろうか？

$$e^{ix} = \cos x + i \sin x$$

まず、これは「関数」になっているので、  
「x の値にナニカを入れると、ナニカの値を返す」  
ようになっている。

そして、その値は「複素数」として返ってくる。  
複素数とは「実数と虚数が合わさったもの」なので、  
この関数の x に値を入れると、「実数の値がいくらかと、虚数の値がいくらか」が返ってくるわけである。

ナニかの値を入れる

$$e^{ix} = \underline{\cos x} + \underline{i \sin x}$$

↓                      ↓

実数の値      虚数の値  
(-1~1)      (-i~i)

---

複素数の値

例えば、実際に値を入れていくと、以下のようなになる。

$x$  の値が 1       $\longrightarrow$       約0.54030 + 約0.84147  $i$

$x$  の値が 2       $\longrightarrow$       -約0.41614 + 約0.90929  $i$

$x$  の値が 3       $\longrightarrow$       -約0.98999 + 約0.14112  $i$

$x$  の値が 4       $\longrightarrow$       -約0.65364 - 約0.75680  $i$

$x$  の値が 5       $\longrightarrow$       約0.28366 - 約0.95892  $i$

$x$  の値が 6       $\longrightarrow$       約0.96017 - 約0.27941  $i$

ちなみに、sin や cos にはラジアン of 値を入れるものなので、一般的には以下のような値が想定される。

$$x \text{ の値が } \frac{\pi}{2} \longrightarrow 0 + i$$

$$x \text{ の値が } \pi \longrightarrow -1 + 0$$

$$x \text{ の値が } \frac{3\pi}{2} \longrightarrow 0 - i$$

$$x \text{ の値が } 2\pi \longrightarrow 1 + 0$$

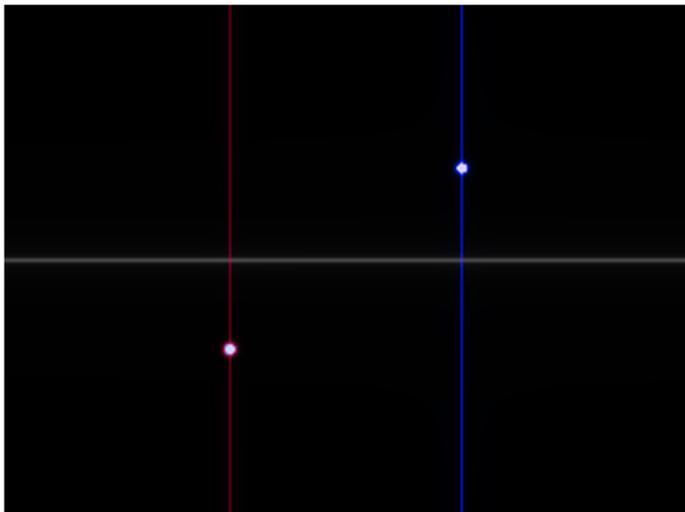
$$x \text{ の値が } \frac{\pi}{3} \longrightarrow \frac{1}{2} + \frac{\sqrt{3}}{2}i$$

$$x \text{ の値が } \frac{\pi}{4} \longrightarrow \frac{1}{\sqrt{2}} + \frac{1}{\sqrt{2}}i$$

$x$  にランダムな値を適当に入れてみた場合、その結果の値を CG にして表すと以下のようなになる。

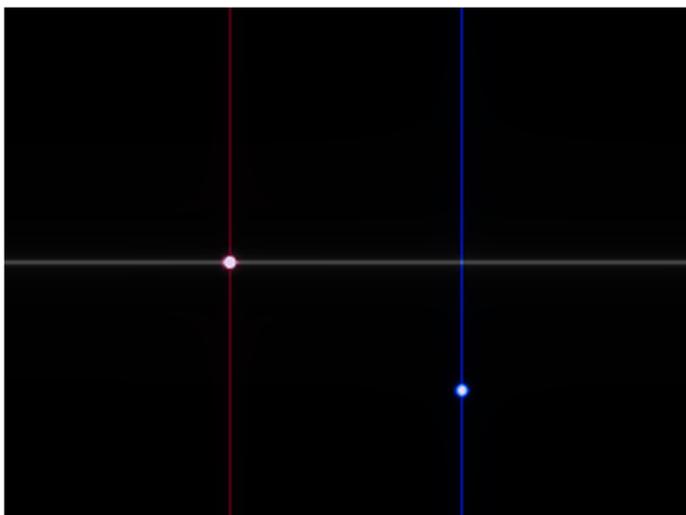
紅色の点の位置が実数の値、蒼色の点の位置が虚数の値。

白線の位置が 0 で、それより上がプラス、それより下がマイナスの値とする。



[アニメーション：二つの点がランダムな位置に出現する]

それから、 $x$  の値がだんだんと増えていった場合、以下のようなになる。



[アニメーション：二つの点が波を描くようなスピードで移動する]

面白いことに規則的な動きになるのが分かるだろうか？

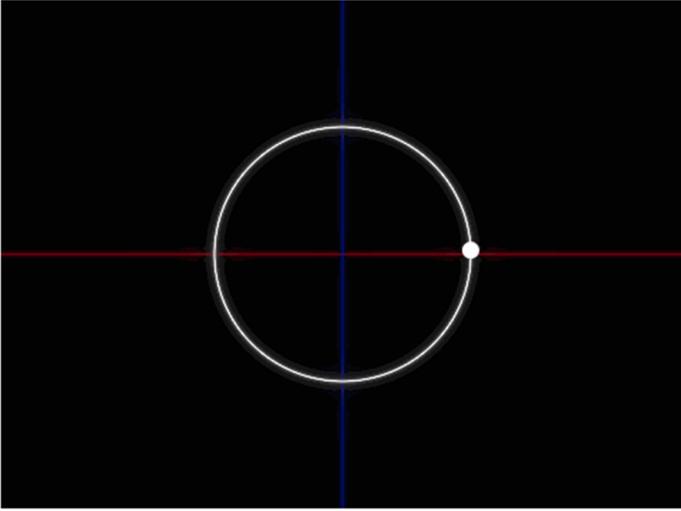
「オイラーの公式」で出した二つの値は、複素平面の円周上の値に必ずなる。  
したがって、実軸と虚軸からなる複素平面があった場合、  
オイラーの公式は円周上をグルグル回るように値が変化するものになっている。



[アニメーション：点が円周上を移動する]

数学が苦手な人向けに説明したが、  
だいたい分かって来ただろうか？

そして、実数の世界を昼、虚数の世界を夜のイメージとすると、  
先のアニメーションは以下のようなになる。

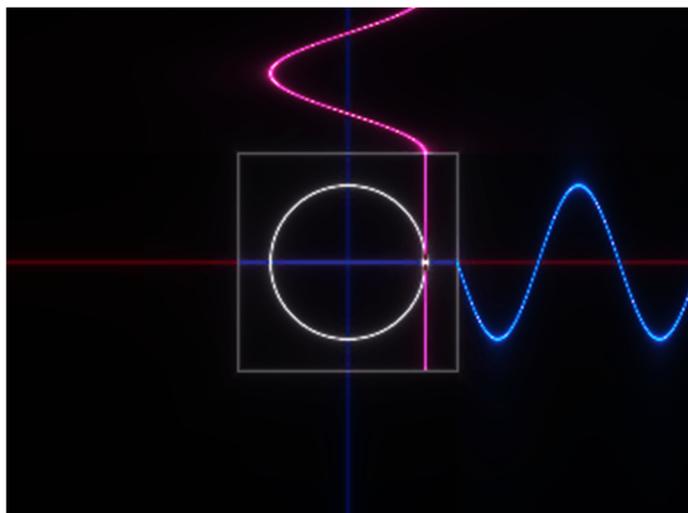


[アニメーション：点が円周上を移動するのに対応して景色が変わる]

「オイラーの公式」について、  
このようなイメージができることが何となく分かったらどうか？

### ■ オイラーの公式と波。エーテル体と回転

また、オイラーの公式は  $\sin$  と  $\cos$  で構成されているから、  
「波」のようにもなっているわけである。



[アニメーション：点が円周上を移動し、波を描く]

[Youtube 動画：Complex Spin]

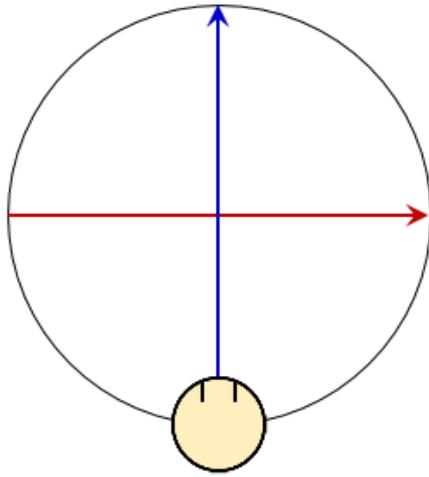
量子力学で実際に出てくる式は以下のようなものだが・・・

$$\begin{aligned}\psi(x, t) &= \cos\left(\frac{p \cdot x - Et}{\hbar}\right) + i \sin\left(\frac{p \cdot x - Et}{\hbar}\right) \\ &= e^{i\left(\frac{p \cdot x - Et}{\hbar}\right)}\end{aligned}$$

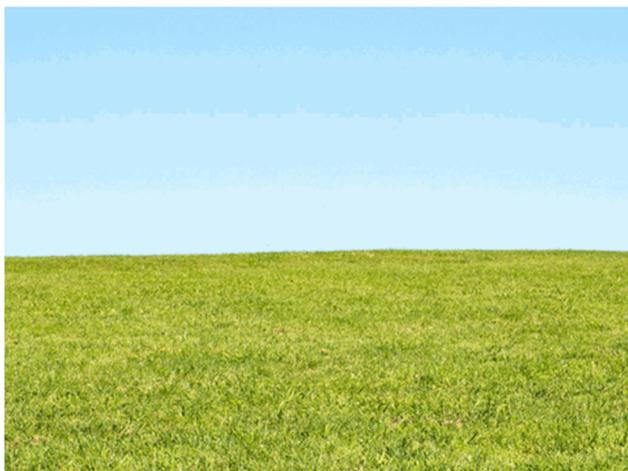
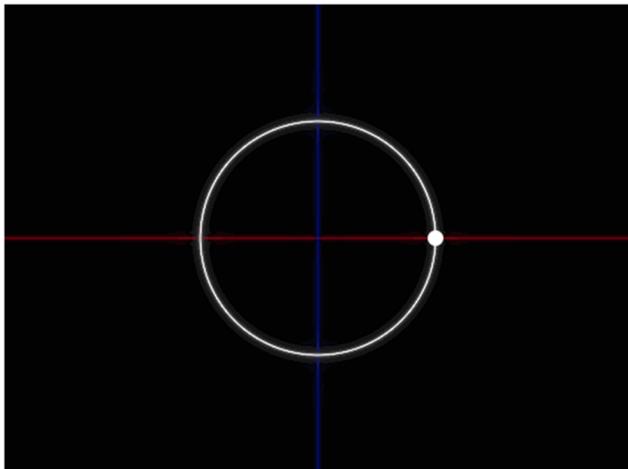
そこでも「オイラーの公式」と「波」のような構造が出てくるから、「波動関数」と呼ばれている。

あとは、虚軸は「エーテル界」とも言われているので、エーテル体っぽいイメージでも良いかもしれない。

外面



内面



[アニメーション：点が円周上を移動するのに対応して景色が変わる]

このように、「オイラーの公式」というとなんだか数学が苦手だとイメージしづらいかもしれないが、とりあえず「回転」と「行ったり来たり」の動きが大事なわけである。

なんとなく伝わっただろうか？

## 43. マカバの利用について

スピリチュアルや神聖幾何学の界限では「マカバ」と呼ばれるものが重要視されている。

マカバは人間が本来持つ「光の身体」みたいな意味だが、  
神聖幾何学において伝えられているそれは以下のような形をしている。



〔アニメーション：マカバの形をした立体が回転する〕

この図形は、数学の界限だとドイツの数学者ヨハネス・ケプラーが発見した「星形多面体」と呼ばれているものの一種であり、

上記のものは「星型正八面体」に該当する。

書籍『フラワー・オブ・ライフ』にて、この図形が取り上げられたことで有名になったらしい。

〔書籍：ドランヴァロ・メルキゼデク『フラワー・オブ・ライフ — 古代神聖幾何学の秘密(第1巻)』  
(2001) ナチュラルスピリット 〕

ちなみに、綿棒を使った工作で作れるので、  
綿棒で多面体製作する一派もいる。

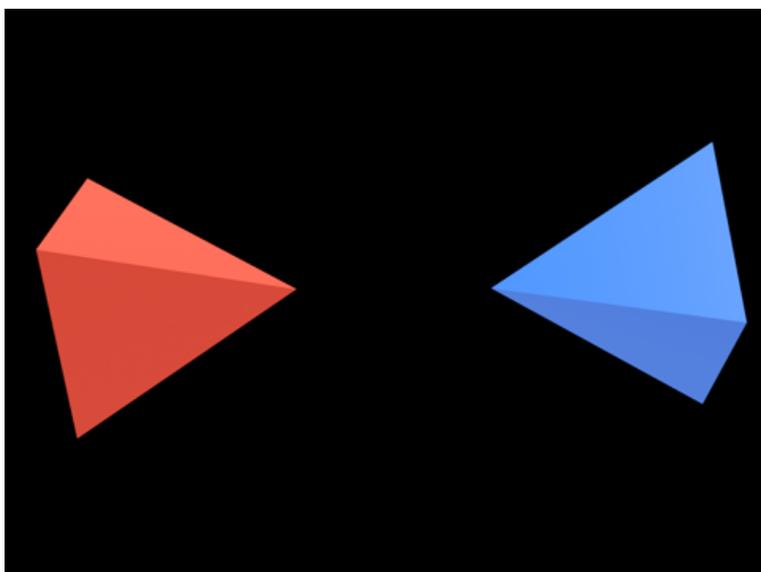
〔リンク：綿棒多面体製作に準備するもの - tamentaiworld ページ〕

さて、星型正八面体や、それと関わる多面体の形もヌーソロジー的に重要な意味を持っているので、  
それについて説明していこう。

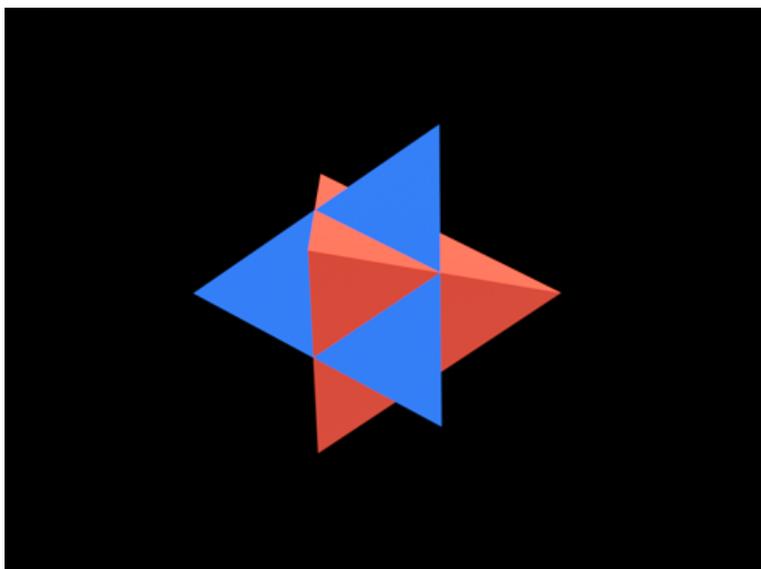
### ■ 二つの正四面体

まず、星型正八面体には、多角形の基本である**正四面体**が出てくる。

向かい合う正四面体を二つ用意して・・・



向かい合ったものを重ね合わせてピッタリな角度に調整する。  
すると・・・

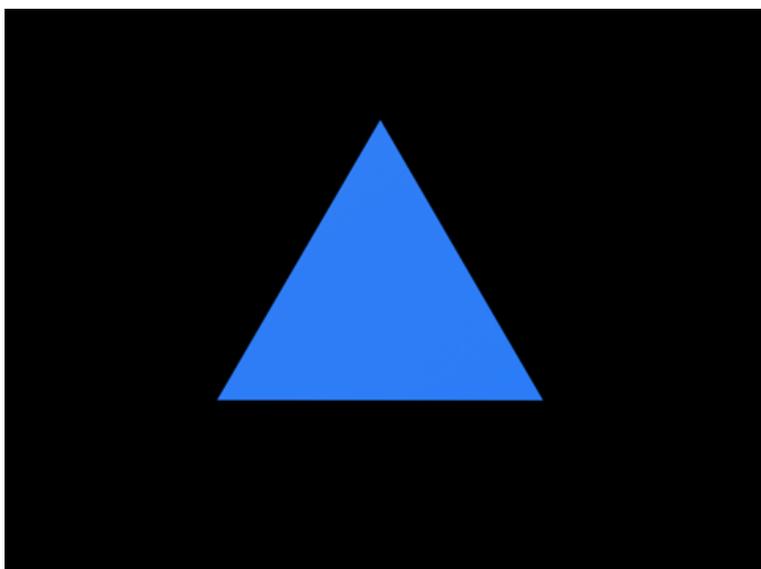


星型正八面体ができるわけである。  
これがヌーソロジー的多面体幾何学の基本となるので覚えておこう。

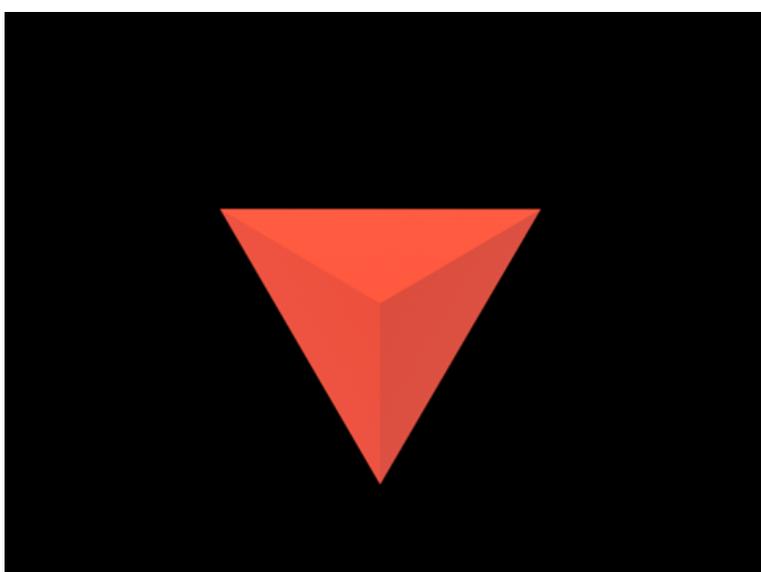
### ■ 二つの正四面体の意味

正四面体はヌーソロジーでも重要な意味を持っていて、  
それは必ず「前方向」と「後ろ方向」の二つの対で機能するものである。

次のように「前方向」と「後ろ方向」の正四面体をイメージしよう。



※前を向いている正四面体



※後ろを向いている正四面体

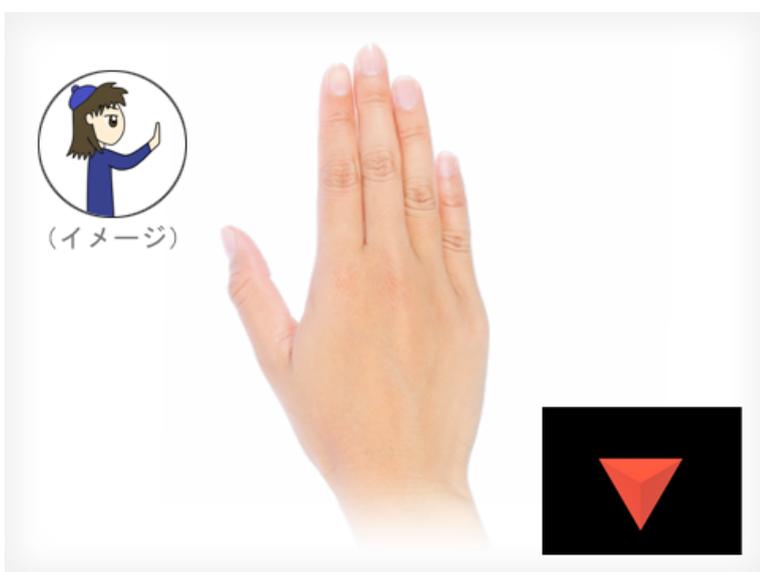
ここで「前方向の正四面体」と「後ろ方向の正四面体」が持つ意味は、  
『次元観察子 $\psi_3$ 』と『次元観察子 $\psi_4$ 』が出てきた時の「前」と「後ろ」と同様である。

[リンク：■変換人型ゲシュタルト論(39) ～「 $\psi_3$ ～ $\psi_4$ 」までを整理しよう～]

前を先手とした場合と、後ろを先手とした場合に、  
それぞれ正四面体があることを意識してみよう。

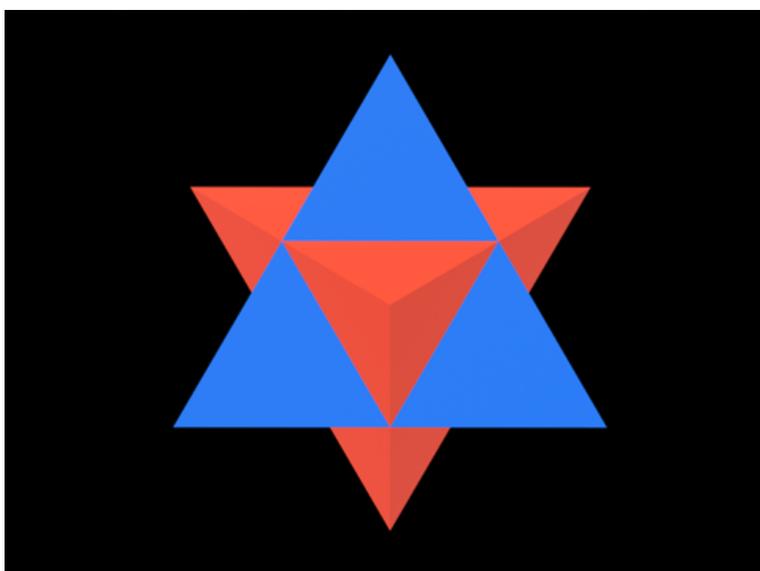


※前を先手とした場合⇒前方向の正四面体



※後ろを先手とした場合⇒後ろ方向の正四面体

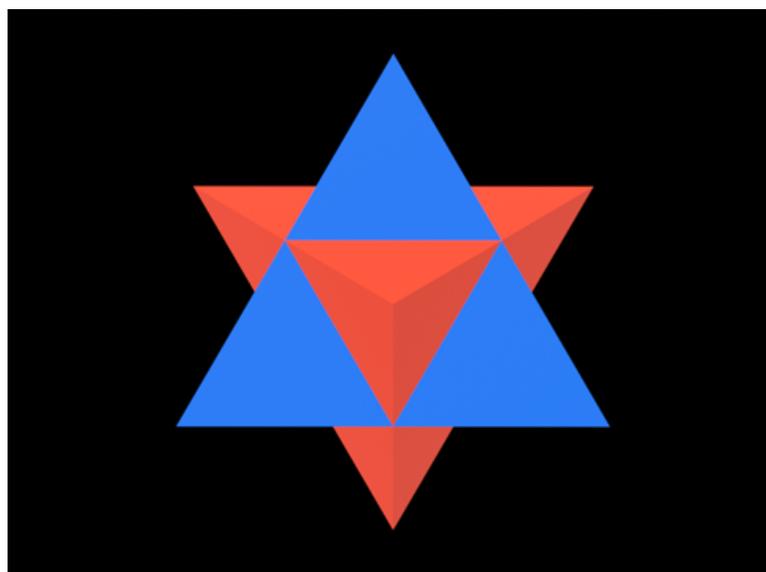
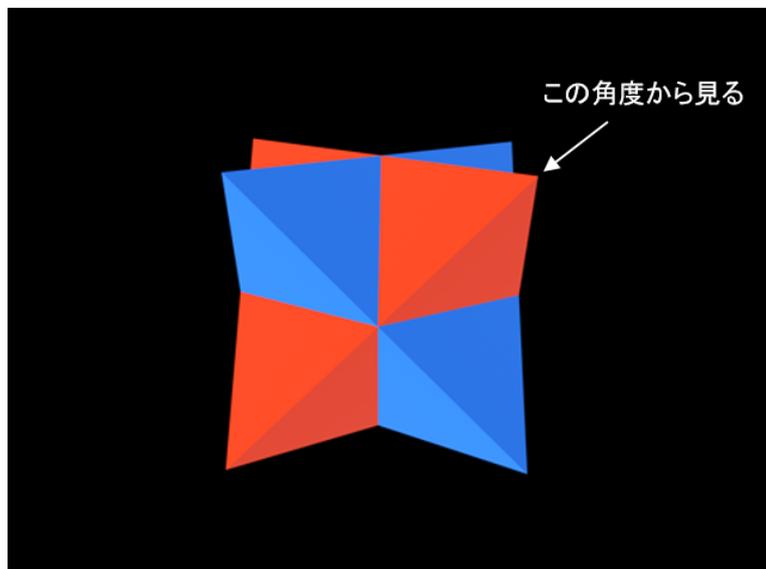
そして、それらの二つの正四面体を重ねると・・・星型正八面体になるわけである。



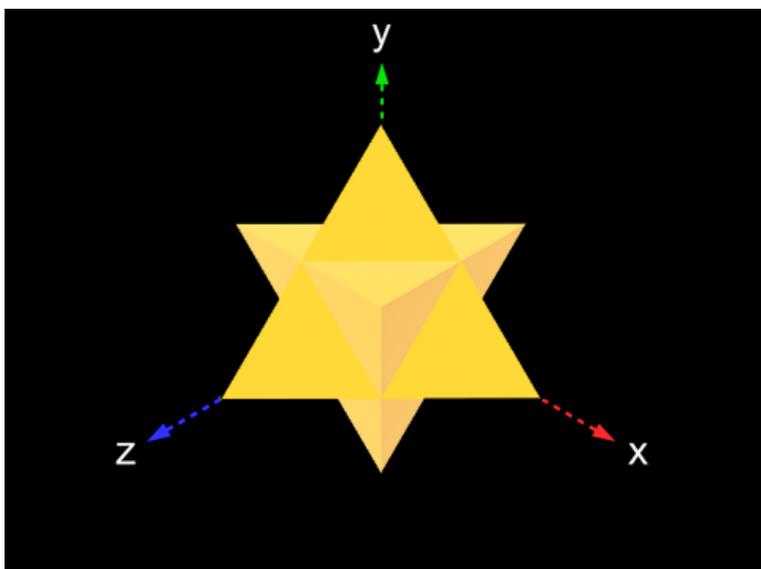
この時の星型正八面体は「前」と「後ろ」を対の関係としてしっかりと捉えて、それらを統合するような力を持つ。

これはヌーソロジー的なマカバの意味の基礎となるので覚えておこう。

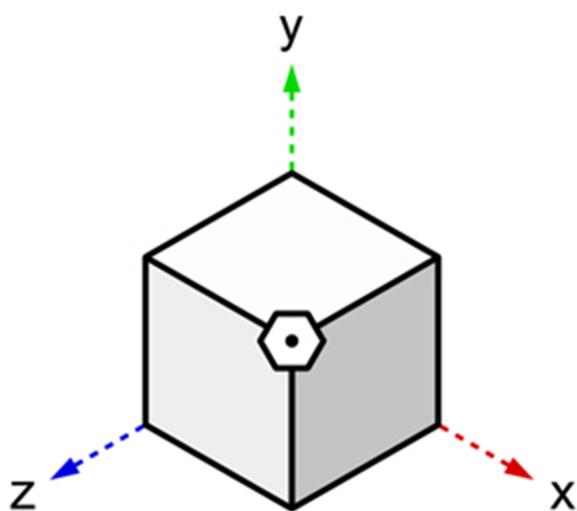
また、以下のようにになっている場合、斜め上から見るのが重要である。



それから、星型正八面体をこの角度から見た時の3点への方向は、4次元から見た  $x \cdot y \cdot z$  の方向を表している。



そのため、これは「4次元を発見するための図」と同様の機能を持っている。



要するに、この図でも4次元方向を見つけることができるが・・・

それを正四面体や星型正八面体の図形でやっているわけである。



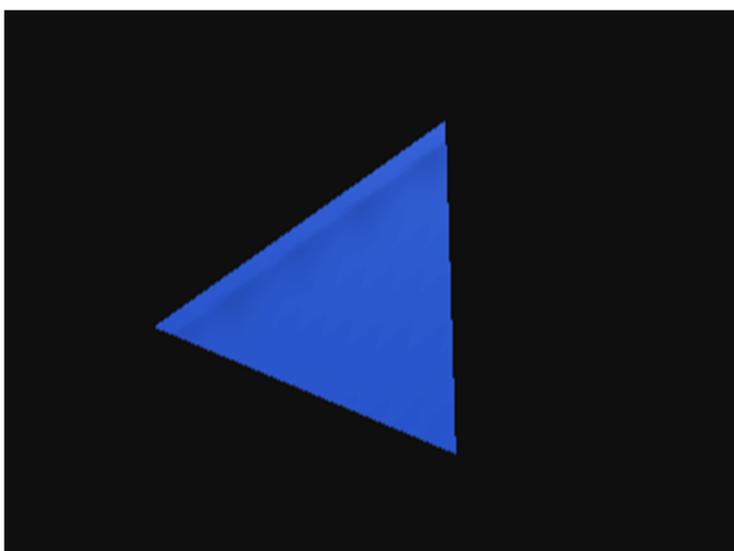
以上が「ヌーソロジーにおける多面体と変換型ゲシュタルトの関係」の基礎である。  
ざっくりと分かって来ただろうか？

### ■ Unity で作った多面体ビューアー

多面体といえば、以前にこのサイトで多面体を眺めるための Web ビューアーを作ったことがある。

[リンク：「Unity で作った多面体ビューアー」を公開します。]

これは Web 上で簡単に使うことができるツールであり、  
多面体を色々と眺めたり、動いてるアニメーションを見たりすることができるので、  
多面体が好き人は適当に遊んでみて欲しい。



[アニメーション：回転する正四面体]



〔アニメーション：回転する星型正八面体〕

以上。星型正八面体についてはもっと奥が深いものだが、  
とりあえず今回はここまでにしよう。

今回は「正四面体」が出てきたので、  
次回は「正六面体」と「正八面体」について説明する。

## 44. 正八面体と正六面体の意味

今回は正八面体と正六面体について。

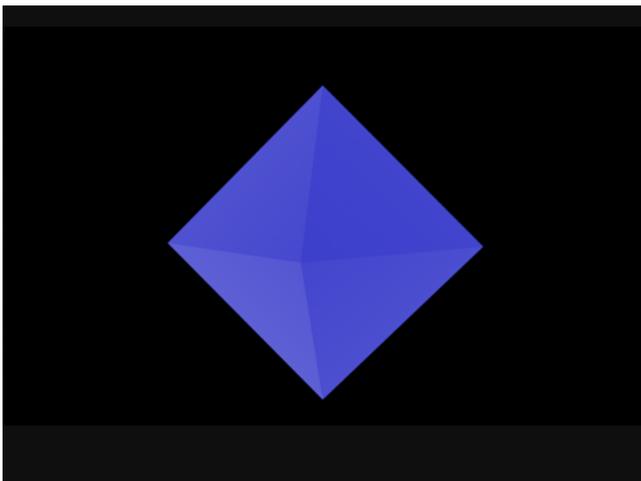
『変換人型ゲシュタルトとは？（前編）』の項で、正八面体は「外在世界(物の世界)として捉えている内面」と正六面体は「内在世界(心の世界)として捉えている外面」の象徴だとちょっと書いたが、ようやくちゃんと説明できる所まで来た。

[リンク：■変換人型ゲシュタルト論(7) ～変換人型ゲシュタルトとは？（前編）～]

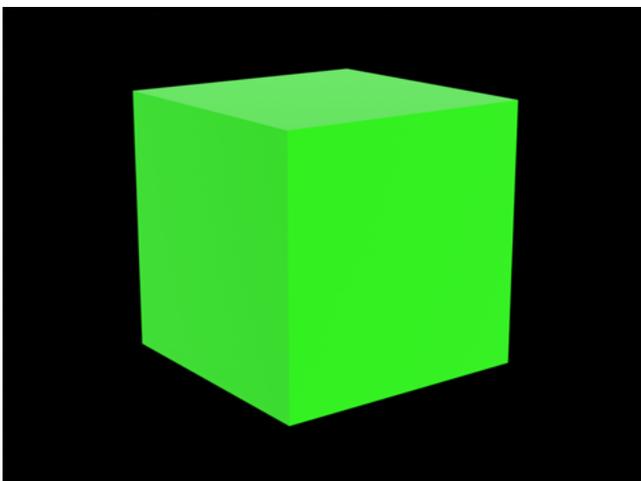
ということで、正八面体と正六面体のニューソロジー的な意味について説明していきたい。

### ■ 正八面体と正六面体の二つの方向性

結論から言うと、3次元空間に留まる『人間の内面』の世界を表すのが正八面体であり、そこから外部へ出る『人間の外面』の世界を表すのが正六面体である。



3次元空間に留まる『人間の内面』行きの方向性



内面から外部へ出る『人間の外面』行きの方向性

以前に書いた「外在世界(物の世界)として捉えている内面」と「内在世界(心の世界)として捉えている外面」も、それぞれそんな感じの意味である。

もっと簡潔に言うと、**正八面体のがノス側なので物質的、**  
**正六面体のがノウス側なので精神的**なものということになる。

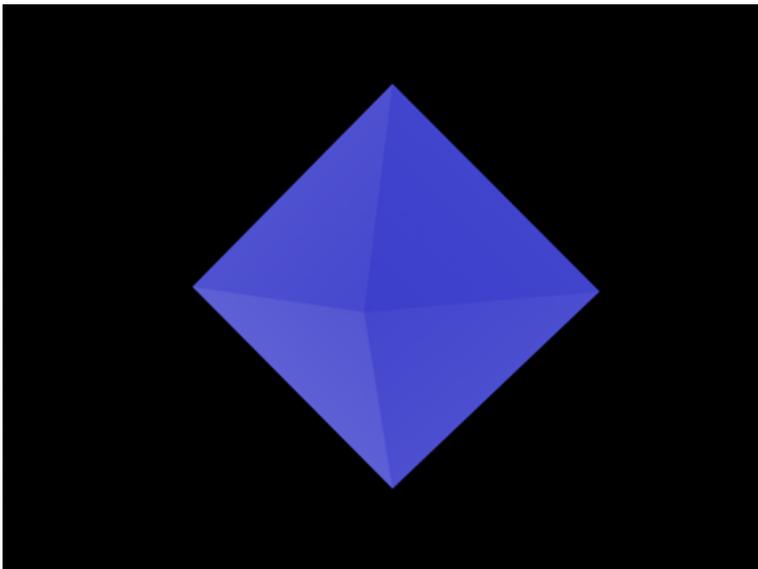
普通に考えたら、ブロックのような形をした正六面体（立方体）のが物質的なのでは？と思うだろうけど、そんな視点が「反転」してるかのような所もまたヌーソロジーっぽい。

どうしてそうなるのだろうか？  
これから詳しく説明していく。

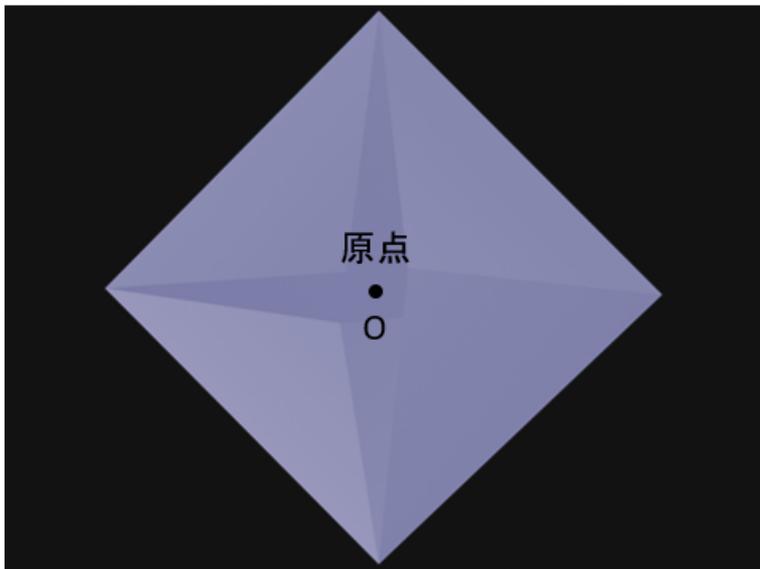
### ■ 正八面体について

正八面体は何故、物質的な方向性のものになるのか？  
それは**3次元座標の姿を表している**からである。

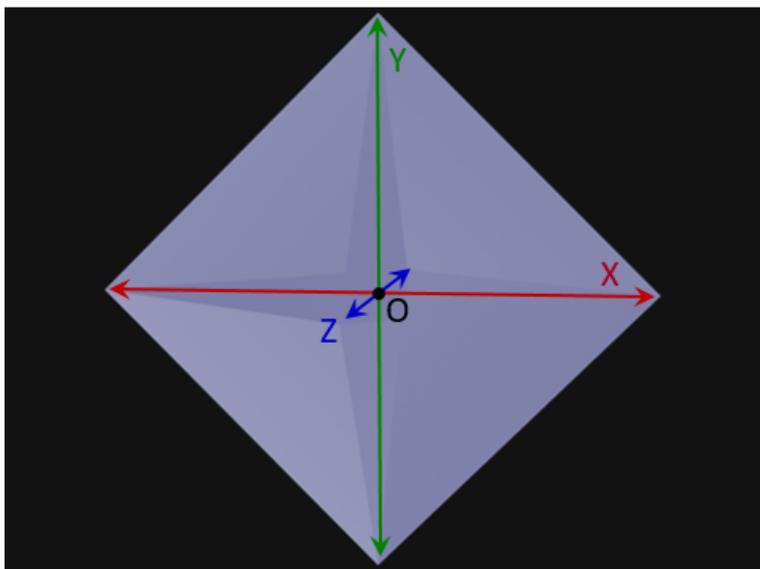
正八面体は以下のような形をしているわけだが・・・



拡大して、その真ん中を原点ということにしてみよう。



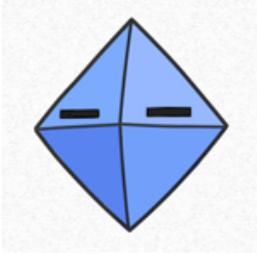
その時、上下、左右、前後の三つの方向に、  
それぞれ頂点があるのわかるだろうか？



この三つの方向はX軸、Y軸、Z軸の方向でもあり、  
「3次元の座標軸の先に頂点がある」という特性が正八面体では大事である。  
正八面体をニューソロジー的に理解する時は、3次元座標をそこに重ねて、3次元座標から出来た形を正八面体として捉える。

このように、正八面体は3次元座標を象徴しているから、  
この世的で物質的なものだと言えるわけである。

(ちなみに、自分がいつも使っている↓のアイコンも、実はどっちかという「3次元空間への定着」的な意味を持っていることになる)



正八面体に留まるように3次元空間に落ち着くことは、地に足をつけることと同義なので・・・**グラウンディング**みたいな意味になる。

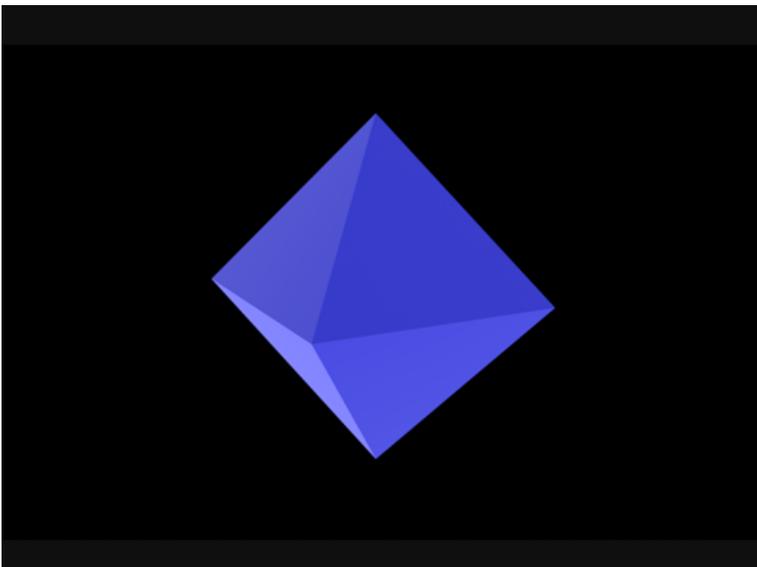
あるいは、正八面体のそうした意味はニューソロジー的な高次元幾何学を踏まえないと分からないため、「高次元からの視点で地に足をつける」みたいに捉えても良いと思う

### ■ 正六面体について

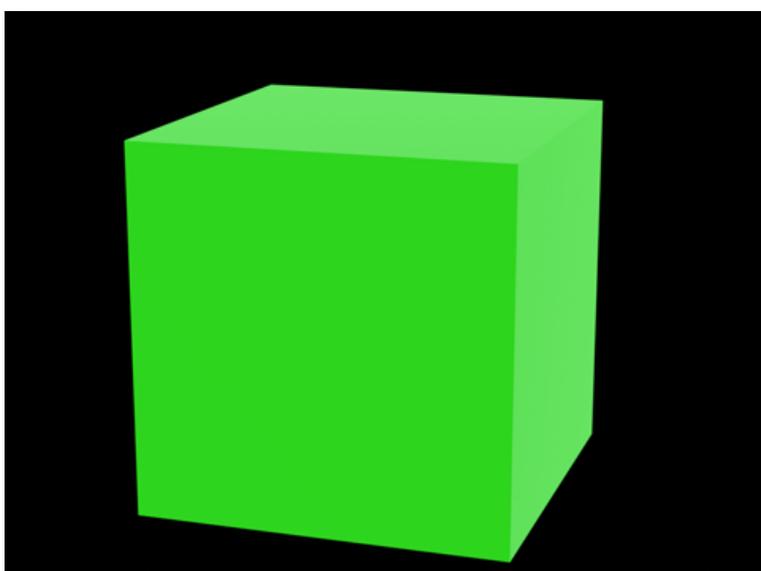
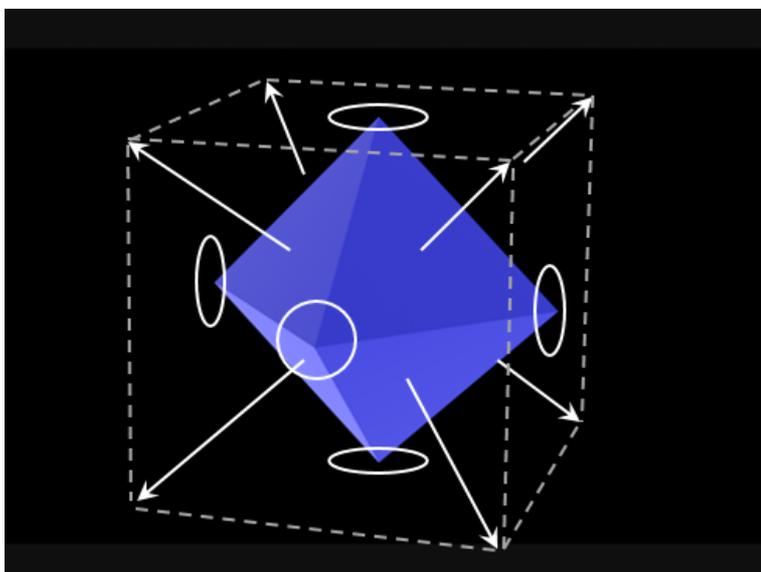
次に、正六面体は正八面体を**面点変換**してできたものと言うことができる。

「面点変換」とは何か？

正八面体は以下のような形をしているわけだが・・・



この立体の頂点を面、面を頂点にしたらどうなるだろうか？



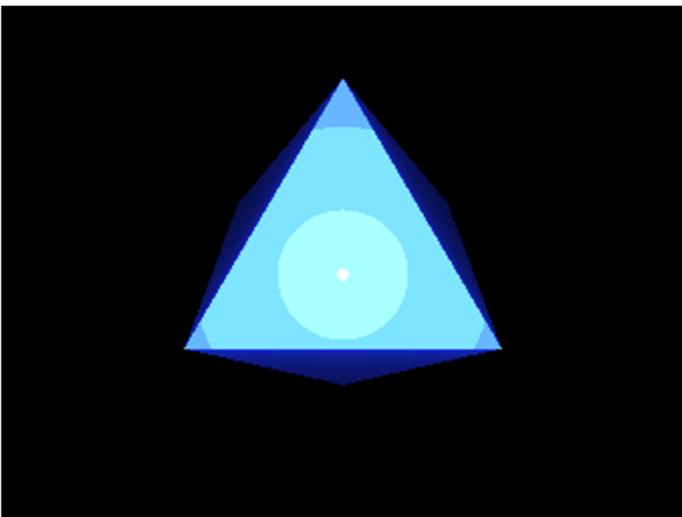
そう。正六面体になるわけである。

正八面体の頂点の数は6つなのに対し、正六面体の頂点の数は8つなため、相互は入れ替え可能な形になっている。

このように、頂点と面、面と頂点を入れ変えるのが「面点変換」であり、正八面体と正六面体は面点変換の関係になっている所が大事である。

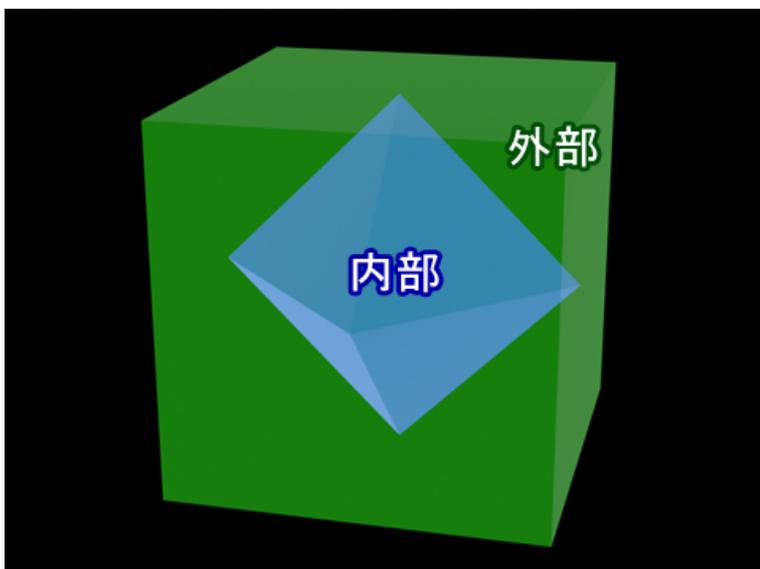
ヌーソロジーはさらにこの面点変換の概念を、

『次元観察子ψ3』や『人間の外面』を発見する時のように「一点を眺ながら全体を見る」感覚とも重ねるようにする。

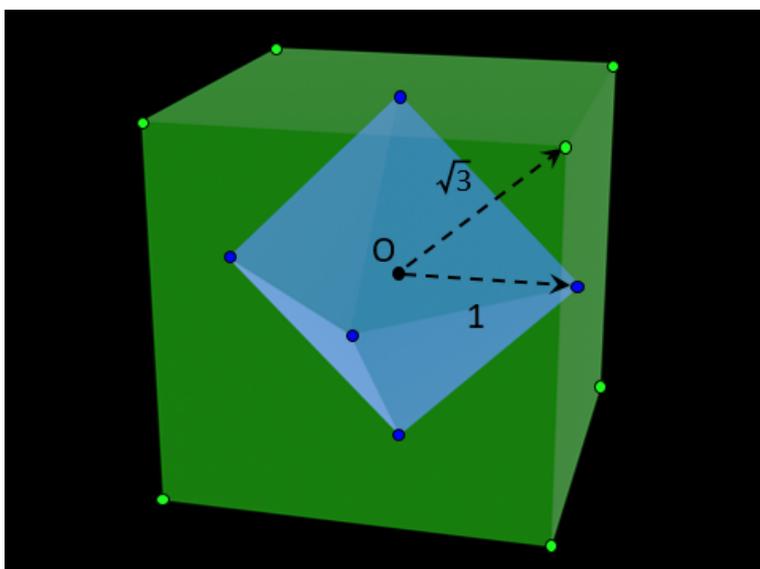


〔アニメーション：正八面体から正六面体への面点変換〕

正八面体⇒正六面体に面点変換した時、  
正八面体の外側にある正六面体は、  
正八面体よりも大きく広がった「外部」の世界を表している。



また、正八面体の原点から頂点への長さを1とすると、  
正六面体の原点から頂点への長さはルート3となる。



つまり、内部：外部は、1：ルート3の比率になっている。

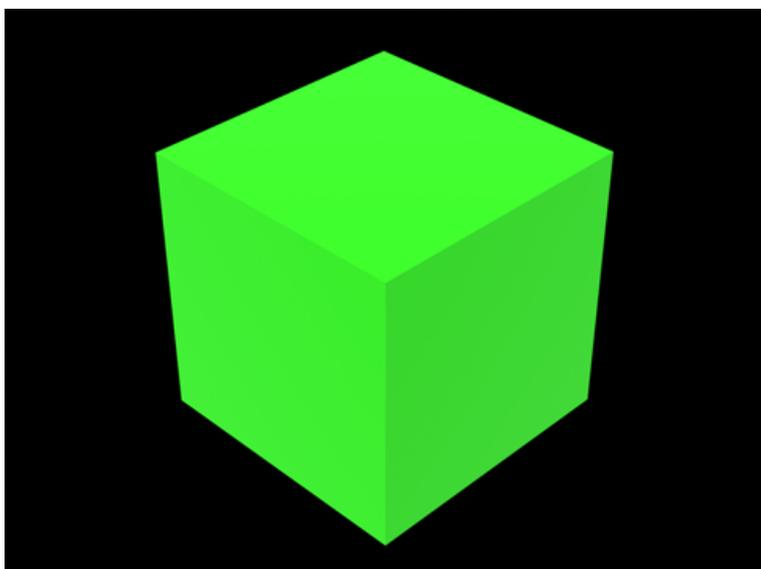
$$1 : \sqrt{3} \text{ (近似値 } 1.7320508075\dots)$$

外部に移行する時の比率がルート3！

これはなんとなく大事な数値になるので覚えておこう。

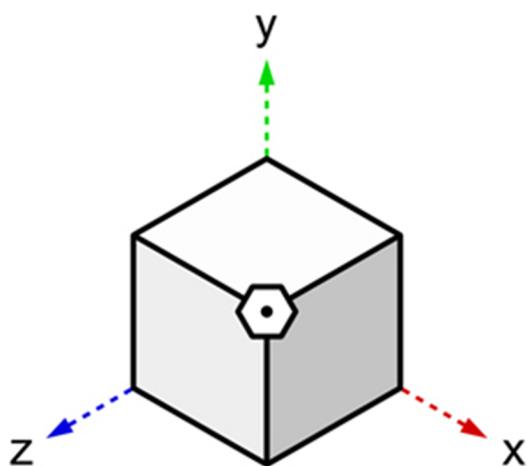
それから、正六面体は普通に考えたら「ブロック」って感じだが、

ヌーソロジー的な正六面体は、以下の視点から見るようにする所がミソである。



(ちなみに、中に正八面体があるとするとこうなる)

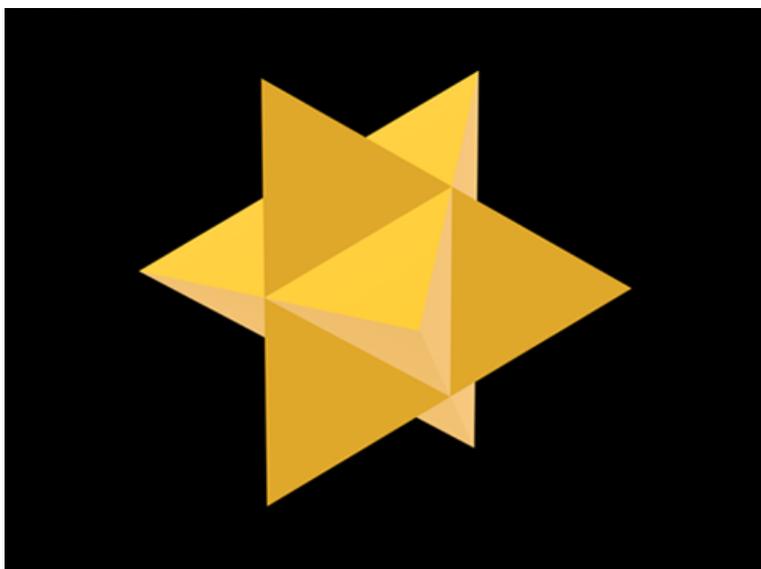
つまり、ヌーソロジー的な正六面体の意味は、以下の図が表すものとほぼ同様になる。



正八面体と正六面体のヌーソロジー的な意味について、大体分かってきただろうか？

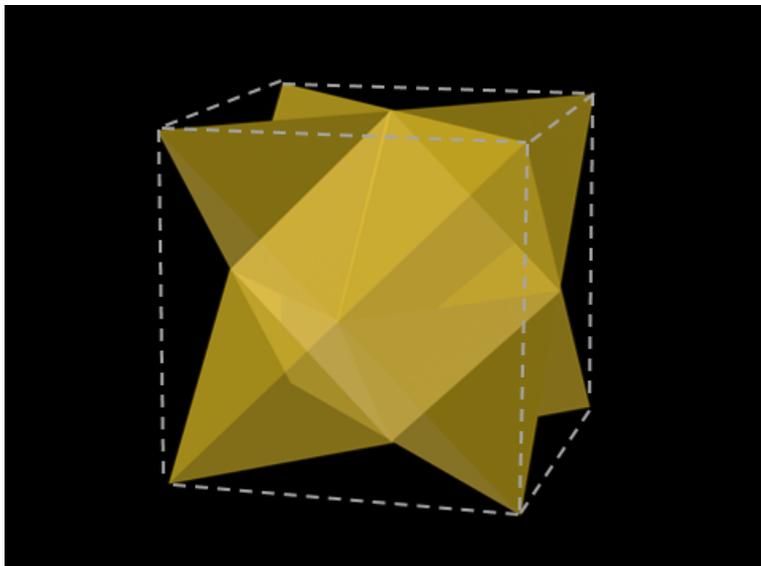
### ■ 星型正八面体について

さて、ここで「星型正八面体」について再度説明する。



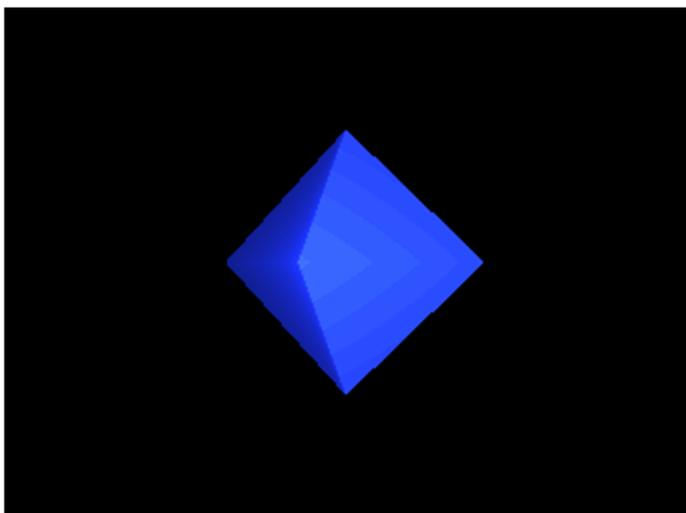
この形は、よく見ると正八面体と正六面体を含んだ形になっている。

突起部分の内側にあるのは正八面体で、外側の頂点を結ぶとできるのが正六面体になっている。



つまり、星型正八面体は正四面体が二つ組み合わさった形であると同時に、正八面体と正六面体を含んだ図形にもなっているわけである。

それから、正八面体の面の部分を伸ばすことで、星型正八多面体になる。



〔アニメーション：正八面体の面の部分を伸ばすことで星型正八多面体に変化〕

これは、3次元空間を表す正八面体が、正六面体までは行かないにせよ、それに向かって外部へと出ようとすることを意味する。

つまり、「外在世界(物の世界)として捉えている内面」と「内在世界(心の世界)として捉えている外面」のどっちつかずにあるながらも、内面を内包しながら外面の方向へ行こうとする形になっているのが星型正八面体である。



〔アニメーション：星型正八多面体の回転〕

以上。正八面体・正六面体・星型正八面体のヌーソロジー的な意味について、なんとなく分かっただろうか？

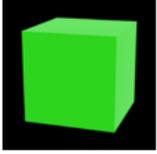
これまで出てきた多面体についてをまとめると、次のようになる。



正四面体(前方向): 外面側(精神側)へ行く方向



正四面体(後方向): 内面側(物質側)へ行く方向



正六面体: 外面側(精神側)の世界



正八面体: 内面側(物質側)の世界



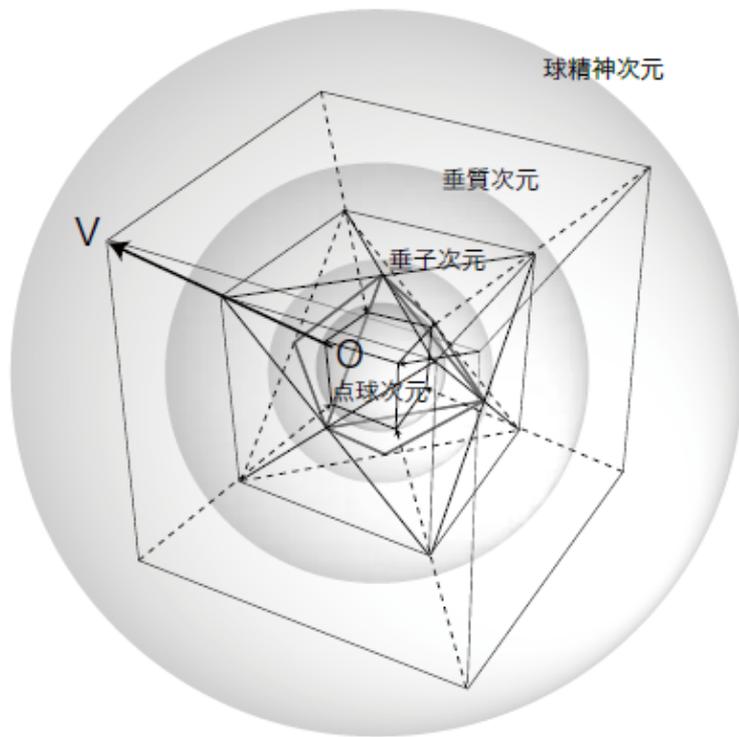
星型正八面体: 内面側と外面側の統合  
内面側を内包しながら外面側へ向かうこと

## ■ 壮大な構造

ヌーソロジーでは、そんな「正八面体⇒正六面体」の構造が、実は**3段階**ある。

その3段階はヌーソロジーが『元止揚』と呼ぶもの・・・

即ち『次元観察子 $\psi 1 \sim \psi 2$ ,  $\psi 3 \sim \psi 4$ ,  $\psi 5 \sim \psi 6$ ,  $\psi 7 \sim \psi 8$ 』に対応している。



※書籍『2013：人類が神を見る日』より引用

「点球次元： $\psi 1 \sim \psi 2$ 」

「垂子次元： $\psi 3 \sim \psi 4$ 」

「垂質次元： $\psi 5 \sim \psi 6$ 」

「球精神次元： $\psi 7 \sim \psi 8$ 」に対応していて、

「 $\psi 1 \sim \psi 2 \Rightarrow \psi 3 \sim \psi 4 \Rightarrow \psi 5 \sim \psi 6 \Rightarrow \psi 7 \sim \psi 8$ 」で3段階の変化がある。

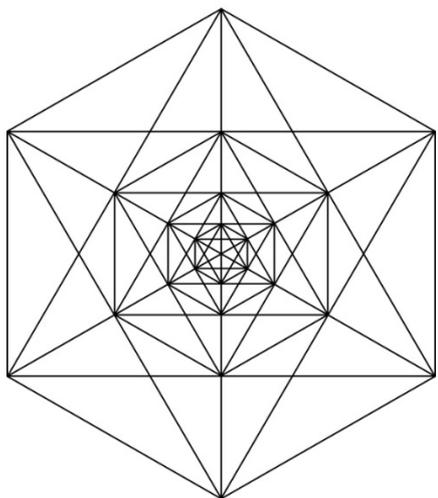
それをナナメ上から見ると、以下のようなになる。

これを『ヘクサチューブル』と呼ぶ。



※Youtube 動画『NOOS LECTURE 2013 OPV』より引用

それを平たくすると、以下のような図になる。



それらの全貌を理解するとなると、だんだんと壮大な話になってくるため、ヌーソロジーは非常に奥が深い・・・

その辺りについては、ここでは詳しく説明しない。

そもそも、無料のブログテキストでなんでもやるのもアレなので・・・

ヌーソロジー本家で学んでいきましょう、ということで。

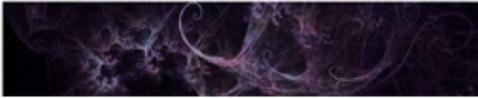
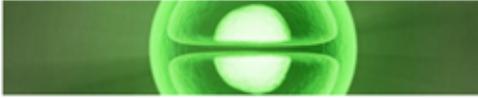
次元観察子 $\psi 3 \sim \psi 4$ と、それに絡んだ幾何学の話はここまでにして、

次回はいよいよ『次元観察子 $\psi 5$ 』の話に入っていこうと思う。

## 45. プログラム 3 次元観察子 $\psi_5 \sim \psi_6$ 位置の等化と中和

いよいよ『次元観察子 $\psi_5$ 』からの話に入っていこう。

「 $\psi_1 \sim \psi_2$ ：普通の世界」「 $\psi_3 \sim \psi_4$ ：反転した世界」より先、さらに突き進んだ層にある世界である。

	$\psi_1 \sim \psi_2$	第一層
	$\psi_3 \sim \psi_4$	第二層
	$\psi_5 \sim \psi_6$	第三層
	$\psi_7 \sim \psi_8$	第四層
	$\psi_9 \sim \psi_{10}$	第五層
	$\psi_{11} \sim \psi_{12}$	第六層
	$\psi_{13} \sim \psi_{14}$	第七層

次元観察子 $\psi_5$ の理解は、次元観察子 $\psi_3 \sim \psi_4$ までの理解が前提になる。

次元観察子 $\psi_3$ については「知覚正面」といった概念の説明があったが、なんとなく分かっただろうか？  
しかし、その辺りはまだ序の口であるため、  
それだけではニューソロジーの持つ力としてはまだまだ弱いとも言える。  
ニューソロジーにはその先があり、そこからが本番である。

次元観察子 $\psi_5$ を理解すると、

『 $\psi_1, \psi_2, \psi_3, \psi_4$ 』がそれぞれ『負荷・反映・等化・中和』の意味があるものとよりハッキリと理解できる。

加えて、 $\psi_3$ よりもさらに奥深い『等化』が分かってくるようになる。

ここから先は、ニューソロジーを深めていくための中級的な本番ということで、話を進めていこう。

## ■ オコットによる次元観察子 $\psi 5$ の説明

まず、次元観察子  $\psi 5$  は冥王星のオコットによると以下のように説明される。

次元観察子  $\psi 5$  とは自己が形成されている空間領域のことです。 $\psi 5$  は位置の等化によって顕在化を起こし、人間の内面と外面を統合します——シリウスファイル: 19920204

「自己が形成されている空間領域」と書いてある。

ここでいう「自己」とは『[「自己」を見つけるために](#)』の項で説明したような「Spirit Self」に通じた自己であるし、

$\psi 5$  が分かるとそうした意識の発見にも繋がるし、ブレない自己を確立することにも繋がる。

[リンク: ■変換人型ゲシュタルト論(3) ~「自己」を見つけるために~]

それから、『位置の等化』というのはヌーソロジー用語であり、

『 $\psi 5$  を顕在化させること』と同義である。

また、 $\psi 5$  は『人間の内面』と『人間の外面』を統合するとも書いてある。

この「統合」を言い換えると『等化』ということになるので、これも「 $\psi 3$  と  $\psi 4$  の等化」と同義になる。

つまり、 $\psi 3$  と  $\psi 4$  の等化が、揺るぎない自己の発見にも繋がるということである。

そのため、確かな自己を確立し、雑多な物事に動じない精神力を持つつもりで、

次元観察子  $\psi 5$  の理解にのぞむと良いと思う。

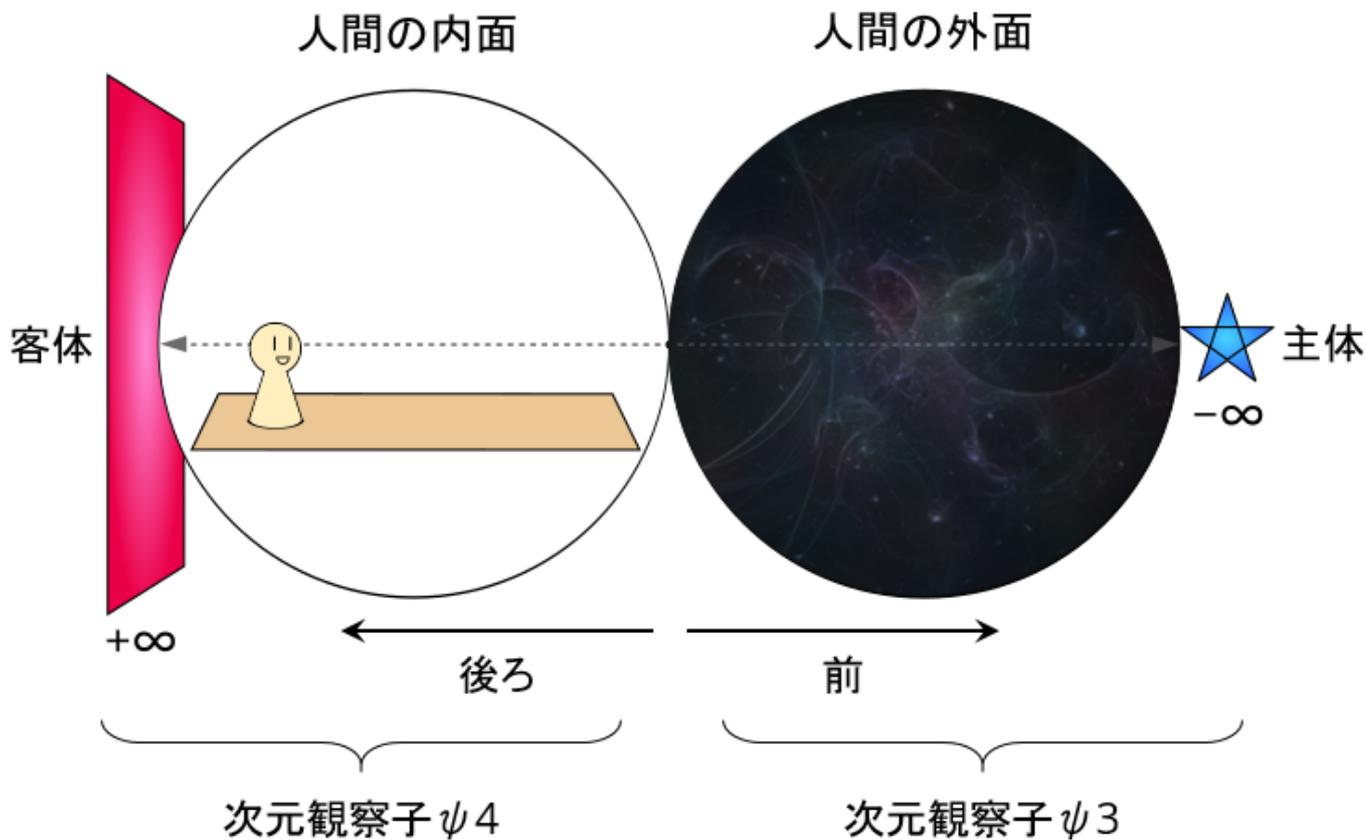
## ■ 次元観察子 $\psi 5$ の発見のゴール

次元観察子  $\psi 5$  の発見のゴールはどこにあるのだろうか？

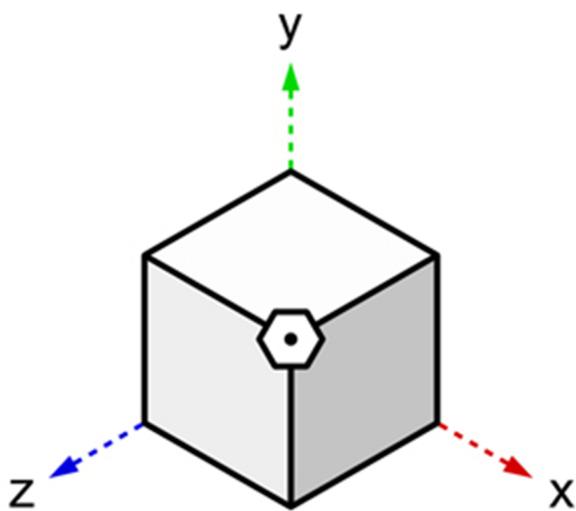
基本的には、まずは  $\psi 3$  と  $\psi 4$  の定着が大事である。

$\psi 3 \sim \psi 4$  において、前の無限遠点 ( $-\infty$ ) と後ろの無限遠点 ( $+\infty$ ) があり、主体と客体がある。

ここまではOKだろうか？



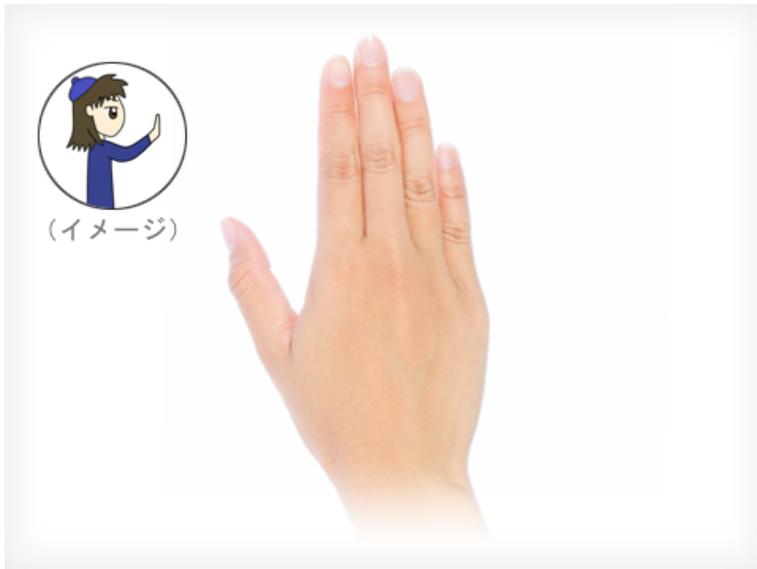
知覚正面上だと、3次元空間の垂直方向ある『垂止』の前側が $\psi_3$ 、後ろ側が $\psi_4$ となる。



また、奥行き方向に主体があり、手前より後ろ方向に客体があることになる。



奥行き方向を意識。前に主体。

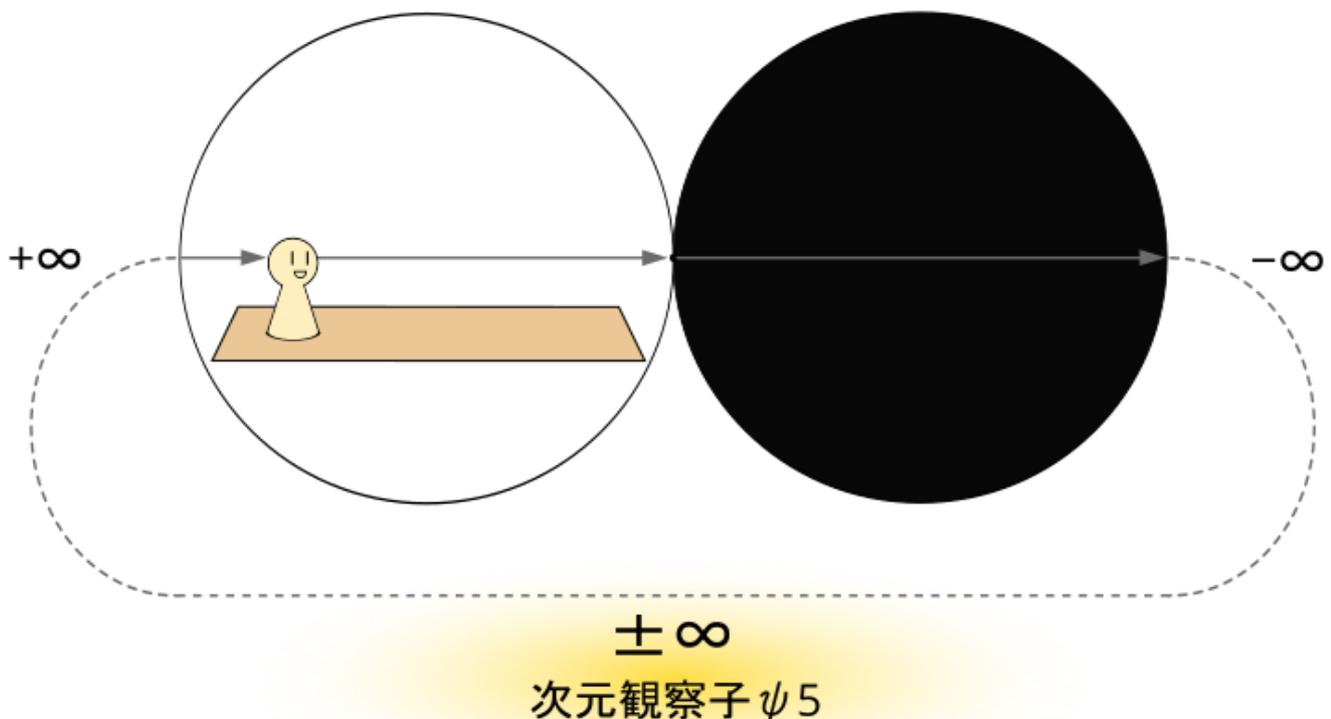


手前より後ろ方向を意識。後ろに客体。

そして、次元観察子 $\psi 5$ ではその二つを『等化』する。  
言い変えると「対称性を見出す」が必要になる。

さらに、等化が完了すると、前の無限遠点と後ろの無限遠点が繋がった、  
「無限遠点 $\pm\infty$ 」の位置が分かるようになる。

その場所に次元観察子 $\psi 5$ があり、冥王星のオコツトが言う通り「自己が形成されている空間領域」もそこにあるため、それを発見するのがとりあえずのゴールとなる。



しかしながら、一体どうやってそれを発見すれば良いのだろうか？

まずは「回転」と「無数化」が基本となるため、  
その二つについて説明しようと思う。

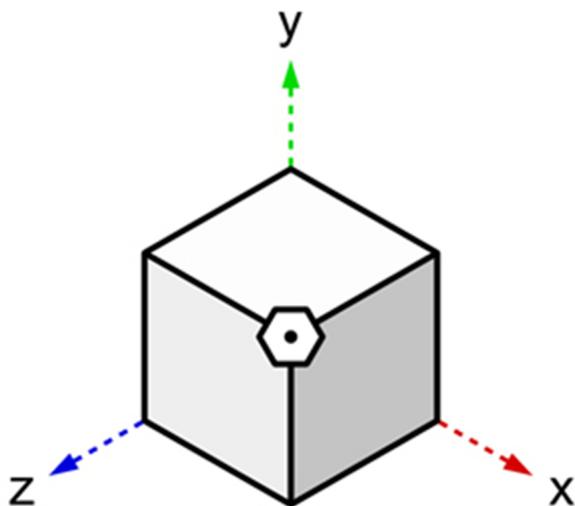
## 46. 垂子の回転

前回、『次元観察子 $\psi 5$ 』の発見のカギとなるのは、「回転」と「無数化」だということを書いた。

今回は「回転」について説明していく。

・・・その前に、『垂子』についてを軽くおさらいしよう。

『次元観察子 $\psi 3$ 』は「知覚正面」が分かった時に発見されるもので、以下の図を知覚正面とした場合、垂直方向にあるものが『垂子』である。

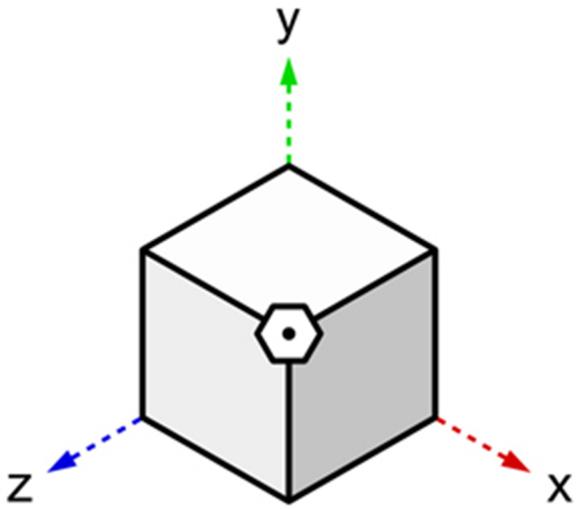


そのため次元観察子 $\psi 3 \sim \psi 4$ が『垂子次元』と呼ばれるので、この概念についてよく意識していこう。

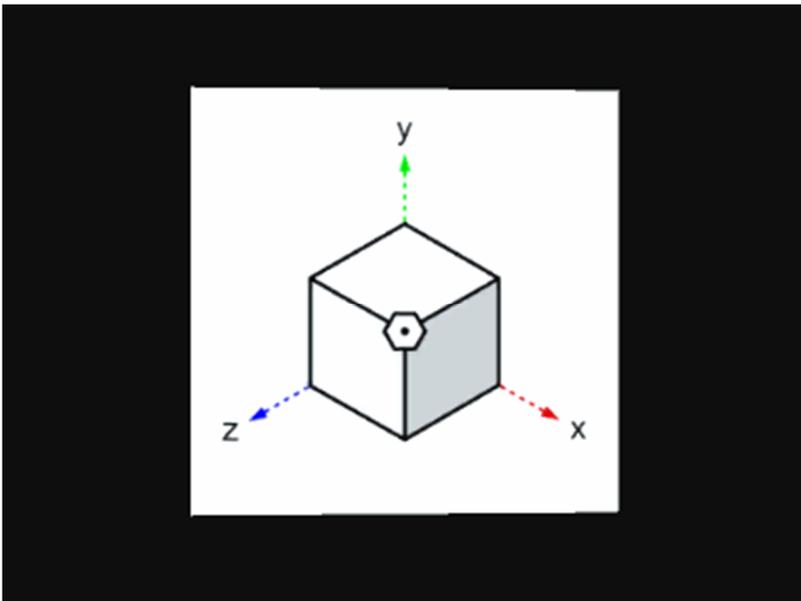
### ■ 「垂子」の回転

さて、次元観察子 $\psi 5$ の発見は、次元観察子 $\psi 3 \sim \psi 4$ の『等化』でもある。等化の基本は回転なので・・・『垂子』を回していこう。

まずは「知覚正面」を意識してから・・・



その「知覚正面を回す」イメージである。



[アニメーション：上記の図板が横回転]

**KitCat 実験**のイメージだと、以下の絵を「知覚正面」として・・・



それを回すイメージである。



〔アニメーション：KitCat 缶が自転しているように見える〕

上記のアニメーションは分かりやすいように描写したものだが、実際に知覚正面を回すイメージができるだろうか？

### ■ 「垂子」から「垂質」へ

そもそも、「回転」にはどんな意味があるのだろうか？

以下の KitCat 実験のアニメーションを見てもらえれば分かりやすいと思う。



〔アニメーション：KitCat 缶が自転しているように見える〕

これは「自分がKitCat 缶の周りを回っているかのように見えるアニメーション」であり「KitCat 缶が回っているアニメーション」でもあるわけだが、  
対象の物が回転した場合、どういうことが言えるかというと・・・  
対象の物を立体物（3D）として全体を認識することができる。

そもそも、回転がない場合は2Dである。



上記の光景でも、光と影の見え具合で3D上はどうなっているかの推察はできるが、  
結果は触ったり回って見たりしないと分からないのである。  
光と影の色合いは装飾で、実は缶の形とは全然ちがう形をしている可能性もある。

見ている光景に先入観を持っていると、  
以下の動画のように分かりづらい配置になっている可能性もある。

〔Youtube 動画：Assumptions〕

それを確かめるためには「触覚」で認識することも大事だが・・・

視覚で認識する場合、対象の周りを回ったり、物を回したり、回転がないと3Dとして物体が認識できないのである。



〔アニメーション：星型正八面体の回転〕

『垂子』と「知覚正面」を回転させる場合もこの法則が大事となる。

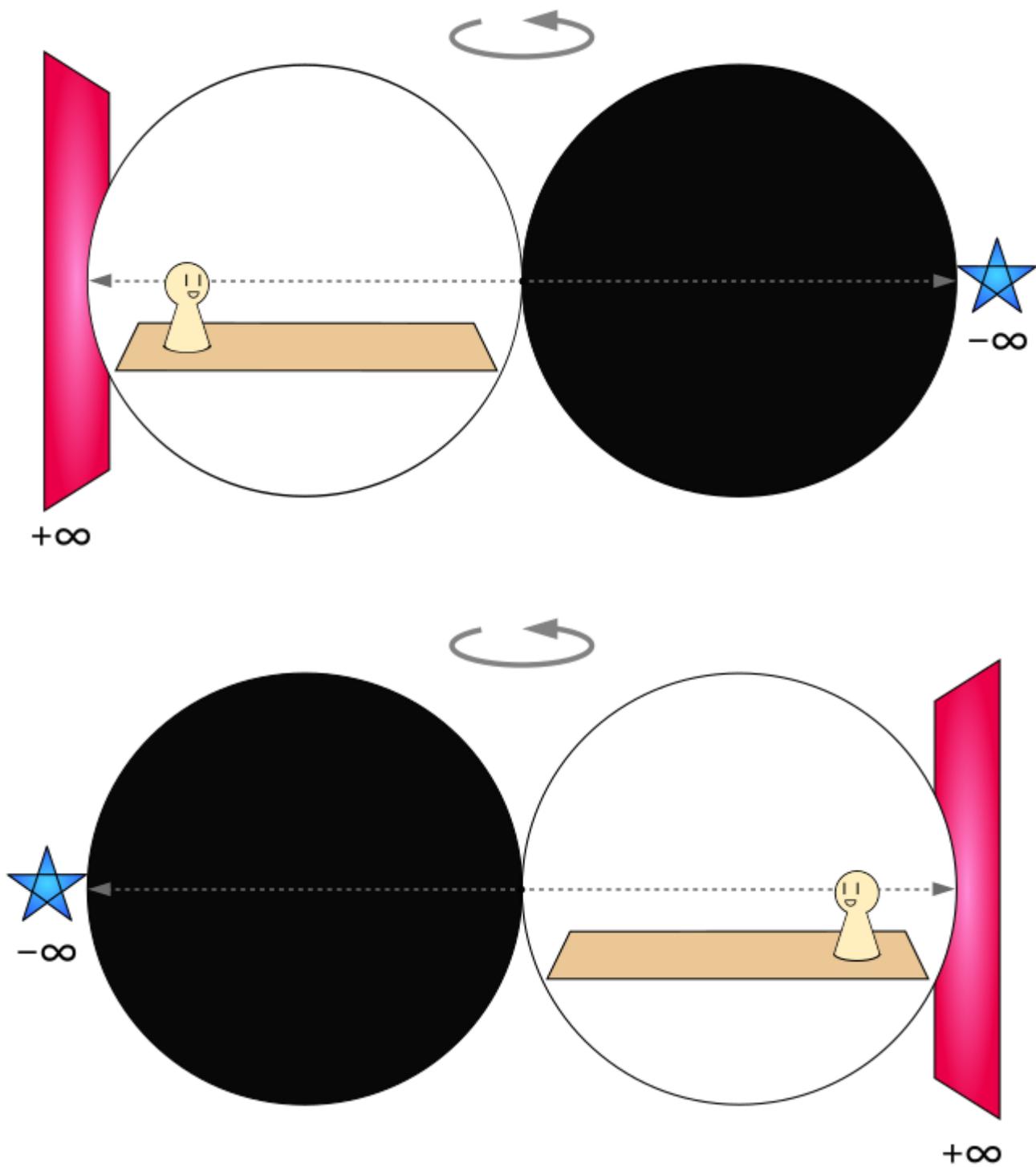
「回転によって一つ上の次元の全体像が見えてくる」という法則によって、「知覚正面」よりさらに次元が上がり、認識している空間の中に「実体」が出てくるようになる。

このように、『垂子』が回転によって実体を持つことを『垂質』と呼ぶ。

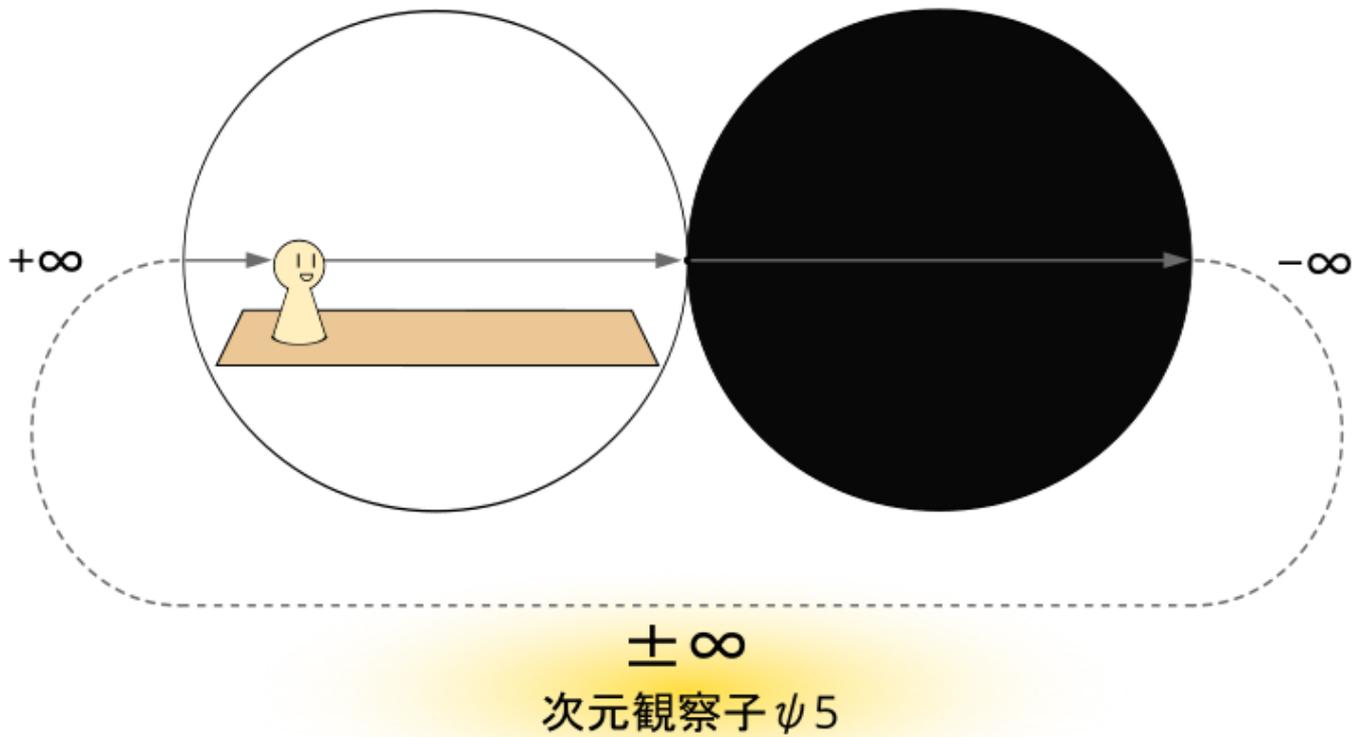
そのため、次元観察子 $\psi_5$ のある次元は『垂質次元』と呼ばれている。

## ■ 回転による入れ換え

それから、主体と客体（前と後ろ）を回転させて入れ替えた場合はどうなるだろうか？



このように回転させて入れ替えるみたいなことをやっているうちに、  
前側と後ろ側が繋がる位置が見えてくるんじゃないだろうか？



『次元観察子 $\psi_3$ 』の時も光速度のスピードによって新しい空間が開けていったので、  
 ここでもまた、光速度の回転スピードがイメージできた時は新たな次元が開けてくるかもしれない。

### ■ KitCat 実験の意味

さて、『垂質』についてを深掘りするために、  
 「KitCat 実験」について改めて考えてみよう。



[アニメーション：自身が自転していて、缶がそれを中心に公転している]



[アニメーション：自身が見ている缶の公転だが、缶が自転しているようにも見える]

[Youtube 動画：視点変換 3 D ルームでの KitCat 缶回転 (KitCat 実験) ]

これは『次元観察子 $\psi 5$ 』を理解するための実験である。

そこにある認識のプロセスを整理すると・・・

「実際は缶が自分を中心に周っている」 ( $\psi 1 \sim \psi 2$ )

⇒ 「自分が缶の周りを周っているように見える」 ( $\psi 3$ )

⇒ 「自分が周っているようだが、自分が不動であるかのようにも見える」 ( $\psi 5$ )

・・・というように、認識が二回反転する所が重要である。

それから、「自分が缶の周りを周っているように見える」には目の前の缶を「知覚正面」として見る必要があり、

さらに、その状態がアニメーションのように連続している所が重要である。

そうしたことを意識して KitCat 実験の動画を観るようにして、次元観察子 $\psi 5$ を理解していこう。

以上。次元観察子 $\psi 5$ について少しでも分かってきたらどうか？

まだまだ序盤なため、引き続き詳しく説明していこうと思う。

## 47. 垂子の無数化

前回は「回転」について説明した。

次は「無数化」についてである。

『次元観察子 $\psi$ 3』の時に「無数化」が出てきたように、

『次元観察子 $\psi$ 5』の時にもこれが出てくる。

[リンク：■変換人型ゲシュタルト論(28) ～等化は「無数化」の方向にある～]

・・・というかそもそも、

これについては「回転と無数化は同義。」というような理解の仕方をして良い。

「回転」は、アニメーションのようにたくさんの視点があって成立するのである。

KitCat 実験でもそうだった。



[アニメーション：KitKat 缶が自転しているように見える]

一般的に放映されているアニメーションのイメージもそんな感じ？と言えそうだが・・・

[Youtube 動画：「セレブレーション！ミッキーマウス」 蒸気船ウィリー]

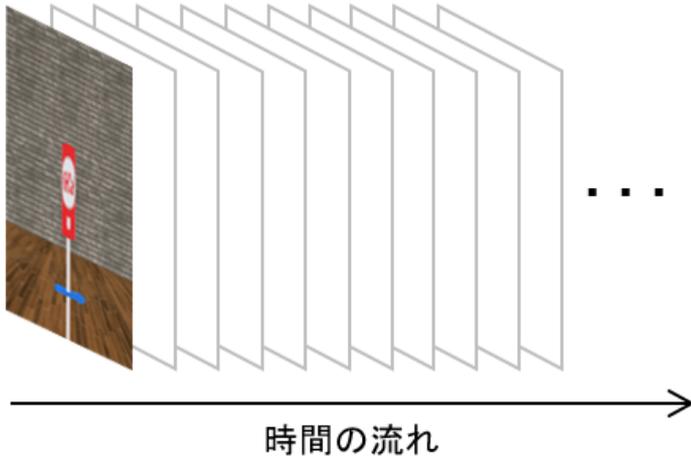
ただ、難しいのは、ヌーソロジーの場合は直線的な時間を通るようなアニメとは違うことである。

アニメはパラパラ漫画のように時間とともに次の絵に進む仕組みだが、

我々の実際の知覚は「今」が連続しているだけである。

この違いが分かるだろうか？

～客観的時空～



～主観的時間～



ただ「続いている」だけ

以下のような「KitCat 実験のアニメーション」の場合は、  
「常に一瞬一瞬の今がある」という感じで、「無数の知覚正面」があることで成り立っている。

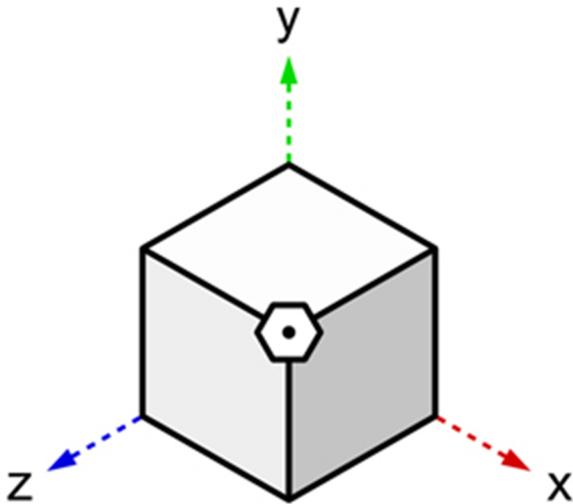


〔アニメーション：KitCat 缶が自転しているように見える〕

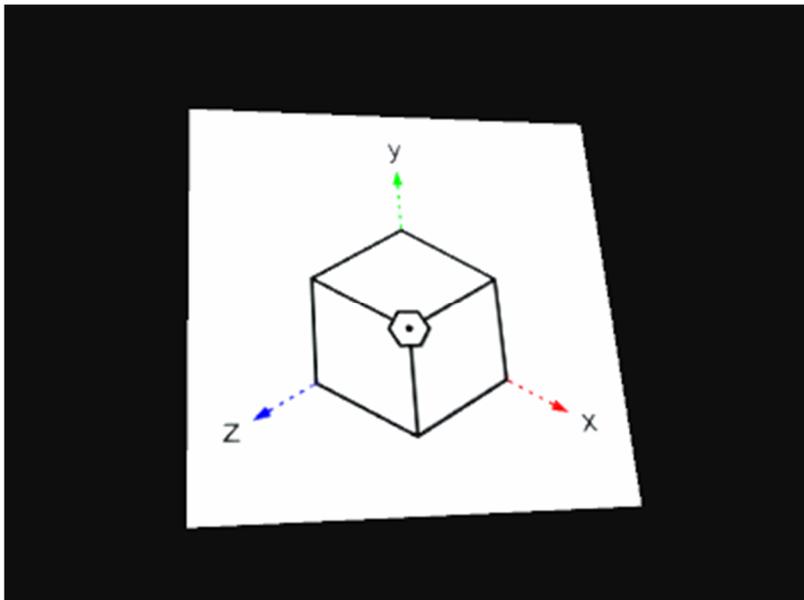
## ■ あちこちの方向へ無数化

さて、「無数化」ということで、  
奥行き方向が無数化してあちこちの方向になっているのもイメージしてみよう。

これもまずは「知覚正面」を意識して・・・



それを色んな方向へあちこちに動かしてみる。



〔アニメーション：上記の図板がランダムで色んな方へ向く〕

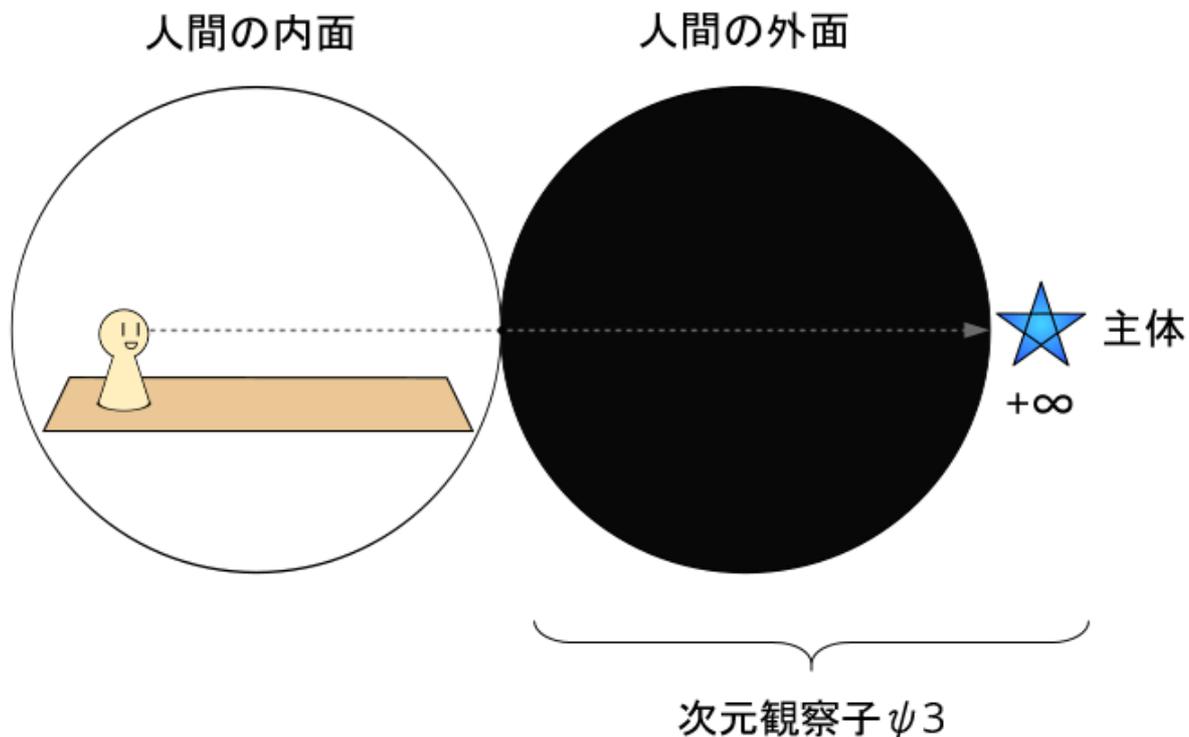
上記のアニメーションは比喻なので時間の経過によってあらゆる方へ向かうようになっているが・・・  
 $\psi 5$  の場合は「同時に色んな方向にある」みたいな感覚に近い。

これもなんとなく $\psi_5$ の方向に近づいていけるんじゃないだろうか？

### ■ 無数の主体

さて、次に『主体』を無数にしてみる。

次元観察子 $\psi_3$ の場合は以下のように一個の主体があるわけだが・・・



次元観察子 $\psi_5$ の場合はどうなるのか？



次元観察子 $\psi_5$ が顕在化すると、以下のように無数の主体が周りになるような感覚になる。



次元観察子  $\psi 5$   
 $\pm \infty$

前回の「回転」の説明と合わせて、そうした感覚が分かるだろうか？

これが分かってくると「 $\psi 3$  と  $\psi 4$  の等化」も分かってくるし、  
ヌーソロジーに関する色々なことも分かってくるので、  
地道にやってみよう。

## 48. マトリックスのバレットタイム

前回と前々回で、次元観察子 $\psi_5$ を理解するための「回転」と「無数化」について説明した。

今回はイメージしやすい例を出して説明する。

引用するのは、映画『マトリックス』で使われた「バレットタイム」という撮影技術についてである。

映画『マトリックス』は、ヌーソロジの書籍『奥行きの子供たち』でも題材になったため、ヌーソロジ一界隈の皆さんは観ているだろうか？

[書籍：半田広宣，春井星乃，まきしむ『奥行きの子供たち』(2019) ヴォイス]

ヌーソロジの教材にそのまま使えるような作品なので、気になる人は是非とも観ておこう。

まあ、今回の記事では観なくても大丈夫なのだが・・・

注目すべきは、主人公ネオが銃弾をかわすシーンである。以下の動画だと0:35～あたりからになる。

[Youtube 動画：The Matrix (1999) - Bullet Time Scene (1080p) FULL HD]

動画タイトルに「Bullet Time Scene」とあるように、ここでは「バレットタイム」と呼ばれる有名な撮影技法が使われている。

ヌーソロジ的にこれは「4次元の視線だ」と言われているため、それについて詳しく説明する。

### ■ バレットタイムについての解説

バレットタイムはどんな撮影技法なのか？

以下の「Bullet-time tutorial」を観てもらいたい。

[Youtube 動画：Bullet-time tutorial - software & hardware]

英語なので全部観てもらわなくても良いが・・・

開始 20 秒ぐらいまで観ればなんとなく分かると思う。

モデルの中心にぐるりと、なるべくたくさんの角度を網羅する数のカメラ（写真撮影用）を用意して、ポーズが決まったタイミングで「パシャッ」と撮る。



（※1秒につき24個ぐらいのカメラが必要）

あとは、色んな角度から撮られた一枚絵をアニメーションのように繋げれば・・・  
物体が静止（あるいはゆっくり移動）したままぐるりと回転している映像を作ることができるわけである。

以下の動画の40秒～あたりも、映画『マトリックス』での撮影風景がそのまま分かるようになっている。

[Youtube 動画 : The Matrix Behind The Scenes - Rooftop (1999) - Keanu Reeves Movie HD]

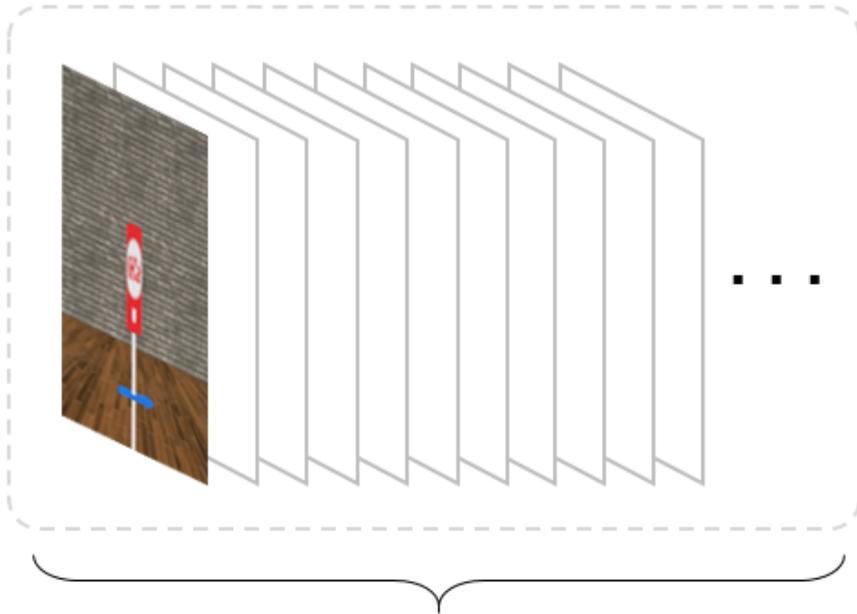
手間とお金がとてもかかりそうな撮影技法だが、  
異様な映像表現を実現することができるので、  
『マトリックス』の名シーンがそれによって作られて、見事に成功した。

### ■ バレットタイムのヌーソロジー的意味について

バレットタイムはヌーソロジー的にどんな意味を持つのか？

たくさんの一枚絵をつなぎ合わせることは、  
いわば「無数化した平面」を連続的に繋げることにもなる。

また、それらは時間軸上に存在するのではなく、  
同時に複数存在する所が重要である。



同時に発生している

ということか分かって来ただろうか？

「回転」のイメージも「無数化」のイメージもこれに現われているため、  
「知覚正面」を「バレットタイム」のようにたくさん用意して、  
動かすことができないだろうか？

バレットタイムがニューロロジー的に「4次元の視線だ」と言われているのは、  
そこから次元観察子 $\psi 5$ のようなニューロロジーの意識を開くことができるという意味である。

### ■ モノ視点と自己視点がある話

ちなみに、バレットタイムについては

natanさんのニューロロジー解説サイト↓でも解説されているため、それを参考にした。

[リンク：【 $\psi 3 \sim 4$ 】バレットタイムでみる $\psi 3$ 主体の位置—映画『マトリックス』 \_ Noos Eggs]

ニューロロジーの次元観察子との対応を正確につきつめると、

バレットタイムは「 $\psi 7$ に対応する」と言われている。

なぜなら、無数に散らばったモノ（カメラ）からの視点であるため、自己からの視点ではないからである。

次元観察子 $\psi 5$ の場合は自己からの視点が大事になるため、

「自分の身体側」からの視点で「バレットタイム」のようなことをやる。

つまり、ネオの視点になったつもりで、ネオの動きになりければ良いわけである。



(Youtube 動画『The Matrix (1999) - Bullet Time Scene (1080p) FULL HD』より引用)

うーん・・・できるんだろうか？ (笑)

とはいえ、これを意識してみると、  
次元観察子 $\psi_5$ の感覚が掴みやすいと思う。

## 49. 「純粹持続」の空間について

これまで『次元観察子 $\psi$ 5』の理解のために

「回転」「無数化」「バレットタイム」といったことについて説明してきた。

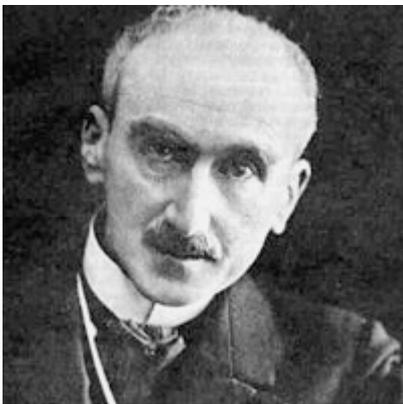
そして、これらはどれも「時間」が重要な概念として絡む話だった。

ここで「純粹持続」という概念について説明しておこう。

### ■ 純粹持続とは何か？

まず、「純粹持続」とは何か？

これは哲学者のアンリ・ベルクソンが提唱した、時間の概念の一種である。



ヌーソロジーの説明においても、半田広宣さんはよく「持続」とか「持続空間」といったワードを使うが、これもベルクソンの哲学を踏襲している。

「持続」は「純粹持続」の略称であるため、ほぼ同じ意味と理解して良い。

一般的に時間は「客観的に流れている直線的な時間」みたいにイメージされているが、それに対する「主観的に持続している時間」みたいな概念が「持続」である。

ベルクソンを分かりやすく解説している

『シリーズ・哲学のエッセンス ベルクソン』による説明だと、「持続」は以下のように書かれている。

〔書籍：金森修『シリーズ・哲学のエッセンス ベルクソン』（2003）NHK 出版〕

日常生活の必要性に駆られて時間を空間様のものとして捉えたり、とびとびの自然数列になぞらえて理解したりという限りにおいては、時間はいわば物質のような外在的性格を引き入れるということになる。せわしない日常のなかで、僕たちは時間を空間のように、または物質のようにイメージしている。

本当を言うなら、つまり日常生活での功利性や実利性、切迫性を離れ、より本来の意識のなかに沈潜しながら反省してみるなら、そこには、空間的時間とはずいぶん性格を異にする流れが存在するということが気が付くはずだ。まるで〈空間的なかさぶた〉をはがしてみると、そこから、本当の時間が姿を現すともいうかのように。

本当を言うなら、つまり日常生活での功利性や実利性、切迫性を離れ、より本来の意識のなかに沈潜しながら反省してみるなら、そこには、空間的時間とはずいぶん性格を異にする流れが存在するということが気が付くはずだ。まるで〈空間的なかさぶた〉をはがしてみると、そこから、本当の時間が姿を現すともいうかのように。

その忘却を自覚させ、眠った状態のそれを覚醒させるという目的のために、ベルクソンは特別の名前をあたえた。彼はそれを〈純粹持続〉(la duree pure) と呼んだのである。

それは空間とは違い、単位をもたず、互いに並列可能でもなく、互いに外在的でもない。それは互いの部分が区別されるということがない継起であり、相互浸透性そのものである。数直線とは違い、それは原理的に後先を指定することが難しく、順序構造をもたない。また、可逆性をもたない。それは量的で数的な多様性ではなく、質的な可能性である。

なんとなくどんなものか分かっただろうか？

それから、ベルクソン本人の書籍『時間と自由』からの引用だと、以下のように書かれている。

〔書籍：『時間と自由』（2001）岩波書店〕

事実、持続には二つの考え方が可能なのだ。一つは、混合物のまったくない純粋なもの、もう一つは、空間の観念がひそかに介入しているものである。まったく純粋な持続とは、自我が生きることに身をまかせ、現在の状態と先行の状態とのあいだに分離を設けることを差し控えるとき、私たちの意識状態の継起がとる形態である。だからといって、過ぎていく感覚や観念にすっかり没入してしまう必要はない。というのは、そうすると、反対に、自我はおそらく持続することをやめてしまうからである。

これは時間に関する色々なことが書かれている書籍の中での一説で、持続についても書かれている。どういふものか少しは分かっただろうか？

先の書籍の内容の要点をまとめると、「直線的な時間」と「持続的な時間」は次のような特徴があることが分かる

### ～直線的な時間～

- 量的である
- 空間のように測れる
- 言語の影響を受ける
- 等質的である
- 決定論に到達する

### ～持続的な時間～

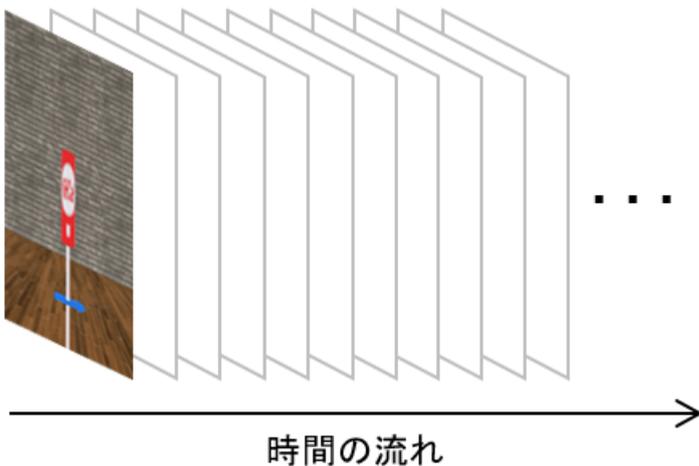
- 質的である
- 測ることができない
- 言語化以前のものである
- それぞれの質が違う
- 自由に到達する

#### ■ 二種類の時間

要するに、二種類の時間があるという話で、

[『垂子の無数化』](#)の項でも説明したような以下の二つの時間のことを言っている。

#### ～直線的な時間～



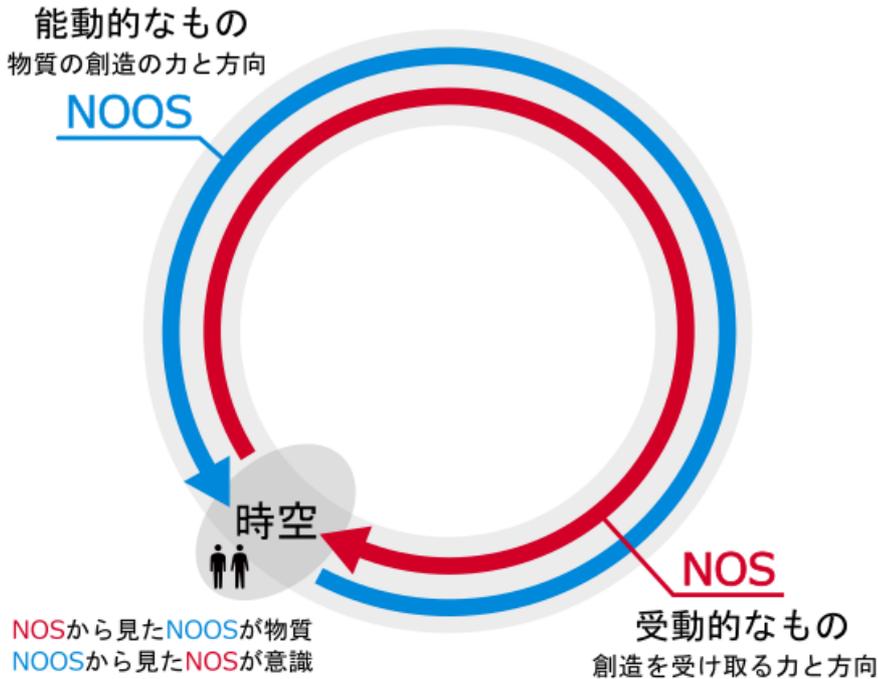
#### ～持続的な時間～



ただ「続いている」だけ

ヌーソロジーにおいてこの二つの時間はノス (NOS) とノウス (NOOS) に関係していて・・・

- ・ノス (NOS) : 直線的な時間
  - ・ノウス (NOOS) : 持続的な時間
- ・・・に対応している。



直線的な時間はノス (NOS) 側にあって、その概念は科学を作る礎となり、受動的なものとして機能する。一方で持続的な時間はノウス (NOOS) 側にあって、生態系はその力で動いている。

こうした二元のイメージを踏まえながら時間と持続についてを理解していくと、ヌーソロジー的な時間概念を深めていくことができる。

### ■ 「時間」と「記憶」の真意

ベルクソンの「純粹持続」は、実は人間の持つ「記憶」と密接に関係している概念でもある。

これについてもうちちょっと整理してみよう。

次の KitCat 実験のアニメーションを見た時、どうなるのか？



〔アニメーション：KitCat 缶が自転しているように見える〕

これは一見すると「回っているように見える」アニメーションなわけだが、我々がこれを「回っている」ように見えるには

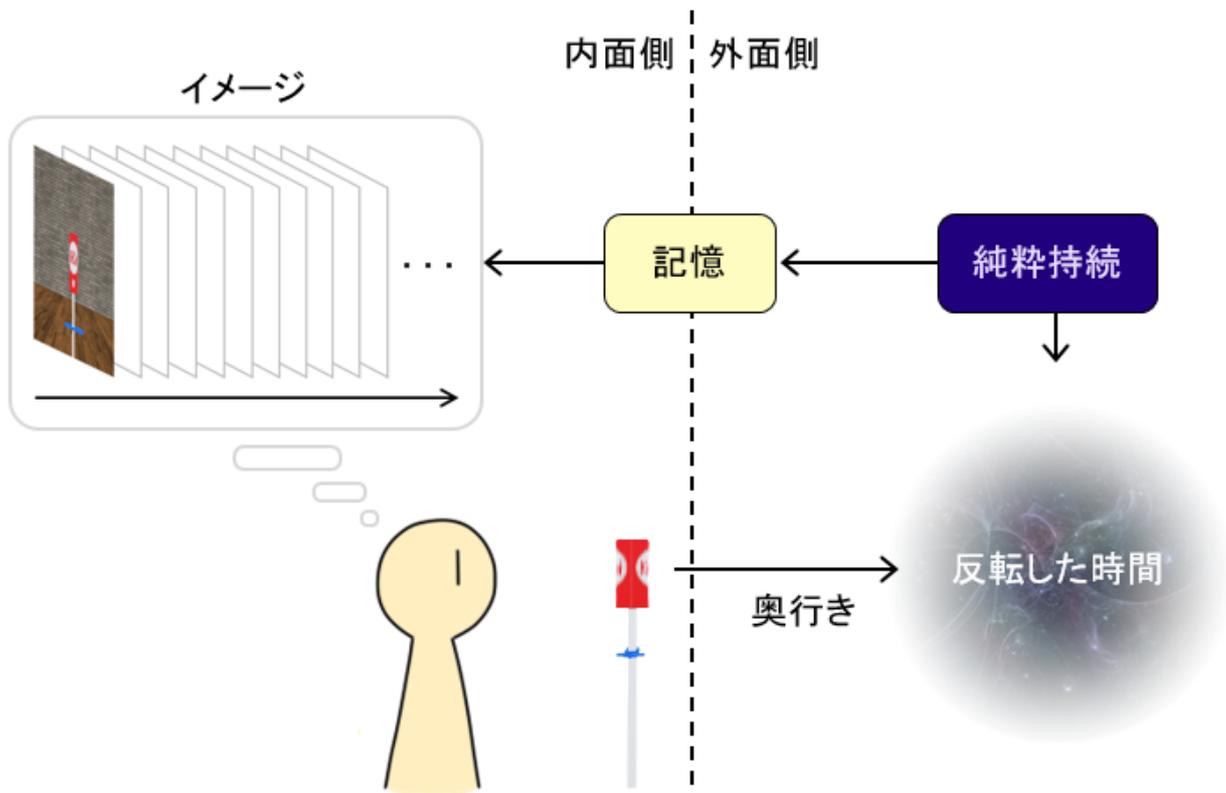
「以前の違う状態になっている記憶」があるからそのように認識できる。

また、動いているものを見て「動いている」と認識する場合は「動いている記憶」が必要だし、止まっているものを見て「止まっている」と認識する場合は「止まっている記憶」が必要である。

そこからその事象をアニメーションで動いているように認識するには、起きている事象を自身の中でイメージとして捉える必要がある。そのアニメーションのイメージの中には直線的な時間があり、時空によって形作られる物質のイメージがある。

一方で、そのアニメーションを生成する元には記憶があり、さらに記憶からアニメーションを生成する以前の大元の意識もあるのではないだろうか？ベルクソンの「純粹持続」はそんな大元の意識にある。

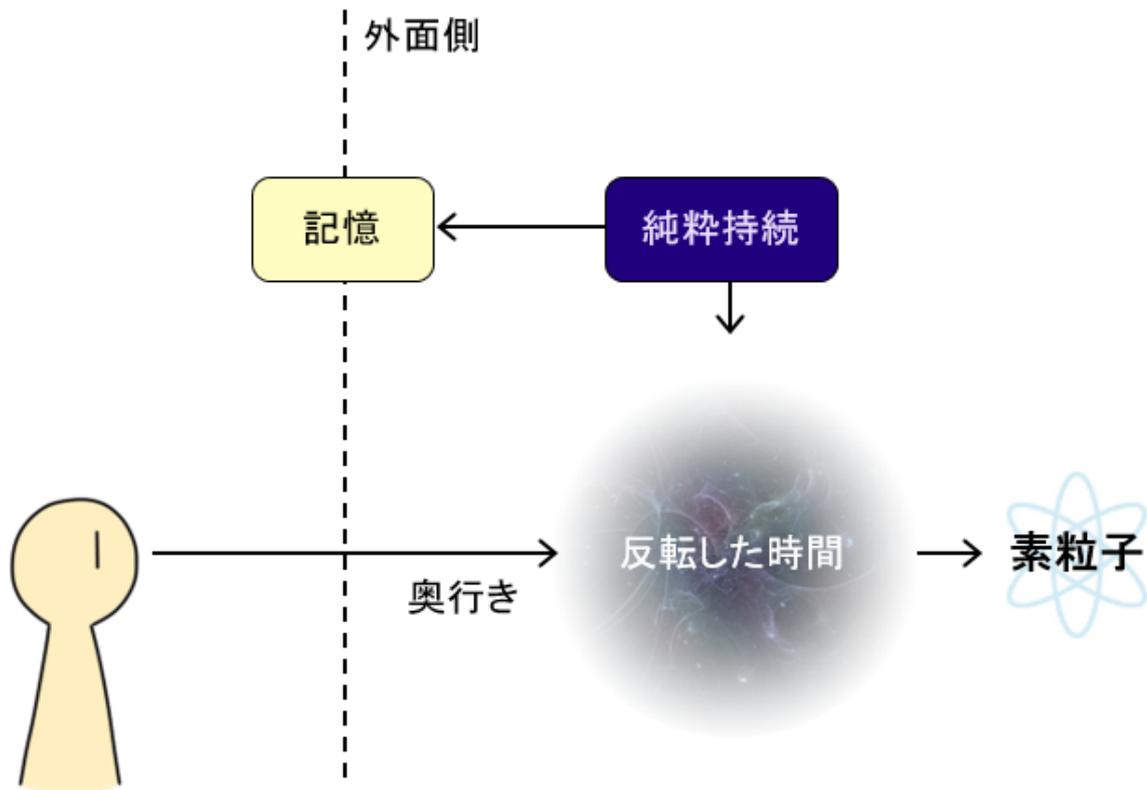
つまり、整理する次の図のようになる。



ヌーソロジーでは、イメージの世界は『人間の内面』側にあり、  
 持続の世界は『人間の外面』側にある。

それから、ヌーソロジーではこの「純粹持続」が、実は「時間の反転」とも関わっている。  
 時間を反転させることは、**時間に虚数  $i$  をかけること**にもなるのだが、  
 「光速度イメージ」によって到達できるその世界と、  
 ベルクソンの持続の概念が繋がるようになっているのである。

さらに、『人間の外面』を理解することは、『変換人型ゲシュタルト』を理解することになり、  
 『変換人型ゲシュタルト』を理解することは、「素粒子」の意識の構造にアクセスすることになるので、  
 「素粒子」にも到達するようになる。



このように『人間の外面』側へ行った時間感覚で作られる空間が、ヌーソロジーでは「**持続空間**」と呼ばれている。

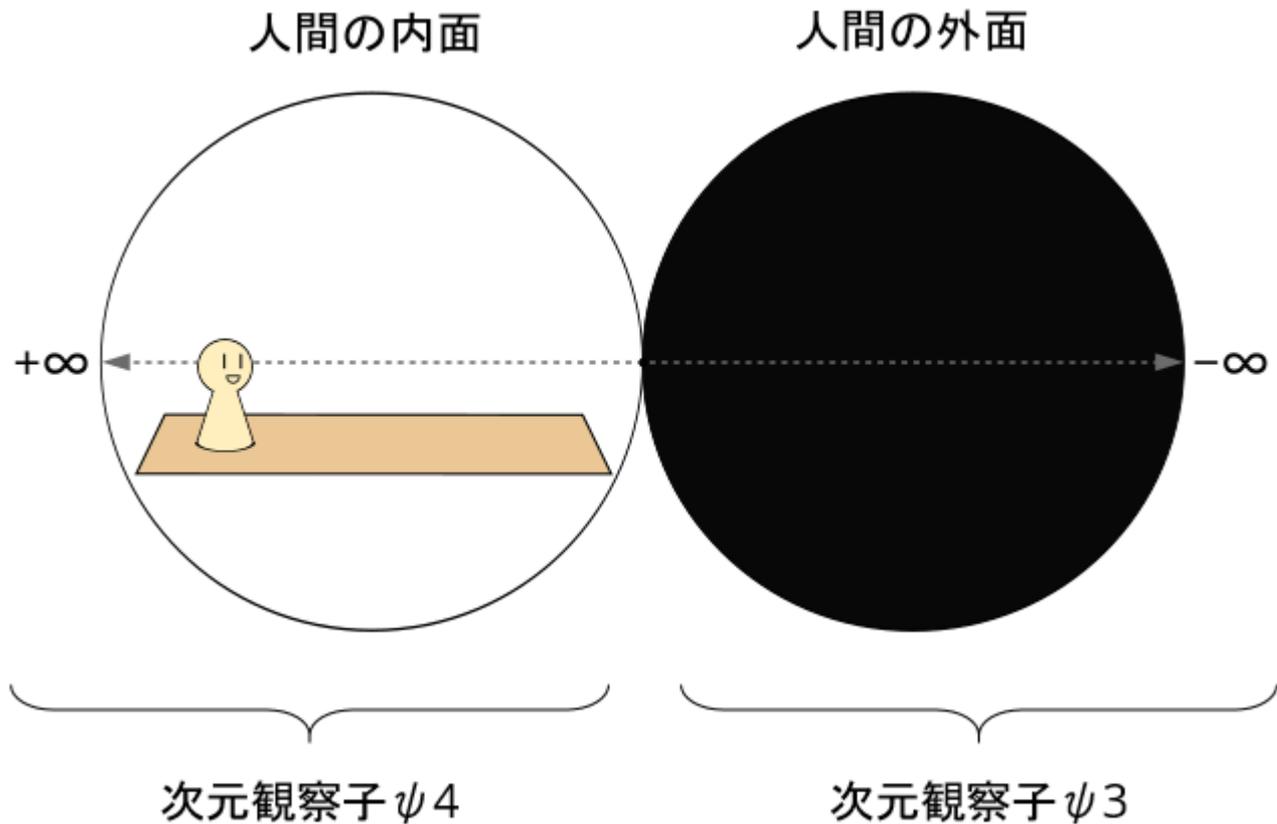
次元観察子と絡んだ話だと、『人間の外面』に身体が没入する段階が『次元観察子 $\psi$ 5』なため、「**持続空間に身体が入る**」状態まで行くと、次元観察子 $\psi$ 5の話になる。

こうした哲学もヌーソロジー理解のためのヒントになるということで、ヌーソロジーではベルクソンの哲学の話が出てくるわけである。

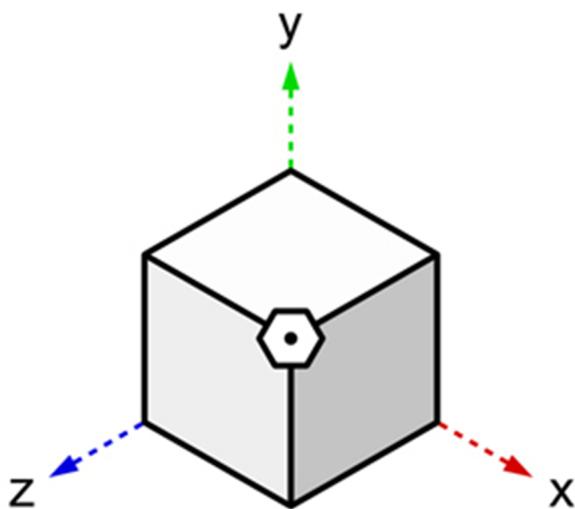
## 50. 光の身体化

少しおさらいすると・・・

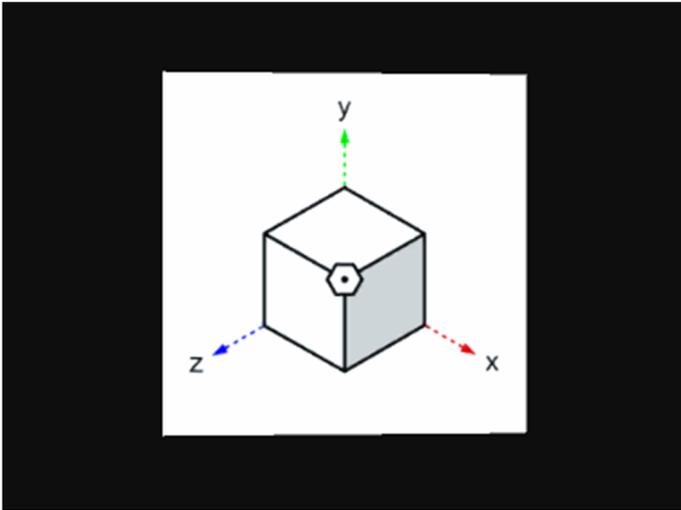
『次元観察子 $\psi_5$ 』は『次元観察子 $\psi_3$ 』と『次元観察子 $\psi_4$ 』を『等化』することで分かるものである。



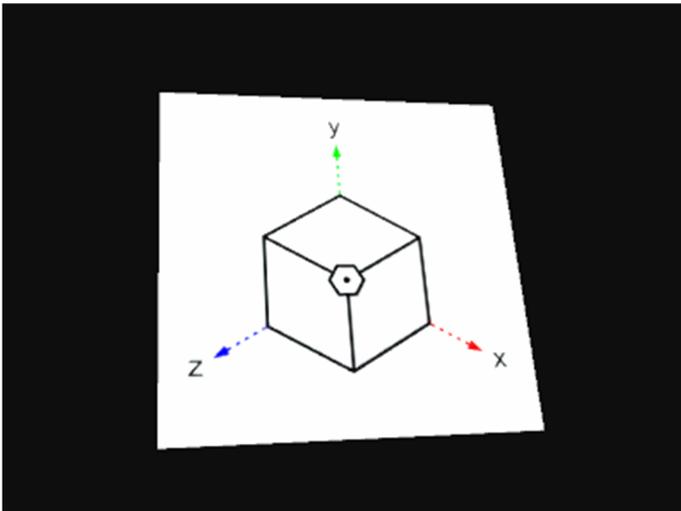
また、それは『次元観察子 $\psi_3$ 』にある一本の線を回転によって無数化することでもある。



※次元観察子 $\psi_3$  は知覚正面に垂直な一本の直線上にある



〔アニメーション：上記の図板が横回転〕



〔アニメーション：上記の図板がランダムで色んな方へ向く〕

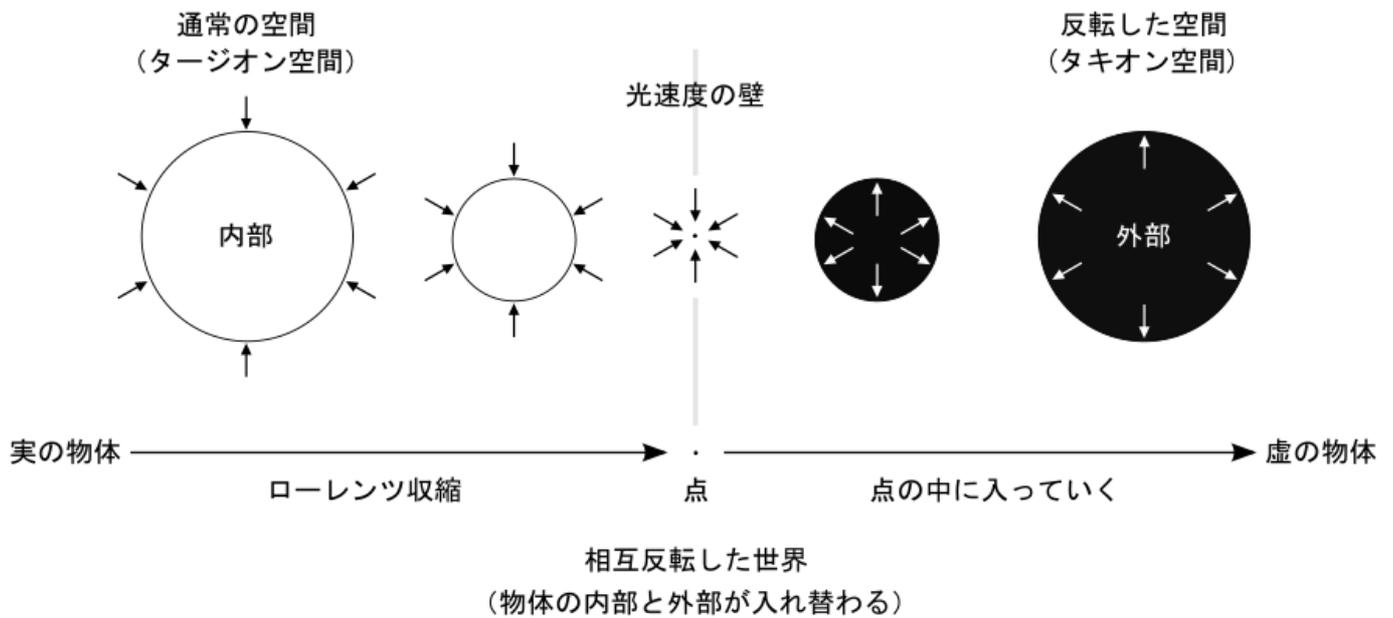
※一本の線の無数化と、それが同時に起きているようなイメージ

それが顕在化することによって自身の肉体に何が起きるのか？  
今回はそのことについて説明していこうと思う。

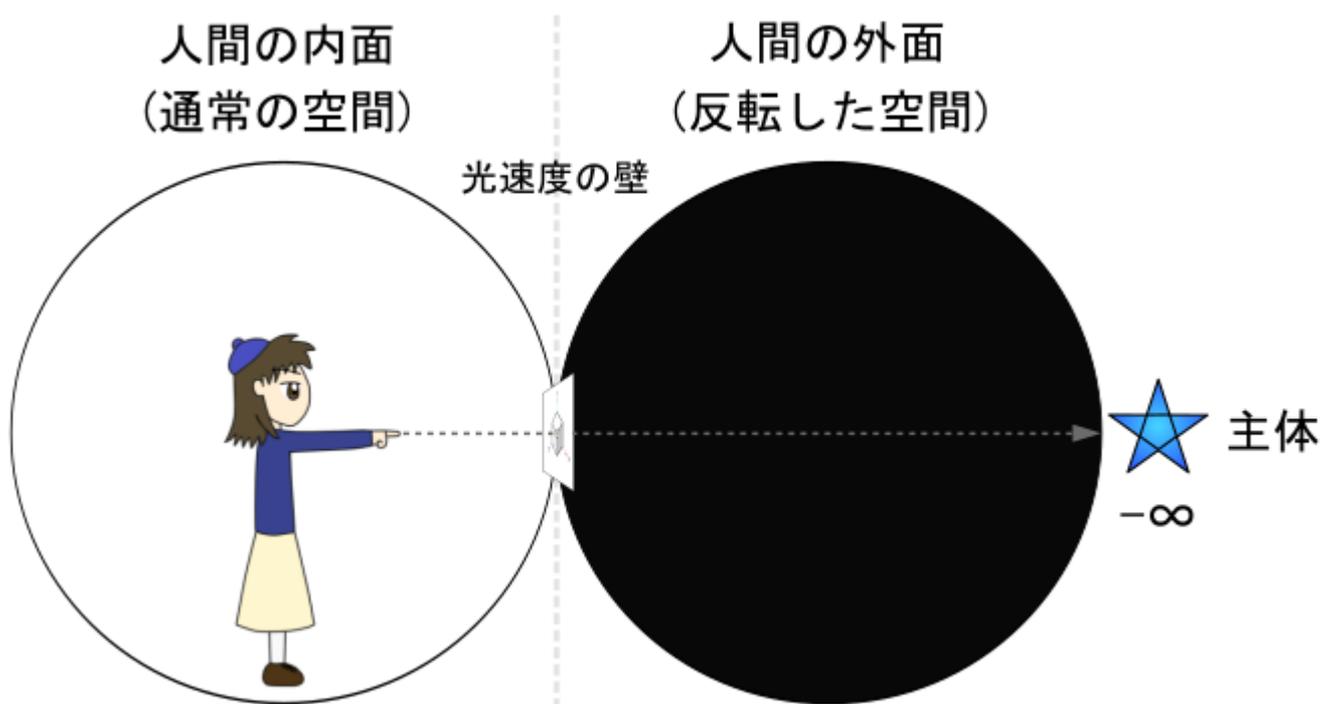
### ■ 光速度突破からの光

まず、『光速度イメージが使えるか？』の項で説明したように、次元観察子 $\psi_3$ のある線は「光速度」によって見出すことができる。

「ローレンツ収縮」と呼ばれる現象によって、光速度の突破で反転した空間が出てくるのが考えられて・・・

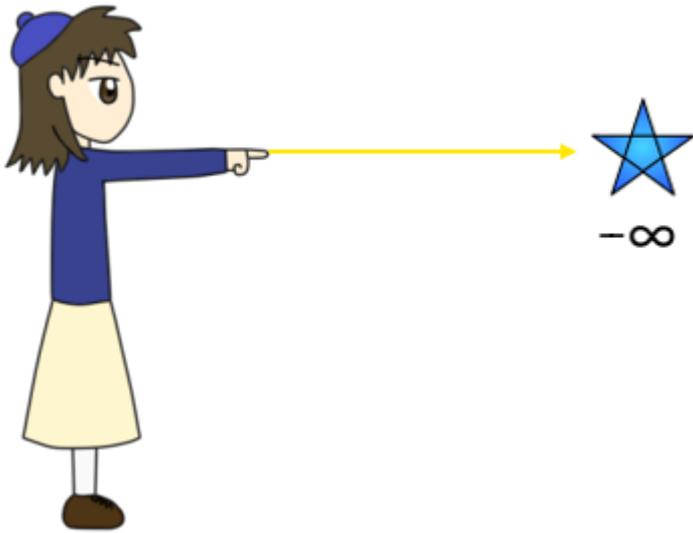


さらに、「反転した空間」と『人間の外面』を重ねることで  
光速度方向と奥行き方向を重ねて認識することができる。

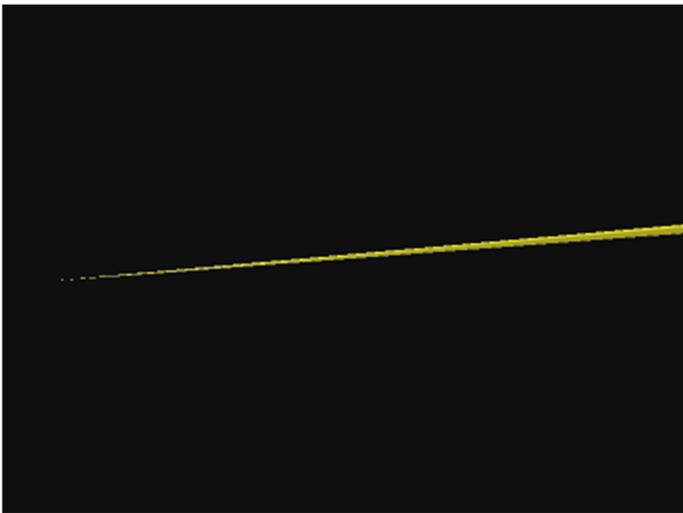


そうすると「 $\psi_3$ のある奥行き方向は、光速度にある一つの直線」だと言えるのである。

そして、次元観察子 $\psi_3$ のある主体（無限遠点）への奥行き方向を「一本の光の線」として捉えて・・・

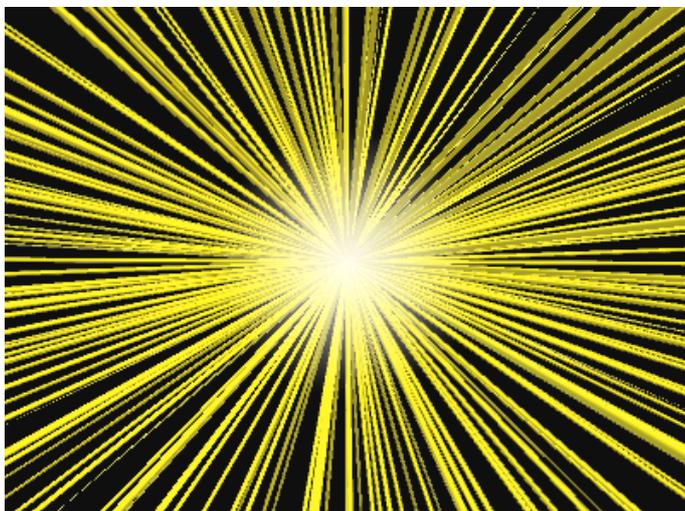


それをあちこちの方向へ無数化すると・・・



〔アニメーション：光の線がランダムで色んな方へ向く〕

「束になって光ができる」みたいなことになる。



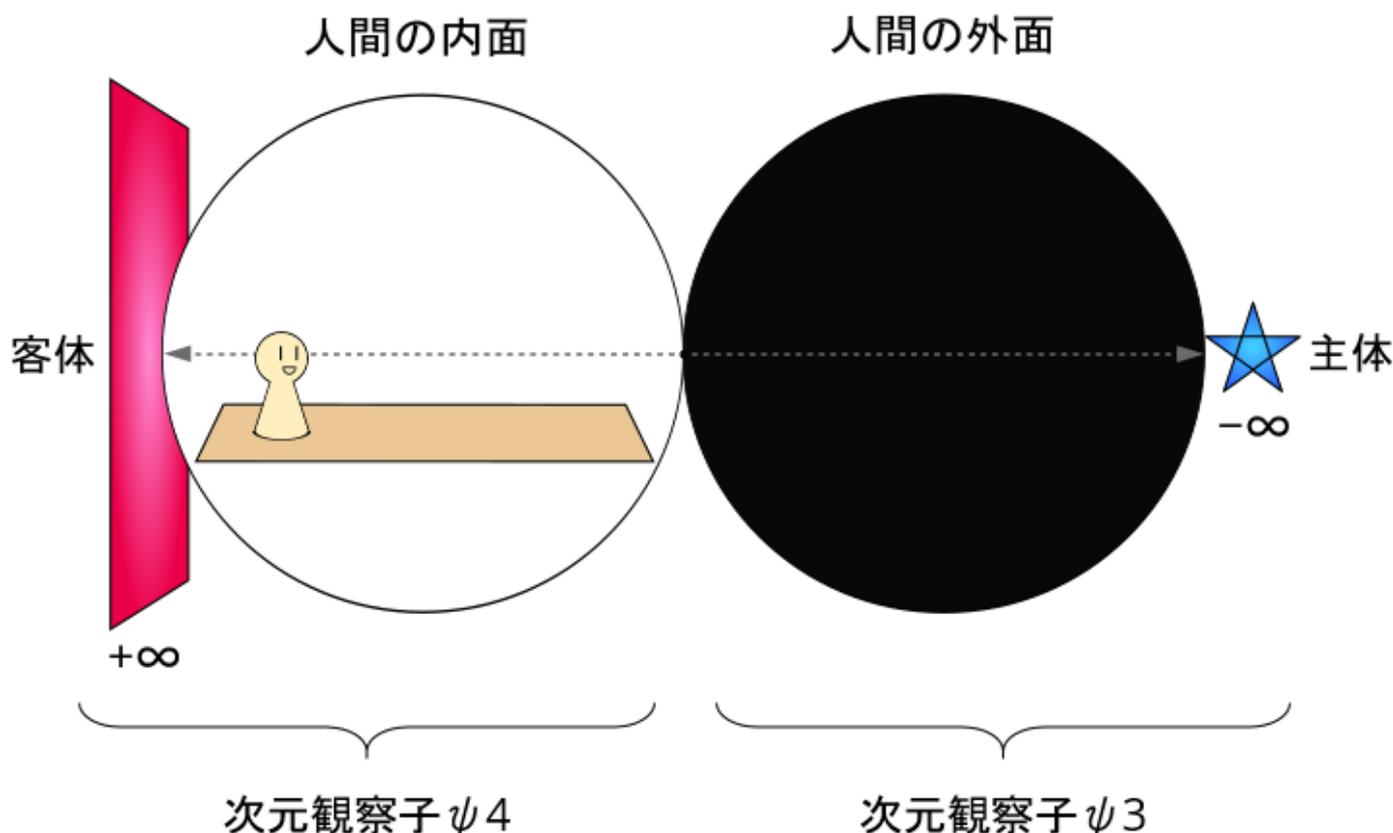
このように、次元観察子 $\psi 5$ の認識は「光の生成」でもあることを理解しておこう。

ちなみに、書籍『2013:シリウス革命』では、p241 辺りから半田広宣さんが次元観察子 $\psi 5$ の認識（位置の等化）をした時のことが書かれている。

気がつくとき、周囲のあらゆる存在物に対する僕の眼差しの全集合は、一つの大きな球体を形作っていた。その球体の中心点には、僕を取り囲んでいるはずのあらゆるモノの中心点が集合しており、一方、そこに生じた球体の表面では、内なるモノの世界への覗き窓が自由自在に動き回っている。そのとき、僕は、自分の懐の中に抱かれるようにして息づいているこの球体が、僕自身の魂であることを直感した。なぜなら、そこには溢れんばかりの光に彩られた記憶のカスケードが、まるで臨終のときに訪れるという、あの走馬灯のように巡回していたからだ。

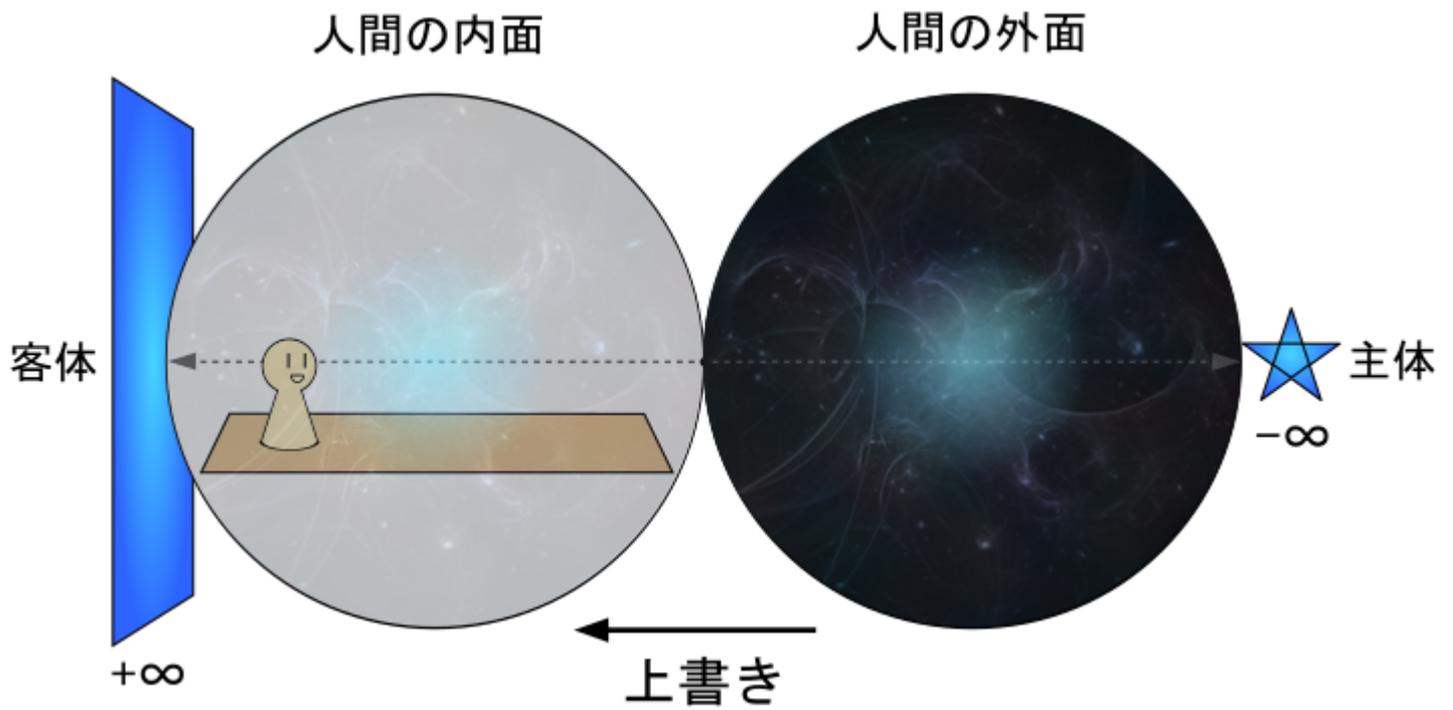
### ■ 肉体の等化

次に、以下の図にあるような『次元観察子 $\psi 3$ 』と『次元観察子 $\psi 4$ 』を『等化』する。



するとどうなるのか？

$\psi 4$ にあるものが、 $\psi 3$ にあるもので上書きされるみたいになる。



そしてψ4にあるもの・・・それはなんなのか？

それは・・・自身の肉体である。

我々が何か物を見た時、  
その対象の手前にあるものは自身の肉体である。  
このことはちょっと考えれば容易に分かることだろう。

## 肉体



そして、 $\psi 3$ にあるものは一本の光であり、  
それが $\psi 4$ にある自身の肉体に上書きされ、  
さらに無数化によって全方向に指す光の束になると・・・  
自身の肉体が「**光の身体**」のようになる・・・と言えるのである。



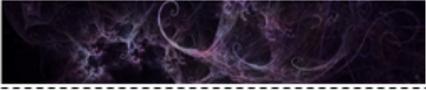
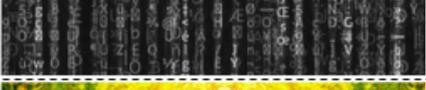
### ■ 光の身体化をする次元

さて、さらに次元観察子の $\psi 1$ と $\psi 3$ と $\psi 5$ について、  
『点球次元』『垂子次元』『垂質次元』といったニューソロジー用語と絡めると、  
それぞれ以下の説明がある。

- ・  $\psi 1 \sim \psi 2$  (点球次元) : 一つのモノの見え姿
- ・  $\psi 3 \sim \psi 4$  (垂子次元) : 一つのモノから広がる空間
- ・  $\psi 5 \sim \psi 6$  (垂質次元) : 無数のモノから広がる空間。また、一人の身体から広がる空間

これによると、ニューソロジーの次元観察子 $\psi 5$ のある次元は、  
**無数のモノから広がる空間であり、それは一人の身体から広がる空間と同義となる。**

従って、「 $\psi 3$ は一つのモノの次元」とするなら、  
「 $\psi 5$ は**身体の次元**」ということになるわけである。

	ψ1～ψ2 普通の時空の次元
	ψ3～ψ4 一つのモノの次元
	ψ5～ψ6 身体の次元
	ψ7～ψ8
	ψ9～ψ10
	ψ11～ψ12
	ψ13～ψ14

そして、その身体は光速度によってニューソロジー的反転空間（もとい持続空間）へと行き来することができる「光」に包まれていて、  
 前回説明したアンリ・ベルクソンの哲学とも繋がってくる。



### ■ ニューソロジー的ライトワーカー

それから、ニューソロジーのψ5 的な「光」は、スピリチュアルで追求するべき光でもあると言えるだろう。



スピリチュアルの界隈では、「光の仕事人」を意味するライトワーカーという言葉がある。

それは大体ヒーリングの仕事をしているヒーラーだったり、何かしらのスピリチュアル的存在やスピリチュアル的勢力と繋がって、癒しの仕事をしたり意識進化の仕事をしたりする立場の者がそう呼ばれている。

ニューソロジーで「光」と言ったら、虚数世界への入り口である「光速度」や、素粒子の一種である「光子（フォトン）」や、さらに光子が媒介する「電磁気力」といったものまでもが絡んでくる概念だが・・・  
そもそもの「光」という存在の本質もその辺りにあるかもしれない？

そうしたニューソロジー的な光の認識は、ありとあらゆる神秘思想、古代哲学、スピリチュアル的存在、そして「神」といった概念の本質を理解するための重要な道筋となる。

ニューソロジーで初めて出た書籍のタイトルは『2013:人類が神を見る日』なので・・・  
そのタイトルの意味も分かってくるかもしれない？

# 紹介文献リスト

- 書籍：半田広宣『2013:人類が神を見る日 アドバンスト・エディション』（2008）徳間書店
- 書籍：F・カブラ『タオ自然学—現代物理学の先端から「東洋の世紀」がはじまる』（1979）工作舎
- 書籍：ダグラス・E・ハーディング『存在し、存在しない、それが答えだ（- To Be and not to be, that is the answer -）』（2016）ナチュラルスピリット
- 書籍：桐山靖雄『「止観」の源流としての阿含仏教—天台智者大師の二つの謎をめぐって 北京大学講演録』（1998）平河出版社
- 書籍：佐道来夢『4次元思想とフラットランド』（2016）
- 書籍：佐道来夢『ヌーソロジー基本概要+（プラス）』（2017）
- 書籍：佐道来夢『リアル魔法使い研究：～魔法の仕組みとその他の仕組み～』（2017）
- 書籍：足立育朗『波動の法則』（2007）ナチュラルスピリット
- 書籍：村松大輔『時間と空間を操る「量子力学的」習慣術』（2021）サンマーク出版
- 書籍：七田真『七田式成功脳をつくるスーパーリーディング』（2006）総合法令出版
- 書籍：半田広宣，福田秀樹，大野章『シュタイナー思想とヌーソロジー 物質と精神をつなぐ思考を求めて』（2017）ヒカルランド
- 書籍：ルドルフ・シュタイナー『いかにして超感覚的世界の認識を獲得するか』（2001）筑摩書房
- 書籍：H・P・ブラヴァツキー『シークレット・ドクトリン 宇宙発生論《上》』（2013）宇宙パブリッシング
- 書籍：諫山創『進撃の巨人（1）（週刊少年マガジンコミックス）』（2010）講談社
- 書籍：ドランヴァロ・メルキゼデク『フラワー・オブ・ライフ — 古代神聖幾何学の秘密(第1巻)』（2001）ナチュラルスピリット
- 書籍：半田広宣，春井星乃，まきしむ『奥行きの子供たち』（2019）ヴォイス
- 書籍：金森修『シリーズ・哲学のエッセンス ベルクソン』（2003）NHK 出版

# Youtube 動画リンク集(QRコード)

- NOOS LECTURE 2013 OP



<https://www.youtube.com/watch?v=1GDjfA-Z4H4>

(チャンネル : NoosAcademeia)

- 冥王星 OCOT から送られてくるシリウス言語にチャネリングした人



<https://www.youtube.com/watch?v=dCIBjQSN9gw>

(チャンネル : Dreamers TV)

- 視点変換 3D ルームでの KitCat 缶回転 (KitCat 実験)



<https://www.youtube.com/watch?v=lZBuFEt8A8o>

(チャンネル : Raimu)

- cave compass ver. 2011



[https://www.youtube.com/watch?v=xi41P\\_9REgg](https://www.youtube.com/watch?v=xi41P_9REgg)

(チャンネル : NoosAcademeia)

- 1B 私たちの本質とは何か？.mov



<https://www.youtube.com/watch?v=AyXUmekiw6I>

(チャンネル : FacelessJapanFilms)

- あなたは何ですか？



[https://www.youtube.com/watch?v=3Ke-\\_qX\\_9vU](https://www.youtube.com/watch?v=3Ke-_qX_9vU)

(チャンネル : FacelessJapanFilms)

- Star and Grid



<https://www.youtube.com/watch?v=q21T8FyIG2w>

(チャンネル : Raimu)

- Captain Einstein



<https://www.youtube.com/watch?v=i6AouFHLb2g>

(チャンネル : Captain Einstein)

- 【光速】体験 光速で移動するとどうなるのか



<https://www.youtube.com/watch?v=YG8VT1vzKzg>

(チャンネル: Video Museum of Science ビデオミュージアム オブ サイエンス)

- 【東方原作プレイ動画】東方妖々夢 HARD 霊夢 B



<https://www.youtube.com/watch?v=BUq-7na00d0>

(チャンネル: Raimu)

- Complex Spin



<https://www.youtube.com/watch?v=mdxn4uP046M>

(チャンネル: Raimu)

- 「セレブレーション! ミッキーマウス」 蒸気船ウィリー



<https://www.youtube.com/watch?v=g6sL0nRxLoU>

(チャンネル: ディズニー・スタジオ公式)

➤ Assumptions



<https://www.youtube.com/watch?v=zNbF006Y5x4>

(チャンネル : Quirkology)

➤ The Matrix (1999) – Bullet Time Scene (1080p) FULL HD



[https://www.youtube.com/watch?v=F0itGa117\\_s](https://www.youtube.com/watch?v=F0itGa117_s)

(チャンネル : RED Lion Movie Shorts)

➤ Bullet-time tutorial – software & hardware



<https://www.youtube.com/watch?v=4nXwkZ7w88Y>

(チャンネル : Eric Paré)

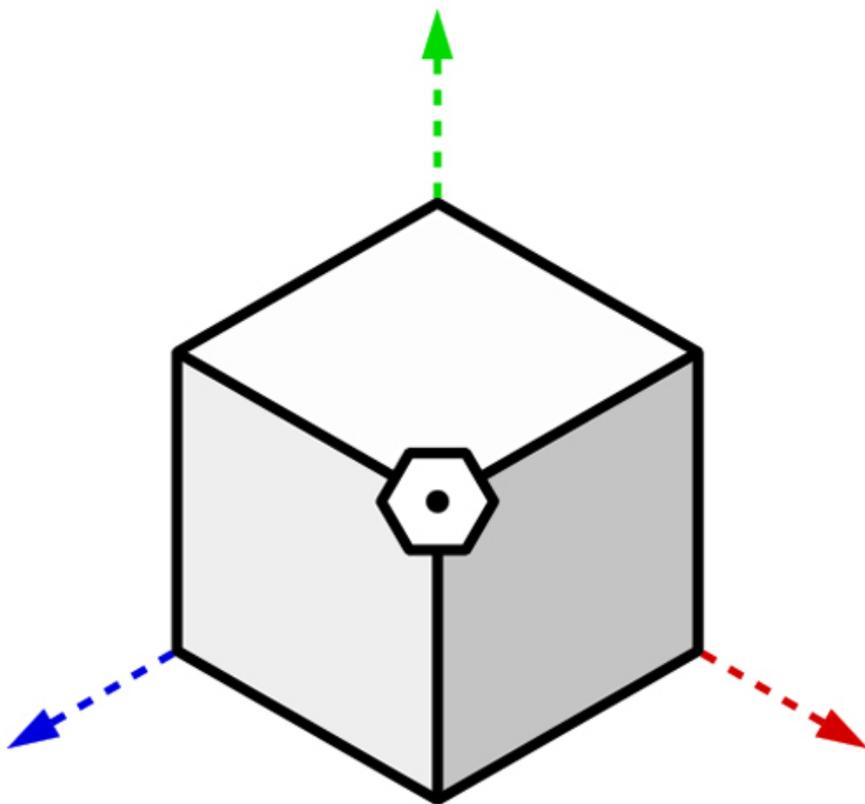
➤ The Matrix Behind The Scenes – Rooftop (1999) – Keanu Reeves Movie HD



<https://www.youtube.com/watch?v=Kjcv-JtU0gA>

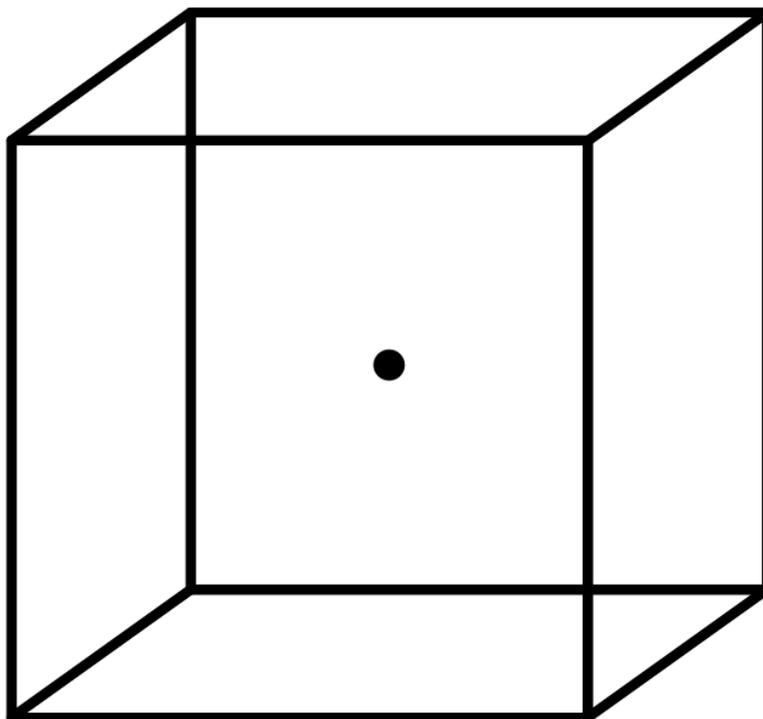
(チャンネル : Vudu)

## 付録 1(4次元を発見するための図)



3次元立体に対して垂直な方向を4次元目の軸と認識しよう。

## 付録 2(ネッカーの立方体)



どちらの面が手前でもあり得る「重ね合わせ」の状態を観よう。